

3歳から始めるめざせポケモンマスター！

たっさそ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ひよんなことから主人公『レンジ』は、3歳児という幼すぎる外見のまま無一文でポケモンの世界を生きていくことになってしまった！

あれ？ 10歳からトレーナーになる世界で3歳児で放り出されるってムリじゃね？
モンスターボールすら買えなくね？ というかお金すらなくね？ いや、なんとかするんだ！ と意気込み、ゲームの知識を生かしながらパチンコで稼いだコインでもらった景品を換金して生活費を捻出しながらたくましく生きることを誓う。3歳児から始めるトレーナー生活。目指すはもちろんポケモンマスター！ 夢と冒険の世界に、3歳児が挑む！

目次

3歳児のカーントー地方編

第1話 3歳児は転生を果たす

1

第2話 3歳児はスロットでお金を稼

ぐ 15

第3話 3歳児はエリカ様に女装させ

られる 30

第4話 3歳児は怯えるピツピを手に

入れる 46

第5話 3歳児は野生のガーデイに勝

利する 64

第6話 3歳児は仕事を見つける

80

第7話 3歳児はトレーナーの資格を

得る 95

第8話 3歳児は説教を垂れる

113

第9話 3歳児はブチ切れる 132

第10話 3歳児はミニリュウとタツ

ベイを手に入れる 147

第11話 3歳児は主人公に出会う

165

第12話 3歳児は敗北を知る

184

第13話 3歳児は勝利の味を知る

第 20 話	3 歳児は激戦を制する	303
第 19 話	3 歳児は博物館へ赴く	289
第 18 話	3 歳児は嫌われる	272
にする		
第 17 話	3 歳児はあざとく勝利を手	253
く		
第 16 話	3 歳児はヤマブキジムへ行	235
第 15 話	3 歳児はふてくされる	217
第 14 話	3 歳児はくりむを助ける	201
第 2 話	3 歳児は心配される	454
第 2 話	3 歳児は心配される	362
第 2 話	3 歳児は成長を促す	339
第 2 話	3 歳児はニビジムに挑戦す	317
第 2 話	3 歳児は全力で奇襲を仕掛	440
行く		415
第 2 話	3 歳児はサファリパークへ	388
れる		

ぶ

第27話 3歳児は社会の厳しさを学

469

第28話 3歳児は成長を実感する

491

3歳児のカントー地方編

第1話 3歳児は転生を果たす

目の前に神様が居た。

「時間がないから手短かに説明するぞい。お前はついさつき儂のミスで雷に打たれて死んでしまったがお詫びとしてお主を異世界に転生させることになったのだが、お主が一番好きなゲームの世界に転生させることにしたので、その世界で好き勝手に過ごしてほしいのじゃ。それでは、夢と冒険の世界に、レッツゴー！」

と思ったら早口で何事かをまくし立てられて、俺の身体（なぜか半透明だった）は神々しい光に包まれて俺の意識は遠くなった

せめて、『なんでやねん』の一言くらい言わせてくれてもいいじゃないか

☆

「くああ……なんだったんだよ、あの神とかいう奴……」

伸びをしながら布団から起き上がると

「ピツピイー！」

「そして、なんだよ、この変な鳴き声の動物……」

目の前にピンク色の未確認生物らしきものがいた

「にやー！」

「それで、なんでこの猫は額に小判なんか付けているんだ？」

さらには俺の布団の中に変な猫も入り込んでいた

「きやーう」

「そんで、全身が水色の毒々しいトゲを持ったこの生き物もなんなんだか」

と、言いつつ。俺の中の冷静な部分はその正体を見破っていた

俺は先ほどの神との会話を思い出す。

俺の一番好きなゲームに転生させると。

なんだか俺の身体が縮んでいるような気がしていて、ふと鏡が目に入ったので、自分

の姿を見てみると、3歳程幼い少年の姿を捕えた

「……………これが俺か。ずいぶん小さいな。」

俺はこの世界にくる前は20歳を過ぎた普通の社会人だった。

それがどんな因果か、一番好きはこのゲームの世界に入り込んでしまおうとはな。ため息を吐きながら頭をガリガリと搔く。

「ピィ……………」

そんな俺を心配したのか、ピンク色の生き物が不安そうに俺に寄り添ってきた。

その生物の名は——

「心配いらないよ、ピッピ」

『ピッピ』という、ようせいポケモンであった。

ぼむつとピッピの頭を撫でると、ピッピは気持ちよさそうに目を細める。

こいつめ、図鑑の説明でペットにしたい人が多いと書かれるだけのことはあるな。

かわいいじゃねーか

「……………というか、ここは何処なんだろう？」

それはさておき目下気になっていることはそこであった。

早口の神によると、俺はポケモンの世界に転生してしまったらしい。

赤ん坊からスタートというわけではないみたいだが、3歳児からのスタートだ。どうしようもないぞ。

それに、どことも知れない布団で目覚め、目の前には生きて目の前で動いている『ニャース』『ニドラン♀』『ピツピ』が居るといふ摩訶不思議な状況。

……………いや、待てよ。

この組み合わせはどこかで見たことがあるぞ。

たしか……………

思考を巡らせたその時。俺が居る部屋の扉がゆつくりと開いた

「おや、目が覚めたのかい？ ほら、暖かいお茶でも飲んでゆつくりしなさい」

その扉の奥からは、おばあちゃんが出てきた。

「ああ、ありがとうございます」

「いいよ。ほれ、おじやも作ってあげたから、食べなさい」

「それじゃ、遠慮なくいただきます……………アチッ！」

お茶をすすつたら熱かった。

どうやらこのおばあちゃんが俺の保護者らしいな

そもそも、この世界の俺はいつたい誰で何者なのだろう。

「…………おまえさん、この『タمامシマンション』の前で倒れておったぞ。おぼえておらんか？」

おぼあちゃんは俺の血縁者ですらなかった、だと!?

じゃあ俺の両親は何処だ、誰なんだ!?

くそう、倒れていたっていつても全く身に覚えがない。

だが、『タمامシマンション』か。

その言葉に、カチリと記憶のピースが嵌る音が聞こえた。

『タمامシマンション』

それは初代ポケモン。『赤・緑シリーズ』や『ファイヤーレッド・リーフグリーン』の舞台に登場するタمامシシティに存在するマンションだ。

そして、このおぼあちゃんは、そのマンションで『ピツピ』と『ニヤース』『ニドラン♀』を飼っていた覚えがある。

このおぼあちゃんはそのひとのだろう。

「……………まったく覚えていないんだ。助けてくれてありがとうね」

「なるほど。それはたいへんだったのう。身分証もなにも持っていないなかったようじゃし

な。せめておまえさんが10歳を過ぎていたら、トレーナーカードをポケモンリーグ協会からもらえるはずなんじゃが」

顎に手を当てて考え込むおばあちゃん。

俺はおじやの入った器をおばあちゃんに渡し、お茶をすすする。
やっぱり熱いや。

そうか。そういうやポケモンの世界では10歳でポケモン図鑑を貰えて旅に出るんだったっけか。

あれ？ それはアニメの話しか。でも10歳でトレーナーカード……つまり身分証がもらえることになる。

といつても、まるつきり三歳児の俺はそんなことできないし、かといつてここで世話になるわけにもいかない。

ん？

なにやら服のポケットに違和感を感じた。

「もうすこし、ここをゆつくりしていきなさい。すぐにおうちに帰るんだよ？」

そう言つて、おばあちゃんは食器を下げた。

おばあちゃんが自分がある部屋から出ていくと、それを見計らつて、ポケットからあ

るものを取り出す。

四角いボディに黒々とした面。指を触れると光を放つそれは——スマホだった

実は俺はガラケー派だったんだがな。

スマホをいじったことは一度もない。

しかし、いま俺が持っているアイテムは、『お茶』と『スマホ』しかないのだ。

ならば、必然的にこの『スマホ』に頼らざるを得ない。

ポチツとな。

電源を入れると、画面に文字が映し出された。

『いきなりこの世界に呼び出されて困っているだろう。それもこれも、あの天照（アマテラス）のババアがいきなり喧嘩を吹っかけてきたのがいけないんじゃない。その余波で一般人——お主を巻き込んでしまったらしい。申し訳ないが、お主が一番好きなゲームの世界に転生させることにした。元の世界、地球には戻りたいと思っても、すぐには無理じゃ。一度世界に固定した魂を再び分離するには時間がかかるので、条件を定めた。この世界のポケモン図鑑を完成させれば、地球の子供としてもう一度転生させることを約束しよう』

「はあ？」

正直言つて、意味不明。

よくわからんが、図鑑を完成させれば地球に帰れるかもしれないらしい。

それも、元の人生ではなく、新たな生命として。

まあ、俺はポケモン好きだし、前いた世界に思い残すことはあまりないし？

この世界で生きて行こうと思うけどさ。

せつかくこの世界で生きているんだ。図鑑のコンプはしたいだろ。地球に帰るかど

うかは置いておいてさ。

別に、この世界では金を稼ぐ手段は簡単だから気にしていない。

生きていくだけなら簡単だろう。

なぜなら、ポケモン勝負で勝てば相手から金を巻き上げることができるのだから。

「そんじゃ、この世界で生きていく覚悟を決めますか。」

よっこらしよ、と布団から起き上がる。

しかし、そのためにはポケモンが必要だ。

ポケモンが必要ということは、モンスターボールが必要ということだ。

『PS. お主のポケモン図鑑を用意しておいた。そのスマホじゃ。ポケモン転送装置

も兼ねているからパソコンの前に立たなくてもそこからポケモンを手持ちから交換できるぞい。ただし、ポケモンセンターに入らねばその操作はできないがのう』

その他、長つたらしい神様(?)の愚痴を無視して追伸を読むなるほど。それは便利な機能だ。マサキも真つ青だな。

自分のパソコンを開こうと思ったのだが、どういう訳か『名前を設定してください』と出ている。

え、どうしよう。本名でする必要はないよな。

いつもポケモンをするとき、主人公の名前つて『てめえ!』にしてただけど。

だつてそうするとみんな主人公のことを『てめえ!』つて呼ぶからなんかシニールで面白かつたんだよな。

しかし、さすがにポケモンの世界が現実になればそう言うことは出来ないだろう。

自分で名前を設定できるとすれば、……『きさまア!』とか……
もつとダメか。

ええい、ネタネームから離れよう。

マサラタウンばい名前にしておこう。

あれ？ 主人公の名前は『サトシ』？ それとも『レッド』？

ライバルだってよくわからないな。でもライバルの姉の名前は『ナナミ』だったよな。だつたら日本語か？

オーキド博士だつて『オーキド』は名字で大木戸だろ？

だつたらライバルは『大木戸グリーン』っていうのはおかしいよな。

ならやつぱり『大木戸シゲル』っていう方がしっくりくる。

よし、じゃあ決めた。俺の名前は『レンジ』だ。

なぜって？

よく聞けよ。頭の髪の色がオレンジ色だったからだ。

なんとまあ不思議な髪の色なこと。

ゲームの世界だと言われなければ納得できませんよこんなもの。

蓮司（レンジ）……………。

いい名前じゃないか。よし、コレで行こう。

『レンジのスマホ』を開くと、そこには『ポケモン』というアイコンと『どうぐ』というアイコンがあった。

なるほどね。ポケモンがいわゆる『マサキのパソコン』道具が『レンジのパソコン』と思えばいいはずだ。

とりあえず『どうぐ』のアイコンをタッチすると

——きずぐすりが入っていた。

「……………」

せめてモンスターボールを入れて置いてくれよ……………。神様あ！

☆

さて、これからの行動を整理しよう。

俺はスマホから取り出したきずぐすりを手に目を瞑って考える。

まずは、ポケモンをゲットしなければ何も始まらない。

そのためには、モンスターボールを手に入れなければならない。

モンスターボールは買わなくてはならない。200円だ。

しかし、モンスターボールは買えない。お金を持っていないから。

お金を手に入れるためには、ポケモンバトルで勝たなくてはいけない。

ポケモンバトルをするためには、ポケモンが必要である。
しかし、ポケモンがいない。袋小路だ。

むんむんと悩んでいると、無邪気にもニドラン♀が俺の膝の上に顎を乗せてすやすやと寝息を立てていた。

ニヤースも俺の右となりで丸くなってゴロゴロと喉を鳴らしている。

癒しのピッピも、俺が寝ていた布団でうつらうつらとオネムのようなだ。

そんな三匹を順繰りに撫でてあげる。

「くう……………」

「ゴロゴロ……………」

「くびい……………」

かわいいなおい。

三匹のかわいい様子にほっこりだ。

「……………(ふんす)」

「気分はどうかね?」

「おっ?」

そんな中、おばあちゃんが様子を見に部屋に入ってきた。

大丈夫かな。鼻息とか荒くなってたような気がする。

だつてこんなに可愛いもふもふが近くにいるんだよ？ 興奮しない方がどうかしていると思うな、俺。

「だいぶ良くなつたよ、おばあちゃん」

「そうかい、それはよかつた」

柔らかに微笑むおばあちゃん。

このおばあちゃんは一応本編ストーリーにも関わるおばあちゃん、たしか主人公にお茶を渡して、そのお茶を警備員に渡したらヤマブキシティに行けるようになるんだっけ。

「おばあちゃん、僕、もう行くよ。助けてくれてありがとうね。またここに来てもいい？」

「いいよ。いつでも来なさい。」

おばあちゃんは笑つて俺を見送つてくれた。

タマムシマンションからのスタートだ。気合を入れて行こう

まず必要なものは、ポケモンとモンスターボール

10歳からトレーナーの資格を得るといふこの世界で、はたしてお店でモンスター

ボールを購入することができるだろうか。

もしかしたら、お使いかと思われて買わせてくれる可能性もあるだろう。

しかし、タバコと同じように年齢確認の為にポケモン図鑑を掲示しなくてはならなかった場合は？

その場合は、詰みだ。

生きてゆく術がなくなる。

一応、お金を捻出するだけならば、神様からの選別で手に入ったこのきずぐすりを売るだけでいい。150円で売れるはずだ。

そしたらフレンドリーショップでおにぎりくらいは買えるだろう。

しかしそれは最終手段。

できることから始めよう。

今、俺にできることといえば。

「待ってろイーブイ!! 今! ナウ! 俺が行くからな!!!」

タمامシマンションの裏口から手に入る、イーブイの確保であった。

第2話 3歳児はスロットでお金を稼ぐ

「へへっ、というわけで、イーブイゲットだぜ！」

人に見つかることなくタمامシマンシヨンの裏口に侵入し、最上階でイーブイをゲットしました。

泥棒？ いいえ、もらってもいいらしいよ。

マンシヨンの最上階で『からておう』みたいな人に聞いても、そのイーブイに預かり手はいなかったみたいだ。

このイーブイって誰のイーブイなんだろう。

勇者のポケモンか？ タمامシジムのジムリーダー。エリカ様か？

それともマサキの？

なんだっていいや。

「よろしくな、イーブイ」

「ブイブイ！」

まずはイーブイのステータスレベルを確認する

基本通り、レベルは25だ。

タマムシシティの隣の草むらでニヤース狩りでもしていたらレベルも上がりそうだが、イーブイは進化させてなんぼの『しんかポケモン』だ。

はたしてどのブイズに進化させればいいだろうか。

個人的にはシャワーズが一番好きなんだが……スピードと一撃の威力があるサンダースも捨てがたい。

特殊耐久の高いブースターも攻撃力の種族値が130族だったからオボンの実かいのちのたまを持たせて『おんがえし』『フレアドライブ』『あくび』『ねがいごと』でかなり優位に戦えたはずだ

ん？ いや、スターは無理だ。

遺伝技が存在しているじゃないか。

というか、フレアドライブとか、ファイアーレッドの時代じゃなくね？

それに、この世界はゲームじゃない。現実だ。

ターン制であるバトルなわけがないだろう。

バトルはアニメ基準であると考えよう。

ならば、ここは鈍足のワーズよりもスピードを生かしたダースにするべきなのではな

かろうか

いや、そもそも……

「進化の石、持ってねえよ……」

タママシシティのデパートで進化の石って確か買えたよな。

「でもお金もねえよ……」

というか、お金があっても

「この年齢じゃ、買えねえよ……」

うがー！ どうしたらいい!?

そもそも、どうやって生きて行こう！

くう……こうなったら……

「パチンコに行こう。」

☆

というわけで、タママシの食堂にてギャンブルでやらかしてしまつたらしいイライラしたオヤジさんに話しかけて「じゃあコインケースは僕がもらつてもいい？」と、うるうるした目で言つてみたところ、「そうでもしないと俺はいつまでもギャンブルをやめないだろうしな。あげるよ」と空っぽのコインケースをいただいた。

なんでも入る魔法のバッグがほしいと思つたが、一応スマホの中に収納することが可能だったため、コインケースはスマホの中に閉じ込めた

よし、あとはタママシのゲーセンに行けば……コインくらい、いくらでも落ちていくだろう。

とりあえず落ちているコインを集めたら260枚手に入った。

これでよし。というか、よくこんなに集まつたな。びつくりだ

「おっちゃん、隣いい？」

「ん？ かまわねーぞ」

こわもてスキンヘッドのおっちゃんの隣。ここがベストポジション。

なぜって？ はたから見たら親子にでも見えるだろう。3歳児がここに居ても自然ですよ。不自然なんてありませんよー

1時間後。

「すげーなちびっこ！ お前才能あるんじゃないか？」

「基本目押しだからね。タイミングさえ合えばおっちゃんでもイケるよ。はい、この300枚はおすすわけ。」

「おう、わりーな坊主」

『777』『RRR』を量産。元手260枚が9122枚になりました。

ゲーム時代によく当たると評判の台に座ること早一時間でコレだ。いい感じにコインが増えていく。

よし、コレで行けるぞ。

コイン交換所へと向かって『わざマシン13・アイアンテール』と交換だ。

『わざマシン13・アイアンテール』を3つ交換し、一つの値段がコイン3000枚。コレで俺のコインケースの中は122枚となる。

アイアンテールの売値は1500円。

一時間当たり4500円の儲けだ。しかし、こんなものでは一拍の宿屋すら取れない。

せつかくタママシシティには旅館があるというのに。

タママシシティは都会なんだ。カプセルホテルくらいあつてほしいものだが………
ビジネスホテルならば泊まれるだろう。

いや、そもそもタママシシティの旅館の料金を知らないぞ。

どんなポケモンも復活させる元気の欠片よりも高いのか？

むむ？ ポケモンセンターに泊まったりできないのかな？

いろいろ調べてみる必要がありそうだ。

「おっちゃん、換金と交換を手伝ってくれてありがとう」

「いいってことよ。」

「あと聞きたいことがあるんだけど、いい？」

というわけで、子供の俺がコインを景品に交換などできるわけがなく、さらにわざマシンを売るなどもつてのほかなので、スキンヘッドのおっちゃんが俺の代わりにいろいろやってくれたのだ！

コイン300枚で手伝ってくれたよ。安い出費だ。

「ポケモンセンターに泊まることってできるの？」

「できるぜ。ただし、一拍食事つきで4500円だな。」

「……………食事つきで泊まれるだけましかな。ありがとう。タママシの旅館の宿泊料金は？」

「たしか、一泊二日の朝晩食事とお風呂がついて12,000円だったはずだししかたがない。旅館はあきらめよう。」

今の俺には敷居が高すぎる

きつと、主人公たちが旅をするとき、ATMで引き落としした親から仕送りがあるのだろう。

だから旅なんかできるんだよ。

「ありがとう。参考になったよ」

「ああ……………だが、お前まさか一人で泊まる気か？」

「そうだけど？」

あつげらかんと答えると、おっちゃんは目を丸くした

「親は？　まだお前2,3歳くらいなのに。ゲームコーナーに来ているのか？」

「あはは、いないよそんなの。僕は今、家出中なの」

いい言い訳が思いつかない俺は、適当に設定をねつ造することにした。

そう、今の俺はママと喧嘩した勢いで家を飛び出していった哀れな子供なのさ

おっちゃんはガリガリとスキンヘッドを搔くと

「それなら、お前はもう自分の家に帰れ。」

「……………え?」

なんでそうなるの? 家出中って言ったじゃん。

って、俺は普通に3歳児じゃん!

「絶対にお前の母ちゃんは心配しているぞ。帰ったらすぐにお母さんにごめんなさいって言うんだ。わかったか?」

「……………」

「お前がどんな気持ちで家出をしたのかは知らないが、オレの娘が家出した時、オレあ心臟が張り裂けそうなほど不安で不安で仕方がなかった。ちゃんと飯を食っているのか。ちゃんと歯あ磨いたのか。まだ怒っているのか。泣いていないか。一人の親として言わせてもらうが、子供がいなくなれば親は心配するもんなんだ。あまり、親に心配かけさせないでやってくれ。それが今のお前にできる最大限の親孝行だ。」

ぼんと俺の背中を撫でて、こわもてだけど身長の低い俺の目線に合わせてから優しく言い聞かせるように家出を止めるように促すおっちゃん

え、なに。なんかやつちやつた? さすがにこんな展開は予想していなかった。

どうしよう。なんかおつちちゃんがすごいことを言ってる!

「……………わかった。おっちゃんの言うとおりにする、勝手にフエンせんべいを食べたこと、ママ許してくれるかな」

うん。こういうときはさらに被せてしまうに限るね。

この世界に親はいないだけだね!!

「ちゃんと謝れば許してくれるさ。オレが保証する。はやくママを安心させてやれ」

なんのこっちゃ。おっちゃんに保障されてもなあ。

というか、こわもてのおっちゃんなのに、子供にもものすごくやさしいおっちゃんだ。

俺に優しくしてなかったら、どう見ても暴走族かヤク丸さんとこの鉄砲玉だよ。

とりあえず、今日のところはスロットで稼げるのはこの時間までだな。

続きは明日だ。

親がないから今日はポケモンセンターで寝泊まりするよ。一応イーブイもいるしね。

明日は、わざマシンの換金での捻出と、コインを溜めて『ケーシー』と『ピッピ』と

『ストライク』と『カイロス』と『ミニリュウ』と『ポリゴン』をゲットしてやる

「ありがとう、おっちゃん！」

「おう。気をつけて帰れよ」

そうして、俺はポケモンセンターに向かって走り出した。
帰り道なんて、どこにもないんだもの。地球はどこよ。

☆

「あら、小さいお客さんね。こんにちは」

「こんにちははジョーイさん。ポケセンで宿泊っていくらですか？」

というわけでポケセンに到着。ジョーイさんなんだけど、めちやくちやかわいいの！
年齢は25歳くらいのおねーさんだよ、美人だ美人！ ひやつほーう！

「あれ？ 一人で泊まるのかな？」

「うん。問題ある？」

「えつとね、お父さんかお母さんは一緒にいないのかな？」

むむ!? まさか、ここでも問題発生か!?

「いないよ！ 捨て子だからね！ 僕一人で旅をしている最中だよ！」

自信満々にどんと胸をたたいて、さらにテキトーな設定を作って乗り切ろう！

「そう……………。大変だったのね……………お金はいいから、ゆつくりやすんでいきなさいね」

やや悲しそうな顔をしながら、同情した声を出すジョーイさん。

……………え、いいの？ いいならそのまま泊まっちゃうしお金も払わないよ？

だって本当に切羽詰まってるんだもん。

「そうだジョーイさん。この子の様子も見てあげて？」

そう言つて俺はモンスターボールを取り出すと、ジョーイさんに預ける。

「この子は？」

「タママシマンシヨンの屋上で放置されてたモンスターボールの中に入つていたんだよ」

「ああ、マサキさんのイーブイね」

やっぱりこのイーブイはマサキのポケモンだったのね。というか、ジョーイさん知つてたんだ。

「この子はね、タママシジムのジムリーダー。エリカさんがマサキさんから預かつていたポケモンなんですけど、エリカさんの出身はジョウト地方のエンジュシティですし、エリカさんの実家は良家なので、ポケモンを飼育することが許されていないらしいの。だからタママシマンシヨンの最上階のトレーナーズスクールで飼育していたみたいなんだけど……。エリカさんはジムリーダーとしてのお仕事も忙しそうですしね……。イーブイの健康状態はよさそうだけどやっぱりポケモンは外で遊ばないとね。」

エリカ様の実家はエンジュシティだったのか！

実はジョウト出身だったというエリカ様にびっくりだ

ああ、でも名残があるかも。着物だし。のんびりした性格だし。

そして、新事実！ エリカ様の住まいはタママシマンションだったのか！

それに、このイーブイ……マサキがエリカ様に預けたイーブイだったのか

マサキがジョウト地方のコガネシティ出身っていうことは知ってたけど、幼馴染なのかな？

おや、アカネちゃんとみかんちゃんもか？

イーブイが最上階のトレーナーズスクールで飼われているのは、イーブイが『しんかポケモン』であるため、ポケモンの進化についての説明を教えやすいからだろう。

「じゃあ、このイーブイ……。エリカ様に返した方がいいのかな……。？」

俺がそう呟いた時、ジョーイさんに渡したモンスターボールが勝手に作動して、イーブイがボールから出てきた

「ブーイ」

かと思つたら、俺の足元に体を擦りつけてくる。

まるでいなくなると言うようなさびしそうな目で俺を見上げるイーブイを3歳児の体力でなんとか抱き上げると、俺のほっぺにうれしそうに顔を擦りつけてくる

もふもふして気持ちいい

「いいえ、そうじゃないわ。エリカさんもね、イーブイのお世話するのが大変だって言っていたみたいなの。よかつたら貰ってもらえるかしら。エリカさんは貰い手を探していたみたいだし、エリカさんには私から伝えておくわ。その子もあなたに懐いているみたいだしね♪」

ジョーイさんがそう言ってくれたけれど、やっぱりそう言うことはエリカ様に直接俺が言うべきことだと思っただよな

「それは僕が直接エリカ様に言うよ。スジを通さないと男じゃないからね」

ドンと胸を叩くと、ジョーイさんは「まあ、男らしい」と微笑んでくれた
惚れてもええんやで？

イーブイはエリカ様に育ててくれたことを感謝しているだろうが、エリカ様はジムリーダーとして忙しい身だ。

イーブイも寂しい思いをしただろう。

「もうさびしくないからな、イーブイ。」

「ブーイ！」

「 সেইজা, ইীবুইকে প্রকৃত্তে চিন্তা করতুমি? その間に僕はチエックイン

の方を済ませるよ」

イーブイを抱き上げてジョーイさんに預けると

「ええ、わかったわ。身分証や保険証は持つてる？」

「え？」

「え？」

身分証……だと？

なんだそれ？

「身分証や保険証がないと、もしかしてポケモンを治療するのに料金が発生したり？」

「……………するわね」

なんてこった！ ポケモンセンターで無料の治療ができたのは保険が適用されていなかったからなのか！

こりやまた新事実！

しかし、ジョーイさんだって慈善事業でこんなことをしているはずがない

お給料をもらってポケモンを治療しているんだ。

お国からの保証で給料をもらっていて当然だ。

「あー……………。今から一緒に市役所に行って住民登録しましょうか」

「……………はい」

こうして、俺は晴れてこの世界の住人として生きることになりました
やったね！

第3話 3歳児はエリカ様に女装させられる

「おせわになります、おばーちゃん。でも迷惑はかけないからね。」

「子供は迷惑をかけてなんぼよ。好きなだけここに居なさい」

「ブイブイ！」

というわけで、タمامシマンションです。

なんやかんやいろいろあつて、晴れて俺はタمامシシティのマンションで住むことになりました。

身寄りのない俺を養子として引き取ってくれたのが、タمامシマンションの管理人でもあるおばあちゃんだ。

本当にこのおばあちゃんには感謝してもし足りないよ

あの後、結局ポケセンに泊まることは無く、身寄りのない俺をたまたま市役所に長話をしにきていたおばあちゃんが引き取ってくれて、そのままおばあちゃんのマンションで暮らすことになった。

おばあちゃんは「あたしのことを本当のおばあちゃんだと思っていいいんだからね？」と諭してくれたので、ありがたくおばあちゃんと呼ばせてもらっているよ

「にゃー」

「きやーうー」

「びっぴいー」

ピッピたちも嬉しそうだ。

「この子達が居るからさみしくないけど、レンジとイーブイが増えてにぎやかになったねえ」

しわくちやの顔をほころばせるおばあちゃん。

そんなやさしいおばあちゃんのが、俺は大好きだ。

「めっちゃいい子にするよー！ なんなら今からイツシユ地方まで出稼ぎに行ってもいいよー」

「おやおや、イツシユまで行かれちゃ、さすがのあたしも寂しいねえ。いい子じゃなくてもいいよ。のんびりしていきなさい。子供は遊ぶことが仕事よ」

そうする。

だが、今は居場所を手放さないために必死になる必要がある。

「それじゃおばーちゃん。僕はなにをしたらいい？ ニヤースとピッピとニドラン♀を進化させたらいい？」

「いいや、この子達はこのままが一番いいよ」

「そっか。」

せつかく拠点ができたんだ。

お婆あちゃんに孝行しつつ、トレーナーとして強くならねば。

しかし、そのためには仲間が必要だ。

イーブイだけでは足りないのだ。

「イーブイ」

「ブーイ?」

「仲間を買いに行こう」

「ブーイ!」

買うって何!? って表情のイーブイ。

僕は何もおかしなことは言っていないさ。

この町には、ロケット団が経営するロケットゲームコーナーがある。

そこで、コインを溜めて仲間をかうんだ。

今は夕方だけど、ギリギリいっぱいまで粘れば7000枚くらいなら溜められそう
だ。

家族が増えるよ！ やったねレンジ！

おい、やめろ。

とにかくだ。おばあちゃんに負担を掛けることはしたくない。

俺の住民税やポケモン保険。食費や洋服代。人を一人養うというのはそれ相応のお金がかかるのだ。

3歳の子供ならば、自立するまでにかかるお金は少なく見積もっても一千万円だ。

学校にも通わないといけないだろう。さらにイーブイもいるとなるとイーブイの維持費に相当のお金が掛かってしまうだろう。

だというのに、俺はまだポケモンを増やそうとしている。

おばあちゃんにとって、俺は悪魔の子かもしれない。

だが、それでも俺はおばあちゃんに楽をさせたい。

自分の問題は自分で解決させる。お金は、自分で稼ぐ。

「おばあちゃん、ちよつと出かけてくるね！」

「はい、いつてらっしゃい」

「イーブイ。一緒に来て」

「ブイ！」

俺の身元引受人となってくれたおばあちゃんだけど、迷惑を掛けるつもりは毛頭ない。

こちらら一度は社会人を経験しているいい年こいた兄ちゃんだ。

お金を稼ぐ手段は、自分で見つける！

イーブイを引きつれて俺はマンションの出口に向かった

——がちゃ

「ただいま戻りました、おばあさま」

「おや、おかえりエリカ」

その時、エリカ様がタمامシマンションに帰ってきた！

着物を着こなした和風美人。年齢は前世の俺より年下の17歳。

清楚な印象を強く見せつける。ふと色気を滲み出させる白いうなじに、俺の視線は釘づけた

「あら？ このお子様はどちら様でしょうか？」

「あ、こ、こ、こんなにちは……ぼ、僕は、その、レンジといいまひゅー！」

な、なんだこれは！ コミュ障じゃないのに、コミュ障じゃないのに！

こんな可憐な女の子を目の前にして思考回路がショートしてしまった！

こんなに美人が世界に存在してもいいものなのだろうか？
いや、いけない。

ここまで完成された美が存在してしまえば、それを独り占めしようとするまざまな害虫おとしこが現れてしまうに相違ない

ならば、先手を打たねばなるまい

「ぼ僕とこけけつこんしてください！」

「こけけつこん……、ですか？ それはどういったお遊びなのでしょう？」
囁んだ

大人の遊びさつと言おうと思っただけど、舌が痛くてしゃべれないでふ

そんな俺のことを非難がましく見上げるイーブイ。おい、なんか俺の足を踏んでませんか？ イーブイさんや。

「あら？ そのイーブイ……」

大事などころで囁んでしまい、消沈していると、エリカ様は俺の足元のイーブイに気が付いたみたいだ

「ブーイー！」

イーブイはびよいつと飛びあがって（最後に強く足を踏まれたのは気のせいだと思い

たい) エリカ様の胸に飛び込んでエリカ様のほっぺをペロリ。

「あなたでしたか。イーブイを預かってくれるのは」

イーブイを優しく抱き留めて微笑みながら俺を見下ろすエリカ様。

すぐにしやがんで俺に視線を合わせてくれた。

「うん。今からタマムシジムまでそれを伝えに行こうかと思つてたんだ。」

「ブイ!？」

イーブイが『うそだろ!？』と言いたげな眼で見してきたが、一応俺の中ではそれも今日の予定には入っていたんだよ？

本当だよ？

エリカ様の胸から飛び降りたイーブイは俺の腰あたりに前足をかけて、たしたしと叩いてきた。

3歳児体型だから、イーブイが大きい。

そのまま身体を支えきれずにイーブイに押し倒されて、身体を踏まれながら顔をペロペロされてしまった

まるで『おしおきだ!』と言いたげにペロペロと舐め回された。ベトベトだ。

いやんダメよ、人が見ているわ。

「くすっ ずいぶんと仲がよろしいようで安心しました。あなたになら、そのイーブイ

を託しても大丈夫そうですね」

「大切にするよ。約束する。」

「ええ、お願いしますね♪」

イーブイを抱っこして持ち上げると、イーブイはキョトンとした顔でこちらを見た。

大丈夫。俺はポケモンの中でもブイズは一番好きなキャラだったから、キミが何になっても、俺は君のことが大好きだよ。

なにせ、ブイズパーティを組んでレート戦に潜っていたくらいだからね。他にもねずみパーティとか、猫パーティとか、亀パーティとか。

まあ、好きと強いを考えたら、どうとも言えない戦績だったけどね

ブイズは総じてかわいいから正義だ。

「あ、そうだ。レンジさん？」

「はい？」

ポンと手を叩いたエリカ様に呼ばれて返事をする

「せっかく女の子なんですから、もっとかわいい恰好をしてみましようよ」

「……………はい？」

なんだかよくわからないことを言われた。

女の子？ どこが？

あ、イーブイの事？

確かに、このイーブイは珍しいことにメスだったもんね

「そのオレンジ色の髪も綺麗ですし、顔立ちも整ってますし、わたくし私がかわいくコーディネートしてさしあげますよ」

ではなく、俺の事らしい

え？ え？

突然のエリカ様のセリフに俺の頭はショート寸前だった。

「では一度、私の部屋に参りましょう。おばあさま、レンジさんをお借りしますね？」

「ええ、いいわよ」

ちよ、おばあちゃん！ おばあちゃん俺の性別知ってるでしょ!?

ついてるよ！ 俺、ちゃんといついてるから！

「ちよ、ちよつと待つて！ 僕は」

「『僕』とか言ったらだめですよ。女の子なら、『わたし』って言わないといけません」

ダメだ、エリカ様はなぜか俺のことを女の子だと思ってる接している！

エリカ様は俺の言葉は耳には届いておらず、俺の手を取って自分のマンションの部屋へと俺を連れて行った

「だから！ 話を聞いて！」

「うふふ、どんな服を着せましょうか……………」

☆

エリカ様に汚されました。

現在、わたくし……………レンジは、絶賛女装され中です。

「うう……………泣きたいよう……………」

「ブイー……………」

鏡に映った俺の姿は、どこからどう見ても、女の子であった。

元から、肩まであるオレンジ色の髪の毛。

それに、長いまつげ。ややかわいい系の顔立ちであったこの世界の俺は、エリカ様の眼には女の子に映っていたらしい。

それでも、俺のことを男だとわかってくれた人はスキンヘッドのおっちゃんとジョー

イさんだ。

おっちゃん俺のことを『坊主』と呼んでくれたし、ジョーイさんは『男らしい』と俺を褒めてくれた。

ジョーイさんはその後、一緒に住民登録をしに市役所まで来てくれたから、俺の戸籍さえ知っているはずだ。

とはいえ、俺の顔が一目見て『男の子だ!』とわかるほど雄々しい顔つきではないのもまた事実。

そう、俺の顔は中性的なのだ。

それなりに整っていると思う。

だが、見ようによっては男にも女にも見えてしまうらしい。

だからこそ、エリカ様は俺のことを女の子だと思ってしまったらしい。

さらにいえば、このイーブイ。

このイーブイは人見知りか激しい子らしく、今まで、女の子以外に懐いたことがないそう。

そのことも、エリカ様が俺のことを女の子だと思ってしまった要因でもある。

じゃあなんでイーブイは俺に懐いてくれたんだ？

もしかしてイーブイも俺のことを最初は女の子だと思ったのかな？

ぐわっ その可能性が大！ イーブイが今！ 俺から目を逸らした!!

「び、びつくりしました。まさかレンジさんが男の子だったなんて……。殿方の裸なんて、初めて見てしまいましたわ……。……（ぼっ）」

死にたい。

着替えさせられるときに、俺の姿が汚れていたからなのか、お風呂に入れられた。

もちろんエリカ様にだ。俺とイーブイはエリカ様の手によつて隅々まできれいに洗われてしまった。

もうお嫁に行けない………

あと、エリカ様は着やせするタイプだったとだけ言っておこう。それだけは眼福でした。

「だからやめてくださいっていったじやないですか、エリカ様あ………」

「うふふ、でもその恰好の時は私のことを『エリカお姉さま』と呼んでくださるととてもううれしいですよ、『オレンちゃん』」

エリカ様はさすがに女の花園であるタمامシジムのジムリーダーをしているだけあつて、若干百合っ気があつた。

とはいえ、男性に興味がないというわけでもないらしい。それは俺の身体を隅々まで

洗った時の反応でわかった。

だが、残念(?)なことにエリカ様はシヨタコンではないみたいなので、俺のことはアウトオブガンチューらしい。

まあ、3歳児だしね。

……責任とって俺をお婿さんにしてください。

でもフリフリのドレスにカチューシャを付けて、がつくりとうなだれる今の俺は『レンジ』ではなく完全に『オレンちゃん』だった。

ぐすん。

「ブーイ………」

「ブーイ、慰めてくれるの?」

「ブーイ」

「………ありがとう」

もはや俺のヒットポイントはレッドゾーンだ。

俯く俺の背中をブーイがポンポンと叩いてくれた。ありがとう。

俺のオレンジ色の髪に水色のカチューシャがこれまた似合っているのが余計に腹立つ。

「私は幼い頃から和服ばかり着ていましたから、どうしてもこういうお洋服にあこがれ

ておりましたの」

「だからって、僕を着せ替え人形にしなくても……………」

「ダメ……………でしたか？」

ドレスの裾をギョツと握って反論しようとしたけど、反則的に可愛いエリカ様ご尊顔が切なげに揺らめいているのが見えてしまい

「……………うう……………僕でよかつたら、協力するよ、エリカさ……………エリカお姉さま。」
俺のいくじなし……………。

でも卑怯じゃないか、エリカ様。

俺はそんなエリカ様の涙なんか見たくないんだよ

だから、エリカ様のタメなら俺は自分の身を犠牲にしても構わない……………と、思い込みたい。

だからと言って女装はしたくないけどさ

「うふふ、ありがとうございます♪」

「……………」

でもまあ、この笑顔が見れただけでも、儲けものかな。

プライストレス。

☆

「オレンちゃんはマンシヨンの管理人のおばあさまの養子になったのですよね？」

いつのまにか、エリカ様は俺のことを『オレンちゃん』と呼ぶようになってしまった。女装している時に限ってのことかもしれないけど、さすがに女の子扱いは落ち着かない。

「うん。成り行きだね。おばあちゃんには迷惑を掛けないようにするつもりだよ。お金も自分で稼ぎたいんだ！」

「そうですか……」

ふーむ、と考え込む仕草のエリカ様。

「でしたら明日、ジムに遊びに来ませんか？ トレーナーになるための勉強にもなりますよ？ もちろん、お手伝いをしてくれたら、お小遣いもあげちゃいます！」

「本当？ ならいく！ イーブイもね！」

「ブイ！」

イーブイも「もつちろん！」と大きく頷いた

それを確認したエリカ様はにんまりと微笑んで

「うふふ、それなら明日、楽しみにしてますね、『オレンちゃん』」

あ、コレ女装してジムに行くパターンや

第4話 3歳児は怯えるピッピを手に入れる

というわけで、翌日のタمامシジム。

「きゃー！ かわいいー！ エリカさんの妹さんですか？」

「ええ。オレンちゃんと言います。オレンちゃん。ご挨拶を。」

「……………初めまして、オレンと申します」

「きゃー！ すごく礼儀正しい子ですねー！」

ドレスを着てタمامシジムへと向かった俺とエリカ様。

そこで待つていたのは、花園だ。

しかし、女装して綺麗におめかしして、エリカ様の妹としてジムに来たわけだが、案の定俺のことを女の子だと誤解したジムトレーナーの方々に、もてはやされ、俺はもううんざりだ。

さんざんかわいいかわいいともみくちやにされても、素直に喜べない。

まあ、おねーさん方の膝の上に座って後ろから抱きしめられたら背中感触がえらい気持ちがいいのは確かなんだけど、俺は男なのだ。

なんともいえない居心地の悪さが存在していた。

「エリカお姉さま。仕事は……………」

「そうでした。つついっオレンちゃんのことをみんなに自慢したくて連れてきちゃいました。オレンちゃんにもちゃんと手伝ってもらうことがあるんですよ」

一向に話が進まないのが俺の本来の目的である、お金を稼いでおばあちゃんを楽にさせるためにどうしたらお金を溜められるか。

その結果であるエリカ様のお手伝いにやって来たのに、どうしてこうなってしまうんだ。

「今日はジムで生け花教室をします。その準備をてつだってもらいたかったですよ」

「いけ、ばな?」

「ブイ?」

まさかの生け花教室だった。

エリカ様に抱かれているブイは生け花が何なのかわからない様子で首を捻る

「はい。タマムシジムは生け花教室も行っていますので。月水金の午前中は生け花を生徒たちに教えることになっています。その準備が大変です……………オレンちゃん、手伝ってくださいね♪」

「……………はい。」

なんというか……………もつとこう、草タイプのパケモンのトレーニングとかしているかと思つたら、生け花教室のセッティングだった。

いや、不満はないよ。手伝うって言ったから全力で頑張るけどさ、もうちよつとこう……………バトルとかなかつたものかなど。

「オレンちゃんも一緒にやりましょうね♪ 私がおしえてあげますよっ」

エリカ様が手取り足取り……………

俺の後ろから手を取って剣山に花を活けるエリカ様の胸が背中越しに——

「頑張ります!!!」

ええい、頑張るぞ！ それがご褒美だ！ 桃源郷だ！

手取り足取り腰とり教えてもらうんじやー！

「ブイ……………」

こらいーブイ。俺の足を踏むんじやない。

☆

生け花教室も終わり、今度はタマムシジムでトレーナーと戦うことになった。

エリカ様は『ラフレシア』『キレイハナ』『フシギバナ』『ウツボット』『モンジャラ』『ナツシー』といった草タイプを好んで使う。

戦うトレーナーの力量によって、進化前である『クサイハナ』や『フシギダネ』などを使うこともあるそうだ。

それに、エリカ様が使用するポケモンは3体のみ。

さらに『キレイハナ』はジョウトのポケモンである故、カントーを巡っている若者のジムバトルで出すわけにはいかないそうだ。

そりゃあジムバッジは挑戦者にあげるためにあるんだから、本気のエリカ様が強いのは当然だ。

今回のトレーナーは短パン小僧のアツシ。

「フシギダネ、ねむりごなです！」

「ダネフツシヤ！」

「チュ……………くう……………」

「ああ！ コラッター！」

「続いてはっばカッターです！」

あえなくフシギダネのねむりごなに当てられて眠ってしまったコラツタは、続けばっばカッターにてあえなくダウン。

勝者はエリカ様だ。

「よく育てられています、まだまだですね。草タイプのポケモンには炎タイプのわざと虫タイプの技。氷タイプの技。そして飛行タイプの技が有効です。草タイプは毒タイプとの複合系が多い傾向にありますので、エスパータイプも有効な一手となるでしょう。対策を練って、もう一度いらしてくださいませ」

ここはタママシジム。草タイプのポケモンで戦うことが判っているのだ。

挑戦者側は圧倒的なアドバンテージを得ているから、対策はしやすい。つまり、エリカ様たちジムリーダーは普段から不利なバトルを要求されているということだ。

エリカ様だって、本当は草タイプ以外のポケモンも持っている。

パソコンの中にピッピやラッキー、シャワーズやブースターも居ると言っていた。

だが、ジムの制約によって草タイプや草タイプの技を繰り出すポケモン以外を出すことができないのだ。

それでも、トレーナーとしての腕は確かなので、並の相手ではエリカ様には全く歯が立たないのだ。

「ありがとうございます。」

バツジを手に入れることができなかつた短パン小僧のアツシ君には残念だが、キミには才能が足りない。

コラツタ一匹でエリカ様に挑むのは無謀もいい所だ。

とぼとぼと帰路に着くアツシくん。

「さて………将来はトレーナーになりたいレンジさん？」

「はい」

ふと、エリカさんが俺のことを呼ぶ。

オレンちゃんと呼ばないことから、まじめな話をしているのだとわかる。

俺もエリカ様の眼を見て返事を返した。

「今の戦いでわかつたと思いますが、ポケモンバトルでまず大事なことはなんでしょう」

エリカさんは人差し指をたてて、僕に言い聞かせるように囁いた。

「タイプ相性です」

「正解です。さすがですね、では、ここにラフレシアが居ます。私の相棒です」

俺がエリカ様の質問に答えると、満足そうにうなずいて手持ちのモンスターボールからラフレシアを目の前に出す

「ラッファー！」

「この子のタイプはなにかわかりますか？」

「草、毒タイプです」

さらに質問を出すエリカ様に応えると、またも「正解です」と言つて嬉しそうに頷いた

「ではレンジさん？ あなたなら、ラフレシアを相手にどう立ち回りますか？」

それに対して、僕は腕を組んで考える。

「立ち回る以前に、7番道路にポッポとガーディを捕まえに行く。後はピジョンに進化するくらいまで育てたら火と飛行の技でゴリ押しすれば……多少技の練度や僕とのコンビネーションが悪くても、勝てなくともいい勝負は出来るはず。」

「痺れ粉」などの粉系の補助わざは飛行タイプの「かぜおこし」で適当に分散させればいいしね。

主に飛行タイプで臨むのがいいはずだ。

さすがにエリカ様のポケモンとレベル差があるので、ピジョンで勝てると断言はできない。

「なるほど、たしかにその通りです。トレーナーは特定のタイプでしか戦えませんので、タイプ相性をきちんと把握し、その上でわたしに勝つてこそ、レインボーバッジを受け取るにふさわしい人物になるのです。その点で言えば、用意周到に準備してから望むレ

ンジさんの方が、先ほどの彼よりもレインボーバッジを手にする資格がありそうですね」

「……………そっか。ありがとう」

バッジを手にする条件の一つが、タイプ相性をしっかりと把握しているかを問われているわけだ

草タイプに対して、なにが弱点なのか。こちらはどのタイプで臨むのがいいのか。それがわからない者に、バッジを持つ資格はないということだ。

「では次に、コラッタで臨めば、どう対処しましたか？」

「コラッタで？」

「ええ。ジム戦ではなく、トレーナーと戦う場合は、どんな相手を使って来るかなんてわからないでしょう？」

それは、考えたこともなかったけど……………

「小回りの利くスピードを活かしながら、〃しつぽをふる〃で防御力を落として、〃いかりのまえば〃で体力を削って、〃とっしん〃か〃ひっさつまえば〃でKOかな？　そううまくいくとは限らないけどそれができなければ、その時に考えるよ。」

「言い解答ですね。この場合は、とにかく〃考える〃ことが重要なのです。ポケモン勝

負は絶対ではありません。草タイプのポケモンでも戦い方しだいによっては炎タイプに勝つときだってあります。明確なビジョンを持つことは、すなわち成長につながります。レンジさんは将来、いいトレーナーになりますよ」

エリカ様にお墨付きをもらっちゃった。えへへ

なんか自信が出てきた。何でもやれそうな気がする！

「今日はここまでです。『オレンちゃん』今日はジムに来てくれてありがとうございます。ごさいます」

「ここらこそ、勉強になったよ。ありがとう、エリカお姉さま」

く、一気に自分の今の現状………女装している現実に戻された。

エリカ様はいたずらっぽく笑って俺の頭を撫でると

「……………いつか、本当にオレンちゃんと……………本気で戦ってみたいですね」

「僕は絶対に超えてみせるよ、エリカ様を」

エリカ様は俺にとっても越えなくてはならない壁だろう。

バツジを手に入れて、いつかはワタルを倒してチャンピオンになるんだ。

それから、別の地方にも行ってみたいしね

エリカ様のジムを後にして帰路に着く。

エリカ様からもらったお小遣いは5,000円だ。

3歳児が持つには大金だが、生活費としてはいかんともしがたい。

本当だったら、バトルを見学させてもらった入り生け花教室で教えてもらった俺の方がお金を払わないといけないはずなのだ。

感謝こそすれど、文句は何一つない。

おばあちゃんは自分に甘えてくれと言っていたが、甘えるつもりは一切ないため、イーブイのポケモンフーズを買うお金なども自分で捻出しなければならぬ今、俺にできることと云ったら、やはりパチンコしかないのだ。

「イーブイ」

「ブイ?」

「今からまたゲームコーナーに遊びに行くよ。ついてきて」

ロケットゲームコーナーはゲーム時代とは少し違って、クレールゲームや音ゲーなど

もある。

クレイニングゲームの中には、ピッピ人形やピカチユウ人形などが置いてある。

だが、俺は換金できるゲームしかしない。

なぜなら、お金が必要だからだ。

「おう、坊主………？ 坊主だな。 おかあさんとは仲直りできたのか？」

スロットのコーナーに行くと、昨日のスキンヘッドのおっちゃんが出迎えてくれたゲームコーナーの中は音がうるさいほど鳴っている。割と大声での会話だ。

二日連続でここにいるけど、おっちゃん、仕事は無いの？

ああ、トラツクの運ちゃんなの？ だから空いた時間にパチ打ってるんだね

ちなみにおっちゃんが一瞬疑問形になったのは、おそらく俺がまだ女装しているからだと思う。

エリカ様のお古の着物だよ。この簪（かんざし）もかわいいでしょ、えへへ………はあ。

ドレスから着せ替えられたけど、どこからどうみても七五三だよ。

びつくりだろ。コレ、下着つけてないんだぜ。

ブラブラだよ。

「おかげさまでね。今日はそのお礼を言いに来たの。おっちゃんが居てくれてよかった」

「ブイ!?!」

「またもイーブイが『うそこけ!』と言いたげな視線を寄越してきたが、こういうのは相手に気分を良くしてもらおうための嘘だ。こういう技術を覚えないと、社会に出てもやっていけないぞ。」

「デートをすっぱかして待ち合わせ場所ではったり出くわしてそこでようやくデートの存在を思い出しても何食わぬ顔で『ぶっめーん遅刻した♪』と反射的に言えるくらいはずぶとさでなければならぬんだ」

「まあ、そんな男は死んでしまえと心から思えるんだけどね。」

「おう、仲直りできなたら何よりだ。それにしても、嬢ちゃん、女の子だったんだな。坊主なんて言つて悪かった」

「ううん。いいよ。あと僕は男だから、坊主でもいい。この格好はちよつと家出をしたバツでママに………ね」

「そうした作り話に、おっちゃんは苦笑いになるほど、と言った。」

「イーブイはちよつと冷めた目で俺を見つめる。『うそつき』と、そんなことを言っているような目だった。」

「また隣で打つていい?」

「おう、かまわねーぞ」

スロット台に座ると、イーブイは俺の膝の上に飛び乗って、丸くなった。

まあ、打つてる最中はポケモンにとっては退屈だからね

残りのコインの枚数は122枚。

どれだけ増やせるかとチャレンジしてみたものの、今日はダメな日だったらしく、30分で全部スツてしまった。

さんねん。日を改めた方がよさそうだ。

「うお! きたきたきた!!」

だが、俺の隣のスキンヘッドのおっちゃんは当たり目が続出しているらしく、30分で5,000枚近くコインを増やしていた

「すげえやおっちゃん! 頑張れ!!」

「まかせとけ!」

結局、おっちゃんは13,000ほど元を増やして、ホクホク顔でスロットのコーナー

を後にした

「おう坊主。付き合ってくれた礼だ。なんでも好きなもんを一つだけ奢ってやるよ」

俺のスコットの成績は散々だったが、おっちゃんに勝っていたのでありがたく奢られることにした。

本当ならば『ケーシイ』が欲しい所であるが、レベル上げをする時間がない。テレポーターしか覚えていないケーシイを仲間にするのは、もう少し俺のイーブイが育つてからの方が望ましいだろう。

「ピッピが欲しいー！」

「いいぜ、オレから坊主にプレゼントだ。」

さすがにポリゴンやカイロス、ストライク、ミニリユウなどのコインの枚数が多いポケモンをねだるのは見ず知らずのおっちゃんには厳しいものがある。

他のポケモンよりも安い、ピッピを所望することにした。

このピッピって、どこから手に入るポケモンなんだろう。

オツキミヤマから手に入るポケモンなのかな？

ロケット団がオツキミ山で乱獲したものをこの場で売っている可能性が出てきた

係員の人にモンスタールを手渡されたおっちゃんは、そのままモンスタールを俺に手渡してくれた

「ありがとう。」

「おう、じゃあな。」

「ブーイ！」

そうして、おっちゃんと俺は別れた。またすぐに会えそうな気もするけどね

それにしても、わりと簡単に777が出るスロットだけど、コインが50枚で千円。一枚25円という高い値段だから無くなる時はすぐになくなってしまふんだ。

さらにそれを換金する方法が、一度わざマシンを買わないといけないという点。

コイン3000枚でアイアンテールを買ったが、3000枚×25円で75,000円必要であるということ。

しかし、アイアンテールの売値は1,500円である。

そのことから考えるときつと仕入れの原価は1,000円程度、いや、もつと低いだろう。

それが、現金換算すると75,000円に化けてしまっている。

つまり、タマムシのゲームコーナーで換金をしようとしても、いくらコインを稼いでこちからも儲けが出たと言っても、コイン交換所を利用するというその行為のおかげで、

最後に笑うのはロケット団であるという点だ。

なかなかゲスい商売である。

こちらが『777』を量産してコイン交換所で交換するればするほど、ロケット団は儲ける仕組みになっているんだ。

その後にコインを景品にして、新たにコイン500枚の為に10,000円払えばほら、もうこつちのマイナスだ。

だからこそ、ロケットゲームコーナーでは『777』が出やすくなっているんだ。

世の中そう簡単にはことは進まないよね。

嘆息しつつ、コイン交換所から出る俺とイーブイ。

タマムシデパートの向かいにある噴水広場にて、ボールから出したピツピを召喚する
「出てきて、ピツピー！」

「ピィ……………」

コイン交換所のおねーさんから頂いたピツピは、案の定、人間に対してひどく怯えた表情をしていた

「……………やっぱりか」

手に入れたピツピは、怯えた様子で俺を見つめ、後ずさる

おそらく予想通り、ロケット団がオツキミ山で乱獲したピッピに違いない。

ピッピの出現率は相当低いはずだが、数の暴力でロケット団が見つけて一網打尽にしたのだろう。

ピッピは人気のポケモンだし、飛ぶように売れたはずだ。

実際、俺もピッピを購入して、眼の前にいるのだから。

俺が一步近づくと、怯えたように後ずさって体を震わせる

そんなピッピを、俺は優しく抱きしめた。

ピッピはその瞬間、びくりと大きく体を震わせた

「ロケット団に無理やり連れてこられたんだよね」

ブルブルと震えるピッピの背中を、優しく撫でる。

「怖かったよね」

「ピッピイ……………」

「仲間にも会いたいよね……………」

「ピイー！ ピッピイー！」

仲間ともども連れ去られらることを思い出し、泣き出してしまおうピッピ

俺の服をギュッと握って涙を零すピッピの背を撫でながら、更に俺は続ける

「…………俺も、もう二度と親にも友達にも会えないんだ。キミの気持ちは痛いほどによくわかる」

「ブイ……………」

足元のイーブイは、俺のを見て『うそつき』という非難がましい目ではなく、俺が本気で言っていることが伝わっているのであろう、ピツピによりそって優しく声を掛けていた

「ここにはキミをイジめるような人は居ない。少しずつでいい。俺と仲良くしてくれないか?」

やさしく。やさしくそう言って、ピツピの身体を離してから顔を見つめ、ピツピとしばらく見つめ合った。

「ピツピツピイー!」

眼を赤くしたピツピは、『こちらこそ仲良くしてね』と俺の胸に顔を埋めてきた

こうして、新たにピツピが仲間になった

第5話 3歳児は野生のゲーディに勝利する

ピッピを手に入れて数日が立った。

未だにお金を稼ぐ方法は確立していない。

ピッピとイーブイの食費でエリカ様の手伝いやスロットで稼いだ俺のお金も、すぐに無くなつてしまった。

甘えたくないと言っていた手前。俺の食費はおばあちゃんが負担している始末。

時々エリカ様にジムに呼ばれることもあるが、エリカ様だつて17歳。大量のお金を扱っているわけではない。

そのため、最初の日以降エリカ様からはお金は貰っていない。

「こうなつたら………」

貧乏人の最終手段。

ニヤースを捕まえて「ネコにこばん」で小銭を増やしまくるしかないのだろうか。

しかしなあ、そのみつかるお金つて『自分のレベル×攻撃回数×5円』という何とも虚しい数だつたはずだ。技を覚えるのがレベル30だということを考えると、一回の戦

闘で手に入るのは300円程度なのか。

時給で考えたら多いのかな。しかし、ニヤースをそこまで育てるのも面倒くさいな。しかし、ニヤース以外に「ネコにこぼん」を覚えるポケモンはいない

ニヤースの特性は、ものひろい……。きんのたま、5,000円

いや、ネコにこぼんで本当にお金が入ったら物価がエライことになる。

「ネコにこぼん」で生計を立てられるほどに。

それならもう「ネコにこぼん」や「ものひろい」には期待できないな。

「おい、オマエー」

じゃあ、どうやってお金を稼げばいいんだ？

3歳児にできる事なんて、全然ないぞ!?

職業斡旋所に行っても、3歳児なんてどこの会社もお呼びでないのだ。

つまり、3歳児にできるお金を儲ける仕事なんか無いということだ。

このままではおばあちゃんに迷惑ばかりかけてしまう。

「きいてんのか、おまえだよー」

だが、お金を稼ぐ方法を確立せねば、おばあちゃんに迷惑をかけ続けることになって

しまう

それは避けたい。

せつかくイーブイとピツピが居るんだ。なんか商売とか……………

できないよなあ。思いつかん。

俺のツンデレイーブイと甘えんぼピツピにできることと言ったら、その愛くるしきで俺を癒してくれることくらいだ。

金儲けの話はできん。

うーむ、早い所仕事をみつけなくては。

とはいえ、3歳児にできることは果たして見つかるかどうか……………

今のところ、ピツピとイーブイの食費で手一杯だから、ポケモンを増やすわけにもいかない……………。はて、どうしたらいいだろうか。

ポケモンマスターへの道は険しいな。

「きけつつつてんだろ！」

「あいたつ！」

痛い！ なに！ いったい！

「ずっとムシしやがって、ナメてんのかおまえ！」

顔を上げると、拳を握りしめた少年が居た。

年の頃は5、6歳といったところだろうか

その近くには、その友人であろう少年が一人。気の強そうな女の子が一人。

計三人の子供がいた。

「ん？ なに？ どうしたの？」

俺は訳が分からなといった表情で彼らを見るが、そんな俺のことを、彼らは不愉快そうに見下ろしていた

「おまえ、さいきんタママシシティにきたんだろ？」

「うん？ ー、そうなの、かな？」

最近タママシシティに来たと言えば来ただろう。

だが、街の主要な建物の場所については確実にわかるほどやりこんでいたし、15年以上昔から。この街に着いては知っているつもりだ。

しかし、現実になったこの世界は初めてと言えるだろう

「うん。最近来たね。それがどうかしたの？」

「そのくせに、さいきんエリカさんのジムにいつてるらしいな！」

あかん。話しかみ合っていない。

子供は苦手だ。

さつき俺がぼかりと殴られたからか、ベルトに固定したイーブイとピツピのポンスターボールがカタカタと怒って動いている

俺は何ともないから、おとなしくしてなさい

「それが？」

「オマエ、ナマイキなんだよ！」

「そーだそーだ！」

「エリカさんはめったにおめにかかれないのに、ズルいのよ！」

「ふむ？」

よくわからんが、俺のことが気に入らないらしい。

俺自身は、イーブイを勝手に持ち出してスロットで儲けようとしているだけのただの3歳児なんだけどなあ。

「それに、10さいにならないとポケモンをつれていくのはダメなんだぞ！」

「そーだそーだ！」

「ポケモンを持つてるのなんかズルいー！」

ああ、なるほど。

彼らの気持ちはすべて女の子が代弁してくれていた

「うーん。僕もトレーナーじゃないけど、一応ポケモンを育てるくらいはできるから、一概には言えないんだけど、みんなも自分の家でポケモンを飼ってるんでしょ？」

ほぼ確実にご両親はポケモンを持っているはずだ。

彼らが居ないと、この世界は成り立たないのだから。

パソコンを管理しているのが実はポリゴンやメタグロスだということは、研究者の間では常識だ。

他にも、仕事と密接に関わっている。ワンリキーやゴーリキー、カイリキーなども建築業や土木関連で大いに人間を助けているのだ

「それと同じだよ。ポケモンの散歩は、僕の仕事。出てきて、イーブイ。ピッピ」

「イーブイー！」

「ピッピイー！」

出てきたイーブイとピッピは、元気に返事をして、俺に突進してきた。

そのまま押し倒される

「ぐえ」

やっぱり3歳児の体力ではポケモンの力には敵わないな

俺からどいたイーブイとピツピは、俺を守るように前に立って、少年たちを睨みつけた

ピツピはだいぶ俺に慣れてきたらしく、心を開いてくれた。

仲間に会えなくて寂しくなっていたところで、おばあちゃんが飼っているピツピに会わせて、おばあちゃんのピツピとすぐ仲良くなったんだよ。

おかげでピツピもすぐに元気を取り戻したんだ

それからというものの、ピツピは俺に甘えてくる。

そのたびにイーブイが俺の足を踏んでくるけど、イーブイとピツピの仲も良好だ。

とはいえ、二匹とも俺のことが大好きらしく、俺がピンチの時は率先して俺を守ってくれるんだ

今はまだ力のない進化前のポケモンだけど、それでも俺はこの子達が俺の為に行動してくれることがうれしくて仕方がない

「さいきんきたくせにナマイキなんだよ。ポケモンもちあるいて、じまんしてんのか!？」

「そーだそーだ、じまんしてんのか!？」

「あたしもポケモン持ちたいのに！ あんたばっかりズルい！」

しかし、俺の言った理屈など、子供の屁理屈の前には無力である。

うらやましいと、最近来たばかりの俺ばかりがいい思いをしていると勘違いしてるんだ。

ほんとう、勘違いも甚だしいよね。こっちは生きることにも必死になるしかないというのに。

「めんどろくさ……………」

思わず本心が口から出てしまった

「あん？ なんつったおまえ！」

「ハヤト、めんどろくさいっていったぞ、そいつ。」

「ほんとナマイキね！」

それを聞き逃さなかった三人の子供は、さらに俺に突っかかって来ようとする
臨戦態勢のイーブイとピッピ。

「こういう場合は……………」

「逃げの一手に限る！ 行くよ、イーブイ、ピッピ！」

「ブーイ！」

「ピッピイ！」

すたこらさつさと噴水広場から離れて逃げます。

ゲーム時代の頃と比べて街がとても広くなっているが、大方の構造は同じだ。簡単に逃げられるだろう。

「あ、まて！」

「はなしはおわってな——」

「にげるなんてズルいわよ！」

三人の声を後ろに残して、俺は走り出した。

7番道路に向かつて。

☆

「初めてタمامシシティから出たなあ。おっと、草むら発見。」

7番道路はたしかセシナの実が落ちていたはずだ。

出てくるポケモンは……

ポツポ・ロコン・ガーデイ・マダツボミ・ニヤース・ナゾノクサ

この6体のはずだ。いずれもレベルは18〜21くらいだろう

「うっわー、思ってたよりもだいぶ広いな」

タمامシシティが現実になってかなり広くなったことは知っていたが、7番道路も、草原みたいになっていた。

たしかあのエリアってちよつと草むらが生えているだけの、3秒で素通りできるような場所じゃなかったっけ。

それがこんなに草原になっている。

まあ、当然か。この世界は人間よりもポケモンの方が圧倒的に数が多いのだ。そして、そのポケモンは生きている。

ゲーム時代のようにポツプするわけではないのだ。

それ相応に広くなっていて当然だ。

というわけでさっそく草むらに突入。

お？ ラッキー。スーパーボールを拾った。

誰かが捕まえ損ねたボールだな？

ポイ捨てはいかんが、有効活用させてもらおう。

ゲーム時代には無い落し物なども存在する。

こりやあ逆にゲーム時代の落とし物がすでに取られているパターンもあるだろうな

「オンー！」

地面を見ていたら、前方から声が聞こえてきた。

顔を上げると、そこには――

「おっと、出てきたな、ガーディ。行けるか、ピツピ。」

「ピィ……………」

怯えるピツピ。当然だ。ピツピはLv. 8

スマホで確認したガーディのレベルは18なのだから。

ガーディは出会ってそうそう臨戦態勢だ。

さすが野生のポケモン。こちらが仲良くしようと思ってもそううまくいかないな

「よし、いったん下がって見てろよ。眼を逸らすな。イーブイ。行けるな？」

「ブー！」

唯一対抗できるのは、レベル25のイーブイだけだ。

レベルという概念を理解しているのか怪しい世界で、レベルを把握している俺はきつと有利のはずだ。

おそらく、このスマホで確認できるレベルというのは、目安みたいなものと思っていはずだ。

「ガウ!!」

そうこうしている内に、ガーデイが「ひのこ」を吹いてきた

「ブイー!!」

「大丈夫か、イーブイ!!」

「ブイツ!!」

「よし、スピードスター!!」

「ブーイ、ブイー!!」

ひのこを喰らつてのけぞったイーブイだが、ダメージは少ないらしく、すぐに反撃に移る

イーブイが吠えるとイーブイの周りから星形のオーラのようなものが現れ、ガーデイに襲いかかった

スピードスターは絶対命中である。

躲そうとしたガーディに命中。レベル差もあり、ガーディは息が切れている

「ガウ！ ガアアアアア!!」

最後のあがきとばかりにガーディは「かえんぐるま」でこちらに向かってきた

「イーブイ、すなかけ」!

「ブイ!」

地面の砂をガーディに掛けて命中率を落とす、視力を失ったガーディは失速。イーブイは襲い掛かる「かえんぐるま」を躲してガーディは木に激突してしまった

ここいらの木は燃えにくい木だったんだな。かえんぐるまがぶつかつたにもかかわらず、焦げ跡も付かなかつたぞ

「トドメの”とっしん”!」

「ブイ!」

ドゴン! という大きな音が響いた。

「わふ……………」

見ればガーディは眼を回して気絶していた。

勝利である。

「よくやったぞイーブイ！」

「ブイブイ！」

トレーナーとしての初勝利である。

本当ならばゲットしたかったんだけどな。野生のポケモンってのは凶暴らしい。

やはり3歳児の身体では危険だな。

ポケモンバトルに巻き込まれたらひとたまりもないだろう。

なるほど。10歳からトレーナーになる資格がもらえるっていうのは、こういうことか。

自分の体格よりも1人分ほど大きいガーディを倒し、イーブイは興奮した様子で俺に飛びついてきた

ピッピも嬉しそうだ。

そんな二匹を撫でて時間を過ごし、だいぶ落ち着いたところで

「街に戻ろう」

イーブイも少し怪我をしたみたいだね。

イーブイをポケセンに預けて30分でイーブイは帰ってきた。

平気？ そっか。じゃあ帰ろっか。

俺はピツピとイーブイと一緒に並んで帰路に着く。

「あ！ おまえ！ やつとみつけた！」

「さっきのー！」

「なんでかくれるのよ、ズルいわよ！」

帰路に着く、茜に染まる街路抜け、幼き童の、妬み声あり。

レンジ。心の短歌。

なんなのこの子たち。暇なの？

なんで俺につつかかってくるかなあ。

この子達と話そうとすると疲れる。

「というわけで、サイナラー！」

三十六計にげるにしかず。

3歳児の身体では子供の喧嘩に、しかも三人相手でも勝てる気がしない。

なにせ、相手は俺よりも体格が優れているのだ。

ならば逃げの一手こそが最善である。
怪我するのは痛いのだ。

「あ、まて！」

「にげるな！」

「ズルいわよ！」

ズルくないです、作戦ですー！

第6話 3歳児は仕事を見つける

「レンジ。トレーナーズスクールに興味はないかい？」

「ん？ ないよ。どうしたの、おばあちゃん。」

トレーナーズスクールといっても、ポケモンの生体や読み書き算術を教える程度の学校でしょ？

そんなもん行ってる暇があったらお金を儲ける方法を考えるよ。

「そうかい……。将来のレンジの役に立つことばかり教えてくれるところよ。興味が
ないならいいわ」

「うん。読み書き算術とポケモンの知識ならカントーだけじゃなく国内ならジョウトと
ホウエン、シンオウ。それに外国だったらイツシユやカロスのポケモンまで伝説や幻の
ポケモンも含めてソラで言えるよ。とりあえず720匹。」

「そ、そんなにかい？ それはたまげた……」

「コイキングがギャラドスに進化することも知ってるし、イーブイの進化形が3種類
じゃないことも知ってる。だからトレーナーズスクールに通う必要なんて、ないんだ

「よ。」

メガシンカについてもある程度知っているけど、これはカロスの研究だ。
俺が口出ししていい研究じゃない。

「そうかい……………なら、逆にその知識を活かしてトレーナーズスクールの講師にはなれるんじゃないかい？　つてその年齢じゃむりね。ごめんね」

申し訳なさそうにあやまるおばあちゃん。

三歳児が教師をねえ。

絶対に舐められる。

だけど……………

「それ、いいかもしれない……………」

「へ？」

「ありがとうおばあちゃん！　これでおばあちゃんに恩を返せる!!」

やるなら知識を活かせ！　俺が得意なこととはなんだ。ポケモンだろう。

ならば知識を活かして金を稼ぎ、ポケモンを育てられるお金を確保し、旅に出る！

コレだ!!

「どうしてこんなに優秀な子が捨て子だったのかしら……………」

それは俺にもわからない。

☆

「というわけで、7番道路でポツポを捕まえました。」

「クルツポー!」

「それと……………」

「カンビィ……………ZZZ」

「16番道路の草原で寝込んでいたカビゴンを、そのままスーパーボールでつかまえました」

ポケモンの笛で起こす必要なんかなかった。

すでに状態異常：ねむる

って感じだったからね。スーパーボールを投げたらすぐに捕まったよ。

しかし残念ながらカビゴンは3匹もいた。

そのうち一匹を捕まえたに過ぎない。

ポツポを捕まえたモンスターボールは、おばあちゃんが俺にくれたものだ。

しかしながら、カビゴンを養っていける財力は無いので、スマホの中にボールごと収納した。

「レンジのパソコン」の中は仮想空間。

ポケモンはおなかを空かせることなく、さらにストレスをため込むことなく生活することが可能らしい。

マサキエ………あなた、本当にすごいお預かりシステム作ってたんだな………

でもポケモンにとっては一種の牢獄かもしれないな。

まあ、今はそんなことはどうでもいい。食費が掛からなくてラッキーだと割り切ろう。

「この木はなんだか切れそうだな」って木があつたけど、3歳児の身体の小ささを活かして隙間を通り抜け——

「へい、こんにちは！」

「あら、あなたは？」

16番道路の秘密基地のような家に住んでいる女の子に会いに来た

8歳くらいの女の子だ。

「僕はレンジ。迷い迷ってこんなところにやって来た、ただの3歳児だよっ！」

「そうなんだ。私がここにいてるってことは誰にも言わないでもらっていい？」

「いいよっ！」

「ありがとう。お礼にこの『秘伝マシン』をあげるね」

というわけで、『秘伝マシン・そらをとぶ』をゲットしました。

「秘伝マシン02は『そらをとぶ』。とても素晴らしい便利な技なの。大事に使ってね
！」

この女の子が誰なのかなんてどうでもいい。

きつとここに来る途中にいたカップルの浮気相手の子かなんかだ。

きつと男の方の連れ子だろう。

ここに来る途中にイチャコラしていたカップルが

「こらカホ。僕ばっかり見ていたらだめだぞお」

「てへっ ごめんなさい。ジンがかっこいいんだもん」とか言っていた。

きつと……いや、やめておこう。

彼女の愛が重すぎたんだ。あとぶりつ子過ぎたんだ。俺でもそんな女はお断りだ。他の女に手を出してしまうのも仕方がないのかもしれない。

さて、自転車もないからもう16番道路に用はない。

次に向かうはクチバシテイ

クチバのジムバッジが必要だ。

なぜならクチバのジムバッジがなければポケモンの「そらをとぶ」の許可が下りないからだ。

秘伝わざを使うのに、許可が必要なのはなぜか。

実力の足りないものが使用すると、危険があるからだ。

空を飛んでも落っこちるかもしれない。

怪力を使って人をひねりつぶしてしまうかもしれない。

岩砕きで物を破壊してしまうかもしれない。

そうしたトラブルを防ぐために、わざを使うことに許可が必要なのだ。

とはいえ……勝手にやってもばれなきやいいのだ。

「ポッポ。そらをとぶ、でききるっ。」

「ポッポ………」

ポッポの小さな身体では空を飛ぶを覚えても使用できないとは思わなかった。

「しかたがない。しばらくはお金を溜めながら7番道路でレベル上げに勤めるよ」



というわけで、ポッポはピジョンに進化した。レベルは現在29である。

戦い？ そんなもん、1カ月かけて野生の奴らと戦っては回復。戦っては回復を繰り返して安全第一で戦ったさ。

おかげで、ピッピのレベルは25にあがって覚えている技は“うたう” “めざましビ
ンタ” “まるくなる” “そして、” “いやしのねがい” である

お金を溜めたらわざマシンを買っているいろいろな技を覚えさせたいところである

イーブイはもうレベル33だ。

しかし、進化はさせていない。

お金がないから石を買えないのだ。

ちまちまとスロットで貯めたコインを換金したり、わざマシンを購入したりして、今現在イーブイが覚えている技は “あまえる” “シャドーボール” “スピードスター” “でんこうせっか”

進化したら、充分に強い技構成でもある

「おばあちゃんー！」

「なんだいレンジ。」

そんな僕は、今おばあちゃんにはじめてのワガママを申しつけようとして床に正座で座っている。

「シルフスコープが欲しいですー！」

そうして頭を下げると、見事なまでに土下座である。

「うーん、ごめんねえ、さすがにいくらいい子のレンジでも、初めてのワガママでも

………その我がままはきけないねえ」

「んー、残念。じゃあ仕事に行ってくるねー」
「はい、いつてらっしゃい。ごめんねレンジ」

シルフスコープが欲しい理由？ 一つしかないでしょそんなもの。

ゴースを捕まえに行かないと。しかしながらシルフスコープは15万円するのだ。

高すぎる。初めから買ってもらえるとは思っていないさ。

とりあえず、今はおばあちゃんに俺のポケモン保険や衣食住を保証してもらっているが、今は自分で稼いでいるお金もある。

仕事の合間を縫って、ポケモンを育てているのだ。

今では7番道路にイーブイ達にかなう相手はいなくなつた。

いや、一匹だけ居るか。最初にイーブイに挑んできたガーディ。あいつはいつもイーブイに喧嘩を売ってくるので、イーブイもそれを買い、なんだかんだでイーブイが勝つ。そんなことを繰り返している内に、ガーディのレベルが26とこの草原の中では最強になっていたのだ。

いまではガーディは7番道路のボスである。

そのうちこのガーディを捕まえよう。

モンスターボールを買い取るようにならないと。

ああそれと、スマホの中に収納したポケモンの食費については心配しないでいいらしく、安心した。

とはいえ、イーブイやピッピをパソコンに預けるようなことはしたくない。なぜなら可愛いから。

だからその分は食費がかかってしまう。

それはしょうがない事だね。

「あ、おまえ！」

「きょうもじゅぎょうにでるのか!？」

「あんたがせんせいなんて、ズルいわよ！」

おばあちゃんの家を出て数分。

近所の子供たちが現れた。

この子達は俺の生徒でもある。

トレーナーズスクールのテナントはタムシマンシヨンの最上階にある。

しかもそれは裏口からしか行くことは出来ない。

マンシヨンに住む人に迷惑を掛けさせないためのモノだろう。

よくできたマンシヨンだ。

「ごきげんようハヤト。マンシヨンでは大声を出さないように。あと、『おまえ』じゃなくて『レンジ』です。ケントも、先生には敬語を使いましょう。サナエちゃんも。僕はズルくないです。僕が持つ知識をみんなに教えるために、先生になったんだよ。僕が苦勞して得た知識をすぐに教えてもらえるキミ達の方がズルいんだからね」

そう。俺はトレーナーズスクールの講師になった。

教員資格などはいらない、ただの講師だから給料は安いけれど、それでも自分の力でお金を稼ぐことができるのだ。

おかげで、この一か月でお小遣いが7万円という、3歳児が持つにしては大金を自分の力で得ている。

あと三か月、この仕事を頑張れば、シルフスコープを買えるようになるはずだ。

☆

「はい、サナエちゃん。5+4は？」

「えっと、えっと………8！」

サナエちゃんは指折りで数えて元気よく答えた

「ぶぶー。惜しいね！もう一度考えてみようか」

「え？ あ！ 9！ むつかしいもんだいをだすなんて、ズルいわよ！」

「はい、正解です。よくできました」

「む、うう」

算術の授業です。

言うても、ここの授業はタمامシマンションの屋上。青空教室だ。5〜7歳の子が多いから、この程度の問題が多い。

それでも、この子達は将来のトレーナーたちだ。

10歳になったら旅に出るのに字や算術ができなければお買い物の時や地図や看板を見る時に苦労してしまう。

だからこそ、知識を詰め込まないといけない。

僕と一緒に授業をする講師のお姉さんは、正直言つて、俺よりも頭が悪い。

小学校高学年までの成績で充分先生をやって行ける力があるというのだ、この世界は。

ポケモンの力に頼り過ぎなのではないだろうか。

だからこそ、高校の数学までならおしえてやれる程度の学力がある三歳児の俺は異常なのだ。

そんな俺だからこそ、こうして講師の職に就くことができたわけだし、そんな俺に利用価値を見出したトレーナーズスクールタマムシ支局は俺を講師にすることに異存はなかったらしい。

まあ、学力テストでさらっと満点を取ってポケモンテストでも満点を取って、本来の講師の先生と学力勝負をしてあっさり打ち負かしたものだから今は俺が生徒たちに算術を教えているのだ。

俺の授業は褒めて伸ばす授業である。

おかげで生徒受けはいいのだが、やはり年下に教わるのは気分がいいものではないらしく、眼の仇にされることも多い。

「はい、算術の授業はここまで。つぎはポケモンの授業になります」

それでも、俺はこの仕事にやりがいを感じていた。

「おいレンジー！」

「ん、なに、ハヤト。」

「おまえはポケモンつよいのか？」

生徒のハヤトと呼ばれて振り返る。

ポケモンか。ポケモン勝負ってことかな？

「うーん。トレーナーじゃないからわからないけど、まだ強くないね。これからもつ

ともつとつよくなって、いつかはチャンピオンのワタルさんも倒すよ」
「ワタルさんを!? すっげー!」

最初は俺のことをナマイキだと言っていたハヤトくん。

彼はなんだかんだでポケモントレーナーへの憧れが強く、俺が懇切丁寧にトレーナーとして何が大事か。彼らよりもいかに知識を持っているかを知らしめてやったら簡単に俺を認めてくれた

なんというか、年が近いこともあって友達みたいな感じで扱われているが、悪い気はしない。

「ハヤトよりもあたしとお話ししようよ。ズルいわよ……………」

最近、サナエちゃんがチラチラと俺を見ている気がするが、俺はロリコンじゃないし、エリカ様が大好きなので彼女のことはアウトオブガンチューである。

「ブイ……………」

だから足を踏まないで、イーブイ。

「うふふ、頑張ってますね、レンジさん」

「あ、エリカさんだ！」

「きれー！」

「なんでここにきてるんだろー？」

俺が授業をしていると、時々ジムから抜けだして来たエリカ様が授業参観にやってくるので、そのせいで俺の授業が人気だということもあるのは、気のせいだと思いたい。

第7話 3歳児はトレーナーの資格を得る

教師生活を始めて早3ヶ月。俺がこの世界に来てからも3ヶ月のそんなある日。

「うふふ、オレンちゃんは本当に物知りですね」

「まあ、ね。早くおばあちゃんに恩を返して楽をさせてあげたいんだけど、そううまくはいかないか。」

授業が終わり、俺はエリカ様の部屋に呼ばれていた。

なぜって？

着せ替え人形にされるために。

そのために、今は一緒にお風呂に入っているとこらだ。

浴槽の中でエリカ様の膝の上に座って、エリカ様はそんな俺のことを抱きしめてくれている

背中には柔らかい感触と共に、すこしだけツンととがった感触もある。

最高だ。

「ねえ、10歳にならなくてもトレーナーになる方法ってないの？ ひゃうー！」

俺が3歳児だからって変なところを触らないでくださいエリカ様。

我慢していたモノが爆発してしまいます。

といつても、精通もしていないからおつきくなつても何も出ないけどね。

あつ、引つ張らないで！

「そうですねえ……………方法はありますよ。」

「どうするの？」

「オレンちゃんなら心配いらなと思いますよ、ポケモンリーグに飛び級認定試験があります。かなり難しい試験ですが、それを受けて合格すれば、トレーナーIDがもらえますよ。」

「あ……………カードみたいな奴だね」

「そうですわ」

トレーナーカードを見れば、残金とかプレイ時間とかバッジの個数とか捕まえたポケモンの数とかがわかるはずだ。

それが現実になったのなら……………個人情報に記載されているのだろう。

住所だとか、郵便番号だとか、そういうの。

「本来なら10歳で自動的に配られるものなので、それまでに基礎知識を固めるのが普通ですわ」

「その辺の知識はバッチリだからね。必要ないかな。」

だってカロス地方までポケモンのことを知ってるんだよ？ それも、3歳児である俺が他の子供たち（年上）に教えられるほどに。

「ええ。なので、明日は一緒にポケモンリーグ協会に申請しに行きましょう。」

「いいの？ ジムのお仕事は？」

エリカ様に抱かれたまま振り返る。

エリカ様はニツコリと微笑んで俺の頭に自身のほっぺを乗つけた。

上気した頬がぶにぶにと気持ちいい。

「いいんですよ。挑戦者なんてめつたに来ませんし、ジムトレーナーだって自分のやるべきトレーニングはわかっているはずです。私にだって都合はあるのですから、その時は挑戦者の方に待ってもらいましょう」

今の私はオレンちゃんに夢中ですしね♪ と俺のへそのあたりを細い指で撫でるエリカ様。

おっふ。ゾクゾクする

☆

というわけで、トレーナーIDを発行してもらえました。

いやあ、簡単だったよ。

エリカ様の持つピジョットでポケモンリーグまでひとつとび。

エリカ様に後ろからしがみついて、ついでにおっぱいも堪能した。

その後、試験官のカンナさん（四天王じゃねえか！）にテストしてもらって、模擬試験としてカンナさんのジユゴンでラプラスと戦い、さすがに勝てなかったけどカンナさんに合格を貰いました。

さすがは四天王。エリカ様のラフレシアよりもより洗練された強さを持つラプラスとジユゴンには脱帽だ。

チャンピオンのワタルにもあったけど、なんだかカンナさんには苦手意識があるみたいだった。

カンナさんは氷タイププの使い手だからね。

エリカ様は俺の付き添いとしてずっと俺の側に居てもらった。

だから手を握っていないなくても迷子にならないってば。

「これでレンジさんもトレーナーですね♪」

「うん、連れてきてくれてありがとう！ エリカ様！」

イーブイとピツピのモンスターボールに俺のトレーナーIDを書き込み、晴れてイーブイとピツピ。さらにはピジョンとカビゴンも俺のポケモンとして認められることになった。

「それでは、今度は『オレンちゃん』の登録も済ませましょうか♪」

「は?..」

☆

というわけで、トレーナーIDを発行してもらえました。
いやあ、難しかったよ。

まさかエリカ様があんなことを言いだすなんて。

ワタルがそれに難色を示すのも当然だって。

だって、誰も2つのIDを持つなんてしたことがないんだよ？

世界初だよ世界初。エリカ様がうるうるした目で「ダメですか？」と俺に女装させた時と同じ眼をしてワタルを落とし、無事テストを受けることになった。

試験官のワタル（チャンピオンじゃねえか！）にテストしてもらって、模擬試験としてワタルのカイリユーでポーマンダと戦い、なんとか互角の勝負をしてワタルに合格を貰いました。

さすがはチャンピオン。エリカ様のフシギバナよりもより洗練された強さを持つカイリユーとポーマンダには脱帽だ。

四天王のキクコにもあったけど、なんだかずっとオーキド博士の愚痴を言ってたみたいだった。

キクコさんはゴーストタイプを使い手だからね。オーキド博士が呪われないか心配。

エリカ様は俺の姉としてずっとわたしの側に居てもらった。だから手を握っていなくても女装なんか脱がないってば。

「これでオレンちゃんもトレーナーですね♪」

「そうですね、なんでこうなったのでしょうか、エリカお姉さま。」

オレンちゃんの手持ちには、何のポケモンもいません。どうしてこんなことに？

あ、トレーナーカードの性別の欄にシールが貼つてある！

一見では男だとばれないようになってる！　なんて手の込んだトレーナーカードなんだ！

「エリカお姉さま。2度も筆記試験と実技試験をして疲れました。」

「ええ。でも、これでオレンちゃんもトレーナーです♪　草トレーナーとして、いつしよにがんばりましょう？」

オレンちゃんは草トレーナーになる運命らしいです。

エリカ様は自腹でわたしの試験代を二人分も払ってくれた。だから文句なんて、時間を返せというくらいしかないよ。

わたしが疲れただけで、特に損はないからね。

オレンちゃんの分はともかくとして、レンジの分の受験料くらいはいつかお金を稼いでエリカ様に倍にして返すよ。

あれ？ それってつまり二人分？

ワタルもカンナも、久々の飛び級試験が珍しくてリーグから出てきたキクコもシバも、女装したわたしがあまりにも女々しくてびっくりしていたよ。

「お前、本当に男なのか？」

「これでもついてるんだよね、おちんちん。」

七五三の着物スタイルで両手を肩の上で掌も上に向けて首をすくめる。

着物が擦れる。そしてブルーブラ。

「もういいよ。エリカ様のお人形やってて『オレンちゃん』にも慣れたから。もうどうにでもなれー♪ ってかんじ」

「た、達観してんなあ……………」

「そうだ、ワタルさん。この『オレンちゃん』にパートナーになるポケモンは居ないんだけど、選別でなんかちよーだい」

もちろんレンジのパートナーはイーブイだよ。ねー♪

でも、チャンピオンにこんな不躰なお願いしてもいいモノだろうか。

「うん？ そうだなあ。せつかく最年少トレーナーが二人もできたんだ。俺が厳選中だったタマゴを2つやろう。おそらく、隠れ特性だ。」

厳選中って……………個体値とかいうあれですか。

とりあえずまだイーブイはレベル上げの最中だから努力値は適当に振っているだけだし、個体値は良個体値だったけど6Vって程ではなかったけど、厳選中のタマゴを貰えるのはいいことだ。

ちなみにスマホでイーブイを撮影して確認できたイーブイの個体値はこうだ。H^{体力}・

A^{攻撃}・B^{防御}・C^{特攻}・D^{特防}・S^{すばやさ}で表記すると

H・28

A・12

B・30

C・31

D・25

S・4

こんな感じだね。

平均的なイーブイよりも鈍足であるが、特殊攻撃はマックスである。

この世界は現実だ。鈍足ならば走って鍛えるさ。いっしょにフリスビーすれば楽しいしね。

しかし、ポケモン勝負はまだまだ分からない事ばかり。何が起きるのかわからないか

ら数字ばかり気にしていたらダメだ。

数字に出ないところも鍛えなければならぬのだから。

ワタルはいったんリーグに戻り、パソコンから2つのタマゴを取り寄せた。

ワタルから頂いたタマゴは“レンジ”と“オレンちゃん”の分だろう。

「どちらかがミニリユウで、どちらかがタツベイだ。大切に育ててくれよ」

つまり、どちらでも夢特性となると、カイリユウは“マルチスケイル”、ポーマンダは“じしんかじょう”

やべえ、どっちも強力だ。

とりあえず、産まれたらその時に考えよう、

「ドラゴンタイプは育つのは遅いけど、進化すればどんなポケモンよりも強力なポケモンになる。ロマンがあるだろう？」

ニヤリと笑うワタルに俺の“ピクシー”を見せてやりたい。

フェアリータイプだぞ。ドラゴンタイプの技なんか効きません。

ん？ カントーじゃノーマル？ どっちなんだ？ あれれ？

カロスのピクシーは突然変異でもしたのか!?

あつれえ?

「ありがとう、ありがたくもらうよ!」

「いつか俺に挑戦しに来ることを祈ってるぞ」

「うん、いつかこの子達でワタルさんを超えて見せる。その時にはすでに僕が大人になって、ワタルさんがチャンピオンの座から降ろされていたりしてね」

「ははっ、年は取りたくないね。あ、筆記の成績表は後で返してやるから、もう少し待っててくれ」

ワタルさんはまだ24歳。まだまだ若いよ

☆

「ふいふ、おばーちゃん、ただいまー」

「あら、おかえりレンジ。試験はどうだったの?」

タママシマクションに帰ってきたよ。

ハラハラしながら待っていたおばあちゃん。

いくら俺が3歳児離れしているとはいえ、心配なものには心配なのだろう。

「よゆーのよつちちゃんじゃ合格だよ。トレーナーの資格を手に入れたから、講師の授業で時給がほんの少しだけ上がるよ！」

「へえ、それはよかったねえ。」

まるで自分のことのように喜んでくれるおばあちゃん。

こんなおばあちゃんだからこそ、俺はおばあちゃんが大好きなんだ。

「ええ、すごかったんですよ、レンジさん。筆記の科目は全部満点！ 大人だって間違えることもある問題もスラスラ解けちゃうんですよ！」

興奮したようにエリカ様がぐっと拳を握って俺を褒めてくる。

そんなたいしたことはしていないんだけどね。

因数分解とかグラフの問題とかもあつたけど、あんなもん前世の知識があつたら誰だつて余裕だよ。

ほら、 $y = ax + b$ とか、むしろなつかしい♪とか思いながら解いてて面白かつたし。

国語つつつても日本語だし。それ以外の強化はポケモンの知識とか。

このポケモンは何タイプ？

この技はどんなわざ？

このポケモンの弱点のタイプは？

つてね。

ちなみにピッピやピクシーはフェアリータイプだった。満点だったんだもの。それで正解なのは間違いない。

いくらスマホのステータスでフェアリータイプと表示されていても、FRRG時代のピッピはノーマルタイプなのだから、固定概念があるのだ。

しかしながら、俺が居るこの世界ではきちんと適用されていて、そういう補正もかかっているようで安心した。

「よくがんばったねえ」

おばあちゃんは俺の頭を撫でる。

頑張った気はしないけど、うれしいものはうれしい。

「うん。でもせっかくトレーナーの資格を手に入れたんだ。講師の仕事をしながら、少しずつ旅に出てみようと思う。日帰りです。」

「危険じゃないかい？」

俺は旅に出なければならぬのだ。まだ見ぬ世界を見てみたい。

この世界は広いのだ。行きたいと思った場所に行けるなら、自由に生きることが可能ならば、生きていく内に行けるところを見てみたいのだ。

「大丈夫。僕には心強い仲間がいるからね」

「ブイー！」

俺の足元で相棒のブイーが一鳴き。

頼りにしてるよ、相棒。

実はもう進化の石は自分の給料で4種類とも買っている。

月の石だつてピツピがいつのまにかどこかから見つけてきた。

太陽の石は土地のせいが見つからなかつたけど、それでもいい感じに石は揃っている。

しかしながら、ブイーは進化させていない。

なぜならブイーが進化を拒んだからだ。

なぜかと聞いても、俺にはブイーの言葉はわからない。ぴよんと俺の膝の上に飛び乗ってくるばかりだ。

もしかしたら、進化したら俺よりも身体が大きくなって俺の膝の上に乗れなくなってしまふのが嫌なのかもしれない。

かわいい奴め。

ピッピはどちらかという進化には積極的で、でも進化させるタイミングは俺に任せられているようだ。

なので、教師として働く傍ら、レベル上げをしつつ、いい感じにピッピもバトルに慣れてきていたので、ピクシーに進化させたよ。

「ピクシーー！」

ピクシーは強くなりたいという気持ちが強いらしく、本人の希望に沿って技構成を練っているところである。

ピクシーは普通ならばアシスト担当なのだろうが、このピクシーはフルアタックで行こうかと思う。

スロットの景品でわざマシンはしっかりと買ったからね

タママシデパートにも買いに行った。

店員さんも初めは俺にわざマシンを売るのに難色を示していたけど、俺のトレーナーカードを見たらしぶしぶ売ってくれた。

さすがタママシデパート。技マシンの品ぞろえもいい感じだね

いまのピクシーの技構成はこうだ。

“サイコネシス” “10まんボルト” “かえんほうしゃ” “れいとうビーム”
まさかのフルアタックのピクシーで度胆を抜かしたるわ

しかもレベルは3ヶ月の間に36まで上がっている。

すでにお給料とおばあちゃんからのおこづかいで、必要な技マシンは揃っているんだ。

ピクシーの為にこのくらいはしてあげないとね。

イーブイに至ってはレベルが39である。

ピジョンもピジョットに進化したので、これで“そらをとぶ”が使えるはずだ。

シルフスコープだって買った。ネット注文で最近届いたんだ。

コレでシオンタウンにゴースを捕まえに行くことができる。

「オン！」

さらには、こいつだ。

ガーディ。例の7番道路のボス。

この子もゲットしている。

お給料で買った10個のモンスターボールについてきたプレミアボールでゲット。

ついでに7番道路に生息するポケモンも全種類捕まえて『レンジのスマホ』の中に収納したよ。

ガーディはイーブイとは良きライバル関係である。

イーブイはかけっこ勝負でガーディにはいつも負けているようで、悔しそうだが、バトル方面ではまだイーブイが勝っている。

そろそろ進化しないとキツイかもしれないね、イーブイ。鈍足でも大丈夫なブイズは居ただろうか。氷タイプของ グレイシアか？

でもマツハパンチで落ちちやうんだよな。

しかもガーディに対してめっちゃ苦手タイプだし。

それはそのうちイーブイが自分で決めることか。俺が口出しすることじゃない。

ちなみにガーディのレベルは37である。

根性あるよ、こいつ。

「僕にはこの子達が居る。ちゃんとお夕飯までには帰ってくるし、仕事もちやんと続けるよ。だから、ね、いいでしょ？」

「そこまで言うのなら、少しくらい遠くに行っても構わないわ。でも、気をつけるのよ。怪我だけはしないでね？」

「……………ありがとう、おばーちゃん」

「うふふ、よかったですね、レンジさん♪」

俺の後ろで、エリカ様も嬉しそうに微笑んでくれた。

ところで、わたしはいつまで女の子の恰好をしなければいけないのでしょうか？

ねえエリカ様。僕の眼を見て？ ねえってば。

第8話 3歳児は説教を垂れる

授業も終わり、生徒たちは三々五々と散ってゆく。

そんな中、俺は生徒のハヤト達に遊びに誘われて噴水広場まで来ていた時間もまだたっぷりとあるからね。仕事終わりとはいえ、いっぱい遊べるよ。

俺は二つのタマゴの入った容器（強く振ってもタマゴに衝撃を与えない優れもの）をリュックから取り出して、ベンチに座る

「レンジ、何もってんだ？」

「ん、これ？ ポケモンのタマゴ。」

「ブイ」

ワタルからもらったポケモンのタマゴ。ミニリュウとタツベイだ。

たまに動いているように見えるので、産まれるのはもうすぐだと思う

それを見たハヤトが目ざとくなんのかを聞いてくる。

そんな中、イーブイだけはあまり話には興味ないとばかりに俺の膝の上に飛び乗った。

「タマゴを持つてるなんて、ズルいわよ！」

「ズルくないよ。」

「それに、二つも持つてるなんてズルい。一つちようだい！」

「あげない。」

「レンジのケチんぼ！」

サナエちゃんがそのタマゴが欲しいと強請ってくるが、こればかりはあげられるわけにはいかないんだ。

ドラゴンタイプは育てるのに時間がかかるうえに、気性が荒い。子供に持たせるには危険であるし、高個体値でかつ、チャンピオンのワタルからもらった大事な大事なタマゴなんだ。

それを簡単に人にあげてしまったら、ワタルに対するヒドイ裏切り行為だ。

それは人として絶対に許されない。

それに、子供にドラゴンタイプを持たせても、育つのに時間がかかりすぎて途中で飽きるだろう。そしたらポケモンが可哀想だ。

「でもいーなー。どこでもらったんだ？」

うらやましそうにタマゴを見つめるのは、ハヤトの友達のケンジくん。

特徴という特徴のない、いたって普通の男の子だ。

ハヤトにいつもくっ付いているから、ハヤトを探したらこの子が見つかる。

間違っても『素敵なハーモニー』とかいうアイツじゃないよ。

「これは、チャンピオンのワタルにもらったんだよ。だから、人にあげるわけにはいかな
いんだ」

「ワタルさんから!? いーなー! いーなー!」

「ワタルさんに会うなんて、ズルいわよ!」

「すっげー! かっこよかった?」

タマゴの入った容器をベンチに置いて、撫でながら「めっちゃかっこよかった!」と
言うと、三人組はさらにはしゃぐ

うへへ、こういううちやほやされるのって、すごく気持ちがいいや。

「うそつけ!」

後ろからいきなり大声で叫ばれた
何事かと思つて後ろを振り向くと

「マサヨシくん」

マサヨシというガタイのいい少年が居た

彼は俺が講師を務めているトレーナーズスクールの生徒である。

成績は優秀。上昇志向が強く、常にトップを目指している。

そんな彼は、ポツと出の俺に授業を教わるといふことが気に食わないという生徒の一人である。

当たり前だ。今まで成績がトップに君臨していたはずなのに、いきなり3歳児が現れて、そいつが教鞭を振っているのだから。

マサヨシ君は9歳。来年にはトレーナーズスクールを卒業してトレーナーとして旅に出るのだと、前任の先生に語っていた。

自分がトップの成績であることを誇りに思っており、プライドが高い。

そのため、3歳児でありながら自分をはるかに凌駕する知識量を持つ俺が鬱陶しくて仕方がないのだろう

「それで、うそつけてどういうこと？」

「言つた通りの意味だ！ ワタルさんがお前みたいなのがタマゴを渡すわけがない！ それにワタルさんはチャンピオンなんだぞ！ そんな簡単に会えるわけがない！

だいたい、毎日トレーナーズスクールに来てるのに、いつ会えるんだよ！」

感情に任せて言いたい放題のマサヨシくんに、俺は嘆息する

「そーだそーだ！」

「もつと言つてやれー！」

マサヨシの後ろから、さらに俺のことがいけ好かないのだろう、とある双子が手を繋ぎながらマサヨシに同調する。

その双子は男の子と女の子だった。マサヨシの後ろに隠れながら声を張り上げているのは

「フウとランも………」

その双子というのが、あろうことか、フウとランである。

長い髪を後ろで纏めて、青いチャイナ服に身を包んだ二卵性双生児。

ホウエン地方のトクサネシティに存在するトクサネジムのジムリーダー。『フウとラン』そのものである。

いやあ、初めて見た時はびっくりしたよ。

まさかカントーに居るとは思わないじゃん。

しかも、タマムシのトレーナーズスクールで俺の生徒になるなんてさ。

あ、ちなみに俺の生徒の「ハヤト」の方はジョウト地方の鳥ポケモンのジムリーダーとは別人だよ。

時系列がどうなっているのかはわからないけれど、フウとランは現在7歳である。

成績はマサヨシに続いて同率2位。

将来はジムリーダーなだけあって、おそらく、マサヨシを超える才能を持っているし、マサヨシもそのことについては気付いている。だが、それでもマサヨシは現在のところ成績一位はゆるぎないため、良きライバルとして互いを高め合っていた。

フウとランは実家がホウエン地方なのだが、トクサネ宇宙センターの方でちよつとしたトラブルが起こったらしく、父方の祖父の家に旅行ついでに泊まっているらしい。

あと数か月もしたらホウエン地方に戻ると言っていた。

短い期間だが、それでも大事な生徒だ。きちんと教えられることは教えておきたい。

「それに、3歳のお前がポケモンを連れて歩くのはダメなんだぞ！ 先生であるお前がいちばんやつちやいけないことをやってんじやんか！」

「ほーりつ無視して」

「好き勝手！」

「レンジの言うことは」

「信用できないわ!」

マサヨシの言葉に、最近までの俺ならば痛い所を付かれたと思っただろう。

しかし、俺はもうトレーナーカードを持っている、正式なポケモントレーナーである。全く痛くもかゆくもない。

交互に俺を罵倒するフウとランの言葉もまた然り。

確かにイーブイを手に入れた最初はなりふり構ってられなくて法律を無視していたが、今の俺は講師であり、ポケモンの授業をしているため、タマムシトレーナーズスクールからは許可は下りている。

さらに、イーブイ達の所有権は、あの頃はエリカ様とおばあちゃんが代理で一時的に引き受けてくれていた。

講師になってからは一度も違反をしたことは無いと断言できる。

だからこそ、そんな言葉は柳の風と受け流せる。

「……いつら……」

「年上だからってちよーしのりやがって!」

「三人がかりでレンジをイジメるなんて、ズルいわよ!」

「ブイブイ!」

年上だからってちよーしに乗ってたのはキミ達も同じだし、三人がかりで俺に喧嘩を吹っかけてきたキミ達も同じだよと突っ込みたくなつたが、俺の為に憤ってくれているハヤトたちに、すこしほっこりだ。

イーブイも俺の為にプンプンとお怒りの様子。

「へっ！ 俺は本当のことを言ってるだけだぜ！」

「トレーナの資格は」

「10歳からもらえるんだから！」

5歳児のハヤテたちと7歳と9歳のマサヨシ達がにらみ合う。

一触即発とはこのことだ。

「それに、俺は知ってるんだぜ、お前、父ちゃんも母ちゃんもいない、捨て子だったんだろ？ そんな奴に教わることなんかなんもねーよ！ 俺の父ちゃんも母ちゃんも、お前には関わるなってみんな言ってたんだ！」

俺を蔑むように見下したマサヨシ

「やーい」

「やーい」

それに続いて挑発してくるフウとラン。

.....。

「くくく.....」

いやあ、もうほんつとうに、子供の喧嘩ってのはくだらないなあ

「あん？ 何笑ってんだよてめえ！」

「気が」

「狂ったの？」

気が狂った？ ああ、そうだよ。気なんか最初から狂ってる。

この世界に来た時からね。

狂って道化を演じてないとやっていけない程に。

といつても、俺の堪忍袋の緒はハリガネでできているからそう簡単には切れはしない
や。

「3歳児がポケモンを持つちやいけなとか、くつだらねえ」

だから、まるで興味がないとばかりに吐き捨てる

「何言ってやがる、法律で.....」

「僕は何の罪も犯していないさ。見るか？ 僕のトレーナーカード。ポケモンリーグの

承認がされている。こんな3歳児でも、立派なトレーナーだよ。」

俺はマサヨシとフウとランを軽く睨みつけながら心底不愉快そうな態度で応える。リユックから出したトレーナーカードには、レンジはトレーナーであることを証明するポケモンリーグの承認印が押ししてある。

それを確認したマサヨシやフウとランは目を丸くしてトレーナーカードを凝視するに、偽物だ！」

「だってトレーナーカードは」

「10歳を過ぎてからじゃないと」

カードを見ても信じてもらえないのは想定済み。

「飛び級認定試験っていうのがあるんだ。僕は10歳までなんてそんな悠長に待てないからね。努力をしたらその先を目指すのが当然。だから僕はトレーナーになった。10歳になる前にチャンピオンを倒せるくらい、強くなる気概でなくてどうする。人を貶めることをする時間があるなら、少しでも勉強するなりバトルするなりお金を稼ぐ方法を考えるなりする方がよっぽど有意義な時間の使い方だとは思わないか？ 思わないよなあ。お前ら、授業は聞かないけど成績だけはいいもんなア！」

俺は小馬鹿にしたような顔を見て、顔を真っ赤にする三人

家では予習復習をしているのだろうが、年下の俺から教わるのはプライドが許さない

のか、俺の授業の時はちつとも聞きやしねえ。

ちなみに、飛び級試験というものは、最低でも一人、ジムリーダーからの許可がなければ受けることができないようになってる。

当然だ。そんなにほしいと試験を受けられるならば誰だつてやっている。

「上を目指すなら、待つんじゃないよ。自分で動け。そして進め。じゃねーとどこかで躓いたときに、ずっとそこから動けないことになる。そのときに僕はおまえ達が一度たりともたどり着けない高みで、さっきまでお前たちががしていた顔でこういつてやるよ。」

『あれ、まだそんなところに居たの？』つてよお」

俺は最大限の嘲笑を顔に貼り付けてマサヨシに歩み寄る。

きつと、今の俺の顔をエリカ様が見たら卒倒するだろう。

それくらい、今までの俺の顔とかけ離れた顔のはずだ。

「能力があるからそれに見合った資格を手に入れるのは当然だろう？　ならばなぜお前たちはそれをしない。10歳になれば自動的に資格を貰えるからか？　そうしている間に、僕はどんどん先に行くぞ。そしたら、お前らはもつともつと惨めになるわけだ。父親も母親もない。蔑んでいた僕に嘲り笑われる気持ちつてのは、いったいどんな気

持ちなんだろうね。いやはや、教えてほしくらいだよ、
“後輩くん”。」

キヒヒツ と笑いながら近づくと俺に気圧されてジリジリと後ろに下がるマサヨシ。

それを見て、俺はさらに嘲笑する。

「あつれ、怖いんだ。なあんだ、やつぱりしたいしたことないじゃん。口先だけ。僕に勝てるところが何一つないから悪口を言う。でもそんなものは僕には響かないから、怖くなって逃げようとしている。あー可笑しい。滑稽すぎて笑えるよ。一生そこで燻っているよ。その間に僕は、もつと先に行くからさ。」

フンと鼻をならして、やさしくポンと彼の腕を叩く。

ほら、どけ。

「だ、」

「あ?」

マサヨシが怒りで肩を震わせながらも、俺に反論しようとしたので、威圧して黙らせようとするが、所詮は三歳児の睨みだ。たいした意味もないかもしれない。

「だとしても、それがお前にタマゴを渡した理由になんかならないだろ! お前がどこでタマゴを貰ったかもよくわかんないし!」

まだそんなことを言ってるのか、このお子ちゃまは。

「このタマゴはトレーナーカードを発行してもらうためにポケモンリーグにまで行って試験を受けた時に、その時に試験官をしていたワタルさんからもらったんだ。ワタルさんはね、すつごく優しいんだよ。僕がワガママで『なんかちよーだい』て言ったら簡単にタマゴをくれたぞ。僕もまさか本当にもらえるとは思わなかったさ。臆することなく行動を起こせば、実を結ぶことだってある。いい例じゃないか。もしかしたらワタルさんに会ったらお前たちもタマゴを貰えるかもしれないね」

俺はベンチに飛び乗って、ベンチに置いていた二つのタマゴを撫でる

「ぐ、う……………」

まだ何か反論を探そうとしているマサヨシ君に、ダメ押しとばかりにモンスターボールを取り出して放ると

「出てこいピジョット。」

ピジョットを取りだす。

「ピジョット——ッ!!!」

人を二人以上乗せてもびくともしなそうな大きな体だ。

三歳児である俺を乗せたところで、重量の内に入らないかもしれない。

突然現れたピジョットに怖気づいたマサヨシ達。

そんな不安がらなくても、襲わせたりなんかしねーよ。

ピジヨットはうれしそうに俺に顔を擦りつけてくる。

俺はそんなピジヨットの頭をワシワシと撫でまわした。

「僕にはポケモンリーグに飛び級試験をしに、自力で行ける手段チカラもある。ならば行くのが当然だ。行動を起こす気もない癖に、持っているものを妬んでばかり。そんな暇があるなら自分で飛び級の申請くらい出してみたらどうなんだ、ああ？」

リュックから取り出したポケモンフーズを俺の手から食べるピジヨット。

でかい癖に、それでも俺のことが大好きなようで、俺の手で食べさせてもらうことが大好きな甘えんぼピジヨットだ。

愛い奴め。

「こっのー！」

「おっ！」

挑発しすぎたか？ マサヨシが拳を握り締めて振りかぶった

「調子に、乗るなー!!」

バキッという音が聞こえる。

視界が揺れる。当然だ。殴られたのだから。

ベンチから転がり落ちて足元にポケモンフーズが散らばる。

「ピジョー!?! ピジョットー!」

「イーよイーよ。平気だから。挑発したら殴られる。当然だろ? エリカ様のピジョットに喧嘩を売ってボロ負けしたことを忘れたの?」

痛つてえ……首ひねったな。

俺が殴られるという状況に戸惑ったピジョットが慌てて俺に手を出したマサヨシにくちばしでつつこうとしているのを諫める

このピジョットはエリカ様のピジョットに喧嘩を売って、ぼろ負けして配下になった、情けないほどに戦闘力は弱いピジョットだ。エリカ様のピジョットよりもレベルは低いし個体値も全体的に低い。だが、子供相手にそのくちばしでつつけば、大けがをしてしまいそうなほどレベルは高い。それに、誤って怪我をさせてしまえば元も子もないからね。

全てのステータスを比べたら、実際、進化をしていないイーブイよりも最終進化までしたピジョットの方が強いからね。

「レンジー!」

「大丈夫か！」

「な、殴るなんて、ズルいわよ!!」

「イブイブー！」

三人組もイブイブも、俺のことを心配して駆け寄り、立ち上がるのに手を貸してくれ
た

ペツと唾を吐くと、血の混じった唾液が噴水広場の地面に付いた

ふーふーと息を荒くして興奮状態のマサヨシ。

フウとランは、さすがにマサヨシがここまでするとは思っていなかったようで、すこ
し心配そうに殴られた俺を見下ろしていた。

マサヨシは3歳児にコケにされて、正気じゃ居られなかったんだろう。気持ちはわか
る。

俺みたいな人生をやり直しているチート野郎が相手なんだ。それを知らないマサヨ
シのプライドがズタズタになるのは、当然だ。まさしく俺のせいなのだから。

「それで？ 僕を殴ったら解決するのか？ しねーだろ。行動を起こさなかった自分の
ことを棚に上げて、自分が持つていなかったものを持つているものが羨ましくて、だか
ら癩癩を起すくらいしかできることがない。単純だな。そんなことをする暇があるな
ら、今すぐポケモンリーグにハガキでも送って飛び級の申請でもしろってんだ。そした

らトレーナーに一歩近づけるってのに。」

そう言つて嘆息する。俺が煽っているのは、ただ発破を掛けているだけだ。

これで、彼が自分の間違いに気が付けばよかつたんだが、むしろ3歳児の俺が言つても皮肉にしかならないかもしれない

もしかしたら、俺がしている行動は間違っているかもしれない。

だが、それでも後悔はない。俺は言いたいことは言う主義だ。

そんな殴られても泣きもしない。表情も変えない俺にさらにストレスを溜めてしまった彼は、そのストレスが爆発し、発狂する

「ああああああ!! うぜーんだよさつきから!! お前さえいなければ、お前さえいなければ俺はこんなことで悩むことは無かつたはずなのに! 全部お前のせいだ! なんでいつもおまえばかりいい思いしてんだよ! 捨て子の癖に! ナマイキなんだよ! いつもいつも見下したように見やがつて! そんなに自分のポケモンを自慢したいならもつとよそに行けよ! なんでお前ばかり……くそがあああああああああ!!」

俺ばかりいい思いをしている、だつて?

お前からしたらそうかもしれないがなあ……。生きるのに必死な俺はまずお金を稼ぐ手段を……。つっても子供にはわからん話しか。

もういい。何言っても無駄だわ、こいつ。

それに、見下したような目とか、被害妄想もいいところだ。

俺は自分の生徒たちは平等に扱っている自身がある。

俺はロリコンやショタコンじゃないからな。

今の俺はエリカ様くらいしか興味がない。

「ブイ………」

だから俺を心配しながら足を踏むなんて器用なことをしないでくれ、イーブイ。

「お前さえ、お前さえないなければあああ——ツ!!!」

そうして、絶叫しながらマサヨシが走った先にあるのは——

「おい、それはやつちやいけねえよ!」

「知るかよクソが!! うわあああああああ!!!」

俺がベンチから転がり落ちたおかげで、ベンチの上には俺のリュックと、二つの夕

マゴ〴〵しか存在しない

「こんなものツ!!!」

人も持つているものが羨ましくて。

自分がないモノが妬ましくて

それでも、年齢という超えられない壁のせいで自分のポケモンを持つことも許されず
なのに、目の前のガキが許されている現状が認められなくて

彼は、タマゴの入った容器を頭上に掲げた

「おい、やめろ!!」

「へ、へへッ！ ザマーみやがれ!!」

引きつった笑みと、涙の痕の残る目元をこちらに向け、マサヨシはその腕を思い切り
振りかぶり――

「やめろ――ツ!!!」

――バリン!

と、容器が碎ける音が、広場に響いた

第9話 3歳児はプチ切れる

——パリン！

タマゴの入った容器が砕け、辺りにガラスが飛び散る

「うわあ！ た、タマゴが！」

「大変だ！」

「キヤー!!!」

「ブイブイー!!」

大抵の衝撃は吸収する素材でできたガラスの容器だったが、さすがに叩きつけられることを想定されて作られているわけではない。

それでも、タマゴを入れていた容器はかろうじて役目を果たしたのか、タマゴ自体は割れてはいなかった

そう、割れては。

「ひっ、ひひっ！ ザマあみやがれ！ ワタルさんからもらったタマゴも、割れちゃったら元も子もないもんな！」

ひきつったように笑いながら、マサヨシは荒く息を吐き、地面に転がったタマゴを見

る

さらに、足を振り上げて、転がったタマゴを踏みつぶそうとする。

その瞬間、頭の後ろの方で、『プチッ!』という音が聞こえたような気がした。

刹那。スツと俺の視界が赤く染まる。

なんだ、コレ。

なんだ、さっきの音。

ああ、そうか。

知ってる。…………いや、知ってた。

わかってんだろ。

…………。堪忍袋の緒が切れた音だ。

「これでちつとは俺の気持ちも「黙れ!!!」

俺は、何か言っているマサヨシを怒鳴って黙らせると――

「どけ、邪魔だ!!!」

いきなり怒鳴られたことで硬直したマサヨシの顎めがけて、ヒジ鉄をブチ当てる。

リアルファイト? 上等だよ。だが相手をしてやるのは今じゃねえ

タマゴが踏みつぶされてしまう前にマサヨシからタマゴの距離を離す事ができた

「ツてエな！ 何しやがる！」

「お前みたいなクズ相手に構ってやる時間をもつたない。ピクシー!!」

反撃しようとして来るマサヨシに対し、俺はすぐさまベルトからボールを放り投げる
「ツツクシー!!」

ボールから出てきたピクシーはコクリと頷いて、マサヨシを睨みつける

「違う、そっちじゃない！ “サイコキネシス”でタマゴをポケモンセンターまで慎重に運んでくれ！ タマゴにヒビが入っているんだ、触ったら割れちまうかもしれない！」

戦闘になると思っていたのか、ピクシーはやや拍子抜けしつつ、足元に転がる蜘蛛の巣状にヒビが入ったタマゴを見ると、状況を把握し、素早く意図を汲んで “サイコキネシス”でタマゴを持ち上げた

「フウ！ ラン！」

「は、はい!!」

マサヨシがタマゴの容器を叩きつける様を呆然と見ていたフウとランを大声で呼ぶと、怯えたように慌てて返事を返した

「これが、お前たちが本当にしたかったことか？　言ってみろ!!　どうなんだ!!」
「ち、ちが、う」

「わたしたちは、こんなことはのぞんでない!」

服の裾を握り締めて、震える声で絞り出した声は、明らかに動揺していた。

それはそうだろう。いきなりマサヨシが凶行に臨んだんだ。

これが予定されていたシナリオだったら、ぶん殴っていたところだ。

「だったらピクシーに付き添って一緒にポケモンセンターまで行ってくれ。この状況。どっちが悪いかなんて、頭のいいおまえ達ならわかるだろ」

「う、うん」

「反省してんならさつきと行け馬鹿野郎!!　正直、顔も見たくねえんだよ!」

そう言ってフウとランに怒鳴り散らすと、慌てたようにピクシーの後を追った。

これでジョーイさんに状況の説明くらいしてくれるだろう

「さて、後はテメエだよ、クソ野郎。立てよ。授業してやる」

アゴにいいもん喰らって脳が揺れていたのであろう、マサヨシが立ち上がる。

俺が拳ではなく、ヒジで襲い掛かったのは、3歳児の体格から殴っても、たいした威

力にならないからだ。

ヒジ打ちは危険であるが、そうでもしないと、3歳児の俺では体格に倍以上の差がある9歳の彼をどかすことができないのだから。

「クソが、なにしやがる!」

「こつちのセリフだクソボケナスが。お前、自分が何をしたのか、わかってんのか?」

立ち上がったマサヨシに見下ろされる形になるが、それでも俺は威圧を止めない。

「へっ、躰けのなつてないガキにおしおきしてやってんだろうが」

まだ自分の立場を理解していないのか、ふざけたことを言うマサヨシ。

「俺にじゃねえよ。タマゴにだよ。仮にもポケモントレーナーをを目指す者が、人様のタ

マゴを強奪し、あまつさえ破壊しようとした。」

ひくつとマサヨシの引きつった頬が動いた

自分のやったことに気付いたんだらう

「お前がやったことは、生命を一つ無に帰しかねない行動だったんだぞ。もしかしたら、手遅れかもしれない。あのタマゴの中に居た生命の痛みを、お前は知らないんだろ。おまえは、取り返しのことかないことをしたんだぞ!」

俺はゆつくりとマサヨシに歩み寄って、その胸倉を掴むと

「最近、ロケット団っていう人のポケモンを盗んで売りさばく、悪い奴らが居るらしいん

だ。ニューズくらい見るだろ。そいつらはいらなくなったポケモンを殺して、強いポケモンを自分の懐に入れ、珍しいポケモンを売りさばく。おめでとう。お前はめでたくそんな連中と同レベルな犯罪者のクズ野郎に成り下がったってわけだ」

心底失望したという視線をマサヨシに投げる

「お、俺は――」

「――うらア!!」

「ガハッ!!」

口を開いたマサヨシに向かって思いっきりジャンプし、頭突きを鼻っ面に突き刺してやった

マサヨシの鼻から鼻血が吹き出す

言い訳なんか聞きたくない。汚い口を閉じやがれてんだ。

「イテェ！ 畜生！ 二度もやりやがって！」

「痛い？ 笑わせるなよ。タマゴの中の子の痛みはこんなもんじゃなかったはずだ。お前がやったことつてのはなあ、一步間違えば、殺しなんだよ。ガキだから許される行為なんかじゃねえんだ。もし、あのタマゴの中の子が死んでいたら、俺はお前を一生許さない。仮に死んでいなくても、これから先、無事にトレーナーでいられるとは思うなよ」

俺はそれを言い残し、マサヨシの服から手を離れた。

興味も失せた。もう知らねエよ、俺の生徒ですらねえ。

血走った眼をしたマサヨシはすぐに俺に手を伸ばそうとしたが、ピジヨットが翼を広げてそれを遮った。

「ピジヨット。イーブイ。」

「ピジヨ！」

「ブイ！」

「マサヨシが逃げ出さないように見張つてて。サナエちゃんはジュンサーさんを連れて来てくれないかな。事情を説明してくれると助かる」

俺が冷静にそう命じると

「ピジヨットー!!」

「ブイ！」

「わ、わかったわよ！」

イーブイとピジヨットは大きく返事をした。そんな怖い声をしていたかな。

サナエちゃんも慌てて交番まで走り出した。

「ハヤトとケンジも、イーブイ達と一緒にここに残ってほしい。僕はポケモンセンターの方に居るから。ジュンサーさんが来たら、そう伝えて置いて」

「わかった、早く行ってやれ」

「ここはおれたちにまかせろ！」

「ごめんね、僕はタマゴが心配だから……………」

ベンチの上に置いたもう一つのタマゴをリュックの中に入れ、急いでポケモンセンターに向かって走り出した

「待て！ おい！ 逃げんな！ ポケモンが居ないと何もできないくせに!!」

そんなマサヨシのセリフを背に受けながら。

☆

「あ、レンジくん！ こっちです!!」

「ピックシー！」

「……………」

ポケモンセンターに到着すると、ジョーイさんが俺を呼んだ。

俺の戸籍登録を手伝ってくれたジョーイさんだ。何度も何度もここを訪れているお

かげで、もう顔見知りである。

ピクシーは待ちきれないとばかりに俺の方に走ってきて、俺と並んでジョーイさんの元まで一緒に歩いた。

「この子達から事情は聞いたわ。」

ジョーイさんにそう言われ気まずそうに俺から目を逸らすフウとラン

当事者なんだ、当然だ。

「タマゴは？」

「一応、無事だと言っておくわ。ただ、そのショックでもうすぐタマゴが孵りそうになっているの。」

「孵化の時期が早くなっちゃった？」

「ええ、そうなのよ……。」

ジョーイさんに案内された部屋は、タマゴの安置所。

俺のヒビ割れたタマゴだけではなく、他のタマゴも保管してあった。

その中で、カタ、カタ、とヒビの入ったタマゴが動いている。

それが俺のタマゴだ。

孵化の時期が早くなったらどういいう障害が発生してしまうのかわからない。

「中の子は、怪我はない？」

「…………それはわからないわ。体はほとんど出来上がっていたみたいだし、幸いにしてタマゴの中の子は体の柔らかい「ミニリュウ」なの。もし、この中に入っていたのが別の子だったらどうなっていたかわからないわ」
そっか。

タツベイのタマゴの方じゃなくてよかった。

俺の運もなかなか捨てたもんじゃないな。

ジョーイさんはヒビの入ったタマゴにエコー診断のような器具を優しく当て、その中の様子を俺に見せてくれた。

中で管状の生き物が動いているのがわかる。間違いなくミニリュウだ。

ちゃんと生きてる。

よかった……………。

「それでも、痛かったよな。ごめん……………」

容器が割れる程の衝撃だ。

中に衝撃が届かなかったわけがない。実際、タマゴにヒビが入っているのだ。

その隙間から、テラテラと光る粘液が溢れている

こんなタイミングで孵化するはずじゃなかったのに

どうか、無事で居てくれ……………

「ジョーイさん。僕はこの子が孵るまでそばを離れたくない」

「ええ。毛布は用意してあげるわ。見ててあげて。」

「ありがと。……………あ、おばーちゃんとエリカ様に連絡しなきゃ……………」

ふらふらとタマゴのある部屋から出ると、テレビ電話のある場所に移動する。

「ピクシー……………」

進化したことにより身長1mもない俺よりも30cm以上大きくなったピクシーに手を引かれ、フウとランの間を通る

「フウ、ラン」

「「ごめんなさい！」」

そのついでにもう帰ってもらおうかと俺が呼びかけると、先ほどまで黙っていたフウとランが頭を下げてきた。

「もう、いいよ。タマゴは一応無事だった。お前たちも充分に反省しただろ」

「うん」

「レンジの言ってることは」

「正しかった。」

「もう二度とバカにしたりしないわ」

そう言つて、涙を溜めた瞳で、フウとランは顔を上げた。

「そう。だったらもう、人やポケモンを貶めるようなことはしないよね。」

「うん、約束する。」

こくりと頷くフウとラン。

「本当は、うらやましかったの」

「レンジがポケモンを持ってるってことが」

「そっか」

それはそうだろう。トレーナーへの憧れが強いから、トレーナーズスクールに通っているのだから。

「それじゃあ、一つフウとランに宿題を出そう。お前たちにとって、ポケモンつてのはなんだ?」

「ポケモン?」

「なにか？」

俺の質問の意図がわからず首を捻る二人。

「うん。お前たちにとって、ポケモンとは、ただの道具か？」

道具じゃない。

生きているんだ。そんな言い方はあんまりだ。生命を侮辱している

「それとも、家族か？」

すべてのポケモンが家族である言い張れるほど、俺だってそんな聖人君子になった覚えはない。

今の俺の家族は、イーブイとピクシー。そういった、自分の力で捕まえたポケモンだ。

それ以外のポケモンは家族ではない。

「それとも、友達か？」

そう、俺にとって、ポケモンとは、俺を支えてくれる、大事な家族であり、友達である。

とても大事な存在だ。

「他人のポケモンが妬ましかつたら、奪って、壊してもいいものなのか？」

マサヨシは、それが妬ましかつたから、行動に起こした。

だが、それは許される行為ではない。

「自分の答えを見つけたら、いつか僕に聞かせてよ。その答えを、僕はバカにしたりしない。フウとランが考えて出した答えなら、それが二人の答えだ。この問いに答えなんてないんだから。」

そう締めくくって、俺はピクシーと一緒に電話機の方へと向かった。

「……………」

黙りこくってその問いに対して考えるフウとラン。

悩め悩め。いつでもいいから答えを見つけて見せろ。

「あ、そうだ。最後に二つだけアドバイス。」

振り返ることなく俺は人差し指と中指を立てると

フウとランの二人が顔を上げてこちらを意識しているのが伝わった

「ポケモンをお世話するのに、トレーナーの資格はいららないんだ。ポケモンと触れ合うことは自由なんだよ。気になるなら、タママシマンションに来い」

そこには、俺のポケモンやおばあちゃんのピッピやニャース、ニドラン♀が居る。

ポケモンのお世話をするなら、人懐っこいあの子たちが最適だ。

俺は中指を折って人差し指だけ立たせると、続ける。

「最後に。飛び級試験には『ジムリーダー』の承認が必要なんだ。僕はエリカ様に飛び

級試験を受けてもいいと、付き添ってもらったけど、フウとランにも、飛び級試験に合格できる力はもうすでにあると思う。興味があるなら、お隣のヤマブキシテイのジムリーダー、〃ナツメ〃さんに会ってみたら面白そうだね。」

将来的には同じエスパークタイプのジムリーダーになるんだし。会ってみて損は無いはずだ。

第10話 3歳児はミニリュウとタツベイを手に入れる

エリカ様とおばあちゃんに事情を離して、ポケモンセンターに泊まることになった。

エリカ様は俺がタマゴの前から離れないと電話で聞くと、ジムを放り出してポケモンセンターに来てくれた。

おばあちゃんは心配していたけど、「エリカが近くににいるなら大丈夫ね。きっと大丈夫よ」と言つて俺をそつとしておいてくれた

しばらくしてイーブイとピジョットを連れてポケモンセンターにやって来たジュンサーさんにもいろいろ聞かれたが、タマゴのことが心配で、すこし上の空だった。

それでもきちんとして答えはしはらずだ。

このタマゴが、どうしてこの状況になったのか。

トレーナーカードを提示してから包み隠さずジュンサーさんに報告すると、「あなたは適切な行動をしたわ。頑張ったわね、小さなトレーナーさん」と言つて、最後に俺の頭を撫でた後、ポケモンセンターを後にした。

あの後、マサヨシがどうなったのかは知らない。

知ろうとも思わない。

タマゴにヒビが入ったのは夕方だ。

現在は、もう夜の9時だよ。

あれから、ずっとタマゴの中から動いている気配はあるのだが、どうにも時間がかかるようだ。

当然だ。本来ならまだ孵化するようなタイミングじゃないんだから。

身体は出来ているとはいえ、未熟のまま孵化の作業をしているのだ。

ミニリュウにとつても、孵化は大変な作業だろう。

「がんばれ……………」

「がんばってください……………」

タマゴのヒビがさらに大きくなる

しかし、そこから先に進まない。

エリカ様は、飽きもせずと俺に付き添ってくれた。

5時間以上、俺と一緒にタマゴを見ている。

だが、それでも集中力というのは途切れてしまうものである。

それから、更に1時間。

「——さん、レンジさん」

「うえ？」

「さすがに、ずっと見張っているのは疲れますよ。お風呂に行きましょう」

「どうやら、すこし意識が飛んでいたらしい。」

エリカ様に揺すり起こされて、寝てしまっていたことに気付いた

ブルブルと頭を振って眠気を追い出す。

しかし、頭が回らない。

「うん、ちよつとお風呂でリフレッシュしたほうがよさそうだ。僕も疲れた……………」

さすがに、5時間以上タマゴの孵化作業を見守り続けていたら、当然疲れてしまう。

それはしょうがない。

だったら、すこしでも力を抜くために、一度ここを離れてリフレッシュした方がいい。

☆

エリカ様に連れられて、お風呂でリフレッシュするが、俺は着替えも何もない事に気付いた

当然だ。俺は元々外で遊んでいただけなのだし、泊まることなど想定していなかったのだから。

「もっかい同じの着ればいいか……………」

今は、そんなことよりも、タマゴの方が心配だった。

「ダメですよ、レンジさん。着物は清潔にしないとイケないのです。こんなこともあろうかと、一度私の部屋からレンジさんのお着替えを用意してこちらに来ていたのです。さ、こちらに着替えてください」

エリカ様の部屋から持ってきた服って……………女物しかないじゃん

「でもま、この際なんでもいいや。早く様子を見に行かないと……………」

エリカ様と二人でお風呂に浸かってさっぱりし、エリカ様が用意した服を着て、すぐに元のタマゴの部屋に戻る。

この際、レンジでもオレンちゃんでもなんだっていい。

あの子が心配なんだ。

「あ……………さつきよりちよつと欠けてるんじゃない?」

見れば、タマゴのヒビ割れていたところが剥がれ落ち、中の“ピンク色”の尻尾がチラツと目に映った

「ん? ピンク? ミニリュウって青色だよね……………やっぱり、落ちた衝撃でどこか怪

我しちゃったのかな……………」

「でも、血の色じゃなさそうですよ？」

「うーん、ジョーイさん呼ぼうか。」

「そうですね……………」

タマゴにヒビが入った衝撃で、どこか異常が出てしまったのかもしれない
急いでジョーイさんに知らせて、こちらに来てもらった

「みゅー……………」

タマゴの中からくぐもった声が聞こえてくる。

体力が足りないのか、少し元気がなさそうだ

ナースコールでジョーイさんを呼ぶと、すぐにジョーイさんが来てくれた

「オレンちゃん、どうなさいました？ あ、もうすぐ孵りそうなんですネ？ 明日の朝に

なつても出てこないようなら人工孵化をさせようと考えていましたが、どうやらその心

配はなさそうですネ」

「うん。どうしたらいい？ なんだか元気もなさそうだし……………」

「体の色も、なんだか普通のミニリュウと違いますし……早く孵った弊害でしょうか……」

ジョーイさんのスルースキルがすごい。

いつのまにか俺が女装して“オレンちゃん”になっていても、すぐに順応して“オレンちゃん”と呼んでくれた

別にうれしくない。

なんでそんな、レンジとオレンちゃんを別人として考えるのだろう。

俺は一人なのに。

「怪我は………たいしたことはなさそうですが、しばらく様子を見ましょう。この子の色は………もしかしたら、色違いのミニリュウかもしれないよ。」

ジョーイさんのセリフにハツとする。

そういや、ミニリュウの色違いの色って、ピンクじゃなかったか？

じつと小さな穴の開いたタマゴを見てみると、

「みゅー」

「あ………」

ピキツとまた一つ、タマゴが欠けた。

その穴からくりくりとした、小さなおめめとバッチリ目が合った。

口元をタマゴにようやく開いた穴に持って行き、パリパリとタマゴの殻を食べ始める「タマゴの殻って食べられるんだ……………」

「意外と栄養は多いですからね。産まれてすぐにする行動で、本能的にこうするポケモンは非常に多いんですよ」

小さな身体で一生懸命タマゴを食べる姿を、しばらく眺める

「あ、色違い……………」

ミニリユウが卵の殻を食べ続け、ようやく見えてきたミニリユウの姿は、全体的にピンク。

そう、ワタルからもらったミニリユウのタマゴは、色違いのミニリユウだった。

まさか……………国際孵化……………？

チャンピオンならば外国に渡ることもあるだろうし、可能性が無きにしも非ず……………。

ラッキーだったと考えよう。高個体値でかつ、色違い。

タマゴにヒビが入った衝撃で産まれるのが早くなってしまったが、それでもこの子は元気に生きている

怪我がない事に安心して、自然と涙が零れてしまった

「よかった………本当に、無事でよかったよお………」

へなへなと力が抜けてしまい、床にへたり込む

ああ、緊張の糸が切れると、本当に腰が抜けて立てなくなるんだね、初めて知ったよ………。

「オレンちゃん、本当によかったですね！」

「うん………」

俺を抱き上げたエリカ様。俺はエリカ様の着物に顔を埋め、声を押し殺しながら、涙を流し続けた

☆

さて、困ったことが起きたぞ。

「みゅー♪」

色ミニリュウが産まれて1週間。

仕事も休んで献身的にミニリユウに尽くしていたのだが……

「みゅー！ みゅー！ みゅー!!」

「はあ、なんでダメなんだ？」

ミニリユウは「オレンちゃん」のことが大好きで、自分の親だと思っっているようだ。だが、ひとたび俺が着替えて「レンジ」の姿でミニリユウの目の前に表すと、途端に不安になって「オレンちゃん」を探すのだ。

「おーい、同一人物だよー？」

匂いも同じなはずなのに……髪型と服装を変えただけで、ミニリユウに認識されなくなってしまった

「どうしてくれるのさエリカ様！ 僕このままずっと女装し続けるなんて嫌だよ！」

「うふふ、いいじゃないですか。このままオレンちゃんとして生きましようよ」

「嫌だつてば！ それに、僕は「オレンちゃん」だけじゃダメなんだよ！」

「タツベーイ！」

「ブイブイー!!」

「ピックシーー!!」

ミニリュウが産まれた3日後にはタツベイも無事に孵化した。

この子はちゃんと「レンジ」のことを認識してくれるのだが……。

逆に「オレンちゃん」のことを他人だと思っている。

「どうすんの、この袋小路!! 本格的に二重生活をしないとイケないの!」

体の弱いミニリュウを放っておくわけにもいかず、ミニリュウが安心できる女装「オレンちゃん」で接し続け

ミニリュウに構いすぎないように、適度に男装「レンジ」でタツベイと遊ぶ。

ミニリュウとタツベイの中は良好。

ミニリュウは♀でタツベイは♂

ちなみにタツベイは色違いじゃなくて、普通のタツベイだ。

俺はもう、タツベイとミニリュウに合わせて着替えるのが面倒くさくて面倒くさくて

……

まあ、タツベイの方は「オレンちゃん」を見ても不安がることは無いし、むしろ女装している方が、お世話が楽だと感じているのは、もう末期なのかもしれない

ミニリユウとは違って比較的元気なタツベイに、イーブイとピクシーが積極的にかまってくれているため、俺はミニリユウのお世話に集中できる。

現在はイーブイとピクシーを相手に頭突きの練習中だ。

そんな彼は厳選中だけあって、かなりの高個体値。

H・31

A・31

B・31

C・28

D・31

S・31

まさかの5Vである。

しかも特攻も気にならないレベルである。

対するミニリユウ

H・0

A・31

B・15

C・31

D・31

S・31

体力がまさかの逆V

防御力も低い。

紙耐久のミニリュウだ。

もしかしたら、体力が低いのは普通の孵化よりも早く産まれてしまった弊害かもしれない。
ない。

表示されていないだけで、もしかしたらマイナスという可能性もある。

ミニリュウの体調がよくなってくれれば、もしかしたら、体力も回復したらいいなと思う。本当はVだったりして。

「でもま、元気になってくれてなによりだよ」

「そうですね……………」

よいしょっと男装を脱いで女装に着替える。

もはや抵抗なんて無い。

フリフリのカチューシャとエプロンドレスを着て、と。これでよし。

「みゅー♪」

「タツベイー！」

ミニリュウがベッドの上から身体をくねらせて、俺に喜びを表現して見せる。ほっこり。

ミニリュウがオレンちゃんにしか反応しないのであれば、ミニリュウのモンスターボールにオレンちゃんのIDを書きこんで、正式にオレンちゃんのポケモンにするだけだ。

それにしても、目の前で着替えているのに、なぜ気づかないのだ。

実はアホの子なのか？

ねえイーブイ。どう思う？

あ、顔を反らされた。

そんなに雰囲気が違うのかな。

ミニリュウのピンクの頭を撫で、タツベイのゴツゴツした頭を撫でる。

「みゅー♪」

「ベーい♪」

気持ちいいか。かわいい奴らだ。

だけど、俺だってさすがにずっと付き添ってやれるわけじゃない。

ミニリュウは体が弱くて、点滴したり、検診を受けたりしなければならない。

だが、俺にだって仕事がある。

「ミニリュウ」

「みゆ？」

「明日は、夕方にもう一回来るから、寂しいだろうけど我慢してね。」

「みゆー……………」

「タツベイ！」

落ち込むミニリュウ。それを励ますタツベイにほっこりだ。

「大丈夫。タツベイが近くに居てくれるし……………」

「ブイブイ！」

「ほら、みんなの頼れるおねーさんの、イーブイも一緒に居てくれる。だから、がんばろ

？」

「みゆー！」

瞳に涙を溜めながら、コクリと頷くミニリュウ。

偉いよ。もう立派なドラゴンポケモンだ。
ポンポンと優しくミニリュウの頭を撫で、部屋を出た。

「よし、今日から学校に顔を出さないと、さすがに迷惑が掛かっちゃうね」

☆

「あ、レンジー！」

「あのタマゴはだいじょうぶなの!？」

「シンパイしたんだから！」

ちやんと男装に戻ってトレーナーズスクールに顔を出せば、ハヤト、ケンジ、サナエちゃんの三人が心配して駆け寄ってきた

「うん。無事に産まれたよ。ただちよつと身体が弱いみたいで、今はまだポケモンセンターから出られないんだ。」

「そうなんだ……………」

「かわいそう……………」

「……………」

みんなもミニリュウの無事を祈ってくれていたんだ。

きちんと生まれてきてくれてほっと息を吐いた

「みんなも、心配してくれてありがとう。今はイーブイ達がついてくれるから、大丈夫」

「そーいや、いつものイーブイがいないな」

「そういうことだったんだ」

「イーブイをつれてこないなんて、ズルいわよ！ でも、しかたないわね」

ズルくないです。

俺だって心苦しいんだからね。

「……………レンジ。」

「……………あのタマゴは無事？」

フウとランも心配そうにこちらに向かってきた

「うん。ちよつと身体が弱いけど、おおむね大丈夫な感じ」

「そっか。それならよかった。」

「安心したわ」

この子達も当事者だからね。心配するのも当然か。

「ねえ、そういうマサヨシは？ あいつに一言謝ってもらった後、ぶん殴って頭踏みつけないと気が済まないんだけど」

トレーナーズスクールに到着してからというもの、マサヨシの姿を見ない。

どこ行っただアイツ。

ミニリユウの前で土下座させてやりたいのに。どこ行きやがった

「マサヨシは………引っ越したよ」

「はあ？」

引っ越した？ そんな急にか？

「あんなことをしでかしたんだ。」

「ポケモンのタマゴを叩き割ろうとするなんて」

「マサヨシにトレーナーの資格はないよ」

「そんな奴がこのトレーナーズスクールに来ても」

「白い目で見られるだけだから」

「だから、ジョウト地方に引っ越しをしたんだって」

フウとランが交互に喋るからそれに合わせて俺も視線を動かさないといけないので、

首が痛い

チツ、マサヨシは逃げやがったのか。いつか、見つけたらリアルファイトでボコボコにしてやる。

訴訟起こして金をもぎ取ってやろうかと思ったが、あの卑怯者のことだ。きつとあの手この手を使って逃げるだろう。

フウとランも、ジュンサーさんから事情聴取をされて、マサヨシ側について俺を貶めようとしていたことを話すと、やはりというかなんというか、こっぴどく叱られたそう
だ。

そりゃそうだ。

「まあいいや、あんなクズはもう知らん。ほら、みんなも席についてー！ 今日ほポケモンの進化について教えてあげる。出てこい。『ロコン』。『クサイハナ』。『ウツドン』!!」
「コーンー」「ナー…」「ぼーん」

だが、フウとランにはポケモンに対する愛情があるはずだ。
なんてったって将来のジムリーダーなのだから。

第11話 3歳児は主人公に出会う

休日！ それは自由の象徴。

「おばーちゃん、わたしは旅に出ます。お夕飯までには戻るので心配しないでください。お夕飯までに戻らなくても心配しないでください。遅くなる場合はなんとかして連絡をするから、慌てず騒がず待っててね。」

「はいはい、わかったわ。元気に遊んできなさい、オレン。」

「いつてきまーす！」

「みゅー♪」

「バイバイ！」

そう、今日は待ちに待った旅立ちの日。

エリカお姉さまにも許可をいただいて、旅立つことができるようになりました！

今のレンジの手持ちはこうだ。

イーブイLv. 43

ピクシーLv. 45

ウインディLv. 45

ピジョットLv. 45

タツベイLv. 6

ユンゲラーLv. 17

イーブイは俺の相棒だが、この面子では他の子達の方が攻撃力があるので、しばらく戦つてはいないのだ。

なので、他の子達よりもレベルは低い。

進化させたウインディにも全体的に負けてしまい悔しそうだが、なんというか、もう意地でも進化しないでお前をぶつ倒してやる！ って感じに燃えてるんだよね。

俺がウインディに自由に戦わせて、俺がイーブイに指示を出すと、まあイーブイが勝つのだが、なんというか、力が弱いのだ。

うーん。エーフィかブラッキーにでも進化しないかな。

ウインディは、ガーディがフレアドライブを覚えた時に、進化させた。

ついでになんと“しんそく”を覚えたので、こりやよかつたと一安心。

いつかはわざマニアのところに行つて覚えさせようと思つていたところだからね。

もしかしたら、Lv. 以下で覚えていたわざなら修行しだいでレベルに関係なく“か

みなりのキバ”も覚えられるかもしれないね。

レベル以上の技を使えるようになれるかも

さすがは”でんせつポケモン” 大きい身体でものすごいモフモフだ。

わーいと身体を埋めると、炎タイプ特有の熱気が俺の身体を包むのだ。

ちなみに、ウインディの上に乗って移動することも可能。

レンジ は いどうしゅだん を てにいれた！ ▼

ってね。

最後にユンゲラー。彼はロケットゲームコーナーでこつこつ稼いだコインで買った由緒正しきケーシーから進化させたばっかりのユンゲラーだ。

覚えている技は、テレポートとねんりきのみ。現在はまだまだ育成途中である。

捕まえたポケモンは、現在のところ、こうなっている

レンジのスマホの中身は、これだア！

ウツボット・キュウコン・ラフレシア・クサイハナ（進化分岐用）・ペルシアン・カビゴン・ストライク・カイロス・ポリゴン・コイキング・そして、ベトベター

先週の休日にタمامシシテイの池で釣りをして、コイキングと一緒にしつかりベトベターも捕まえ、レンジのスマホの中にブチ込んだいた。臭いもん。

きれいな街として君臨するカントー地方の中心地、タمامシの汚点だよね。

いくら綺麗に着飾っても、工場排水とか、ロケット団の基地から出る排水とかが、さ。きれいな都会のど真ん中でベトベターが釣れるっていうのは、なんというか、感慨深いものがあるよね。

まあそんなことは、今は置いておこう。

今度は「オレンちゃん」の手持ちのポケモンはこうだ。

色違いのミニリュウLv. 5

リハビリを毎日頑張り、順調に大きくなってきたミニリュウは、もうレベルが5なのである。

イーブイたちに修行を付けさせてもらっているので、経験が溜まってレベルが上がっているのだ。

別にポケモンを倒すだけが経験値を稼ぐ手段じゃないってことだ。

なにせここは現実なのだから。

レベルが5になったということは、だ。

旅に出ても、それなりに戦えるレベルでもある。

初心者用の居場所に行けば、なんだけどね。

というわけで……………

「ピジヨット！ マサラタウンまで連れてって!!」

トレーナーIDを二つ持っている利点。

ポケモンを連れて歩けるのは12匹まで!!

いやあ、ワタルさん。こんな許可をしてはいけませんよ。

チャンピオンでしょあなた。

ん？ もしかしてワタルさんも2つIDをもつてサブ垢として一から旅してたり

しないよね？

……………しない、よね？

でもワタルさんはチーターだからなあ。プテラはいわなだれ覚えなのに……………。

疑惑の判定……………。

考えるのはよそう。チャンピオンかっこいい。この幻想を壊したらダメだ。

「よつと。ようやく着いたか。ありがとう、ピジヨット」

「ピジヨット——」

ピジヨットをボールに戻す。

ピジヨットの背に乗って旅をするのは、キンタマがひゅんってなるね。

と言つても、今のわたしは女の子。キンタマなんて汚い言葉はつかいませんのことよ。

ピジヨットの背からマサラタウンの場所をわたしが指示して、そっちに向かわせたのです。

早朝からピジヨットの背に乗って約3時間で到着だ。ゲーム時代のように一瞬で到着なんかできるわけではない。

ゲームの頃よりも広くなっているし、移動に時間がかかるのも当然だよ。

ピジヨットが飛ばしてくれたから、これでもめちやくちや早く着いた方かなさあ、マサラタウンから冒険を始めようじゃないか。

一度、ゲームをなぞって旅してみたいと思つていたんだ。

誰だつて思うでしょ。

まさかタママシティからスタートだなんて普通は思わないしさ。

マサラタウン。来てみたはいいものの、本当になんにもない田舎町だなあ。

ここに、未来のチャンピオンが二人もいるんだ。いい町だね。

自然がいつぱいだ。だからこそ、オーキド博士がここでポケモンの研究に専念でき

るってわけか。

家は、主人公の家らしきものと、その隣にライバルの家らしきもの。

その他数軒とオーキド研究所がある。

町というよりも村と呼んだ方がいいかもしれない。

それほどまでにのどかな場所だ。

「おーい！ 待てよグリーン！」

「ぶっ!!？」

「みゆ？」

「イブイー？」

研究所の中から急に聞こえてきた声に、わたしは吹き出してしまった

なぜ噴き出したのか理解していないミニリュウが、わたしのカバンの中からひよつこりと顔を出して首を捻る

イブイーはわたしの隣でお座りしながら「どーしたの？」と心配げに見つめてきた

グリーン？ 誰だそれ！

いやわかるけどさ。

それ、日本の名前じゃないでしょ！

ここにきて、ライバルの『大木戸グリーン』という名前が判明しました。

おいユキナリイ！ 孫の名前がおかしなことになってるぞ！ どうかしろ！！

ってそうだった、オーキド博士は孫の名前を忘れるくらいボケてるんだった。

グリーンって名前なら現実逃避したくなるのも分かる気がするわ。

声の主の方を、看板に隠れて覗いてみる

ん？ この看板は……

『マサラタウン。マサラは真つ白。始まりの色』

うっわ、懐かしい！

こんな看板あったわたしかに！

いやいや、気を取られないで。様子を見ましょう。

「早く来いよレッド！ ま、お前は一生俺の後ろを追っかける運命にあるんだけどな、バ

イビー！」

「ゼニヤー！」

うっは、ライバルのBGMが脳内で聞こえてくる！

この傲岸不遜な態度。

まさしく、グリーンである！

グリーンは研究所の中から“ゼニガメ”を引きつけて走り去った

「くっそー！ あいつ、自分ばかりお姉さんから地図を貰いやがって……俺だって
ナナミさんに地図をもらってやる！ 行くぞ、“カゲどん”！」

「カゲカゲ！」

グリーンの後を追いかけて研究所から出てきたのは、レッドと呼ばれた12歳くらいの少年だ。

10歳でトレーナーの資格を貰えるとはいえ、ここは凄い田舎だ。

10歳から旅に出るというのは最低限の年齢であり、通常はこうして義務教育分の学業を終わらせてから旅に出るのが一般的だとか。

彼らも12歳でも十分に中学卒業くらいの知識は詰め込まれているはずである。

つまり飛び級であるわたしは異常そのものってことだね

ちなみに、グリーンも12歳くらいの少年だったよ。

レッドと呼ばれた少年は“ヒトカゲ”を引きつけてナナミさんの家に走って行った
なんというタイミング。

これは……主人公がポケモンを選んで最初のバトルを終えた後だ。

主人公、レッドは“ヒトカゲ”を選んだようだ。それでさつき、グリーンが“ゼニガメ”を連れて走っていたんだな？

となると、“フシギダネ”が研究所に余っているはずだ。

盗んじやおうかな。

でもオーキド博士に残された最後のポケモンだ。

盗むわけにもいかないか。

というか、盗む度胸もないんだけどさ。

「ずるいよお兄ちゃん！ わたしだって地図が欲しいのに！」

そうこう思っていたら、研究所の中からさらに、ひとりの女の子が現れた

「あれは……………」

長い栗色の髪に、白い帽子。青のタンクトップ。赤のスカート。

これは、見覚えがある！

FRRGの女主人公！！

なんでこんなところに！！

しかも、『お兄ちゃん』……………だとう!？

どういうことだっ！

彼女の名前は……………「ブルー」？ それとも、「リーフ」？

はたまた、「イエロー」の可能性もあるぞ！

「置いてくぞ、くりむ！」

レッドがその声に反応して大きな声を出す。

公式で名前の無かった可哀想な女主人公。

名前は「くりむ」らしい。

ああ、「クリムゾン」……………主人公と同じ、赤ってことね……………

正直、公式の女主人公のデータファイル名「LEAF」の『リーフ』が名前かと思っ
てたよ……………

この世界に入り込んでから、びっくりすることが多いなあ……………

レッドも無口じゃないし。

というか、主人公は活発に人に話しかけることによって情報を得ているから、無口
じゃなりたないか。

レッドに妹。しかも年齢が離れていない……………つまり

「双子、もしくは年子、か」

こんな設定は無かったはずだが、主人公を両方ねじ込んだ結果、そうなってしまった可能性が大！

「もー！ いくよ、フツシー！」

「ダネダネ！」

しかも、くりむちゃんはちやつかりフシギダネを手持ちに加えている。

生息地不明のポケモン……全員持ってかれた……。

凶鑑コンプできないよー!!

「待ってー！ きゃん！」

「ダネ!?!」

そしてなんというご都合主義。

くりむちゃんやんがズツコケてしまい、さらにポーチの中にしてしまっていたモンスターボールが飛びだして、こちらに転がって来たではないか！

「うわっわ！」

「ブイッ！」

慌ててモンスターボールを拾う。

わたしが二つ。イーブイが一つ。転がってきたボールを受け止める

「ごめんなさいい！ それ、とつてもらえますかー？」

もう取つてますよ

隠れる意味もなくなつたので、きちんと姿を現した。

「はい、これだよね」

イーブイが受け止めたボールを手に取り、三個のボールをかえすと

「えへへ、ありがとう！」

と、花咲くような笑顔を向けてきた

その瞬間。わたしの身体に電流が走る！

美少女！ 美少女である！！

12歳くらいでありながら、若干大人の色気も持っている。どのへんかって？

膨らみかけの胸と、色気を醸し出す“絶対領域”だよ！

しゃがんで背の低いわたしからボールを受け取つた際、スカートの奥から“白い布地

”が見えたっ！

無防備!!

「ブイ……………」

ええい、足を踏むんじゃない、イーブイ!

シャッターチャンス! シャッターチャンスを見逃すわけにはいかないんだ!

スクリーンショット! 脳内メモリに保存。永久保存! 完了!

バックアップ完了! USBメモリにもいっばいに保存しなくては!

「あら? 初めて見る子だね、どこの子かな?」

ニコツと微笑んでわたしの頭を撫でてくれるくりむちゃん

「タمامシシテイから来たの。」

「わざわざタمامシシテイから来たんだ! すごいね、私はこのマサラタウンから出たことがないから、都会ってどんなところか知らないの。」

そうなんだ。温室育ちっていうか、自然の中で育ったんだな

「おねーちゃんはなにしてるの?」

「私はね、今日、ポケモントレーナーになったの！ だから、これから旅に出るんだあ」
こんな無防備な女の子が旅に出るなんて、おじさん許しませんよ。

こーんな美少女が旅をしたら怪しい男に連れ去れてしまう！

「今日はオーキド博士からポケモンを貰える特別な日なの。えへへ、見て。ポケモン図鑑ももらっちゃったんだ」

そこまで聞いていないのに、赤い図鑑を見せてくる。

それだけうれしいんだらう

「でもね、私はまだポツポとコラツタくらいしかポケモンを見たことがないの。どんなポケモンがいるのか、すごく楽しみ！ あれ？ そう言えば、あなたのすぐそばにいるその子は、あなたのポケモン？」

「ブイ？」

くりむちちゃんが、わたしの足を踏み続けていたブイに気が付いて、図鑑をブイに掲げる

「へえ、ブイって言うんだ！ かわいいわね！」

くりむちちゃんは俺のブイに手を伸ばし、頭を撫でる

まだポケモンに慣れていないようで、撫で方はぎこちない

「みゅー♪」

「あ、こらー！」

イーブイが頭を撫でられているのを見て、ミニリュウが自分も撫でてとわたしのカバンから飛びだしてくりむちちゃんの目の前にポテツと転げ落ちる

お前は色違いなんだから、あんまり人前に出たらダメなんだぞ。

好奇心が旺盛なのは仕方がないけどさ。気を付けてね。

攫われるかもしれないんだから。

「あ、この子もかわいい！ この子はなんていうの？」

くりむちちゃんがミニリュウの頭を撫でながらわたしに話しかけてくる

「この子はミニリュウ。ちょっと身体がよわいけど、わたしの大事な大事なポケモンだよ」

幸いにして。くりむちちゃんはまだポケモンの知識が薄い。

色違いだとかそう言うことに気付いていないんだ。

「へえー、うふふ、かわいい……………」

くねくねと身体をくねらせるピンクのミニリュウに、くりむちちゃんはもうメロメロ

だ。

「あれ？ でもキミ3歳くらいだよ、ポケモンを持つててもいいの？」

「うん、お世話するだけならトレーナーの資格はいらないし、わたしはトレーナーカードはちゃんと持つてるしね」

そう言つて、わたしは「オレンちゃん」のカードを見せる

「いわゆる飛び級つてやつだよ。」

「ふわり、すつごーい！」

すぐにカードを戻す。なぜなら性別のところにシールが貼つてあるから。

「オレンと言います。でも、わたしはトレーナーとしてまだまだ初心者だから、オーキド博士にアドバイスでも貰おつかないって思つて、居ても経つてもいらなくてマサラタウンに来たんだ」

「そうなんだ、あ、オーキド博士は研究所の中だよ。今さっきね、オーキド博士からモンスタールールを貰ったんだ。これでさつき見かけたポツポとコラツタを捕まえるの！」

そしてキミ……ええと、オレンちゃんの持つてるポケモンもかわいいからゲットしたいなあ」

にへつと笑うくりむちちゃん

くう………笑顔が素敵ですぜ！

「ブイ………」

だから、足を踏まないでってば、イーブイ

そういや、さつきくりむちちゃんはポケモン図鑑を開いていたよね、ということは、一度トキワシテイに行ってお届け物を届けたあとなんだな。

「それじゃ、私達は今日からライバルだね！ いつもいつもお兄ちゃんとグリーンばかりお互いにライバル視してるから、私にはそういう友達っていなかったし、オレンちゃんが私の友達でライバルになってくれたら、とてもうれしい！ さつきだってお兄ちゃんばっかりバトルしてー！ むきー！ うらやましいわー！」

うはっ！ なんていい子なんだ、くりむちちゃん！

なるよなつちやう！ お友達になりましょーう！！

「もちろん！ これからよろしくね、くりむちちゃん！」

くりむちちゃんが差し出した手を握って握手をすれば、立派なライバルだ。

思わず口元が綻んじやう

「ライバルになったなら、最初にやるべきことはひとつ！」

「ふえ!？」

ライバル認定された途端に、くりむちちゃんは眼の色を変えてわたしからばつと距離を取ると

「トレーナーなら目が合ったらそれは、バトルの合図!! おねがい、フッシー!」

「ダネフッシー!」

くりむちちゃんは足元のフシギダネを繰り出してきた

「なるほど……わたしを3歳児だと見下さない人は初めてかも。全力でお相手するよ、くりむちちゃん! 行け、ミニリュウ!」

「みゅー♪」

くりむちちゃんは思ったよりも熱いトレーナー魂を持った娘だったようだ

第12話 3歳児は敗北を知る

「先手は貰うよ！ ミニリュウ、＼でんじは＼!!」

「りゅー、みゅー!!」

FRRGの女主人公であり、現主人公レッドの妹、＼くりむちゃん＼とのバトルが始まった。

こちらの手札はミニリュウのみ。今のわたしは＼オレンちゃん＼。

イーブイは＼レンジ＼のポケモンなので使いません。

覚えてたの補助技である電磁波をフシギダネに放つ

「ダネー！」

「ああ！ フツシー！」

電磁波をもろにくらったフシギダネは身体がしびれてうまく動けないようだ

痺れる身体に鞭を打ってフシギダネは足を踏ん張る

「頑張つて、フツシー！ 体当たり！」

「ダ、ネ、フツシャ！」

どかつ！

「みゅー！」

くそっ！ フシギダネの体当たりには、ミニリュウは吹き飛ばされてしまった

ミニリュウは耐久力が無い。だが、フシギダネにも攻撃力はそんなくない

「大丈夫か！ それなら、にらみつける！」

「みゅっ！」

「ダネエ!?」

ミニリュウに睨みつけられて少しだけ怯えてしまうフシギダネ

こんなんで本当に相手の耐久力が下がるのか疑問だが、下がっているのだろう。

「たいあたりよ！」

「ダ、ネ……………」

慌ててくりむちやんが指示をだすが、フシギダネは身体がしびれて動けないようだ。

電磁波がよい感じに仕事をしてきている！ これなら貫つた！

「まきつく!!」

「みゅー！」

「ダネー！」

まきつくは相手に巻きついて1ターンに8分の1ずつダメージを与える技だった。これならあと5ターンあれば倒せると、そう思っていたが、そうは問屋が降ろさなかつた

「みゅー!」

「んなあ!」

フシギダネに巻きつけられるほど、ミニリュウの身体が大きくないということだ。ゲーム時代と現実が違うのだ。もちろん、ターン制ですらない。

「首! 首に向かって巻きつく! 自分の身体が入る場所を探して!!」

「みゅー!」

わたしの指示に従い、ミニリュウは即座に首に向かって巻きつくを行使する

ミニリュウが覚えている技は“でんじは” “まきつく” “にらみつける”のみ

「ダ、ダネエ……………」

「そのまま締め上げて!!」

「みゅー!!」

フシギダネが苦しうにもがくが、ミニリュウは離さない!

「やったか!」

このままいけば勝てる。わたしは勝利を確信して声を上げる

「フツシー！ やどりぎのたね！」

「フツシャー！」

「みぎゆう……………」

フシギダネの背中の中の種からポンと小さな種が吹き出し、ミニリュウに付着。それは小さく成長し、ミニリュウの体力を奪う。

寄生樹？！

つまりフシギダネのレベルは最低でも7を超えている

ミニリュウのレベルは5だし、トキワシテイに行くときにレベルを上げてきたのか！
不覚！

こちらが巻きつくで継続ダメージを与えても、あちらの寄生樹継続ダメージがそれを回復してしまう。しかもこちらの体力を奪われるおまけつきだ！

巻きつく単体のダメージは高くない。体当たりの方が高いくらいだが、ミニリュウの身体では体当たりなど柔らかすぎで意味をなさない。

「たいあたり！」

「ダ……………ダ、ネエ！」

「みぎゆう！」

首元に巻きついたミニリュウを地面に叩きつけるように体当たりをかましたフシギ

ダネ

まだミニリユウに体力は残っているのだが……………

「だめだ、降参！ まいりました!!」

相手の動きが鈍くなっても寄生樹をどうにかできる力がなかった

負けが確定したこの試合。続ける意味は無い。

これ以上ミニリユウが傷つく前に降参した方がいい

こちらが負けを認めると、ミニリユウに宿った寄生木が腐るようにボロボロと崩れた

「やったあ！ 勝ったよ！ フッシー！」

「ダネダネ！」

なんといつても、こちらに攻撃技が無いのがつらい

ミニリユウの巻きつくだって、実際継続ダメージの方がダメージ多いし、だから睨み

つけるをやったんだけど、それでも大してダメージにならないもん

こんなことなら技マシンを使っておくべきだったか……………

「お疲れさま、ミニリユウ。」

「みゆう……………」

ぐてつとフシギダネの首で力無く項垂れるミニリユウ

ポテリとおっこちて白いおなかをこちらに見せる

「みゅー！ みゅー！」

じたばた、じたばた。

あらやだかわいい

「おいで、ミニリュウ」

それからくるりと体を反転させ、によるよるとわたしの足から這い上がってきたので、抱き上げて頭を撫でてあげた。

仕方ないよ。今はまだ弱いかもしれないけどさ。お前の将来は立派な600族。

カントー地方で最強のポケモンになるんだ

一緒に頑張ろうな

ミニリュウを手当てした後は残った体力でわたしのリュックの中に入る。

ボールに入るのは嫌らしい。外の世界に興味津々だから、それも仕方ないことだ。

「やったあ！ 初めてトレーナーと戦って勝ったよ！」

「おめでとう、くりむちゃん！」

何気に初めてトレーナーと戦って、初戦で負けた。

ちなみに賞金取引は存在しなかった。

初めはゲームみたいに賞金取引があるのかと思っていたが、おばあちゃんに確認してみたところ、それは互いに合意がなければできないそうだ。

まあ、そりやそうだろう。そんなのが横行してたら町中スキンヘッドと暴走族ばかりで溢れてしまう

一方的にけしかけても、違法となる。

ちなみに暴走族などは脅して無理やり合意を得る場合もあるからやはり要注意だそうだ。

賞金取引システムは一応動いているけど、合意が必要。これ豆な。

「あー、悔しい！ でもわたしたちももつと強くなつてくりむちゃんに勝つから、覚悟しててね！」

「えへへ、受けて立つよ！ そういやさつきグリーンがポケモンリーグに挑戦するって言つてたつけ……ズルい！ 私も挑戦したい！ オレンちゃん、また会おうね！ 私 はもう行くわ」

ポケモンリーグはバッジを集めてからじゃないといけません。

でも、そんなことを知らないグリーンとレッドとくりむちゃんは、ポケモンリーグの受け付けがある場所まで行つちやうんだよなあ

「頑張つてね！ わたしはもう少し修行を積んでから、いろいろな場所を見て回りたいんだ。くりむちゃんのこと応援するよ！」

「えへへ、ありがとう、じゃあねー！」

転がってきたモンスターボールを拾ったことから始まった不思議な縁。

これからも幾度となく会うだろうライバル。

「楽しくなってきた……いろいろな茶々を入れてやろう」

「ブイ？」

ゲーム知識を活かしたアドバイスをふんだんに使って、彼らを導いてやろう

「俺は性格が悪いからね」

我ながら気が狂っていると思うよ。

キヒヒと笑う俺を見たイーブイは、首を捻っていた



「オーキド博士！」

「む、なんじゃ、キミはどこの子かな？」

「こういう者です」

わたしはバトルが終わってすぐにオーキド研究所に行って、オーキド博士にトレー

ナーカードを見せる

「おお、キミが噂の最年少トレーナーのオレンくんかね」

「はい。というか、知ってたんですね」

「うむ。キクコから電話で面白い子がリーグに来たと言っておったぞ」

キクコさんと電話する仲なんですね

でもオーキド博士は既婚者です。浮気はすんなよ。博士。

キクコから話を聞いているってことは、俺が本当は男だってこともIDを二つ持っていることも知っているのか。

だつたらいいか。

「えい」

頭の上に飾ってあるリボンを取っ払う。

ついでにその場で女装も解いて比較的身軽な男装に着替えた。

やはり、性別についても知っていたらしく、オーキド博士から特に反応はなかった。

ちよつとさみしい。

「といつても、僕はともかく、〃オレンちゃん〃はまだ初心者だし、パートナーになるポケモンがミニリュウだけしか居ないから、オーキド博士からもらえないかなーって思つて来たんだけど、無駄足だったかな」

「すまんのう。将来有望な孫とその幼馴染にすべてのポケモンを渡してしまったんじゃない」

「タマゴとかは？」

「タマゴもないのう」

そりゃ残念だ。

エリカ様からフシギダネのタマゴを貰うか。

残りは……グリーンとレッドに交渉してタマゴができたら譲ってもらおう

「それで、そんなキミがなぜ研究所に？ 親御さんは？」

「いないよ。元々捨て子だからね。一人で来たんだ。この研究所に来た理由は、簡単に言えば『ヒトカゲ』『ゼニガメ』『フシギダネ』のいずれかが欲しかったからなんだけど………ついでもいいか。ミュウに関する情報が欲しいからかな？」

なんせアレは幻のポケモンだ。

凶鑑の完成には必要のない個体だけれど、できればすべてを集めたいと思うのが貪欲な人間、レンジである

映画の特別前売券で配信とか舐めんな。ねエよ。

だったらどこかに居るはずだ。情報を得るなら研究所。

「どこでミュウの存在を？」

孫を慈しむような優しい目から、真剣みを帯びた眼力でわたしを睨むオーキド博士。眼力がすごい

「グレン島のポケモン屋敷に、『ミュウツ』に関するレポートがあつたからね」
ゲーム時代の知識だ。

どうせそのレポートには科学者であるフジ老人と同じく科学者のカツラ。ポケモン研究者のオーキド博士も絡んでいるんだろう。

ちゃんとわかつてる。

推論が間違つてたらごめん

「……………なるほど。キミを年齢通りの子供と侮るのはよした方がよさそうだね」

オーキド博士のセリフににやりと笑ってみせると

「……………『最果ての孤島』、でしょ？」

「そこまで知つておつたのか……………」

「行き方はわかんないけどね。」

それはミュウをゲットするために、ポケットモンスターエメラルドで手に入れられる古びた海図で聞くことが可能になる、孤島だ。

「シオンタウンのフジ老人がミュウツを生み出してしまったことも知ってるし、ハナ

ダの洞窟の奥深くにミュウツーが居ることも知ってる。情報を悪用するつもりはないよ。一目見るだけでいい。幻のポケモンなんだ。いい記念になるじゃん」

実際、前世の俺にとっては、幻のポケモンなどいくらでも手に入った。

映画も見たし、配信ポケモンは逃さず、アニメのシリアルコードもきっちり入力した。だから、正直珍しくもなんともない

スマホのポケモン図鑑も、一応見て撮影するだけでも図鑑は埋まる。

だけど、それはプライドが許さなかったため、捕まえられるポケモンはできればすべて捕まえるつもりだ

できなければしょうがない。

ミュウツーは主人公たちに任せるさ。ならばミュウウを見てみたい。そう思うのは当然だった

「さすがに場所を教えるわけにはいかんのじゃ。すまんのう」

教えるわけにはいかんと。つまり、知っているのか。

なるほど。いいこと聞いた。

「そっか………僕がポケモンリーグのチャンピオンになっても?」

「そのくらいの実力が付いたのなら、考えてみよう」

「ありがとう。まあでもチャンピオンになる気は無いし、無理かな。」

情報もちやんと手に入っただし、もう充分か。

レンジで生活費を稼ぎながら、オレンちゃんまで午後や休日に旅をする。

今のところ、この生活でこの世界を面白おかしく生きて行こう。

「参考までに、どうやってその情報を得たのか教えてほしい。ミュウは人目に触れてはいけないポケモンなのじゃ」

あー、そうか。迂闊なことを聞いたな。

幻のポケモンの存在を知っている3歳児。その情報の出所を特定しないと、ミュウに危険が及ぶのは当然だ。

「その前に、オーキド博士は生まれ変わりって信じる？」

「何を言っているんじゃ？」

いぶかしげに眉を寄せるオーキド博士

「まあ聞いてよ。信じてもらえなくてもいいし、戯言だと笑ってもいい。だけど、ここまですり端な3歳児が居たんだ。話くらい聞いてもいいでしょ。……僕は一応、カントー・ジョウト・ホウエン・シンオウ・イツシユ・カロスの6つの地方で手に入るすべてのポケモンに関する情報を持っているんだ。その数は720匹。それ以上はまだ知

らないけど何処で見つかるか、分布もわかるし、伝説や幻のポケモンも、姿形なら今ここで絵に描くこともできる。」

そう言つて、記憶を掘り起こしながら「ミュウ」の絵を簡単に書き記してみる。その隣には「ビクティニ」その周囲に「ラティオス」や「ラティアス」

「シェイミ」や「セレビィ」、
「マナフィ」、
「ジラーチ」といった伝説級や幻の配信ポケモンが輪をなして遊んでいる絵を鉛筆画で書き記した

ついでと言つた感じに別の紙に自分の知りうるブイズの進化系統。イーブィ8変化も描いておいた。

「ブィブィー！」

我ながらいい感じの絵だ。

イーブィは俺の描いたイーブィ8変化をじつと見つめ、自分の未来の姿に思いをはせているようだった。

やりこんだからね。分布だけじゃなく、図鑑の説明も完璧だ。

うむむ？ 特にニンフィアをじつと見ている気がする。興味があるのかな？

でもポケパルレはないよ？

「むう………明らかに3歳児の絵ではないのう。しかも、文献に残るポケモンとも似ておるようじゃ」

「その点も踏まえて聞いてよ。絵を見てわかるとおり、僕はただの3歳児じゃない。ポケモンに関する知識があるからね。僕は旅をしながらすべてのポケモンを捕まえるつもりでいるよ。」

「ふむう……して、その知識はいつたい誰から教えてもらったものなのじゃ？」

興味があるのは当然だ。誰だって知りたいはずだ。この伝説や幻のポケモンの所在や姿形を知っている俺の正体も含めて。

「僕はね、別の世界で死んで、気づいたときにこの世界に居たんだ。僕がこの世界に来たのはほんの半年前。その時にはすでに僕にはすべてのポケモンに関する知識があったんだ。嘘じゃないよ。まあわかると言っても見かける場所と名前と姿形、どんなタイプか。どういう特徴があるのか。そのくらいしかわからないけどね。」

「……………」

「だから、誰かから教えてもらったわけじゃないんだ。もしもオーキド博士が悪用するのなら、僕もオーキド博士に教えたりはしないよ。その点、オーキド博士は信頼できる人だと思うから」

ゲームの中では人格者だったからね

「なるほど……………それを信じるにはいささか判断材料が足りないが、そうでなくては

ミュウの居場所を知っていた理由もわからん。レンジくんがむやみやたらとその知識を披露しないのであれば、問題あるまい。今までその知識を人に言ったことは？」

「ありません。普通のポケモンに関する知識なら子供たちに教えました」

即答する。

「そういえば、トレーナーズスクールの講師もしておるんじゃないか。なるほど。正直、研究者としてキミの持つ知識にはものすごく興味がある。しかし、我々の都合でそれを強制するわけにもいかないし、レンジくんにも知らない情報はあるじやろうしのう」

「僕も強制されたら自害してやろつかないよ。って思ってたから何よりだよ。んー、ポケモンも『最果ての孤島』への行き方の情報ももらえないんじゃない、ここに居る意味ないや。僕はもう行くよ。くれぐれも、レッドやグリーン、くりむちゃんに『レンジ』と『オレンちゃん』が同一人物だって教えないでね。なんだかんだでこの二重生活を満喫してるからさ」

「ほっほっほ。おかしな趣味をしておるのう。安心しなさい。ワシはただの研究者じゃからのう。トレーナーの事情はなんも分からんわい」

それならよかった。

本当は色違いのミニリュウをオーキド博士に自慢したかったけど、研究者のことだ。眼の色を変えて研究させてくれと言ってくるに違いない。

突然変異の色違いはなぜ生まれてくるのか。そういった論文の発表とかに使われてもたまつたもんじゃないしね

「たぶんまた来るよ。じゃあね、オーキド博士。僕が知識を持つてゐることは秘密でね！」
「いつでも来なさい。気が向いたら、力を貸してくれると助かるわい」

三歳児に何言つてんだか。
気が向いたらね。

第13話 3歳児は勝利の味を知る

オーキド研究所を出発してトキワシティに向かいます
結局何の情報もなかったけど、まあしょうがないかな

「出てきて、ウインディ！ タツベイ！」

「……………（フンスー）」

「タツベイ!!」

1番道路に到着して、すぐさま「ウインディ」を召喚。

俺はその背中に乗せてもらう。

ウインディはガーディの頃の好戦的な頃とは違い、強さを手に入れてからというものの、落ち着きも手に入れた。

召喚時に周囲が静かなことに気付いて、大きな返事はしないものの、呼び出されて嬉しそうに鼻を鳴らしていた

俺はそんなウインディにしゃがんでもらい、よじよじとよじ登り、そのもふもふを精一杯堪能することにする。

タツベイも小さな身体でウインディによじ登る。

「タツベイ、ミニリユウ、どうだ？」

「みゅー♪」

「ベーイ！」

レンジの頭の上から返事を返すミニリユウ。

二匹ともウインディの背中の上はどうやら気持ちがいいらしい。それに、高い視点から地面を見下ろして興奮しているようだ。

このままゆつくりとトキワシテイに向かい、野生のポケモンと遭遇したらミニリユウとタツベイの二匹で戦わせていくというスタイルだ。

体力も少ないから、慎重にね

ミニリユウもなんとかレンジに慣れてくれたので、こうして旅に出ることができんだ。

いまでもオレンちゃんが居ないことで少しだけ不安そうだ。

同一人物だつてば。ねえイーブイ。

「ブイ。」

ねー。

というわけで、野生のコラツタやポップと戦って経験値を溜めながら、俺はウインデイの背に乗って時々タツベイとミニリュウの戦闘を応援、観戦してトキワシテイを指した

ミニリュウは攻撃技が「まきつく」しかないため、必然的に戦闘の時間が延びる。

一度はコラツタを捕まえて「レンジのスマホ」に収納したため、ミニリュウの体力が減っただけの結果があつたが、それでもミニリュウはバトル自体は楽しそうに繰り広げていた

なんだかんだでイーブイ達の戦闘を元気に応援したりしてるからね。

見るのも戦うのも好きなんだろう。

でも移動中のミニリュウは体力が少ないからすぐにへばって俺のリユツクの中に戻ってきてしまう。

タツベイは一度戦闘が終わったらしばらくは自分の力で歩いて、数百メートルで疲れてしまい、ウインデイの背に飛び乗るといふ形を取っていた。

自分でも体力を付けようとしているのだ。タツベイはやるのう。

だがミニリュウはさすがに手足がないため、持ち運ぶしかないのだ。これはしょうがない。

はたして何キロ進んだらうか。

3歳児の体力ではトキワシテイにたどり着く間もなく日が暮れるだろうが、さすがはウインデイさん。3時間ほどでトキワシテイに到着だ。

ミニリユウのレベルも6に上がり、タツベイのレベルも8になった。

やはりドラゴンタイプ。育つのに時間がかかる。

きすぐすりは大量にあるので、手当てはすぐに終わる。

パワーレベリングはこの子達の為にならないし、自分と同じくらいの相手とずっと戦っていければそれなりに強くなるはずだ。

「いい感じにお昼時だね。みんなでお昼にしようか」

そして、時間はお昼時。朝の6時にマンションを出て、合計6時間。時刻は12時だ。というわけで、イーブイ以外の子達をボールにしまい、トキワシテイに入る。

さすがにウインデイに乗ったまま街に入ったらあかんでしょ。

そのままポケモンセンターに直行。

まずはミニリユウとタツベイの手当てから。

お昼はそれからでも遅くない。

「こんにちはジョーイさん結婚してください」

ポケセンに入って開口一番にプロポーズ。

別に本気じゃないので、イーブイは足を踏まないで。ダメだつてば。グリグリしないで。圧力が！ 圧力が!!

「あん？ なんだこの子供は………？」

しかし、受付には先客が居た！ うわっはずかしい！

「おいおい、ポケモンセンターは子供が来る場所じゃねーぞ。俺様はいまイラついてんだ。ガキは早くおうちに帰った方が身のためだぜ」

ん？ 誰だ、こんな冒険者ギルドのテンプレ的なことを言う奴は！

「あん？」

ギロリと三歳児睨みを聞かせてそちらを見ると、そこに居たのは――

「ああ………」

なんだ、グリーンか。

つい出そうになった言葉を飲み込んで納得した。

グリーンがポケモンセンターに居る。

理由はまあ想像つくよ。

おおかた、ポケモンリーグに挑戦しようとして、バッジがないから門前払いされ、2番道路でレッドに負けたのだろう。

やられ役のアンタのことだ。負けたに違いない。

レッドは強い。何せ奴は主人公だから。

グリーンも強いが、レッドの方がポケモンのことをわかっている。そう！ きつとレッドはポケモンのことを家族だと思っているような奴だからな！

「なんでここに居ちゃいけないの？」

そんな踏み台ポジのグリーンさんに格下呼ばわりされてもイラッと来るだけなので、もちろん反論しません。

というか、俺はトレーナーだし、正当な理由があるのだから、この場合は俺にまったくの否がないのだ

「はん、ここはトレーナーが来るところだ。ガキはお呼びじゃねーんだよ」

「僕はトレーナーだよ。傷ついたポケモンを治療しに来たんだ。つまりあんたは僕にポケモンを治療させることなく死なせろと言うんだね。あんたは血も涙もないのか。よくそんなんでトレーナーだなんて言えるね。あつははは、ヘドが出ちゃうよ。ポケモンを大事にしないあんたはトレーナーですらない。言葉をそっくり返すけど、トレーナーじゃないならどいて。治療ができない」

しっしつと手を払ってグリーンを払いのける

自分でもびっくりするほど相手がイラツとする言葉をピンポイントで選んで口から零れ落ちる。

コレでイラツとしない人が居たら教えてくれ。そのコツを聞きたいから。

しかし、先にケンカを売ったのはグリーンだ。こちらはそれを買ってあげたまでである。

「あらいらつしやい。小さなお客様ね。どうしたの？」

ジョーイさんのスルースキルがすごい。

さっきのやり取りを見ていたでしょうに。

俺の隣でグリーンが顔を真っ赤にして拳を握り、プルプルしている。

怒った？ 上等。俺に口げんかで勝とうなんざ10年早え。

そんなくらいになりやあ精神年齢も同じくらいになって舌も達者になるだろうに。

「治療をしに来ました。この子とこの子です。どちらも珍しいポケモンだから人目に付かないようにしてもらえるとたすかるよ」

「この子達は？」

「こつちがタツベイで、こつちがミニリユウ………の色違い（小声）」

「わかったわ。身分証はもってる？」

しつかりとジョーイさんに治療を受ける子供たちの特徴を伝え、*“レンジ”*のトレーナーカードを差し出す。すると、驚いたような表情でこちらを見る。

きっと、ポケモンリーグ協会から最年少トレーナーの話は聞いているはずだ。

トレーナーカードとモンスターボールを預かって、ジョーイさんは奥へと消えた。そしてグリーンに向かってドヤ顔を向ける

「で、僕はトレーナーだからここに居てもいいでしょ？　まずはいきなり消えるように言ったことで、僕に言うべきことがあるんじゃないの？　ねえ、どうなの？」

「くっ……………」

自分が悪いと認めていても、ここまで口の悪い子供に頭を下げるのはプライドが許さないらしい。

気持ちには痛いほどにわかる。

こんな3歳児が目の前に居たら、殴りたくなって当然だ。

しかしながら、ここはポケモンセンター。

人目もある故、自制が効いているみたいだ

「……………だ」

「ん？ なに？ ごめん、全然聞こえないです」

いや本当に。冗談や挑発抜きで敬語になっちゃった。

「勝負だ！ おまえもポケモントレーナーなら断つたりしないだろ！ まあ、万が一にも俺様が負ける事なんてないと思うけどな！ その弱そうなポケモンを見てたらわかるぜ！ おまえ、ポケモン持ったばかりで調子に乗ってるんだろ。俺様が矯正してやるぜ！」

なんとグリーンさん。まさかの勝負を仕掛けてあやふやにする作戦を決行しやがった！

「ブイツー！ フカーツー！」

しかもブイツーさんも自分が馬鹿にされていることに腹を立て、その挑発に乗って毛を逆立ててグリーンを威嚇している！

しかしながらブイツーの特性は「てきおうりよく」であるために！

“ 威嚇 は かわいい だけ で あった！ ” ▼ “

ブイツーがやる気ならばしかたあるまい

「いいよ。ルールは？ 僕はあなたにイラツとしているし僕が勝つたら、さっきのことをちゃんと頭を下げて謝ってもらいたい。あんたが勝つたら、僕はさっきのことを不問にしよう。それだけじゃ面白くないから、このバトルには賞金を設定しようか。勝者に

5000円でどう?」

「ご、5000円もだと? ふん、いいだろう。せいぜい吠えずらをかきやがれ! 俺様が勝つって決まってるんだ。手持ちのすべてのポケモンで勝負だ!」

出来レースです。ありがとうございます。

☆

「さっきは、バカなことを言ってすまなかった……」

というわけで、勝ちました。

当然だ。

ジョーイさんからから受け取った治療を終えたミニリユウとタツベイのモンスターボールをベルトに付け、グリーンと共にポケセンを出て、バトルスタートだ。

こちらの手札は相棒の「イーブイ」さんLv. 43

グリーンの初手は「ポツポ」さんLv. 9

先手必勝の「スピードスター」でポツポを沈めた

イーブイさんは得意げな表情で俺の胸に飛び込んできたため、抱き留めて撫でまわし

てあげた。

そして次。

グリーンは「ゼニガメ」さんLv. 9を繰り出しイーブイさんは体当たりを躲す躲す躲す躲す。

時には尻尾を使つてゼニガメを転かした

そして、追撃はせずにお座りして待機。

そこからはもはやお遊びである。転がした後、何となく甲羅の上に乗つてみたり、ポンポンとゼニガメの頭を撫でてみたり。

イーブイさんは「弱そうなポケモン」と言われたことがよっぽどご立腹らしい。

しまいには倒れて涙目になるゼニガメを尻目にグリーンの方をチラ見して――

イーブイ「ブイ……………（チラ）」

グリーン「……………？」

イーブイ「……………（へっ）」

グリーン「（ω、ω、#）ピキピキ」

こんな感じになった

なかなか悪い感じに俺の性格を遺伝しているようでなによりだよ。

結果、ゼニガメを全く傷つけることなく、グリーンが実力差を痛感して「まいった」と

言わせた。

ゼニガメも涙目だった。

アホな主人を持つてしまつて災難だね、ゼニガメ。

とはいえ、なんだかんだでトレーナーと戦つて勝つたのは初めてなので、それでもうれいものだ。

「うん。その一言がきけたら満足。もう子供だからつて見くびらないようにしてね。あーお腹すいた。グリーンさんも一緒にお昼食べる？」

一度誤つてもらえたならよつほどのことじゃない限り、それは水に流すべきである。喧嘩をすれば仲直り。仲直りのしるしに、一緒に昼食。すばらしいだろ。

「……………ああ、わかつた」

というわけで、グリーンさんも誘つて昼食タイム。

みんな、出ておいで!!

ボールを放り投げ、全てのポケモンを場に出す。

「ブイー!」

「ピックシー!」

「ジョットー!」

「オン!」

「シー……………」↑ユンゲラー

「ベーイ！」

「みゅ〜♪」

ミニリユウとタツベイに関しては珍しすぎるし手持ち7匹目のポケモンに該当してしまうため、体の大きなピジョットとウインディにさりげなく隠してもらいながら、ジョーイさんから買い取ったポケモンフーズを食べてもらった。

「これが、レンジのポケモン達か……………大きいし、強そうだな」

「ゼーニゼーニ」

「つよいよ。でも、みんな進化前から一緒に過ごしているからなんだかんだで僕のこと
が大好きだからね。仲の悪い子も居るけど、それはそう言う個性つてことで喧嘩が大き
くなり過ぎないように注意しつつ傍観してるかな。」

誰つて？ イーブイとウインディだよ。

あの子たちは仲が悪い。

険悪なわけじゃないよ。互いにライバル視していて、互いを挑発し合ってる感じ。

俺の手持ちたちがご飯を食べている間に、俺もグリーンと一緒にお昼ご飯を食べる。

ポケモンセンターの喫茶スペースで注文したサンドイッチである。

「うまうま。」

「それにしても、レンジはなんでそんなに強くなったんだ？」

「んゆ？（ごくん）んー、年季？」

「年下じゃねーか」

グリーンに突っ込まれつつ、サンドイッチを口に詰め込んで返答を探す。

ゼニガメもこれ食べてみる？ おいしいよ。

「でも、当たり前ながら僕よりもジムリーダーの方が強いよ。僕はタマムシジムのジムリーダーの本気を見たことがあるけど、さすがポケモンリーグ公認のジムリーダーだ。全然勝てるイメージが湧かないもん」

「そんなにか？ もっと勝てるもんだと思ってた……………」

「そりゃあ勝てるでしょうよ。ジムリーダーだって、制限でそのタイプのポケモンしか使えないんだ。対策されれば、どうしてもやられちゃうって言うってたからね。それに、相手が持っているバッジの数に合わせて出すポケモンを決めているみたいだから、挑戦者が勝つのは確かに難しいかもしれないけど、ある程度の実力があれば勝てるようになってるんだ。勝たなければポケモンリーグに挑戦することすら敵わないんだから」

「確かに……………」

「リーグの公認ジムリーダーの本気は四天王やチャンピオンに匹敵する。バッジを取った程度では冗長できないよね。各地方のジムリーダーやチャンピオンが集まって戦う

“PWT” っていうのも、激熱だよ。みんなバケモノだ。」

最後のサンドイツチを近くに寄ってきたイーブイに一口あげる。

あ、全部なくなった。でもイーブイが幸せそうな顔なので全てよし。

「でも、グリーンさんが最初のジムバツジを手に入れるとしたらニビジムでしょう？

そのタケシさんは岩タイプをおもに使って来るから、バツジ0個で水タイプのゼニガメがいるなら撃破は簡単かもね。出してくるのはおそらく、“イシツブテ”と“イワーク”かな。どっちも水草4倍だし。」

そう考えると、最初にヒトカゲを選んだレッドはタケシ、カスミと苦手タイプが続いて苦戦を強いられるだろうね

「なるほど………参考になったよ。あれ？ でもトキワシテイにもジムがあるけど、そこは？」

「あそこは今、休業中。しばらく待たないとね。バツジを7つ集めたらここに来るといいかもね。トキワジムは主に地面タイプを使うし、カントー地方のジムでは最強の実力を持つているところだから、今行っても確実にやられるよ。チャンピオンになりたいなら、最強のジムリーダーの本気つてのを相手にしたほうが燃えるってもんでしょ」

「お前、わかってんじゃねーか」

簡単に発破を掛けてみたら背中をバンバンと叩かれた

どうやら気に入られてしまったらしい

つっても、あんた3年後にはトキワシテイのジムリーダーだけだな。

「ごちそうさま。それじゃ、僕はそろそろ行くね。ご飯御馳走様でした」

「おう、またな………つて会計俺か!? ちよつと待て——!!」

スタコラサッサ。

第14話 3歳児はくりむを助ける

「ブイブイー?」

「んー? そうだね、じゃあ22番道路に行ってみようか」

グリーンと別れた後、イーブイが次は何処に行くの? と聞いてきたので、一番近い新しいポケモンが居る場所に行くことにする

22番道路は「マンキー」と「オニスズメ」が居たはずだ。捕まえることができ
ば……………凶鑑もい感じに埋まるね

ウインデイの上で地図を確認しながらトキワシティを出る。

「おや、キミ、強そうなポケモンを持つてるね、俺とバトルしようぜ!」

「ふに?」

すると、バトルジャンキーが現れた

そこに居たのは、レッドである。

うわあ、3歳児にバトルを申し込む人、3人目だあ

俺の初試合、全部主人公組だよ。

レンジの戦績——1戦1勝

オレンの戦績——1戦1敗

総合戦績——2戦1勝1敗

「いいよ。受けてあげる。ルールと賞金は？」

「“ありあり”のフルバトルで！」

「ごちになります。」

“ありあり”というのは賞金あり、アイテムありの略、らしい。

これはグリーンから聞いた。

追加で2勝1敗。レットの分。

確定試合です。ケチヨンケチヨンにしてやりませう。

「行け、ヒトカゲ！」

「カ…………カゲエ…………ゼエ、ゼエ…………」

と、思ったら、ヒトカゲはすでにボロボロであった。

「……………」 ↑レンジ

「……………」 ↑イーブイ

「……………」↑ウインディ

なんだこいつ。ふざけてんのか？

さきほどグリーンがレッドと戦って敗れてきたが、それでも接戦だったはずだ。

グリーンはポケモンセンターにすぐにポケモンを預けていた。

だけど、こいつはヒトカゲの体調を無視して、ここでレベル上げかポケモンの捕獲を
しているらしい。

「タツベイ、出てきて。」

「ベイー！」

俺はイーブイでもその場に居るウインディでもなく、手持ち最弱のタツベイを繰り出
した

タツベイのレベルは8。

ヒトカゲのレベルは1

「よし、やるぞ、カゲどん！」

「カ、ゲエ……………」

ヒトカゲはフルバトルと聞いてげんなりしつつ、タツベイの後ろに控えているイーブ

イと体の大きなウインディを今の状態で戦って、さらに勝てと。3タテしろと命令する
レッドの無茶ぶりに、すでに涙目であった

「……………」

そんな様子に、もはや俺は無表情。

ゲームならばたしかに、ヒトカゲはそういう扱いでボロボロになつても経験値集めを
していたさ。

だが、ここはあくまで現実。ヒトカゲは生きているのだ。

レベル差のおかげで先手を取って、さらに「もうか」の特性がある。その状態でも一
撃で勝てる状態が続いていたのかもしれないが、ヒトカゲの体力はもはや限界だ

すでにHPゲージは赤色でピコンピコンと言っていることだろう。

「よし、カゲどん、ひのこー！」

しかも、タツベイに対してひのこ攻撃。明らかなタイプ無視だ。

これはしようがない。俺だってゲーム初心者だった初代赤・緑の頃はどのポケモンに
どの攻撃が有効かなどは手探りで探していたもんだ。

「カゲ……………カゲア——!!」

特性「猛火」が発動しているのか、ヒュンヒュンと力強く飛んでくる火の粉に対し、

タツベイは目を瞑って火の粉を受け切る構えを取り――

「“いかり”!!」

すべての火の粉を受け切ると、タツベイは瞳に炎を灯す

効果は今一つゆえ、ダメージは少ない。だが、タツベイの怒りのボルテージは上がる

「――ツベイ!!」

「カギヤ!」

拳を握りしめたタツベイは、そのままヒトカゲをぶん殴った。

タツベイの覚えている技は“ひのこ” “にらみつける” “いかり”のみ。

一応体当たりや頭突きのような技も可能であるが、ポケモンの技特有のオーラのようなものは発生しない。

レベル差はあるが、もともと体力が限界ギリギリであったため、威力20を倍増させられた“いかり”の一撃によってあえなく眼を回して気絶してしまったようだ

「ああつ! カゲどん!」

心配そうにヒトカゲに駆け寄るレッド

俺はそんな彼を無表情で見つめていた

「そんなあ、さつきグリーンにも勝ったのに……こんな子供に、なんで負けたんだよう」

戦ったのは俺ではないし、そんな状態のヒトカゲを使ったらコラツタだって勝てるわ。

「さつさとお金をよこしなさい。」

「うう………はい」

70円。おいしくない。

「さつきなんで負けたんだって言ったけどさあ………あんた、ポケモンバトル舐めてんの？ そんな状態のヒトカゲを使ったら負けるのは当然じゃねえか！ 馬鹿か！」

「な、なんだと!？」

「あたりまえだポケナス！ 最初からヒトカゲはボロボロだったじゃねえか！ ポケモンは道具じゃねえんだぞ！ テメエ自分が全身を怪我してんにボクシングするのかわ？ ああ!? お前がヒトカゲにやらせたことはそう言うことなんだぞ！ そんなのポケモンが可哀想だ！ ちったあポケモンの気持ちも考えろや！」

俺が怒鳴るとレッドは驚いて口をつぐんだ

先ほどレッドはポケモンのことを家族だと思っっているはずだと思っただが、残念だ。

ただの虫取りしているガキンチョと同じだ。

初心者だから、ポケモンのことをよくわかってないのは仕方ないけどさあ。もうちよつと大切にできるでしょ。生きてるんだから。

「ポケモンセンターには頻繁に連れ帰った方がいい。ポケモンをゲットするのも大事だけどさ、目の前の相棒をきちんと心配してやってよ。だから実力を出す前に負けるんだ」

「あ、ああ」

「ほら、行つて。そしてヒトカゲにちゃんと謝れ。ヒトカゲだって本当は全力で戦つて勝ちたかつたはずだから。」

俺はレッドにそう言つて、22番道路の草原に向かつて歩みを進めた

誰だつて失敗はあるが、これはヒドイ。

未来のチャンピオンならしつかりしろよな。

☆

レッドと別れ、22番道路でミニリュウやタツベイで戦いながらマンキーとオニスズメを捕まえ、レンジのスマホに収納した頃、遠くで女の子の声が聞こえてきた

「誰だ？　こんなところで」

「みゅー?」

「ベイー?」

「ブイ?」

声の方にどんどん進んでいくと

「ええーっ! ダメなんですかー!」

22番道路のポケモンリーグに続く関所のような場所で通せんぼを喰らっているくりむちやんを見つけた。

「まあ予想通りっっちゃ予想通りなんだよねー。あ、ミニリュウはボールに戻ってて。レンジの姿でキミを連れているのはまずいから。」

「みゅー!」

ミニリュウをボールに収納してから警備の人に止められるくりむちやんを眺める。

「バツジ? バツジってなに? それが必要なの? それがなかったらどうしたらいいのー?」

それがなかったら集めるんだよ。

話の通じない女の子に、警備のおっちゃんも苦笑いだ。

「ええい、こうなったら色仕掛けしかもう残された手段がないわ！」
は？

「ねえ、これで通して下さいらない？」

そう言つてくりむちゃんはスカートに手を掛け――

絶対領域の肌色の面積が少しだけ広がった

白い布地おパンツまであと少し。

「……………」 ↑ レンジ

「……………」 ↑ 警備員

「……………」 ↑ くりむ

アホか。さすがにガキに欲情する警備員じゃ――

「それじゃ、キミ、ここを通してあげるかわりに、ちよつといっしょに向こうのしげみに
いこうか」

「え？ こんなんで本当に通してくれるの!? わあ！ お兄ちゃんの持ってた漫画つて
すごーい！ うん、いくいくー！」

アホー!!!

「ジュンサーさあああああん!!! 強姦魔! 強姦魔がおるで——!!!」

「ツ!!?」

「え? なに?」

うおおおお!! 声に導かれてここに来てよかった!

くりむちゃんがエライことになっていた可能性がある!

あ、あぶなかった!

「こつちに!」

「きゃっ!」

俺の叫び声にびっくりした警備員さんが慌てて詰所に逃げたのを尻目に、俺は草むらから飛びだしてくりむちゃんの手を引いてそこから走り出す

「ちよつちよつと! あなたなに!? せっかくポケモンリーグに入れそうだったのに!」

状況を理解していないのかこのアンポンタンは!

「うるさい黙れみそでんがく!」

「みそでんがく!？」

「いいから来て!!」

リーグの関所には、ジヨウトに通じる道とシロガネ山に通じる道とチャンピオンロードに通じる道が存在している

すべて許可証がなければ通ることは出来ないようになっていいる。

それを色仕掛けでゴリ押ししようとするなんて、頭のねじがぶっ飛んだマヌケとしか言えない

だいが関所から離れたところで、ようやくくりむちちゃんの手を離す

「ちよつともう! なんなのよあなた。」

「なんなのよじゃないわよもう! お前今自分があの警備員になにされそうになってんのかわかってないだろ! 絶対に一生後悔することになってたぞ!」

「ちよつと言ってる意味がわからないんだけど、ねえ、どうしてじやまするの?」

ああー! もう! この子は性知識がほとんどなさそうだ!

こういう場合なんて説明したらいいんだ!?

あなたはあの警備員にレイプされそうになっていましたってか?

ふざけんな、きつと伝わらねえ!

「えーと……………」

ガリガリと頭を掻き耨る

ええい、ままよ！

「とにかく！ 女の子がそんな気軽にスカートをたくし上げちゃダメ！ そんなことしたら男は簡単に野獣に変身しちゃうの！」

そんなことを言っても、所詮こちらは3歳児。

くりむちゃんも「野獣？」と首を捻るばかりだ

「もう、そんなわけのわからないことをいってお姉さんを困らせたらダメだよ！」
諭そうとするんじゃないくりむちゃん。

精神年齢はおじさんのほうが上なんだぞ。

「あなた、お名前は？」

「レンジ。こっちは相棒のイーブイ。それとタツベイ」

「ブイ！」「ベリー！」

足元のイーブイとタツベイが片手をあげて返事をする。

今回の件についてはイーブイも俺のふくらはぎをペしペしと叩いてよくやったと褒

めてくれた。

さすがに自分はエッチなおじさんだと自覚しているが、少女が襲われそうになっているのを見過ごせるほど腐っちゃないやい。

「レンジ君ね。なんか今日はオレンジ色の子供とイーブイに縁があるなあ……」

そりゃあ、主人公たちが珍しくて追っかけてきたからね。

感心したようにため息を漏らすくりむちゃんに、俺はカバンから取り出したトレーナーカードを見せる。

「二応、僕は飛び級でトレーナーの資格を持つてるよ。コレがトレーナーカード。だからこそ言うけど、ポケモンリーグの門を潜るなら、各地のジムリーダーを倒してバツジを手に入れないとダメ！ そんな色仕掛けでリーグに入ってもポケモンの実力じゃないでしょ！」

その言葉にむっとするくりむちゃん

「でも入れるならいいじゃない。面倒な手順を踏まなくて済むのよ？」

「そんなことしたらキミの人生が終わっちゃうって言うてんでしょうが！」

「なんでそんなこと言うの？ ぜんっぜん言ってることわかんない！」

ぐぬぬぬ、とにらみ合う俺とくりむちゃん

頑固な子だ。

ええい、面倒だ。どうせこの子はバトルジャンキー。
ならば！

「面倒事は！」

「バトルで決着をつける！」

気は合いそうだ。だが、こちらはもはや手加減するつもりはナツシング。

「勝負よ！ こつちが勝ったら、私はポケモンリーグに挑戦するわ！」

「それじゃ、こつちが勝ったら、おとなしくジムバッジを集めてからリーグに挑戦するつてことでどうだ！」

「いいわ、それで行きましょう！」

余計負けられねえんだよこん畜生！

「ルールは『ありあり』の1対1！ 手加減しないから覚悟しやがれ！ GO！」

「イーブイ！」

「ブイブイ！」

「こつちだつて負けないわ！ 全戦全勝の私に死角は無い！ お願い、『フツシー』!!」

「ダネフツシー！」

全戦全勝つて、オレンちゃんだろ！

！
あの子の色ミニリュウはまだ攻撃技を覚えていないってのに！ 調子に乗りおつて

勝ちました。

イーブイにむかって体当たりを仕掛けてきたフシギダネに、イーブイは頭突きをかました。

カウンター気味に入った頭突きに吹き飛ばされたフシギダネ。

ふたたびくりむちやんの指示で体当たりを繰り返すが、すかさずスピードスターで迎撃完了である。

「ふんっ。これに懲りたら、もう二度と色仕掛けなんてしないことだね」

「ああん！ フツシー！」

眼を回しているフシギダネを抱きかかえるくりむちやん

色仕掛けをするなら俺の眼の前だけにしなさい。

「ほら、はやくポケセンに行つて回復させてもらいなさい！」

「きやん！ うう………わかった」

俺はそんなくりむちゃんのおしりをひっぱたいて歩かせ、ポケセンまで付き添いました。

ふう。これでくりむちゃんはあんなアホな方法でポケモンリーグに挑戦なんかしないでだろう。

きつと、将来の黒歴史だ。

「あれ？　くりむ？」

「あ、お兄ちゃん」

するとそこには、レッドがおりました

ヒトカゲの治療中なのだろう

「なんでお兄ちゃんがこんなところに？　お兄ちゃんならもつと先に進んでいるのかと思ってたよ」

「それは……そうしたいのはやまやまなんだけどね、ヒトカゲの治療が終わるのを待つてるんだ。つてくりむはなんでその子と一緒に？」

レッドはくりむちゃんと一緒に現れた俺に一瞬だけビクリと反応する

そりゃそうだ。

先ほど彼を説教したばかりなのだから。

「さつきこの子とバトルして負けちゃったんだ」

「キミがおかしなことをしようとするから、僕はそれを止めようとしただけだよ」

「楽できるならいいじゃない！」

「ダメ！ 人間楽を覚えたらダメになるんだよー！ それに僕はキミとのバトルに勝ったんだ。約束は覚えているよね！」

「くう……………」

ぐぬぬ！ と互いにならみ合う。

どうもレンジとくりむちちゃんは相性が悪いらしい

ねえオレンちゃん。どう思う？ え？ 代われ？ 嫌だ。

状況を読み込めないレッドは首を捻るばかりだ

「ちなみに、なにをしようとしていたんだ？」

「ポケモンリーグの関所を色仕掛けで通り抜けようとしてスカートをたくし上げてた」

「お兄ちゃんの持つてる漫画のマネを試してみたの！」

俺とくりむちちゃんの言葉をじっくり吟味したレッドは

「これはくりむが悪い。」

「あいたー！」

スパーン！ と妹の頭を引つ叩いた。
ざまーみろ！

第15話 3歳児はふてくされる

「それにしても、キミは俺に続いてくりむにもバトルで勝ったんだな」

ポケモンセンターにいつまでもいるのはなんなので、レッドのヒトカゲとくりむちやんのフシギダネの治療が終わってから、一緒にポケセンを出てトキワシティ北にあるトキワの森に向かって歩いていった

レッドはしつかりとヒトカゲに無理させてごめんな、と謝っていたので何よりだ。

「まあね。レッドさんと戦う前はグリーンとも戦ったよ。たぶんもうニビシティに向かっているはず」

「グリーンにも会ったの!? そっかー。お兄ちゃんとグリーンにも勝ってるなら、私が負けちゃうのもしかたないかあ」

くりむちやんもため息を吐く。そりやあオレンちゃんに勝った程度で調子に乗られちゃこつちもたまったもんじゃないよ。

レンジのポケモンはタママシマンシヨンの近くでずっと修業を積んでいたし、許可を

得てエリカ様のポケモン達と組手をしていたんだから。

そんな所こちらのトレーナーと戦っても負ける気は全くしない

「ねえ、二人とも、今日の予定は？」

何とはなしに聞いてみた。トキワシティはサカキがジムリーダーを務めている関係で開いている時間は少ない。

数週間は帰ってこないかもしれない。

ならばトキワシティに居る理由もない

まあ、ゲームの頃と違ってトキワシティも充実しているから別にトキワシティに泊まってからニビシティに行ってもよさそうだ。

俺なら完全にスルーしてニビシティに行くけど。

「そうだなあ、せっかくの旅だし、トキワシティを満喫したいってのもあるけど、俺はこ
のままトキワの森で珍しいポケモンとかを捕まえようと思う」

とはレッドの弁。

トキワシティの珍しいポケモンねえ。

あ、ピカチュウか。ピカチュウに違いない。

「私もトキワの森に行こうかな。オニスズメを捕まえたから、こんどは別の場所で手に入るポケモンも見てみたいもの！」

「そっか。トキワの森は広いから、気を付けてね。数日程度で森を抜けられたらいいね」
「え？ そんなに広いの？」

「そりゃ広いよ。道は入り組んでるし虫ポケモンはわんさか出るし、草むらだらけだし、進もうと思っても進めないだろうね。僕も入ったことは無いけどさ。」

「うへへ、虫ポケモンかあ、苦手だなあ…………。でも、行ってみようと思う。今日のところの拠点はトキワシティにして、日帰りで行ける場所まで。」

くりむちゃんは眉を寄せる。女の子らしい一面じゃねえか。かわいい。

「二日じゃ抜けられないのか…………でも俺も行ってみるよ。そして、しばらくはトキワシティを拠点にして、森の入り口で修業を積んでからトキワの森を抜けようと思う。そ

れから虫ポケモンもいっぱい捕まえて、トレーナーと勝負して、そのままニビジムを突破だ！」

レッドは拳を振り上げて元気よく歩き出した。

「ふーん。じゃあ、僕も途中まではご一緒しようかな。お夕飯までにウチに帰るって約束してるからそれほど長く一緒に居られるわけじゃないけどさ。」

「えー、あなたも行くの?」

俺もついて行こうとしたら、くりむちちゃんが不快そうにそう言った。

正直すぎだろ、この子。

むっとした。

「あつそ。キミは僕のことを嫌いらしいけど、その正直すぎるところは直した方がいいよ。それで相手がどれだけ不快な思いをするのか、考えてみる」

おいどうしたオレンちゃん。〃自分の事を柵に上げてんじゃねーぞ〃だって? 知るか!

お前は黙って寝ている。後で代わってやるから。

「ブイ……………」

そしてイーブイ。お前もお前で。お前がそれを言うか……………！” って眼をするんじゃない

こちとらちゃんと自覚してんだよ。

「じゃあね。僕は一人で行くよ。」

「あ……………」

自分の失言で人を傷つけたことに、後悔の色を見せるくりむちやんとキワの森に出るポケモンもすべてわかつてる。

捕まえるべき主なポケモンはビードル・キヤタピー・ピカチュウだ。

ゲームではなく現実であるため、ピカチュウを見つけるまでに時間はかかるだろうが、それでもかまわない。

ピカチュウはオレンちゃんの手持ちに入れる。

正直なところ、伝説のポケモンなんかよりも“ラッキー” “ガルーラ” “ケンタロス” といった出現率の低いポケモンの方が俺に取っっちゃ珍しいのだ。

伝説のポケモンなんて、いつでも取りに行ける。そんな考えだ。

「まっ……」

「なに。僕は居ない方がいいんですよ。邪魔なんですよ。その方がうれしいんですよ。」

かったね、ガミガミ説教する奴がいなから楽に旅ができるよ。色仕掛けもし放題だ。好きなだけ脱げばいい。僕はもう知らん。」

くりむちゃんが呼びとめてきたけど、そんなん知らん。

トキワシティ北に向かって歩みを進めた。

もう出てくるポケモンのことで頭がいっぱいだ。

「ごめ——」

「ウインデイ！ トキワの森まで連れてって！」

聞く耳持たない。

ボールを真下に投げ、出てくると同時にウインデイの背に乗り、そのまま走り出してもらった。

☆

「くりむ」

「……………うん。レンジ君にちゃんと謝らないとね……………」

私は、自分の失言でレンジ君を傷つけてしまったことを、後悔していた

「彼はね、本当にポケモンのことが大好きな子なんだ。だからこそ、飛び級なんかしてトレーナーになってるんだよ。彼のポケモンは強かった。すごく頑張って育てたんだろうね。だから、ズルしてリーグに挑戦しようとしたくりむが許せなかったんじゃないかな」

「……………」

「それにね、レンジは俺の『カゲどん』が弱っている状態でバトルに繰り出した時、俺に向かつてても説教をしたんだよ」

「……………お兄ちゃんにも?」

「ああ。ちゃんとポケモンのことも考えてやれつてさ。レンジはね、口は少し……………いやかなり……………めちやくちや悪いけど、間違つたことは言わないよ。彼は本当にくりむのことを心配して色々言ってくれているんだよ」

俯いている私の頭をポンポンと撫でるお兄ちゃん。

私はゆつくりと顔を上げると

「……………あやまつてくる」

私がバツジを集めるのを面倒くさがつてあんなことをしていたけど、それは確かに努力をしていた彼に対する冒涇だ。

明らかに一緒に居たくないと態度で示されてしまえば、私ならどう思うだろうか。

すごく、悲しくなる。

それに、レンジくんはまだ3歳なのだ。

ポケモンと一緒にはいえ、そんな彼が一人で森に行くというのは、危険すぎる
だというのに、私のワガママのせいで、彼を傷つけ一人で行かせてしまった

「行っておいで。俺も一緒に謝ってあげるから」

「……………うん」

確かに私は口が悪くて説教くさいレンジ君のことを好きになれそうにない。

でも、私がいいた種だ。私がケジメをつけないと

☆

なんでかなー。

レンジがふてくされて「オレンちゃん」に変装したおかげでわたしが前面に出てき
ちやつた

そうです、今のわたしはオレンちゃん。

気持ち悪いよね。二重人格ってわけじゃないのに、エリカ様に調教(?)させられた

おかげでオレンちゃんの時はオレンちゃんです別人になっちゃうんだ不思議な感じ。

水色のカチューシャを付けてスカートを穿けばすぐに人格を入れ替えられるよ。

「みゅー♪」

「よしよし、わたしも会いたかったよ、ミニリユウ」

といつても、さつきから会ってるんだけどさ。

レンジの姿でだけ。

なんで同一人物だと認識してくれないのかしら。ウチのミニリユウは。

「さて、トキワの森攻略に移りますか。」

正直、トキワの森攻略はレベルが12を超えたくらいから進めたいところなんだよね安定してビードルやキャタピーを一撃で狩れるから。

でも、ミニリユウがそのレベルになるまでに時間がかかる。

タマムシに戻ってパワーレベルリングすればいいかもしれないが、それは最終手段だ。今はまだ――

「ミニリユウ、でんじはー!」

「みゅー!」

この子に同レベル対で戦える実力を付けさせたい。

「よくやったね、ミニリユウ。キヤタピーゲットでいい感じー！」

「みゅー♪ みゅー♪」

とりあえず手に入れたキヤタピーにまひなおしをふりかける。

この調子でビードルも捕まえよう

……

……

…

「ああ！ ミニリユウ！」

「みゅふ……けふっ」

そう思っていたらビードルに毒針を喰らってビクンビクンしている

ピンク色の肌は無事だが、白いお腹が薄紫色に変色してしまっている。

明らかかな毒の状態異常だ

ビードルは無事に捕まえることが出来たのはいいものの、トキワの森はコレが怖い。

「脱皮できる？ 大丈夫？」

「みゅ……」

もごもごもぞもぞとミニリユウが動くと、ペリペリとミニリユウの皮が剥がれて、その奥から健康な血色のミニリユウが顔をのぞかせた。

「みゅー♪」

なぜ毒の状態異常が脱皮で治るのだろうか

ポケモンって不思議だ。

というかそもそもミニリユウの特性は「だつぴ」ではなく「ふしぎなうろこ」であり、状態異常になったら防御のステータスが1.5倍になるという物だったはず。

この子はもしや天才なのでは？

子供の竜だから普通に脱皮もするか。ゲームじゃないんだし。

体力がなくなってきたミニリユウにオレンの実を食べさせる。

傷跡も脱皮ついでに綺麗になったが体力までは戻らないからね。

そのきれいなピンクの肌に傷が付いても大丈夫。

キミはかわいいまんまだ

「チュツピイ？」

そんな中、背後に何者かの気配が！

「むむ？ 先手必勝！ 行け！ モンスターボール！」

サイドスローで振り向きざまに投擲。命中。

アンドGET!

「ピカチュウゲットでナイストウミーチュー!」

うむ、いい感じのキメ台詞がしっくりこないよ!

トキワの森入り口ですべてのポケモンを捕まえることが出来てしまった。

キャタピーたちのレベル上げはレンジに任せるとしよう。凶鑑埋めはレンジの仕事だ。

わたしは気ままに旅をしよう

「さて、そろそろタマムシシティに戻ろうかな。どうせ明日も仕事だし。」

そういえば、トキワシティのポケモンセンターの北にも、トレーナーズスクールってあったよな。

一度顔出してみたいな

「出てきて、ピカチュウ。」

「ピカッチュー!」

ボールから出てきたピカチュウは、いきなりの出来事に困惑し、人間であるわたしを警戒しながらほっぺの電気袋をビリビリと帯電させている

「ピカチュウ。このモモンの実をお食べ。甘くておいしいよ」
「ピカ？ ……チャャー♪」

あかん、かわいい。

甘いモノというのは、やはりポケモンにとってもおいしいモノであるらしい。

つまりだ。味覚は人間に近いものがある。もしくは人間よりも鋭いと言ってもいいくらいかもしれない。

だから、ポケモンフーズなどという物よりも人間と同じような食べ物の方がポケモンも喜ぶだろう。

しかしながら、食費という物も馬鹿にならない。ごめんよ、いつもいいものを食べさせてやれなくて。

ちゃんと毎日味を変えるように工夫しているし、わたしのご飯も分けているけど、もつと五感全てで食事を味わいたいよね。

わたしにもつと甲斐性があったらよかったんだけど、月8万の講師の仕事ではそれもままならないんだ。

「ピカピカ、ピイカツチュ」

「もつと？ いいよ。たんと食べなさい。」

ピカチュウの餌付けにも成功である。

「みゅー!」

「ミニリュウも? はい、どうぞ」

「みゅー♪」

毒は脱皮で治っているのだが、それでもモモンの実はおいしいからね。というか、特
性上はミニリュウは「ふしぎなうろこ」の為、体内に少し毒が残っている可能性もあ
る。ミニリュウにも食べてもらうに越したことは無い。たべちゃいな。

果物は食べてしかるべき。

バッグの中で腐らせるより百倍マシだ。

「ブイブイ!」

「ブイブイも? はいどうぞ………ってそれはカゴの実だよ。しぶいよ?」

「ブイー!」

「そっか。そりゃ渋い趣味してるね。召し上がれ。」

ブイブイはわたしが取り出したモモンの実ではなく、バッグの中を漁ってカゴの実を
取り出した。

ブイブイは渋さがたまらん! と言った表情でカゴの実を食す。

いやあ、わたしは食べたくないなあ。

渋いもん。

しかしなんというか、イーブイの毛並に艶が出ている。

ポロツクは無いのに美しさに磨きがかかっているようだ

なんでやねん。キミはかわいさでしょう。

ぶんぶん

それにしても……………

「ピカ?」

「ピカチュウはかわいいなあ」

「ピカツチュ♪」

てれてれと頭を掻くピカチュウ。

アニメでピカチュウがメインの訳も分かるよ。かわいいもん

「ブイー!」

「おふっ」

「ピカア!?!」

ピカチュウの頭を撫でたり愛でたりしていたら、イーブイさんに捨て身タツクルを喰らって数メートルほどぶっ飛んでしまった。

嫉妬かいハニー。でも愛情をタツクルで表現するのはやめてほしいカナ

「……………(フランス)」

そのままわたしのお腹の上に乗っかるイーブイ。

つまり、わたしは常にイーブイの尻に敷かれる運命にあるのですね

「きやあ！ さつき何か落っこちたような音が聞こえた！」

「そうだね、近くみたいだ。見てみよう」

むむ？ こちらが楽しくお食事を開いていたら、背後のくさむらから人の声が。

というかレッドとくりむちゃんの声だ。

そう気づいたとたん、俺がビクリと反応する。

ええい、レンジは寝てなさい。口悪い癖に臆病ってなんだよおまえ。

だったら最初から嫌われるような発言をすんじやねえよ、アホ。

どうせ今はオレンちゃんなんだから、レンジがばったり出会うこともないってば

「あれ？ オレンちゃん？ なんでこんなところに倒れてるの？」

「あ、くりむちゃん！ へへへ、イーブイに捨て身タックル喰らっちゃった。」

「そ、それ大丈夫なの!?!」

「割と平気だよ。」

「そっか……………」

レッドもくりむちゃんもわたしがレンジだと気付いていない。

そんなに雰囲気ちがうの？

髪の色も一緒だよ？　ただ髪型をかえてカチューシャをしてスカートを穿いただけだよ。

「くりむ。その子は？」

「あ、この子はオレンちゃん。私が初めてバトルした女の子だよ。そしてこっちが私のお兄ちゃん。」

「そうか、この子がくりむが言ってた女の子か。くりむのことをよろしく頼む」

「オレンです。よろしくー。それで、なんでくりむちゃんがここに？」

自己紹介も済んだところで本題に入る。

「あ……………うん。人を探してるんだけど、オレンちゃんと同じような年でオレンジ色の髪の男の子を見なかった？」

「ふに？　なんで？」

「なんというか……………私、彼にひどいことを言っちゃったから、謝りたくて……………」

だつてさ、レンジ。よかつたね

と言つても今はわたしが前面に出ているから直接謝らせることは出来ない。

「見てないよ。わたしはずつとこの子とポケモンを捕まえていたからね」

「みゅー♪」

「ピカチュー!」

「ブーイ!」

「元気はいいことだ。」

餌付けしたピカチュウも「ぼくのことだね!」みたいな返事をしておられる
「そっか……もうちよつと探してみる。じゃあね」

「ここに居るのに……ちよつと罪悪感が。」

くりむちやんたちはトキワの森の奥に進んでいき、やがて見えなくなつた

第16話 3歳児はヤマブキジムへ行く

「ただーい」

「あ、レンジー！」

「待ってたわよー！」

トキワシティで捕まえられるポケモンはすべて捕まえた。

とはいえ、夕方になってしまい、ピジヨットに乗って帰ってもお夕飯までに間に合わない。

ゆえに、ユンゲラーに頼んでタمامシマンションまでテレポートをしてもらった。

なんだこれ、便利すぎる。

ゲームだと野生から逃げる程度しか使い道がなかったのに、現実になるとここまで利便性が高い技もなかなかないよ

これ、バトルでも相手の背後にテレポートして奇襲を仕掛けることが出来そうだ。

ゲームではできない戦法。『テレポート戦法』いいかもしれない

マンションに戻ると、そこにはフウとランが居た。

「お、どうしたの、二人とも」

「レンジの言った通り」

「ここでポケモンのお世話をお手伝いすることにしたの」

なるほど。

やはりいい子じゃないか。

自分にできることを把握して、将来の夢に突っ走れるならそのための努力は惜しまない。

将来の夢なんてない俺にはできない事だ。

「レンジはいっぱいポケモンを捕まえたんでしょ？」

ランが俺を抱っこしてソファに座る。

俺はそんなランの上に座る形でランの話聞く

授業で実際にリーフの石や炎の石を使ってポケモンの進化を生徒たちに体験させたこともあるとおり、授業中に、自分が捕まえたポケモンたちを使って説明をするときがある。

だから、俺がそれなりにポケモンを捕まえていることはわかっているんだ。

「うん。それがどうしたの？」

「いろんな種類のポケモンを、見せてほしいの」

かわいい生徒がそう言うなら仕方あるまい。

というか、いつまで俺を抱っこしているつもりなのかね、幼女よ。

「いいよ。一通りのお世話の仕方教えてあげる。なんだかんだ言っても僕も新米トレーナーだから、日々勉強しているんだよ。」

最近の俺のスケジュールは、8時〜15時は仕事。それから勉強、もしくはポケモン達のお世話と特訓に当てられる。

夜も割と机にかじりついて夜中の2時までポケモンのお世話の仕方やマッサージ、食べ物勉強に集中している。

ゲームではわからない部分も多いのだ。ならば、ゲーム知識に胡坐をかくわけにもいかないし、こちらも学ばなければならない

なにより俺はポケモンが大好きなのだから、当然だ。

レンジがただのおちゃらけた変人だと思ったら大間違い。思いのほか勤勉レンジだったんだぞ。

「それじゃ、出てきて、みんな！」

出したのはウインディとタツベイ、ピクシー、ピジョット、イーブイにユンゲラー。ついでにミニリユウとピカチュウ、キヤタピーとビードルもである。

ここがマンションの1階でよかった。

重量で潰れちゃうもんね

「こんなにいっぱい……！」

「僕たちにもできるかな」

「それをチャレンジすることから始めるんだよ。この子達は意思の無い人形なんかじゃない。性格もあるし、感情だってある。もしもトレーナーがお世話を怠れば、ポケモンは簡単にトレーナーに牙をむくよ。誰だって、自分を利用しようとするやつはいけ好かないからね。」

イーブイだって、俺のことが気に食わないと思つた時には足を踏んできたりするしね。

「ポケモンは、人間よりもはるかに力を持っている。でも、人間の指示に従って人間のために動いてくれるのはなぜか。ちゃんとポケモンに対して誠意をもって接しているからだと思うんだ。」

俺はランの膝から降りて、ウインディの元に歩み寄り、喉をくすぐる。すると、ウインディは気持ちよさそうに目を細める。

これが元の世界で相手が虎だったら、こんな真似はできない。

コレができるのは、それだけポケモン達の知能が優れている証拠だ。

ウインディの“体長”ではなく、“高さ”が2mと、かなり大きいワンちゃんだ。高さだけで1.7mのリザードンよりも大きい

つまりだ。俺はウインディにパクツとやられたら簡単に死んじゃうってことだ。

むしろ乗っからただけで死んじゃう可能性もある。

それでも、ウインディはきちんとそのことを理解して、自分の方が強いのだということも分かっているながら、トレーナーの指示に従う。

ウインディの視点では把握できないことを、全体を俯瞰しているトレーナーが補完しなければ、いい動きができないからだ。

つまり、持ちつ持たれつ。互いに信頼し合えなければ、ポケモンに食い殺されるのは、俺の方なのだ。

「ポケモンは人間の言葉をしっかりと理解している。だから返事もするし、言った通りに行動してくれる。そんな子たちはもちろん個性や性格が存在している。好きなモノや嫌いなものもある。把握するのは大変だろうけど、それがわかればちゃんと付き合い

方もあるんだ。」

「ふーん」

聞いているのかいないのか、フウはミニリュウを抱き上げてピンクの身体を撫でる。「たとえば、この『ピクシー』。この子はおそらくなんだけど、もともとはオツキミ山でロケット団に乱獲されてしまったピツピなんだ。」

「えっ!?!」

俺の突然のセリフに、ギョツとしてこちらを向いたフウ。ランも同様に目を見開いてこちらを見ていた

「この子は当初、僕に怯もえていたんだよ。」

「え、でも……………この子はレンジのことがすごく好きなのに……………。そんな風には見えない」

ランがピクシーの手を握って涙目で彼女を見つめる。

ピクシーはそんなランに気にするなど笑みを浮かべてランの頭を撫でる

「親元から引き離されて、一人になったこの子は、ロケットゲームコーナーの景品だったのを、僕が買ったんだ」

「買ったって……………」

「買ったんだよ。言葉通り。ポケモンを売買するのも、捕まえるのも、罪じゃないから

ね。それが罪になるなら、野生のポケモンをモンスターボールで捕まえているトレーナーはみんな犯罪者になってしまう。それに、ポケモンを売買することは、確かに需要があるから、ロケット団が居なくなつたとしても無くすることはないだろうね」

ロケット団じゃなくても、「ポケモンハンター」なる職業の者もいるからね。

それに、研究者だつたらポケモンを解剖したり実験したり、いろいろ人道的に不味いこともあるはずだ。オーキド博士やジョーイさんだつてそこは例外ないはず。

しかし、彼らの研究がなければ、この世界はもつと混沌としているのだから。

それもダメあれもダメと駄々をこねるわけにもいかないと言うのもまた事実。

「そんなピッピと仲良くなるためにも、僕がやったことつて言つたら抱きしめて僕も君と同じで親とも二度と会うことは出来ない。僕は君の敵ではないと言ふことだけだつた。それからゆつくりと時間をかけて仲良くなつたんだよ」

「そうだつたんだ……」

「ピクシーはそんな弱かつた自分が嫌いだね、トレーニングにも必死についてきたし技マシンでたくさん技を覚えたんだ。だから、たぶんこの子だけでエリカ様を………つまりレインボーバツジは手に入れられると思う。」

「ピクシーー！」

むんと胸を張つて見せるピクシー。

すごいよ、お前は。

技マシンを覚えるのって、ポケモンに無理やり技データをインストールしているようなもので、実はポケモンにとってはかなり苦痛を伴う行為らしい。

それでも、ピクシーはそれを受け入れて、自分が強くなる方法を選んだんだ。

俺はそれを尊重したい

それでも、本気のエリカ様には敵わないだろうけどね

本気のエリカ様は水タイプも炎タイプも悪タイプ使うんだ。さすがに厳しいよ

「ポケモンそれぞれに、過去があり、事情がある。それも踏まえて、きちんとポケモンと向き合って、どう育成するかを『考える』。それがトレーナーの仕事だと思うんだ。ただ育てればいいって言うだけなら、野生のままの方が幸せだ。」

「そっか。『トレーナーになりたい』って漠然と思うだけじゃダメなんだね」

「ありがとう、レンジ」

「いやいや、お役にたてたようだなによりだよ。」

この子達が何を持ってトレーナーになりたいのか。その答えを見つける手助けになつたのなら、充分だ。

「それと、飛び級のことなんだけど……………」

「レンジに聞いておきたくて……………」
「なに？」

この世界のホウエン地方には“塾帰り”なるトレーナーが存在していることから、飛び級の制度があることは明白。

しかし、ルビサファ時代よりも確実に3年以上はまえの時代であるこのカントー編。それにフウとランというロリシヨタジムリーダー。

そのことから考えると、今はまだ飛び級の制度が浸透していないのかもしれない。

おそらく、フウとランがジムリーダーとして主人公たちと戦うのは9歳〜11歳。現在のフウとランの年齢は7歳。

トレーナーとしての経験を積んで最低でも3年。ジムリーダーになりえる才能は、この子達にはあるはずだ。

主人公たちの年齢って、ORAS時代で考えると、女主人公の胸の大きさも加味して14歳くらいに見えるんだよね。

そうなると、フウとランが11歳でもややしつくりくるかも。

ならば……………カントー地方で、俺が塾帰りを量産してやればいいじゃないか！

タママシトレーナーズスクールで飛び級の生徒が増える

噂を聞きつけた父兄たちが子供を預ける ←

← 更に飛び級

←

塾帰りを量産

←

その子たちを教えた先生は誰だ！

←

俺だ

←

お給料がさらにアップ

「ぐふふ」

「レンジ？」

「聞いてる？」

「聞いてない」

「聞いて！」

変な笑い方をしていたらフウとランに心配されてしまった。
いけないいけない。

「飛び級について、お前たちの為に僕もいろいろ調べてみたんだけど、まず、年齢制限がない事。だから僕がトレーナーになることも可能だった。まあ、だからこそその飛び級なんだけども。」

コクリと頷くフウとラン

「次に、ジムリーダーの承認が必要って言ったよね。それは飛ばして、ポケモンリーグに申請を送れば承認したジムリーダーが責任を持つて監督を務めることによって、ジムで飛び級試験を受けることが出来る。つまりわざわざポケモンリーグにまで行かなくてもいいってことだね」

となると、ハウエン地方のジムリーダー“ツツジ”もトレーナーズスクールの講師をしながらジムリーダーをしていることからジムリーダーとしてよりも、飛び級試験の承認をたくさんすることが仕事になっているのかもしれないな。

トレーナーが増えればポケモンの管理もしやすくなる。

一石二鳥。

まあ、レンジとオレンちゃんの場合はエリカ様がカントーのポケモンリーグ本部に連れて行ってくれたんだけどさ。

「というわけで、思い至ったら即行動。今から一緒にヤマブキシティに行くよ」

「え?？」

「実はもうお前たちの飛び級の申請はポケモンリーグに受理されているんだ。僕が勝手にやっておいた。あとはジムリーダーの許可を取ってお前たちに飛び級の意味があれぱいと思っただけだけど、問題ないみたいだからね。夕方だけナツメさんはまだジムに居るはずだ。」

飛び級の申請に掛かる費用も、フウとランの親御さんからトレーナーズスクール経由でいただいている。

レンジは準備がいい男なのです。ふはははは！

むむ? そんなジト目で見ないでくれイーブイ。勝手な行動をしたってのはわかっているんだから。

「たのもー!」

「し、しつれいします」

というわけで、ヤマブキジム。

タクシーを捕まえてヤマブキシティまでやってきました。

タクシー代? そんなもんはトレーナズスクールの経費で落とせます。

あ、領収書ください。ってね。

「おーつす未来のチャンピオン! って、あれ? なんか小さいな。観光か?」

なんかジムの説明のあんちゃんが話しかけてきたので、ナツメさんに会いたい旨を伝える

「あ、ついでにジム戦もしてみたいな」

「ジム戦? はっはっは、バカ言っちゃいけねエよ。最低でも10歳を超えてから挑戦しな。」

「あ、僕はトレーナーだよ。はい、ID。確認してみて。」

俺から受け取ったトレーナーカードをなんかの機械に通して確認をするあんちゃん

「ふむふむ、ほほう、キミが噂の最年少トレーナーの“オレン”だね。判った。通つてい

「よ」

「あー」

「オレン？」

何度も出し入れしてるせいでカード間違えた。ごちゃごちゃになっちゃってる。

ちゃんと整頓しないとダメだな

幸いにして、元からかわいい系の顔立ちにオレンジ色の頭。レンジとオレンちゃんの

共通点は多いので、わりとあっさり同一人物と思われるってしまった。

きつと深く確認を取ったりもしないのだろうし、まあいいや。

「このジムはエスパータイプのジムだ。ナツメのポケモンは超能力を使ってお前のポケモンを惑わすぜ！ 床のパネルもワープパネルになっていて簡単にはナツメにたどり着けない仕掛けになっているんだ。頑張ってみてくれ」

「おっけー」

「レンジ、本当にジムに挑戦するの？」

「するよ。僕だってジム戦は初めてだ。でも、フウとランをここに連れてきたついでにやっておきたいって思ってたんだよね。ジム戦がついでってのもなんか失礼だけどき。せつかくトレーナーになったなら、ジム戦をクリアしてなんぼでしょ」

ワープパネルねえ。

元の世界では考えられないシステムだよね。
とりあえず、フウとランを連れて目の前のワープパネルに乗り込む。

「わ！ 本当にワープした！ すっげー！」

「あはは、おもしろーい！」

「レンジがはしゃいでるところ、初めて見たよ。でも面白いな」

ワープした部屋にはトレナーが居たけれど――

「あ、あそこに人が」

「フウ。あの人と目を合わせたらダメだよ。眼を合わせたらバトルの合図なんだから。」

「そ、そうなの？」

「バトルを避けるなら、眼を合わせたらだめ。近くに寄ってもダメ。あの人の話しかけてくる距離は、およそ5m。その範囲に近寄らなければ、あの人が僕に対してバトルを仕掛けてくることは無い。こうして、僕はポケモン達の体力を温存したままナツメさんと戦うことが出来るんだ」

「な、なるほど」

というわけで

「北西」

「え？ なに？」

「どうしたの？」

「いいから、ついてきて」

フウとランを連れて、北西のワープパネルを踏む

「南西」

「どこ行くの？」

「同じような部屋ばかりだけど、迷っちゃうよ！」

踏む。

「南西」

「待つてよレンジ！」

「置いてかないで！」

で、

「ほい、到着。」

「わ！ あの人がナツメさん!? 美人だねー！」

「ほ、本当に着いちゃった………」

人とバトルすることなく、ナツメの部屋にたどり着きました。

「おどろいたわ。まさか一度も迷うことなくこの部屋にたどり着くなんて……………」

「まあね。僕は超能力者だからね。」

「ウソね」

「ウソだ」

「ウソよ」

「うん。ウソだよ。えーっと、僕はナツメさんにジム戦を挑むけれど、それとは関係なしに、この僕の生徒たちの飛び級試験の承認をお願いしたくてここに来たんだ」

こんなふざけた挑戦者に、クスクスと笑うナツメさん。

やばい、かわいい。結婚したい

「いいえ、結婚は無理ね。子供には興味ないし」

「心を読んであつさり振らないでくださいよ。」

「ブイ……………」

「そしてイーブイも！ 僕の足を踏まないで！」

いつの間にか俺の足を踏んでるんだから！ もうっ！

「あなたはそのポケモンにそうとう好かれてるみたいね。」

「まあね。僕はブイズが大好きだから、この子のことが大好きだよ。相思相愛だよ、ね

♪」

「……………(ぷいっ)」

あらかわいい。

俺の思いは一方通行らしい。

「ジム戦の件は置いておくとして……………あなたたち」

「はい！」

「そちらのレンジ君から手紙で話は聞いているわ。飛び級したいんですってね。」

一応話は通しているのです。アポなしで来たけど、話は通しているのです。

自分勝手？ 知ってる。

「いいわよ。私が貴方たちをテストしてあげるわ。それで、合格点に達しているならば部に飛び級承認の書類を送ってあげるわ。」

「本当!？」

「やったあ！」

「今はもう夕方だから筆記試験を行うことは出来ないけれど、ポケモン勝負の舞台を整えるくらいはできるわ。私のウンゲラーとバリヤードを貸してあげる。二人でポケモンバトルをしてみなさい。それを見て、実技の判断を下すわ。レンジ君、あなたとの勝負はそれからよ」

「あい。」

そもそもついでだったからね。

さすがにナツメさんに勝てるかどうかはわからないけれど、精一杯やらせていただきます。

第17話 3歳児はあざとく勝利を手にする

というわけで、フウとランはナツメさんから借りたユンゲラーとバリヤードで一度バトルをして、成績優秀なこの子達はすぐにユンゲラーとバリヤードの本領を発揮させることができ、なかなかいい勝負をした後、ナツメさんからお墨付きをもらって、後は筆記試験の成績がよかったら飛び級の許可をしてもいいと言ってもらえた。

「よかったね、フウ、ラン」

「うん！ レンジのおかげだよ！」

「ありがとう、レンジ！」

ランが俺の手を取ってぎゅるんぎゅるんとジャイアントスイングをしている。

うれしいのはわかったから！

いくら俺が3歳児体型だからって、そんな危ないことをしないでくれないかな。

こっちだって握力があるわけじゃないんだから！

うっぶ

「あ」

びゅーん！

☆

「さて、今度はレンジ君のジム戦だったかしら」

「あ、はい……………おつぷ」

「大丈夫、レンジ？」

「目え回ったお……………」

「ピクシー……………」

眼を回している俺を心配するあまり、ボールから出てきたピクシーが俺の身体を支えてくれた

ランのジャイアントスイングで壁に激突する前に、ナツメさんのユンゲラーが念力で俺の身体を浮かしてくれてよかった。

危うくカエルみたいに潰れるところだった。

パンパンと顔を叩いてしっかりと正面を見る。

なんかまだ身体が回ってるみたいだけど、なんとかかなりそうだ。

「お願いします。」

「レンジ、頑張つてね！」

「応援してるね！」

「レンジ君の所有バッジは0個。なので、私の最初のポケモンはこの子よ！」

ナツメが投げたボールから飛び出したポケモンは

「シイ……………」

「ケーシイか。こりやまたよくわからん相手が来たなあ……………」

ケーシイの覚えている技はおそらく「めざめるパワー」

個体値によって技のタイプが変動するため、どのタイプなのか、喰らってみるまでわからない。

ケーシイのレベルはおそらく12前後。

「ミニリユウ、行ける？」

「みゅー♪」

正直、今回は俺のミスもあるけれど、無謀なことをしてしまったようだ。

「オレンちゃん」のカードを間違つて提示してしまったがために、オレンちゃんのポ

ケモンで立ち向かわなければならぬのだから。

いや、レンジのポケモンを使ってもいいんだよ？

俺の手持ちは実質12匹までなんだし。

それでもさ。一応筋は通そうと思うんだよね。

ポケモントレーナーなんだから。

しかしながら、レベル差がなんぼのもんじやい。勝ちに行くよ。俺は。

日が暮れるまでトキワの森で修業を積んだおかげで、ミニリュウのレベルは9になった。

ピカチュウも一緒に頑張ったおかげで、レベルは7だ。

キヤタピーとビードルまだ育成していない状態である。

そんな状態で、ナツメさんに勝てるだろうか。

「まあ、やって見なくちゃわからないよね」

「ええ。ポケモン勝負は何が起こるのかわからないもの。ルールは“ありあり”で、私の使用ポケモンは2体よ。貴方は好きに交代したらいいし、キズぐすりなどのアイテムの使用も許すわ。」

「おっけー。負ける気はさらさらないんだよね。ちよつと準備するから、待ってて。ミニリユウ、おいで。」

「みゅー！」

未だに攻撃技を覚えていないミニリユウでも、アイテムがありならば、方法はあるのだよ

「ではこれより、チャレンジャー。オレン。対ジムリーダー。ナツメ。のバトルを始める！」

審判役のジムトレーナーが勝負開始のゴングを鳴らす

「先手はもらうわ。めざめるパワー。よ」

「シィ……………」

ケーシィから放たれた「めざパ」がミニリユウに殺到し、激突

「みゅー!!……………みゅー？」

が、思ったよりもダメージは少なかったようだ

「なるほど、その「めざめるパワー」は虫タイプ対策の炎わざだったんだね」

「ご名答。でも残念ながらドラゴンタイプには今一つの効果しかないの」

ならば、チャンス。ナツメさんがわざわざくれたチャンスを無駄にしたらトレーナーとしても終わっているだろう。

「ミニリユウ、でんじは！」

「りゅうー、みゅー！」

ケーシイに電磁波がヒット。

同時にケーシイの身体とミニリユウの身体が淡く輝く

その瞬間、ケーシイだけではなく、ミニリユウの身体にも小さな電流がパチパチと弾けているのが見える

「シイ……………！」

「みゆぎ……………ッ！」

「な、なに？」

「何が起こってるの？」

何が起きているのかわからない様子のフウとラン

「落ち着いて。ケーシイの特性なんだった？」

だから冷静に、フウとランに説明する。

「あ、シンクロ！！」

「正解」

こんな時でも大事な生徒に授業をしたくなるのは、職業病だろうか

シンクローは自分が状態異常にかかった時、その状態異常を相手にも掛けさせるという特性だ

なぜか自分の身体がしびれてしまうミニリユウ。初めての現象に戸惑っているようだ

「ミニリユウ、首元にクラブの実があるでしょ。おたべ」

だが、俺はそれを予測済みであるため、ミニリユウの持ち物は「クラブの実」を選択している。

ミニリユウの夢特性は「ふしぎなうろこ」

状態異常の時に防御力が1.5倍になる特性だが、エスパークタイプが相手では特性の相性が悪い。

奴らはみんな特攻が高いからね。

俺が冷静に指示を出したことによって、ミニリユウは自分の首元に掛けてある袋の中からクラブの実をパクリ。

麻痺が直り、再び全力でバトルに臨むことが出来るというわけだ。

レンジくんは準備がいいのです。

「みゅー！」

「なるほど、このジムの特徴をよくわかっているようですね」

「うん。まあこっちは何の攻撃も当てられないけど、ここからはずっと僕のターンだよ。」

「元気になったミニリユウ。そして相手はケーシイ。しかも技はめざパのみ

「まきつくー！」

「みゅーー！」

ケーシイの身体は小さい。

ミニリユウでも巻きつくことは可能だ。

「そのまま絞めちゃいなー！」

「みゅー!!」

「シイ……………ツ！」

「ケーシイ、めざめるパワーで振りほどいて！」

「シ……………イ」

ナツメがケーシイの身を案じて指示をだす

しかし、ケーシイは身体がしびれて動けない。

「畳み掛けろ！ まきつく継続！ 締め上げりゃあ!!」

「みゆうー!!」

「シィ……………」

苦しそうなケーシィ。だが、まだケーシィはしびれて動けない。

「それなら……………テレポート!」

テレポ!?! なるほど、たしかにそれなら巻きつくから逃げる事ができるだろう

仕切り直しか……………!

「ケーシィ!?!」

かと思いきや

身体が動かないのに、自分を締め付けられ続け、ケーシィは、眼を回して気絶した。

レベル差があるので電磁波がなければ負けていたのはこちらである。

運も味方をしたようだ。

電磁波さまさま! ありがとう電磁波!

しかし、続いてもう一匹を倒せる自信もないや。

まぐれが二回続くとは思えない。

たはは、どうしよう

“プラスパワー”使っちゃうか?

そりゃあ最終手段だあな

「ポケモンの特性を理解し、戦術を立てたのは見事でした。ケーシィ。お疲れ様。」

ケーシィをボールに戻すと、ナツメさんは次のポケモンを繰り出してくる

「バリバリー！」

「今度はバリヤードか………」

きびしい………

きびしいよう。

おそらくレベル差は倍くらい。

Q. レベル50のポケモンがレベル100のポケモンと戦ったらどうなりますか？

A. アボン

いくら互いにレベルが低いと言っても、それと同じだよ。ほとんど勝ち目がない！

しかも、ミニリュウは攻撃技を全く覚えていないんだ。

ケーシィを倒せたのも奇跡と言っていていくらいなのだから。

「どうします？ ポケモンを変えますか？」

ナツメさんがそう言って来る

「そうさせてもらいます。ミニリュウ。こっちにおいで」

「みゅー♪」

「おう、偉いぞ、よく頑張った。あとでオレンちゃんにめいっぱい褒めてもらいな」

「みゅー♪ みゅりー♪」

かあいいい……………。

ミニリユウが足元から這い上がって、俺の首に巻きついて肩の上で落ち着く。

ぶにぶにのピンクのマフラーみたいでかわいいだろ。

「あ……………」

「お？」

ナツメさんも、あまりの可愛さにすこし頬を染めていた。

女の子ですねい

あ、眼を逸らされた。それも恥ずかしそうに。

心を読んだな？ 隙を見せたらいかんのですよ。

かわいいは正義。正義を全うしてこそそのかわいいモノ好きでしょうに。

自分に蓋したらあきまへんよ。

「そんじや、つぎに行きますか。ピカチュウ！ GO！」

「ピカッチュ！ チュピ？」

元氣よく飛びだして来たピカチュウ。

しかし、なぜ出されたのかわからないらしく、首を捻っているようだ。

「ピカピカ、ピツピカチュ。チュピカ？」

「ふに？ オレンちゃんかえ？」

というか、ピカチュウにお前は誰だ、と言った視線を向けられた

いやあ、確かにキミを捕まえたのはレンジじやなくてオレンちゃんだけどさあ。

さつきフウとランにキミを紹介した時もレンジの姿で出したというのに。

「うーん、そんなに雰囲気が違うかなあ。変装道具一式は持って来てるけど………えい」

バッグから取り出した白いカチューシャ（ニヤースの耳とこぼん付き）を頭に付ける

「みゅー♪」

「ピックシーー！」

「ブイ………」

「ピカツチュ！ ピカアピカ！」

ミニリユウはうれしそうに首元でくねくねと踊り

ピクシーもわたしが女装していることを面白そうに喜び

イーブイは呆れてため息を吐きながらわたしをジト目で見る

ピカチュウは実はオレンちゃんが男だったと知り、仰天してひっくり返った

ピカチュウ。キミは芸人向きだ。吉本系だね。

「というか、なんなのよこのニヤースのカチューシャ。エリカお姉さま、またわたしのバッグに変なものを入れて……………まあいいです。」

ちよつと呆れながらバトルに集中しようと正面を見ると

「……………」

「……………!!」

普段はクールなナツメさんがすごい目でこつちを見ていた。手をわきわきさせて、今にも撫でたそうにしている。

ああ、ナツメさんはかわいいモノが好きなんだなあ。

ほっこりだよ。

バリヤードも、眼が飛びだしそうなほど眼を見開いている。

バトルどころではなさそうだ。

「……………」

今度は無言のままフウとランの方に振り返ってみる

「……………」

二人とも驚いた表情のまま固まっていた

口をパクパクして何も言葉が出ていない状態じゃないのさ

「……………」

わたしは顎に手を当ててしばらく考え、ナツメさんとフウとランに見える位置に、ゆっくりと移動してみた

「……………」

無言のまま三人ともわたしの行動を目で追うと

わたしは精一杯のかわいい笑顔を作り、あざとく首を傾げながら目を細め、頭の右上と左肩に猫の手を持って来て、爆弾を落とす。

「——にゃあ♪」

「うっ！」

その瞬間。三人の金縛りが解けたかのように、時間が動き出した。

フウは鼻血を吹きだし

ランはくらりとよろめいて

ナツメさんは、鼻を押さえて膝をついた。

……。なんだこれ。

ちなみにバリヤードとはいえば――

メロメロ状態に陥って、鼻血の海に沈んでいた。

「あつるえ？ 勝者、ニヤースwithオレン？」

そんなわたしの声だけが、バトルフィールドに響き渡るのだった。

☆

「まさか、そんな方法でバリヤードがやられるとは思わなかったわ。」

「なんですか！ 無効試合でしょあれ！ というか、わたしが納得できませんよ！」

「いえ、アレは私とバリヤードの鍛錬不足よ。」

「負けを認めないでナツメさん！ 明らかにおかしいから！ ポケモン勝負ですらないから！」

「こんなバツジの取得の仕方は色仕掛けでリーグに挑戦しようとしたくりむちゃんに顔向けできないよお！」

猫仕掛けでバッジ貫つてもうれしくないんだよ！

「フウ、しつかりして、フウ！」

「あ、うあ……………」

ランはフウを膝枕して、必死に鼻血をチツシユで拭っていた

ナツメさんはナツメさんでわたしを膝に座らせてカチューシャを付けたオレンジ色の髪をなでなで。

審判の人も「こんなナツメさん初めて見た」と表情にしがたい不思議な顔をしていた
「オレンちゃん」には、この「ゴールドバッジ」を差し上げるわ」

「受け取れないよお！　というか、「レンジ」でいいから！」

「受け取りなさい。そして、もう少し抱っこさせてくれたらうれしいわ、「オレンちゃん」
”

「しんぱあん！　助けて！　助けてよお！」

「……………勝者、チャレンジャー「オレン」っ!!」

「ブルータス!!」

こうして、オレンちゃんはめでたく一つ目のバッジを手に入れることができました。
まる。

「もうすこし、もうすこしだけ！」

「はーなーしーてー！」

めでたい………のか？

第18話 3歳児は嫌われる

なにはともあれゴールドバツジゲットである。

おかしいな。ケーシイと戦った記憶しかないや。

バリヤードはどうして血まみれで倒れていたのだろうか。

あはは。謎だね。

「またいつでも来なさい。オレンちゃん」

「今度はわたしが『レンジ』の時に、本気で戦いましょう。」

「オレンちゃんがいいわ」

「わたしは男です」

「それでもよ」

もうやだ。エリカお姉さままで慣れたつもりだったけど、なんでこう、わたしは美幼女なのよ

イケメンがいいの！ イケメンが！

顔立ちが整っていても女顔じゃモテないわ！

最近はどうもオレンちゃんが女の子に近づいている気がしてならない。レンジはちやんと男としてのプライドがあるけれど、オレンちゃんの時は「かわいい」と言われてうれしくなっちゃうのがすごく悔しい。

それに、だんだんと思惑が分離していくような気がするし、本格的に二重人格にならないか、不安で仕方がないよ。

ねえレンジ。わたしたちの思考が分離してしまったらどうするよ

～しらね

そうだった。レンジはそういう適当な人間だった。

聞いたわたしが馬鹿だったよこんちくしょう。

ふんだ、もう知らんわい。こんなカチューシャ。ぼーいとはぎ取って、隣にいたフウの頭に着けてあげた。

オレンちゃんと違って似合っていないわ。

フウには美シヨタ度が足りないな。

「あ……………」

「何残念そうにしてるんですか、ナツメさん。」

「いえ、なんでもないわ。それじゃ、また今度、フウとランの二人は筆記試験を受けに来なさい。その時には「オレンちゃん」を連れてくること。いいわね」

「は、はい！」

ガシツとフウとランの肩を掴んで催促するナツメさん。

しょうがない。そこまで言うなら、フウとランを俺が連れていくのは当然として、ナツメさんが喜ぶのなら、また「オレンちゃん」の姿で行ってやろうではないか

オレンちゃんも女の子扱いされるのは、口では拒否する癖にまんざらではなさそうだもんな。

俺も膝の上に乗せられたら背中に当たるおっぱいの感触とか堪能するし。

「それじゃ、また来るよ。」

「ありがとうございますー！」

ランとネコミミ付けたフウがナツメさんに頭を下げて、待たせているタクシーに乗り込み、タمامシシテイに帰ることになりました。

☆

あ、ニヤースのカチューシャはちゃんとタクシーの中で返してもらえました。運転手さん、領収書ください。

「びっくりしたよ」

「まさかレンジが」

「あんなに可愛くなるなんて」

「雰囲気も全然違うんだもん」

タمامシシテイに帰って、タمامシマンションに到着すると、さすがにもう夜だ。もうすこし時間を考えて行動すればよかった。

思い至ったらずぐに行動するのも、いいことばかりじゃないな
「僕も自分の美少女っぷりにびっくりだ。でもちゃんと男だよ」

オレンちゃんの心は女のかもね

乙女心のオレンちゃんだ。

「男装の僕が、レンジで」

普通の水色のリボン付きカチューシャを頭に装着。

「女装のわたしは、オレンちゃんだよ。」

☆

フウとランにウインクをして見せ、
そして、カチューシャを取り外す。

「ちなみに僕をこんなふうにした元凶はエリカ様だよ。」

ポカンと口を開いて俺を見つめるフウとラン。

当たり前だ。

そんな奇天烈な人間が居たら誰だつてそんな反応になる

「ちなみに、これらが僕とオレンちゃんのトレーナーカード。何の因果か、IDも二つ分
持っているんだよね。この事は内緒ね？ 誰かに言いふらしたりしたら——エリカ
様が泣いちゃうからやめてね。僕が女装してるのはトツプシークレットだから、みんな
には内緒だよっ」

ちよつと冗談めかして口元に人差し指を持つてくる

「それじゃ、また明日、トレーナーズスクールで会おう。予習を忘れるなよ。明日は授業
が終わったらすぐにナツメさんのところに行くんだから。」

「わ、わかった」

「また明日……………」

きつとこれから今日のことや俺のことを話しながら帰路に着くのだろう。

気を取られて予習復習を忘れるなよ。

フウとランに手を振って分かれる。

さて、俺も明日の授業の構成と授業計画を考えないとな。

その前におなかですいた。

「おばーちゃん、ただいまー。お腹すいたー！」

「おや、おかえりレンジ。もうすぐ晩ごはんができるから、待つててね」

「はい。っていうか、手伝うよ。何すればいい？」

そういや、トキワの森に入って行ったくりむちゃんとレッドは大丈夫なのだろうか。

主人公だから大丈夫だとは思うんだけど……ちよつと心配だなあ

☆ くりむside ☆

「ほら、だから俺は暗くなる前にポケモンセンターに戻ろうって言ったんだよ」

夜よ！

レンジくんを探して森の中を歩いていたら、いつの間にか、もう夜になっちゃった

……

「うう……ごめんね、お兄ちゃん」

あたりは真つ暗。お兄ちゃんの「ヒトカゲ」の尻尾の炎であたりを明るく照らしながら道を歩く。

歩き疲れて足が棒になっちゃった。

それに、実はもう帰り道がわからないほど森の奥に来てしまっている

あたりは不気味な雰囲気だし、きずぐすりで私のフツシーの治療をして、今日のところはここら辺で野宿かしら。

「レンジ君は大丈夫かな……」

「心配いらないよ。きつと彼は今ごろ自分の家に戻っているはずだ」

「それならいいんだけど……」

「それに、もしレンジがまだトキワの森の中にいたとしても、レンジのポケモン達が彼を守ってくれるさ。それよりも、俺達は野宿の準備をしないとだろ。お腹もすいたし、ポケモンセンターへの道も、もう遠すぎて戻れそうにないからね」

「う……ごめんなさい」

「反省しているなら早くテントを張っちゃいな」

「はあい」

お兄ちゃんにそう言われて、簡易テントを設置していく。

ギヤアギヤアとオニスズメの鳴き声があたりに不気味に響いて余計に怖さを増している

私がテントの準備をしている間、お兄ちゃんがヒトカゲの尻尾の炎を使ってお湯を沸かしていた。

インスタントの食品を食べるためだ。

私の分もある。何から何までありがとう、お兄ちゃん

☆

「眠れないわ。」

時刻は8時。辺りはもう真っ暗だ。

家では明かりがあるからもつと遅くまで起きていられるのだけれど、野宿となれば夜中に明かりは無いし、漫画もない。することもないので寝るしかない。

しかし、こんな時間に寝る習慣はないので、そう簡単には眠れないのよ。

だというのに、隣のテントで寝ているお兄ちゃんときたら、もう寝息を立てているん

だから。もう。

それに……………。夜の森は不気味で、木々のさざめきも鳥の声も風の音も。全てが化物の声に聞こえてしまい、初めての野宿に少しワクワクしていたのが恥ずかしいくらい怖いよ。

「うう……………なんでこんなことに……………」

レンジ君を傷つけてしまい、それを謝りたかったから彼を追ってトキワの森に入ったというのに、彼に会えずじまい。はては迷って森の中で野宿だ。

はあ、なにもかも、うまくいかないなあ

こんなことならお兄ちゃんの言うとおり、すぐにポケモンセンターに戻っておけばよかった……………

「そりゃあ、自分が頑固だからでしょ」

「え?」

声が聞こえてきたため、テントの外に顔を出してみる

しかし、外には誰もいない

「上だよ。こっち」

「……………?」

その声に釣られて上を見上げると

「やあ。」

「あ、レンジくん！ 探したよ！ でもなんでここに？」

そこに居たのは、私がずっと謝るために探していた、レンジ君だった。

彼は膝の上にイーブイを乗せて、傍らに見たことのないポケモンを携えて木の上に座っていた

3歳児の彼がこんな夜中に一人で森の中の、しかも木の上で座っていたのだ。考えてみれば不気味な光景だった。

「そりゃあ、僕だってあんな別れ方をした後、トキワシティをしばらく拠点にするって言った人が僕の後を追ってトキワの森に入ったってのにその森から帰って来なかったら心配もするよ。ユンゲラー。念力で地面まで降ろしてもらえる？」

「シィ……………」

「ありがとう」

レンジ君は傍らにいたポケモンにそう命じると、不思議なことに、イーブイを抱き上げたレンジ君はふわりと体を浮かせ、ゆっくりと地面に足を着けた

「なんでトキワシティを拠点にしているはずの人がまだトキワの森にいて、テントを張ってるの？」

「そ、それは……………レンジ君を探していたから……………」

「あんな別れ方をして、しかも理由が僕を探していたっていうから、僕も強くいえないけどさ。さすがに夕方には戻れるようにしようよ。その頃には絶対に森から出てるもん。夜の森はあぶないんだよ？」

「うう……………でも、あなたも居るじゃない」

「僕は無敵だからいいの。晩御飯を食べ終わってから直ぐに確認に来てよかった……………大変な目に遭ってたらどうしようかと思ってたからね。」

なんか心配そうにしながらも釈然としない答えを返される。

そうだ。レンジ君はこういう人の神経を逆なでする嫌な子だった。

なんだかむつとなつて言い返したくなってしまう

「そういうあなたは、もう寝る時間なんじゃないの？ キミみたいな子共が夜に抜け出していたらお母さんが心配するよ」

「はん、まだ8時だよ。そんな時間に寝るなんてもつたないことはできないよ。あと6時間はポケモンの勉強時間に当てられるね」

言い返したら鼻で笑われた。

なんなのこの子！ むかつくむかつくむかつくー！！

「それに、僕はお母さんなんていないから、心配してくれる人はいないんだよ。」

しかし、続くその言葉に、私は口から出かけた文句を飲み込む

親が、いない？

心配してくれる人も、いない？

それは、とてもさみしい事だと思った

「まあ、おばあちゃんなら居るんだけどね。っていうかそれはどうでもいいんだよ。とにかく大丈夫そうで安心したよ。僕はもうおうちに帰ろうかな。」

「え、それを確認するためにわざわざトキワの森に戻ってきたの？」

「そだよ。あ、そうだ。何時間も森の中に居たからわかってるだろうと思うけど、トキワの森はビードルがとにかく多い。毒針に気を付けてね。僕が持つてるモモンの実と毒消しと、あとキズぐすりをおすそ分けしてあげる。」

そう言つて、彼は自分のバッグの中から毒消しとキズぐすりとモモンの実を取り出して、私に手渡してくれた

毒消しつて、たしか100円よね……………それをこんなに……………

それにキズぐすりも……………

「あ、ありがとう」

「どういたしました。今日ここで野宿するんだったら、明日は朝早くからトキワの森で修業を積めるんだよね。だったらポケモンも全力で戦えた方がいいからさ。」

どこまでも、この子はレンジ君ポケモンの為に。

それが彼の行動の原動力なのだろうか

「その……………ごめんなさい」

私のためを思っって言ってくれたことを不快に思っつて、勝手に拒絶していた私が、すぐ小さく思えてしまい、謝罪は簡単に口から零れ落ちた

口は悪いけれど、彼はポケモンのことを思っつて私にこれだけのことをしてくれたのだ。

「ん、なんのこと?」

そういつてすつとほけるあたりに、彼の悪意を感じる

「レンジ君を拒絶してしまったこと。あれは、私が悪かったわ。本当にごめんなさい」

「うむ。許してしんぜよう。僕は心が広いからね!」

「……………どこがよ」

「あれ、耳が聞こえないのかな、心がだよ!」

許して貰えたけれど、彼の口の悪さも私に謝るべきだとおもうな。

やっぱり、私は彼のことを好きになれそうにない!

「にひひ、じゃあね、僕はもう帰るよ」

「今度会ったら、バトルでコテンパンにしてやるんだから！」

「できるんならね。その時は相手になってあげるよ。ユンゲラー、タマムシまでおねがい。」

そう言い残し、彼は私の目の前から消えた

あれも、ポケモンの力……なのかしら。

傲岸不遜なあの態度。自信に溢れた生意気そうな顔。

どれをとつても嫌いなあの少年の事が、寝る前まで頭から離れなかった。

第19話 3歳児は博物館へ赴く

“ポケモンは通信交換によって進化する者もいる”

という授業をレンジが生徒たちに教えていたことがある。

たとえばゴリキー。奴はカイリキーに進化をする。

たとえばゴースト。奴はゲンガーに進化をする。

しかし、今回俺が言いたいのは、こいつだ。

「ねえ、キミはなんでフリーデンに進化したの？」

「フリー……」

「いや、『フリー……』じゃわからないのよ」

「デイ……」

「なるほど、わかんない。」

そう、通信交換をしたわけでもないのに、ユングラーがフリーデンに進化しちやっ

るんだわ。

まだ覚えている技は「ねんりき」と「テレポート」だけだ。レベルも17である。

今はオレンちゃんのポケモンや新しく手に入れたポケモンの育成に力を入れていたため、ユンゲラーの育成がおろそかになっていたのだ。

ミニリウウがナツメさんとの戦いの後、レベルが上がってようやく攻撃技である「たつまき」を覚えたのはよかったものの、オレンちゃんのポケモンはまだまだ弱い。

これから勝てるかわからない。

そのため、そろそろレベルも近くなってきたユンゲラーをレンジの手持ちからオレンちゃんの手持ちに移そうと思って、レンジのボールホルダーからオレンちゃんのボールホルダーにモンスターボールを移したら、進化しちやっただ。

きつとフリーデイン自身も何が起こったのかわかっていないと思う。

「まあいいや。キミが居ると移動が楽だから、これからも頼りにしているわ」

「ディーン♪」

「さて、ねえピジヨット。落ち込んでないで空の旅に連れてってよ。わたしはピジヨットの背中の上も大好きなんだからさ」

「ピジョー！ピジョットー！」

かわいいピジョットも、移動手段を新参者のフリーデインに取られてしまい、少々落ち込み気味だったが、それに気づかないわたしではないのです。

みんなの心のケアはわたしにおまかせあれ。

フウとランは無事にトレーナーの資格を取得することが出来た。

トレーナーズスクールの方も順調である。

フウとランが飛び級で資格を手に入れたことにより、他の子供たちも勉強する意欲が上がっているのだ

お試し期間ということで、フウとランには、レンジのポケモンを貸し与えた。

授業でも大活躍の「キュウコン」と「ペルシアン」である。

フウがペルシアンを預かり、ランがキュウコンを預かって、お世話を任せている。

今俺が持っているポケモンの中で、一番お世話が簡単な子達を渡したのだ。

だってほら。ベトベターとか渡してもお世話の仕方なんかわかんないじゃん。

わたしだってわかんないもん。ちなみに、ベトベターはお世話をしている内に次第に周りを汚さなくなってきた、むしろ勝手にゴミを綺麗にまとめてくれるので少し重宝し

ています。

歩くたびにそこから草は生えなくなるという図鑑の説明だったのだが、トレーナーが誠意をもって接すれば、きちんとポケモンは答えてくれるのだ。

今はむしろベトベターが通った跡はワックスがけしたみたいに綺麗になっている。しかし、どうしてもベトベターのお世話の仕方はわからない。

ポケモンフーズは食わないけど、水だけで生きていけるらしい。

高い天然水を掛けたら嫌がるし、むしろ泥水をかぶるとべちやべちやの顔を“ニチャア”と笑顔に変えるのだ。

だから主食は泥水で……

あとはきつとその辺のゴミを食ってるんだと思う。

ってベトベターの話はいんだよ。

フウとランには、どちらもレベルを32にしてから渡した。

過保護……なのかもしれないな。

そのくらいにしておけばその辺のトレーナーには負けないし、キュウコンだけでエリカ様を突破できるもん

キュウコンってすごいよね。なんと言ってもあのふつくしい九尾!

レンジが触らせて! って言ってもツンとそっぽを向いて触らせてくれない。

痺れを切らしたレンジがキュウコンの尻尾に頭を突っ込んでモフモフを堪能したら『きゆうん!』

というかわいらしい悲鳴を上げてレンジから距離を取り、火炎放射を容赦なくぶつ放してきやがりましたよ。

必死に謝つたら許してくれました。

まあレンジのアホは放っておきましょう。あいつは不死身ですからね。

キュウコンの特性はもらいびで

技構成は“ほのおのうず” “かえんほうしゃ” “じんつうりき” “あやしいひかり”

“
相手が混乱しても、炎の渦で逃がさない。じわじわ舐り殺す性格の悪いキュウコンに仕上がってしまった。

ペルシアンの方も、特性はテクニシャンで、

覚えている技は“ねこだまし” “パワージェム” “スピードスター” “10まんポルト”

といった、こちらを割と何でもアリのペルシアンになっている。

“スピードスター”を“つばめがえし”にしてもいいかもしれないな。格闘対策に
さ。

ねむいびぎ型ペルシアンと迷った末、普通にフルアタックになりました。

そんな彼らを、フウとランにあずけ、お世話を任せることにしたのだ。

キュウコンは難しい性格だけれど、ちゃんと心の優しいお姉さんだよ。

虫系や粘体系のような意味不明な生物ではなく、元が動物の子達ならば、他のポケモンに比べてお世話が比較的に楽なのだ。

「ピジョット。ニビシティまで、よろしくね」

「ピジョットー！」

フウとランはトレーナーの資格を手に入れても、トレーナーズスクールにちゃんと出席している。

キュウコンとペルシアンを連れてやってくるため、彼らはタマムシトレーナーズスクールのちよつとしたヒーローになっている。

トレーナーの資格も手に入れたしね。

そのおかげで、生徒たちにもいい刺激になって、前よりもレンジの授業をよく聞いてくれる。

これなら、タマムシトレーナーズスクールが飛び級を量産する日も近いかもね

ジムだつてすぐ近くにあるしよ。

「ありがとう、ピジヨット」

「ピジヨ！」

「またよろしくね」

「ピジヨ！ ピジヨットー！」

さて、そうこうしている内にニビシテイに到着だ。

なぜニビシテイに来たのかつて？

わかるでしょ。ジム戦だよ。

オレンちゃんのジム戦だ。ナツメさんからバツジを貰つてしまったオレンちゃん。

ここまで来たらオレンちゃんで行けるとこまで行つちやうよ。

正直なところ、ハナダの洞窟でレベル上げをしたい。

トレーナーと戦つてレベル上げをしたい。

でも、こつちは3歳児。ハナダの洞窟に入れさせてもらえないし、レンジやオレンちゃんをトレーナーだと気付いてくれる人が居ないのだ。

だから、ジム戦をしに来たってわけ。

「ま、その前に……ニビシティに来たら博物館に寄らないとだね」

「ブイー！」

「ピカツチュウ！」

「みゅー♪」

というわけで、博物館にやってきました！

連れているのはイーブイとピカチュウ。それに、バッグの中からチラツと顔をのぞかせるミニリユウ。

「うっひゃー！ プテラだ！ プテラの化石があるよイーブイ！ すっごーい！」

「ブイー………」

「ピツカア………」

「みゅー！」

大迫力の化石達にイーブイも驚きを隠せないらしい。

これが大昔のポケモンの化石なんだよね

「あ、ほらあつちにはカブトプスの化石があるよ！」

「ブーイ！」

「ピカー！」

「みゅー♪」

うひょー！ たのしい！

たのしいねレンジ！

∨ そうだな。

だよね！ やっぱりそうだよね！

「あれ？ オレンちゃん？」

「ふに？」

突然かけられた声の間抜けな声を出して振り返ると

「あ、くりむちちゃん！」

そこに居たのはくりむちちゃんだった。

くりむちちゃんはポーチを腰につけてビバ観光！ と言わんばかりの恰好でわたしに

手を振っていた

「くりむちちゃんも博物館に来てたんだ！」

「オレンちゃんもね！」

両手を上げてくりむちゃんの方に行ってみれば、わたしの両手に指をからませてハイタッチのようななにかをする

「くりむちゃん、調子はどう?」

「うん。ちよつとトキワの森でトラブルがあつたけど、おおむね順調だよ! 本当ならもうちよつとトキワシティに居るつもりだったんだけど、思いのほか早くニビシティに着いたから、今はここを拠点にしているの」

「そうなんだ」

「えへへ、見て、ニビジムのバッジを手に入れちゃった!」

そして、そのからませた指を離して、バッジケースを開いて見せる

そこにあつたのは紛れもなくグレーバッジだ。

「すごい! すごいよくりむちゃん!」

「えへへ、ありがとう。コレがきつとオレンちゃんじゃなくてももう一人の方の3歳児だつたら、そのくらいで舞い上がるなつて言うんだらうな」

そうなの、レンジ?

「そんなわけあるか。俺だつて普通にうれしいぞ。よくやっているじゃないか

というか、なんで普通に会話してるの、わたしたち。

「いつの間にか本当に思考が分離しているらしいな。思考回路は同じなのに、不思議

なことだ。

ほんとうにふしぎだね。それもこれも、全部エリカお姉さまのせいなんだけどね。せつかく思考が二つに分かれても、どっちも心が男なのは何とも皮肉なことわ。

～まあ、なんだ。それは置いといてオレンちゃんも手に入れたバッジを見せてやればいいじゃないか。オレンちゃんだって本当は自慢したいんだらう？

そうだった。わたしもナツメさんからバッジを貰ったんだった。猫仕掛けとは、い、え

～どうした？

やっぱりこれは見せられないや。わたしのプライドが許さないから。

～そうか。その気持ちもわかるから俺はオレンちゃんの意見を尊重しよう。

ありがとね、レンジ

さて、と。

「わたしもこれからニビジムに挑戦しようと思うよ！　くりむちゃんは？」

「私はねえ、もうすこしニビシティで修業を積んでからオツキミやまに行こうと思うんだ」

「オツキミ山かあ。その近くではロケット団が出てるみたいだから、気を付けてね」

「ロケット団？」

あれ？ くりむちちゃんはニユースには疎い子なのかな。

〜なんでロケット団の存在を知らないんだよこの小娘は……………

黙ってなさいレンジ。思ったことを口に出すな。ゲームじゃ情報収集して手に入った情報だろ。だから田舎から出てきたくりむちちゃんが知らなくても不自然はないよ。ゲーム知識だけで語るなニワカ野郎

〜おま、自分が同一人物だつて忘れてないか!?

「ロケット団つてのは、人のポケモンを盗んだり売りさばいたりする悪い奴らのことだよ。一応わたしも珍しいポケモンを連れているから、心配なんだよね」

そう。たとえレベルの高いイーブイが居たとしても、ウインディが居たとしても。

油断というものは何処にでも潜んでいる。

その意識の隙間を狙ったようにレンジのポケモンやわたしのミニリュウが連れ去られてしまえば、もう戻ってくる可能性は限りなく低くなる。

しかもミニリュウは色違いなのだ。

もし見つかってしまえば粘着ストーカーのように狙われてしまうだろう。

守ってくれる？ イーブイ。

「ブイ。」

ありがとう。

「うへえ、そんな人たちがいるんだあ」

「他人事ひとじゃないんだよ？　くりむちやんのフシギダネだって十分珍しいポケモンなんだから、ロケット団に狙われるかもしれないんだよ？」

「え、うそ！　やだ、フッシーと別れたくない！」

「わたしだつてそんなくりむちやんをみたくないよ。だから、警戒するに越したことは無いんだよ。」

「わかった……………」

くりむちやんがコクリと頷いたのを確認して

「それじゃ、わたしは今からニビジムに行くよ。じゃあね」

「あ、私もオレンちゃんのジムバトルを観戦したい！」

「え……………いいけど」

大丈夫かな。勝てるかな……………

かつこ悪い所を見せちゃいそうで怖い

タケシに勝つ方法を考えていたら、さらに後ろから声を掛けてくる人物が居た

「おもしろそうだね。オレンちゃんのバトル。俺も見てみたいな」

バトルジャンキーその2であるレッドが現れた

「お兄ちゃん！」

「レッドさん……………」

「やあ、久しぶり。俺もそのジム戦を観戦してもいいかな。」

「いいけど、なんで観戦？」

「俺はまだジムバッジをゲットしていないから、参考にしたいんだ。一度負けちゃったしね」

ああ、やっぱりヒトカゲじゃ辛かったんだ

第20話 3歳児は激戦を制する

「お前みたいなガキンチョがタケシさんに挑戦するなんて100万年早いぞ！」

「おおつ、ちゃんと言い間違いに気付いて1万光年から訂正されている

そうだよ、光年は時間じゃなくて距離だもんね。」

「100万年なんてタケシさんが寿命で死んじゃうほうが早いよっ！」

「舐めた口を！ 行け！ イシツブテ！」

「イツシツ！」

キャンプボーイに喧嘩を売られたので、全力で叩き潰すよ。

さて、こつちは何を出そうかな。

「ピカチュウ？」

「ピッカ！」

「キミはこのジムでは悪いけど役立たずなの。」

「ピカツチュウ!? ピカアピカ! ピカツチュウーウ！」

出たい出たいと駄々をこねるピカチュウ。

「そんなに出たいの? じゃあ君を選ぶけど、勝ちたい?」

「ピカツチュー！」

「じゃあ、こちきて。」

ピカチュウを手招きでわたしの方に寄せると、わざマシンケースから「アイアンテール」を取り出す。

「悪魔の取引だ。ピカチュウ。今からキミに苦痛を与える。でもね、それは、わたしがキミの事が嫌いだからじゃない。勝つための手段を君に与えるだけだ。それでも、キミは苦痛を受け入れる？」

「ピカツチュー！」

「おーけい。」

やる気十分のピカチュウの頭の上に、CDのようなディスクをセットする。

「やるんだな。」

うん。ピカチュウの望みなら、叶えてあげようかな。

「オレンちゃんも、案外DSだな」

あは、だって同一人物だよ、わたしたち。

「気合入れて。耐えるんだよ。レッド、くりむちゃん。よく見てて！ トレーナーになるってどういうことか、今からわたしが見せるから！」

「な、なにを言ってるんだ？」

「どうしたの、オレンちゃん！」

技マシンが光り輝いて、その光がピカチュウを包む。

「ピグウ……………ピカアアアアアア！」

いきなり始まった苦痛に、ピカチュウはもがき、苦しんで暴れ出す。

電撃もところ構わず出してしまった

「ちよ、オレンちゃん、なにやってるの!？」

「今すぐ辞めるんだ！ ピカチュウが苦しんでいるじゃないか！」

わざマシンンの技をピカチュウにインスコしている最中。心配してわたしの近くにいたくりむちちゃんとレッドが慌てて近寄るが

「ピガアチュウウウウ……………」

「ちよ、なんだよ、この状況……………バトルは……………」

キャンブボーイもいきなりのピカチュウにわざマシンを与える僕に困惑しながらイシツブテと待機している

「ごめんね、ポケモンを出して貰ってなんだけど、まだバトルは始まっていないんだ。

「チュウウウウウウウウ！」

「わっち！」

暴れるピカチュウの電撃が、わたしの腕に当たる。

わたしの身体が小さいからか、それだけで全身がしびれてしまう

「落ち着けなんて言わない。キミが受け入れた苦痛だよ。身を任せて、ほら、痛みが引いていくよ、ゆっくり呼吸して、すって、吐いて」

そんなピカチュウをしびれる体のまま抱きしめ、その体をさする。

「ピ……………カ、チュ」

暴れ疲れたのか、くたつと身体から力が抜ける。

「ほら、スパルタで行くよ。ピカチュウ、アイアンテール。」

「ピカチュ……………」

わたしの腕に抱かれながら、ピカチュウは尻尾に力を込めると、アイアンテールが発動してギザギザの尻尾が鈍色に輝いた。

よかった、成功だね。まあ、失敗したことなんてないんだけどさ。

「これで、キミはイシツブテに勝てる力を入れた。勝つたらわたしがピカチュウに
おいしいおやつをあげよっか。行けるよね」

「ピカチュ！ ピッピカチュ！」

おやつという単語に反応して、わたしの腕の中から飛びだすピカチュウ。苦しかっただろう。

痛かっただろう。わざマシンとは、わざを無理やりポケモンに覚えさせるといふのは、そういうことだ。

苦痛を受けた後だ。体力も少し持って行かれただろう。

ここは、ゲームじゃない。現実なのだから。

それでも、苦痛を受け入れてわたしを信じてくれたピカチュウにはありがとうと感謝をして頭を撫でてやる。

すると、気持ちよさそうにわたしの手に頭を擦りつけてくる。かわいいなあ

でも、電気ショックを消して10万ボルトをわざマシンで覚えさせるんだけどね。覚えるレベルまで待つてられないよ。

「お、オレンちゃん、今のはいったい……」

ピカチュウの苦しむ姿に少し怯えながらも、もう大丈夫だと判断したくりむちちゃんがわたしに聞いてきた

「今のは、『わざマシン』だよ。ポケモンは、強くなつてレベルが上がる以外にも技を覚えることが出来る。本来ならば覚えることが出来ないわざ。それが、わざマシンなんだよ。」

「わざマシン……………あ、そういえば、タケシさんにもらった」

「そう、それだよ。それを使えば、ポケモンは強くなる。ただし、そのポケモンがそのわざマシンを覚えてくれるかは適性によるけどね。ジム戦で勝つためには誰だって必ずポケモンにわざマシンをつかうだろうし、くりむちゃんやレッドだって、旅に出るなら必要なわざマシンは存在する。」

「……………」

秘伝マシンなんかはその典型だ。

旅で使わなければ先に進めないのだから。

「さきに教えておきたかつたんだ。トレーナーとは。旅に出るとはどういうことなのか。ポケモンが苦痛を覚えることも、トレーナーは把握していないといけないってことをね」

こればかりは、ポケモンが苦しそうだからやりたくないでは押し通せない。

やらなければならぬ、いわば通過儀礼だ。

「待たせてごめん。1万年くらい待っちゃった？」

「い、いや、3分程度だよ。」

「そっか。よし、ピカチュウ、キャンプボーイに苦戦するようなら鍛え直してあげる。さあ、バトルを始めよう」

「ピッピカチュウ！」

ポケモンが苦痛を伴うのも、一瞬のことである。

注射がチクつとするのと同じだ。

～それとはちよつと違うだろ

うっさい。ピカチュウはすぐに元気になってくれたでしょ

やる気のもつた電撃を頬からビリビリさせるピカチュウ。

うーん。電撃はつかいませんけどね。

そう思いながら、バトルをするために身構えていたところに――

「なにやら騒がしいと思ったが、今回の挑戦者は本当に子供じゃないか」

「んにゅ？」

誰か来た。

あれは……………？

うわ、タケシさんだ！

「16歳くらいの少年じゃないか！」

エリカ様よりも年下か。

うっひゃー、眼え細いなあ。

「キミが噂の最年少トレーナーのオレンちゃんだね」

「はい、初めまして。オレンです」

トレーナーカードは受付で渡したから、わたしの情報はもう届いているはずだ。

「なにやら面白いことをしていたみたいだけど？」

「うん、ピカチュウに『アイアンテール』を覚えさせたんだよ。このジムでは岩タイプがメインだから、弱点になるタイプを突かないと勝てないからね」

「なるほど、キミはその後ろのレッド君よりもポケモンについて詳しくそうだね」

「事情があるからね」

そういや、レッドは一度タケシに挑んで負けたんだっけ。

きつとタイプ相性も無視してヒトカゲで頑張っちゃったんだろう。

マンキーでも捕まえてくれればよかったのに。

そう思つてレッドを見れば、負けたこと、無知なことを恥ずかしそうに目を逸らした。

現実を直視しなさい。
頭を使わないとポケモン勝負には勝てないよ。

「それじゃ、この試合の審判はオレが務めよう。」

「ええっ！ タケシさんが!?!」

キャンプボーイが驚きの声を上げる。わたしもびっくりしちやった

「うん？ いいだろう、別に。誰が審判をやったって。オレもオレンちゃんの勝負には興味があるからな」

「うーん、緊張しちやうなあ」

わたしは頬をぼりぼりと掻きながら呟く。

あれだよ。後ろにはくりむちちゃんとレッドというトレーナー初心者が居るのだ。

タケシにも見られていれば緊張しない方がおかしい。

☆

「これよりジムトレーナー“トシカズ” 対チャレンジャー“オレン”の勝負を開始する
！」

タケシの宣言によって、両者が構える。

「使用ポケモンはジムトレーナーが2体。チャレンジャーは6体まで。ポケモンの交代とアイテムの使用はチャレンジャーにのみ認められることとする！ では、始め！」

「いけ、イシツブテ！」

「イッシツ！」

「GO！ ピカチュウ！」

「ピカツチュウ！」

両者とも、傍らに控えさせたポケモンを繰り出す

「イシツブテ、たいあたり！」

「ピカチュウ、覚えたての技をぶつけてやれ！ アイアンテール！」

「チュウウウウ！ ピツカア！」

ピカチュウがイシツブテの体当たりに合わせてアイアンテールをぶち込む。

まだ尻尾を使った攻撃に慣れていないのか、体の軸はブレているし、力も籠っていない。
い。

力が分散してしまっているようだ。

だが――

「イッシツ！」

アイアンテールは効果抜群。

多大なダメージをイシツブテに負わせたらしい。

イシツブテはもう満身創痍。効果抜群ですごいなあ。

「立て直す隙を与えるな！　　“でんこうせっか”!!」

「チュッピイ！」

ピカチュウの電光石火がイシツブテにぶち当たる。

もともとの素早さも上だが、体力の少ない敵には電光石火でとどめを刺すのは当然だ。

「ああつ！　イシツブテ！」

「勝者、ピカチュウ！」

タケシの宣言により、キャンプボーイのトシカズがイシツブテに駆け寄って、無事を確認するとボールの中に収納する

「くそ、今度は負けねエぞ！　　行け、サンド!!」

「きゆう！」

続いてトシカズが繰り出して来たのは、サンド。

あれ、そういうえばサンドって“地面”単体じゃないか？

原作でも思ったけど、これはどういうことなのでしょう？

「タケシさん、サンドって地面タイプ単体だよ。いいの？」

「ああ、別にルール違反ではないさ。ジムトレーナーもそのタイプに応じた技を持っているからね」

「そういうことね。ピカチュウ、戻って。さすがに分が悪い」

「ピカア……………」

「不満そうにしないの。ちゃんとおやつを買ってあげるから。」

「ピカチュ」

キミもあれだね、バトルジャンキーだね。

とはいえ、さすがに地面単体のポケモンを相手にピカチュウでは無理がある

相手が“マグニチュード”でも使ってみろ。ピカチュウは一撃で倒れちゃうよ

「ブイー？」

足元のイーブイも心配そうに見上げてくる。

でも、キミはレンジのポケモンだから、ジムバトルでの使用はしないよ。

「さて、ミニリュウ。出番だよ」

「みゅー♪」

わたしのカバンからによるよると這いだしってくるピンクの生き物。
色ミニリユウだ。

「行けるね、ミニリユウ」

「みゅりー♪」

くねくねと喜びを表現して見せるミニリユウ

よろしく、現。パーティの最強わざを見せてやれ！

「先制はわたしがもらうわ！ ミニリユウ、”りゅうのいかり”！」

「りゅうー、みゅーー！」

小さな小さな角の先に溜めたオーラを、サンドに向けて発射する
「きやうー!!？」

そして、命中。

竜の怒りは固定ダメージ。

相手の体力を40ほど、確実に削るわざだ。

相手のレベルは未だに20にならない所だ。

ならば、相手の体力はよくても60程度。現実だから固定ダメージとか言われてもよ
くわかんないけど、低レベルの時では「ナイトヘッド」などよりも確実に相手を刺せる
最高の技だ。

ミニリユウの持ちわざである「でんじは」はこのジムでは使えず、「たつまき」はた
いした威力が出ない「まきつく」も同様だね。

だから、最近覚えた最強の技。「りゅうのいかり」で、ほぼ確実に相手を戦闘不能に
陥れる！

「サンド、〃ぎりさく〃攻撃！」

「きゅーー！」

サンドのきりさく攻撃に対し、避けるすべを持たないミニリユウは、もろにその攻撃
を受けてしまう

「みゆ——！！」

サンドの体力を大幅に削ったおかげか、威力は高くなさそうだが、ミニリユウを深く
傷つけた

「ぬ、ぐ……………もどつて、ミニリユウ」

これ以上傷つく姿を見てられなかったので、ボールに戻す。すこし休んでからだ。

もともと、ミニリュウの体力は低い。

なにせ、逆Vなのだから。

ミニリュウは十分に頑張った。

相手の体力はもうほとんど残っていないはずなのだから。

竜の怒りとは、それほどまでに強力なわざなんだよ

つぎは……………

「ピカチュウ！」

「やる気？ でも、キミじゃ厳しいよ」

「ピカピカ、ピカツチュウ！」

仇を討ちたいって？

うーん。サンド相手では厳しいけれど、やってみようか

アイアンテールを当てることが出来れば、わたしたちの勝ちだ。

「GO、ピカチュウ！」

「ピッピカチュウ！」

ピカチュウを繰り出す。

しかし、すかさずトシカズも技を叫ぶ

「^ッがんせきふうじ^ッ!!」

「マジで!？」

ここにきて岩タイプの技。

「ピカーッ!？」

しかも、こちらのスピードを下げ、とても厄介な技。

素のスピードならピカチュウの方が上だろう。

このネズミ対決は一瞬にして圧倒的にサンドが有利になってしまった。うう。

「ピカチュウ、アイアンテール！」

「サンド、マグニチュード！」

「きゆうー!!」

「ピカピカピカ、チュビッツッ!？」

ピカチュウはアイアンテールを放つ前にマグニチュードの直撃を受けてしまう

隆起した地面に突きあげられて宙を舞い、地面に叩きつけられたんだ。アイアンテールは命中力に不安の残るわざだ。

この結果は悔しい

プルプルと震える足で立ち上がるピカチュウ。

今にも倒れてしまいそうだ

しかし、立っている。

立っているならば、負けていない。

負けていないならば、チャンスを見逃すな！

「もう一度、マグニチュード！」

「アイアンテールを地面に刺して耐えて！」

「ピッカ！」

言われたとおりに、ピカチュウは揺れる地面に対し、身体がぶれないように5本目の足を地面に突き刺した

マグニチュードはダメージがランダム。

それに賭けるしかない。

とはいえ、効果は抜群。耐えきれぬ保証はない。

ピカチュウの真下の地面が割れる。

——来る！

「跳んで！」

「ピッカア！」

その瞬間。地面が隆起して盛り上がる。

「足場が来たよ！ 大ジャンプ！」

自分のジャンプの高さが頂点になる頃の下から迫ってくる地面に降り立つことで、ダメージを極限まで押し殺す。その立ち上る地面のスピードを借りてさらに上にジャンプ

クルクルと縦方向に回転しながら大きく宙を跳ねたピカチュウの着地予想地点は、サンドの真上！

「アイアンテールを叩きつけて!!」

「ピカツチュウ!!」

「なに!?!」

「うわ、すごーい！」

「やるな、オレンちゃん」

感心した声聞こえるも、わたしの脳はすでにその声をシャットアウトして何も聞こえなくなる。

必要な情報だけをみつめて！ 勝つ方法を模索するんだ！

「いっけええええええええええ!!」

「ピッカアアアアアアアア!!!」

ガギン!!

という、地面を金属が穿つ音が聞こえた。

「ピカ!?!」

「外した!?!」

くそつ、コレだからアイアンテールは……………。

命中率低すぎだ

「チャンスだ！ サンド！ “きりさく” 攻撃!!」

しかも、地面にアイアンテールが刺さってしまった、ピカチュウは動けない！ ここまでなの!?!

せつかくギリギリまで追い詰めたのに、こちらが相手に無防備な姿をさらしてしまった。

ピンチはチャンス。チャンスを不意にして、ピンチになってしまったのだ。もう、なすすべはないのだろうか……

∨諦めるな

声が聞こえた。自分の声……いや、レンジの声だ。

レンジ……でも、このままじゃ……

∨まだ、負けちゃいねーだろ

まだ……そうだね、まだピカチュウが倒れた訳じゃない。負けた時は――

――ピカチュウが倒れた時だ！

まだ、負けてない!!

「尻尾解除で地面から抜いて！ すかさず “でんこうせっか”！」

思考停止、命令停止は即座に敗北を意味する。

ならば、最後まで足掻くのが、わたしの戦争だ。

「きゅー！」

きりさく攻撃で、サンドの爪がオーラを纏って伸びる。

腕が重くなったのか、サンドが大きく振りかぶった。

ピカチュウは身動きが取れなかった。サンド自身の体力も残っていない。だから振りかぶったのだろう。

確実にピカチュウを仕留めるために。

それが、吉と出るか、凶と出るか。それは誰にもわからない事だ。

そこでようやくピカチュウの尻尾が地面から抜ける。

時間的にはギリギリか

「臆するな、行つて!!」

「ピカアアアアアア! チュアアアアアア!」

アイアンテール解除からの電光石火の移行は、ほぼノータイム。

技を繋いだ。

これなら!

「チュツピイ!!」

「きゅあー!!?」

サンドの爪がピカチュウの頬をかすめる

だが、ピカチュウの電光石火はそれを無視してサンドのドテツ腹に吸い込まれていった。

急所だ。

「き、きい……………きゆう……………」

サンドは目を回して失神してしまった。

「勝者、チャンレンジャー オレンッ！」

肩で息をする僕とピカチュウ。

危なかった。一歩でも怯んでいたら、致命傷を負っていたのはピカチュウの方だ。

ピカチュウはクルリと身体の向きを変えると、しばらくの間、見つめ合うと

「ピカチュウ」

「ピイカ……………」

「おいで」

嬉しそうにわたしに向かって飛びこんできた。

第21話 3歳児はニビジムに挑戦する

オレンちゃんの精神でジムトレーナーに勝利した。

「よく頑張ったね、ピカチュウ」

「ピカッチュー！」

ピカチュウ自身もボロボロだ。

よく勝てたよ。わたしも驚いている。

地面タイプのサンドにピカチュウのアイアンテール、そして電光石火。

もちろん、その前にミニリュウが竜のいかりで体力を削っていなければサンドには勝てなかったはずだ。

「すーいー！」

「本当にすーいな………相性が悪いのに勝っちゃったぞ」

くりむちゃんとレッドもわたしの勝利に喜んでくれた。

やったよレンジ!

ああ、大健闘じゃないか。

色仕掛けに訴えなくても何とかなるものだね

なツメさんの時はノーカンドろ。

そうだけどさ。こう、やっぱり拮抗した勝負で勝てると楽しいよね

ああ。ピカチュウは大車輪の活躍だったな。今後が期待できる

「タケシさん。わたしはピカチュウをポケモンセンターに連れて行かないと」

「ああ。行つてくるといい。キミと勝負する時が楽しみだ」

「あ、私も行く! オレンちゃんとお話ししたいし」

今のところはピカチュウもミニリュウも勝負ができそうな体ではない。一度出直そう。

するとくりむちゃんがわたしについてきてくれた。

「レッドくん」

「はい!」

その後ろで、タケシさんがレッドを呼ぶ。

「オレンちゃんの戦いは見たよな」

「はい」

「オレンちゃんはここが岩タイプのジムだということをちゃんと理解して、きちんと対策をしてきた。キミみたいにヒトカゲの『ひのこ』に頼って効果の薄い攻撃は全くしなかった。それどころか電気タイプという最悪の愛称でありながら、『アイアンテール』という、こちらの弱点までつく戦い方だった。レッド君。キミは今回のバトルで、何か学べることはあったかい？」

「……………たくさん、ありました。俺、もつともつと強くなります！ オレンちゃんみたいに、ポケモンのことをよく知って、いろんなポケモンと戦って！ そしてタケシさんにも勝って見せます！」

「よし、その意気だ」

タケシさんはレッドの背中をたたいて送り出した。

わたしのバトルがレッドの心に火をつけたみたいだね

「ライバルは、多いほうが楽しいからな！」

「もう、お兄ちゃんったら負けず嫌いなんだから……………」

さすがバトルジャンキー。いっぱい戦って強くなるんだよ。

まあ、レンジのほうがもつと強いけどね！

✓ 言ってやるな。

「ブイ！」

「ピカッチュ」

バトルが終わり、イーブイもピカチュウにねぎらいの言葉をかけているようだ。

ポケモン語はわからないけど、『がんばったね』『ありがとう』的なことを言ってるんだらう。

次のタケシさんと戦うときも頼むよ

……

……

……

チンチンチロリン♪

「お預かりしたポケモンはみんな元気になりましたよ♪」

「ありがとうジョーイさん！」

ジョーイさんからポケモンたちを受け取り、ピカチュウもミニリュウもすっかり元気になって帰ってきた

その間に情報収集をしていたんだけど、どうやらくりむちやんの手持ちは「フシギダネ」「オニスズメ」「ニドラン♀」「バタフリー」がいるらしい。

バタフリーがいると序盤は楽になるはず。

正直、最初はバタフリーがいれば無双できた記憶しかないけど……あ、ケーシイも無双できたような。

エスパークタイプつよすぎい！

捕獲要因にバタフリーを捕まえているのはいいね。

進化が早いから序盤では頼りになるポケモンのはずだ。

そして、レッドはというと、「ヒトカゲ」「コラッタ」「ポツポ」「ニドラン♂」
マンキー」「ピカチュウ」

そしてボツクスにキャタピーとビードルが居るそうだ。

ポケモンを捕まえるあまり、育成がおろそかになっていそう。

だからタケシさんに負けるんだ

「レッドさんははとりあえずマンキーかビードルを育ててみるといいかもね」

「マンキーかビードル？」

「マンキーは格闘タイプだから、岩タイプには効果抜群だし、ビードルはトキワの森を抜けたならわかるでしょ。毒は凶器だよ」

「なるほど……………」

キヤタピーを育ててみてもいいけど、その場合はトランセル時代に時間がかかりすぎてしまう。

毒の粉を覚えるまでが長い。レベル12といたら、今のヒトカゲと同じくらいまで育てないといけない

「どうしてもヒトカゲで戦いたいって言うのなら、ヒトカゲがメタルクローを覚えるまで頑張るのもいいかもね」

ORASではメタルクローは遺伝技だけど、FRGではレベル13で覚える仕様だった。

もしかしたらカントー地方のヒトカゲなら、メタルクローを覚えられるかもしれないね

「はがねタイプの方か……………オレンちゃんのピカチュウみたいに、相性の悪い相手でも逆転できる技ってことだな」

「そういうこと。どうするかはレッドさんに任せるけどね」
「そっか………いろいろ試してみることにするよ」

悩め悩め。わたしはそれを応援するから。

「そういえば、グリーンは？」

ふと気になったのでくりむちゃんに聞いてみた。

一緒に行動していることはないとは知りつつ、連絡くらいは取り合ってそんな気がするんだけど………

「あれ？ オレンちゃんって、グリーンのこと知ってたっけ？」

え？

あ！ しまった！ グリーンと戦ったときってわたしがレンジの時だった！
意識が分かれても記憶が一緒だからまったく気にしてなかった！

グリーンとオレンちゃんでは面識が全くないよ！

やっべえ！ どうしよう！

「ほら、前言っていたじゃん。くりむちゃん忘れたの？」

「そうだったけ？」

「そうだよ。レッドもライバルはたくさんいるって言ってたし、グリーンのことなんですよ？ わたしは会ったことないけど、今グリーンはどうしてるのかなって」

「そっか。えーつとね、もうニビジムのバッジを手に入れて先に行っちゃったみたいだよ」

よかった！ 騙されてくれた！

グリーンはもう先に行っちゃってるのか。

ということは、オツキミ山で迷子になって、後ろから追ってきて何事もなかったかのように出会うパティーンですな。

∨グリーン迷子とかwwwwwwww

ウケるよね

「そっか、すごいね、グリーンって」

「でもグリーンはゼニガメを持つてるから、タケシさんにはすんなり勝てたみたいだよ」
「そうなんだ」

そうだろうな。

「それじゃ、今度はタケシさんに挑戦だ」

「応援してるよ！」

「まかせて！」

くりむちやんが突き出したこぶしに、こつんとこぶしをぶつけて笑みを浮かべる。
いまならなんだってやれそうな気がするよ。

☆

「来たか、オレンちゃん」

「勝ちに行くよ！ タケシさん！」

残念ながら、タケシはロリコンではなくお姉さん属性のため、ナツメ戦のように色仕掛けが通用するとは思えない。というかわたし自身、やろうとも思わない。

「ブイ」

だからイーブイさん。わたしの足を踏まないで。
観客席にはくりむちやんとレッド。

審判は1万光年のキャンプボーイ「トシカズ」。

「これより、ニビジム戦を開始します！ 使用ポケモンはジムリーダーが3対。チャレンジャーのポケモンは6対まで。ポケモンの交代はチャレンジャーにのみ許されます！ では、バトル開始！」

「行け、イシツブテ！」

「イツシツ！」

イシツブテのレベルはどうだろうか。

仮にもわたしはバツジ1つ持ちだ。

18くらいじゃないだろうか。

「ならわたしは………！ 行け！ ピカチュウ！」

「ピッピカチュウ！」

「行けるよね？」

「ピッカア！」

ビリビリとほお袋から電気をバチバチさせる電気ネズミ。

元氣十分なら勝機も十分！

「先手から仕掛けるよ！ アイアンテール！」

「イシツブテ！ まるくなる！」

「ピカア！ チュツピイ！！」

「イツシツ！！」

ピカチュウのアイアンテールをモロに受けたイシツブテだが、体を丸めてゴロゴロと転がり、せつかくの効果抜群の技を受け流されてしまった

さすがジムリーダーのポケモンだ。

よく鍛えられている

「そのまま “ころがる” 攻撃！」

「うにあ？！」

まさかの “まるくて転がる戦法” だったか！

丸くなる後の転がるダメージ2倍。

これは……まづい奴だ

ガガガガと地面から土煙を上げながらこちらに転がってくるイシツブテ

「アイアンテールで受け止めて!!」

「ピッカアアア!!」

そして、それをピカチュウはアイアンテールで受け切った。

イシツブテの固い体にピカチュウの尻尾が突き刺さる

イシツブテは目の前。目と鼻の先、どころか触れ合っている。

ならば——!!

「でんきシヨック!!」

「ピカツチュウ!」

バリバリと受け止めたそばからピカチュウが電気を発する。

「でんきシヨック!?!」

「オレンちゃん! 自分で言ってたじゃない! 地面タイプには電気技は効かないって

!」

「何をしているんだ? キミ程聡明な子ならイシツブテに電気技が聞かないことなどわ

かっているはずだろ？」

三者三様に驚きの声を出す。たしかに地面タイプには電気技は効かない。

だけど、それはでんきショックの使い方次第だろう。

わたしは電気技を使ったけど、補助技として使ったんだ。

効果は――

「イシツブテ！ 体当たりでピカチュウを吹き飛ばせ！」

「イッシ………」

「イシツブテ!？」

✓ 目くらまし。俺でもそうするよ。

だよね。目をつぶすのは喧嘩の基本。一顎《チン》ジャブからの小指フックで口の中に指を突っ込み、顎を閉じさせているからかまされる心配はなし。さらに小指フックのまま顔をぶん投げて地面に倒してマウントをとれば勝ちが確定だ。

目が見えないながらも接触部である尻尾に向かって体当たりをかまそうとするイシツブテ。

しかし、残念ながらピカチュウはわたしの意図を組んで重心をずらし、回転ドアのように体を回してイシツブテを受け流す。

「その勢いでそのままアイアンテールをぶちかませ!!」

「チュウウウ!! ピツカア!!」

クルリと体を回転させたピカチュウは、受け流した運動エネルギーを足腰の力でさらに増幅させ、重い一鉄の尻尾《アイアンテール》となったヘビー級の遠心力を上乘せさせた一撃をイシツブテの無防備な背中に一文字切りでホームラン。

ガンガンッゴンッ! とイレギュラーバウンドを繰り返しながら地面を転がり、くたつと動かなくなる。

見ればイシツブテの目は回っていて気絶しているようだった。

「イシツブテ戦闘不能!」

トシカズの宣言により、ピカチュウの勝ちが確定する

「っしや! まずー勝!」

「ピツピカチュウ!」

「ブイー! イブイー!」

突き出した拳に合わせ、イーブイとピカチュウがぼんとわたしの拳に擬似雷パンチとすてみタックルをぶちかましてくれた

あっぱば。

「無傷だね、ピカチュウ。アイアンテールにも慣れた?」

「ピカツチュウ！」

「うーん、個体値はそこそこだけど、バトルセンスがいいね、ピカチュウ。気に入った！」

「Vこそない個体だけど、すぐにアイアンテールを自分のものとしたそのバトルセンス。」

数値には表れない才能。

楽しいねえ、楽しいねえ!!

「くそつ、なかなかやるじゃないか、オレンちゃん。だが、岩タイプは我慢強く、砕けぬ意志がある！ こいつをどう攻略するかな？ 出てこい、イワーク！」

「イワアアアアアアック！」

2匹目、イワヘビポケモン。時速80kmで地中を掘り進む攻撃力ポツポツだ。

「ピイカ……………」

「ブイ……………」

その巨体に、ピカチュウもイーブイも委縮している

レベル差があっても、重さや大きさがダンチだもんね。

「見た目に惑わされるな！ そいつの防御力は確かに脅威だけど、そいつの攻撃力はポツポ並だ！ 臆せずGO！」

ビシッと指を突き付けてピカチュウにGOサインを出す。

「そのままピカチュウできたか」

「ピカチュウだけでは不安だけど、まだまだ仲間はいるからね」

「ピカア！ ピイカツチュウ！」

『勝つに決まってるじゃん！』って言いたげだ。さすがだ、ピカチュウ。

とはいえ、レベル差もあり、タイプ相性も悪い。

いくら攻撃力ポツポとはいえ、さすがにこれは分が悪い。手持ちには4倍弱点である草も水もないのだから。

しかもアイアンテールは物理技。命中率も問題がある。

すこし厳しい戦いなのだ。

～というか、ピカチュウは負けると読んでいるんだろ

まあ、ね。あまり調子に乗って、自分は最強だと思われてもだめだろうから、適度に負けを経験することも必要だと思うんだ。

～経験値では触れられない経験か。

「ステルスロック!!」

「うえ!?!」

〽うえ!?!

やべ、変な声出た。

そっか。イワークはもうレベル20を超えている。

レベル14程度の初心者用イワークではないのだから。

イワークのステルスロックで尖った岩が漂い始めた。

くう………ステルスロックを覚えていても当然だ。ちよつとこれはわたしの油断のしすぎかな。

「ステルスロックってどんな技なの?」

どうやらくりむちゃんはステルスロックの効果がわからないらしく、首をひねって隣にいるレッドに質問をしていた。

「ただどレッドも知らないようであ、と首をひねっていた。

「ステルスロックとは、ポケモンを交代する際、出てきたポケモンを無条件で攻撃する技

だ」

「え！ ズルい!!」

タケシさんの説明にズルいと抗議するくりむちゃん

「ズルくないよ……それだけ、タケシさんが本気でわたしを相手にしているってことだもん」

「ああ、その通りだ。これで、ピカチュウが倒れても、交代しても、出てくるポケモンはすべてダメージを負うことになる。見せてもらうよ、オレンちゃんのポケモンの、本当の絆を！」

ギリツと歯を食いしばる。

厄介な技を………!!

先手を打たれた………!! しかし、交代できないのなら突っ切るのみ!

「ピカチュウ、 アイアンテール!!」

わたしはそれでもアイアンテールの指示を出すしかない。

「穴を掘って躲せ！」

時速80km!

イワヘビポケモンめ……………やってくれるじゃねえか

「ピツチュウ!」

——ガギン!!

アイアンテールはイワークの尻尾の先端に当たった程度。

ダメージは薄い。

うぬぬ……………

「電光石火でフィールドを駆け回れ! 出てくるイワークをかく乱するの!」

「ピッ! ピッ! ピツカア!」

電光石火を使い、高速でフィールドを駆けまわるピカチュウ

「無駄だ! //あなをほる!!」

「ガアアアアアアアアアア!!」

「ピツカアアアアア!!?」

地面から出てきたイワークに打ち上げられるピカチュウ

直撃!

まずい！

いくら攻撃力ポッポとはいえ、ピカチュウは電気タイプ！
レベル差もあるしくらったらただじゃすまないぞ！

「ぐう………ぴいか」

まだ、やれる………！

とでも言いたげに空中でうめくピカチュウ。

しかしながら吹き飛ばされた体制では体を動かせない。

「アイアンテールで重心をずらして体制を整えて！」

「ピツカ！」

「叩き下ろせ!!」

「ピツカツチュウウウ！」

「ワアアアアク!!」

そのままアイアンテールを落下の加速もつけてイワークの頭にたたきつける

ガードなしのボクシングをしている気分だ

しかも相手はグローブをつけたサンドバック。

こちらの攻撃が通用している気がしない

「がんせきふうじ！」

「やっぱりか！ 電光石火でよけて！」

慌てて支持を出すものの、ピカチュウはすでに「あなをほる」のダメージでフラフラだ。

まともにくらってしま

「あかん！ ピカチュウ！」

「逃がすなよイワーク！ “しめつける” 攻撃！」

ピカチュウを縛りあげ、尻尾で締め上げるイワーク

「ピギユウ……」

つぶれたカエルみたいな声を上げるピカチュウ。

見てられない……ボールに手を伸ばそうとしたが、そうすると次のポケモンがステロのダメージを受けてしまう

いや、受けてしまうのは当然か。

今ピカチュウを戻しても再び出したとき、ステロだけでピカチュウは気絶しかねない

「アイアンテールでもがいて！」

「ピガア！」

苦しそうにしながらもアイアンテールで締め上げるイワークの尻尾をガンガンとたたき続ける

「イヴァアアアク!!」

「ピッ! ピカッ! チュッ! チュッピイ! ピイ! ピ……………カ……………」

何度も何度も締め上げられながらアイアンテールでたたき続けるピカチュウ。

イワークも効果抜群の攻撃をくらっているのだ。効いていないわけがないしかし、力を使い尽くしたのか、くたつと力を抜くピカチュウ。

どうやら気絶してしまったようだ

「ピカチュウ、戦闘不能！」

トシカズの宣言により、ピカチュウは締め付けから解放される

「よく頑張ったね。気絶するその時まで、わたしを信じてくれてありがとう」
勝利に対する執念。ピカチュウからはそれを感じた。

キミは、もっともつと強くなれる

第22話 3歳児は成長を促す

気絶したピカチュウをボールの中に収納する。

タケシのイワークを相手にそこまでやってくれた、わたしを最後まで信じてくれたピカチュウに報いるためにも、タケシには勝つしかない。

「さあ、オレンちゃん。次のポケモンはどうするんだい？」 そのイーブイかい？」

「ううん。このイーブイはわたしのポケモンじゃないから使わないよ」

「ん？ じゃあ、どんなポケモンで来るのかな？」

イーブイはオレンちゃんではなく、レンジのポケモンだ。

イーブイもそのことは理解しているし、イーブイが出陣すればオレンちゃんのジム戦の意味がなくなる。

ちゃんとしたジム戦を経験しないと、レンジにもオレンちゃんにも示しがつかないからね。

ボールホルダーから一つのモンスターボールを取り出す。

「GO、バタフリー」

投げたボールから飛び出してきたのは、ちようちよポケモン。バタフリー。

「フレイイイ♪ フギユツ!?!」

タケシがイワークでステルスロックを撒いていたおかげで、バタフリーに尖った岩が食い込んだ

ボールから出てそうそうに苦悶の表情のバタフリー。

「バタフリー? 飛行、虫タイプのポケモンは岩タイプの技は4倍だぞ?」

「知ってるよ。一撃くらったら落ちるってこともね。だけど………バタフリーの真骨頂は鱗粉にあるんだよ。舞え! バタフリー!」

バタフリーは4倍ダメージのステロを受けてすでに体力を半分近く失っている状態だ。

それでも、やる気を見せて薄い羽根を広げて飛び上がる。

バタフリーのエサは花の蜜。花畑に連れて行ってバタフリーを放してあげると、すごく喜ぶよ。

美しく舞うその姿は、まさしく幻想的な蝶の舞い。

だが、バトルにおいては蝶のように舞い、蜂のように刺す。
そんなスタイルは求めている。

ボクシングじゃないんだ。卑怯もくそつたれもあるか。

「行けるね！ “ねむりごな”！」

「フレイイイ♪」

イワークの上空で眠り粉をまき散らすバタフリー。

「イワ……………zzzz」

「ほう……………！ なかなかやる！ 起きろイワーク！」

タイプ相性が悪いなら、からめ手から搾り取るのみ。

じり貧になってもいい。最終的に勝てばいい。効率を優先して行動を起こせ。

イワークは眠ってしまって動けない！

「“ちようおんば”！ 決して起きても行動させるな！」

「フリツ！ フレイイイイイイイイイイ！！」

ならばと追い打ちをかける。

眠り粉と毒の粉の併用はできない。

というか覚えさせていない。

だから、わたしはバタフリーには「ちょうおんぱ」と「ねんりき」を覚えさせている。

相手にまともに行動させないように、卑怯と言われようともわたしはタケシに勝ちたい！

命中率の低いちょうおんぱが眠るイワークへと直撃。

これで起きても混乱状態。

タイプ相性がなんだ！ ならば搦め手！ どつからでも手を伸ばせ！

視野を広くもて！

「いいようにやられてたまるか！ イワーク！ 起きるんだ！ このままじゃお前はやられてしまうぞ！」

「……………zzzz」

いい感じに眠り粉が仕事をしているようだ

「……………くろうさん、もどつていいよ、ミニリユウ！」

「みゅーっ♪」

役目を終えたバタフリーをボールに戻し、カバンの中からミニリユウが這い出てきて色違いであるピンクのボディがフィールドに降り立つ

こんなこと、イワークが眠っているときじゃないと隙だらけでできないもんね。

ミニリュウがフィールドに入ったことにより、ステロがミニリュウに直撃。

「みっ!？」

「いける?」

「みゅー!!」

4倍ダメージのバタフリー程ではない。

すこし擦りむいた程度のダメージだ。

行動に支障はない

「起きろ、イワーク! 起きるんだ!!」

「zzz……………イワア……………」

ようやくお目覚めのイワーク。

しかし、目が覚めたといっても混乱状態。

時間を稼いだおかげで、こちらの準備はすべて整った

「でかい図体で防御力がいかに高くても、固定ダメージは防ぎようがないよね!

ミニリュウ、”りゅうのいかり”!

固定ダメージを与える最強技。トサキント以下のHPで、ピカチュウが削ってくれた

体力で、はたして固定ダメージを堪え切れるだろうか

「イワアアアア!？」

答えは、否。

ピカチュウの活躍により、ただでさえ少ない体力を削り、バタフリーの活躍により行動を制限され、ミニリュウの固定ダメージでそれを粉砕する。

「イワーク、戦闘不能！」

トシカズの宣言で、タケシはイワークをボールに収納する。

「よく頑張った、イワーク。今度みっちり修行しような」

ねぎらいの言葉をかける。

やはりタケシもポケモンを大事に思っているんだな。

ジムトレーナーはそうでなくっちゃ。

ボールをホルダーに仕舞い、ニツとこちらに笑みを向けるタケシ。

「見事！ よくぞイワークを打ち破った！ だけど、まだ俺のポケモンすべてが戦闘不能になったわけではない！」

そう、イワークを倒したからと言ってジム戦が終わったわけではない。

むしろここからが本番だ。

タケシの使用ポケモンは3体。
あと一体が残っているのだから。

「ラストだ。行け、ゴローン！」

「ゴローン!!」

タケシが繰り出したのはイシツブテの進化系。ゴローンだ。
強敵。

「え、ゴローン!? 私の時はイシツブテとイワークの2体だけだったのに!」

くりむちゃんが自分とのバトルの時にはいなかったゴローンの存在に目をまるくした

「何も不思議なことはない。俺たちジムリーダーはトレーナーの強さに応じて、使用するポケモンを選んでいくからな。強さの基準は、バッジの所持数。驚くかもしれないけれど、オレンちゃんはすでにゴールドバッジを持っているんだ。だから、小さい子だからって容赦はしない。その実力に応じたポケモンを選出して、俺たちは出しているんだ」

「なっ!? オレンちゃん、もうバッジもってたの!」

「う、うん。黙っててごめんね?」

「いいけど……どうして言ってくれなかったの?」

「だ、だって……これ、ナツメさんからもらったものだけど、本来の実力でとれたものじゃないから……」

「なにやら言いたくない事情があるらしいが、ジムリーダーが認めているなら、それは君の実力だ。全力を出し切って俺に挑んで来い!」

タケシさんが熱くわたしを歓迎する

本当に、言いたくないんだよ。とくにくりむちちゃんには。

色仕掛けならぬ猫仕掛けで手に入れたなんて知られたら、くりむちちゃんが行く先々のジムで色仕掛けをしてしまいそうな気がするのだ。

それは何としても避けたい。

「さ、バトルに集中だ。ミニリユウ。いけるね?」

「みゅーっ♪」

ゴローンにはレベルで負け、素早さで負け、攻撃力で負けている状況。

ここでミニリユウを交代することもできるが、それはしない。

ミニリユウはトレーナー戦での勝ち数が極端に少ない。

ドラゴンタイプという大器晩成型。カイリユウに進化しなければ足を引つ張ることも多いだろう。

それに、体力逆Vというハンデも抱えている。

ミニリユウは少しずつ強くなっていくしかないんだ。

しかも、覚えている技は“でんじは”や“たつまき”“まきつく”といったゴローンにはほとんど効果をなさない技しかない。

厳しい戦い以前に、この状況で勝てるとは思えないのだ。

悔しいだろう。

悲しいだろう。

弱い自分が嫌になるだろう。

それでも、わたしは根気強くキミに付き合うよ。

いつか大きな翼で大空をはばたくその時まで。

「ミニリユウ。 “りゅうのいかり”」

「りゅうー！ みゅうっ！」

ちいさな角に「りゅうのいかり」のオーラが集中する

「ゴローン！　「いわおとし」だ！」

「ゴローン！」

「み　ゆ……………」

それに対し、タケシのゴローンは上空に出現させた岩をミニリュウにぶつけることで技を中断させた

「突っ込めミニリュウ！　「りゅうのいかり」！」

「みゅー!!」

降り注ぐ岩をよけながら、あるいは体に当たりながら、ゴローンに肉薄する

今度は角に溜めたオーラを霧散させることなく、ゴローンに向かって「りゅうのいかり」を放出した

「ノーゴオ……………」

「みぎゅう……………」

まともにくらったゴローンはそれでも怯まずに肉薄するミニリュウを鬱陶しそうに弾き飛ばす

「ぬう……………」

「やはり厳しいな」

うん。将来性は十分なんだけど、現状の戦闘力が不足しているのはいかんともしがた
いね

「とはいえ、今は我慢の時期だぞ。わかっていてワタルからタマゴをもらったんだか
らな

その通りだよ。

固定ダメージをくらったといっても、半分程度しかダメージはない。

それよりもミニリュウの受けるダメージのほうが多い。

「りゅうのいかり！」

「みゅーっ！」

だが、ミニリュウにできる攻撃手段といえば、りゅうのいかりしかない。

愚直にでも、そうするしかないのだ。

「させるな！ マグニチュード！」

「ンゴオオオオオ!!!」

振動する地面。

もともとミニリュウは地面をはい回るタイプのポケモンだ。

地面からの振動は直接腹と頭に響くはず。

さらにはミニリユウの真下から突き出す隆起した地面

「みやあーっ!!」

三度目の「りゆうのいかり」も、再び発動前につぶされてしまった

突き上げられたミニリユウは宙を舞い、そして地面に激突する。

「ミニリユウ!!」

砂塵が舞い、わたしの声が木霊する。

しかし、その声に応えるものはなく、ただただ、沈黙が場を貫いていた
砂煙が晴れたとき、そこにいたのは、力なく横たわるミニリユウの姿。

「ミニリユウ、戦闘不能!」

そして無情にも突き付けられる現実。

かろうじて気絶は免れているものの、ミニリユウは戦闘を継続できるほどの体力は残
されていない。

悔しかろう。

惨めだろう。

それでも、現実を受け止めなければならぬものだ。

今までのバトルは、ほとんどの場合、相手が状態異常に陥っていたり、体力を削ってもらったりしていた。

お膳たてをしてもらわなければ、ミニリュウはほとんど勝てないのだ。横たわりながらも、必死で涙をこらえている小さな小さな勇者を、わたしは迎えに行く。

「お疲れ様」

「……………み」

涙をこらえて、まっすぐにわたしをみつめるミニリュウ。

「わたしを信じて最後まで戦ってくれてありがとう」

「……………み」

まばたきをすると、はらりとしずくが零れ落ちる。

「わたしの指示不足にも原因はあるかもしれないけれど……………君は、弱い」

「……………」

先ほどのバトルでさんざんに意識させられた現実を、再認識させる。

悔しそうにうつむいた。

「強くなりたい？」

「……………」

うつむいた首で、さらにこくりとうなずくミニリユウ。

「そっか。でも、今は辛いけれど、今は悔しいけれど、それを力に変えて、いつかまた、ここにいる人たちをあつと驚かせてやろうよ」

「……………みい」

「ミニリユウ。キミは、最強のドラゴンタイプだ。大空を翔る猛々しい竜だ。今は弱くて辛い時期かもしれない。でも、君は何よりも強くなれる素質を持っている」

「……………」

「レンジのポケモンたちはみんなすつごく強いでしょ？」

「……………みう」

レンジのポケモンたちは、育てた年季が違う。

ミニリユウはレンジのポケモンたちを見て育っている。

雄々しく凜々しい“ウインディ”を。

それと互角に戦う“イーブイ”を。

自分を支えてくれる“ピクシー”を。

大空をはばたく“ピジヨット”を。

ミニリュウの頼れる幼馴染である「タツベイ」を。

ミニリュウはそんな彼らを思うと、自分との「格」の違いを思い知らされる。

「君も、そうなれる」

「……………みっ？」

わたしに懐疑的な視線を向けられる。

ゴロンを相手に、何もできなかった自分が、どうやってそこにたどり着けるのか。背中を追うことさえできないような差を、どうやって埋めるといえるのか。

完全に打ちのめされた今。そのビジョンを思い浮かべることができないのだ。

「ドラゴンタイプは、辛い時間が長いポケモンだ。最初から強いポケモンなんていない。だけど、弱さを忘れるポケモンは愚かしい。弱者の心を知れる、心優しい竜に育ってほしい。どうか忘れないで。弱くて悔しい、その気持ちを。弱者の誇りを」

「……………みい」

「そして、今度は強くなって、もう一回ここに来よう。もう一回戦って、今度は勝てばいい。そして、今度は一緒に祝勝会だよ。」

「……………みっ！」

ミニリュウは、カイリユウに進化するまで、時間が必要だ。

弱者でいる期間を受け入れ、忍耐強くそれに付き合い、やがてはだれにも負けない心優しき竜になる。

気合を新たににした桃色の小さな勇者は、その悔しさをばねに、もつともつと強さにどん欲になれるだろう。

「ただし、負けを受け入れたらダメだよ。『次は絶対に勝つ』この気持ちを切らさないようにね」

「みゅーっ!!」

「よし、おいで」

ミニリュウを抱き上げ、首に巻く。

3歳児ボディだと、ミニリュウ一人でかなり重い。

イーブイとわたしの身長差は30cm程度しかないし、ミニリュウは全長1mへたすればわたしよりも体長が長い。

ミニリュウは大きくなったら2mを超えるみたいだし、そうなると首に巻くことはできなくなっちゃうだろうな。

「なかなかいいミニリュウじゃないか」

「当然だよ。わたしのミニリュウなめんな! 強くなつてからそのゴローンをぶつ倒し

にもう一回このジムに挑戦しに来るんだから！」

「みゅーー！」

タケシがミニリュウの根性をほめてくれる。ミニリュウを『かくごしろよ！ ぜったいにたおすんだからあ！』とでも言いたげにわたしの肩から叫び声をあげた。その意気だ

「さあ、次はどのポケモンで来るんだい？」

タケシがゴローンを傍らで待機させ、次のポケモンの召喚を促す。

バタフリーはステロのダメージでまた傷つけさせてしまうことは避けたい。

ピカチュウは行動不能。ミニリュウもしかしり。

手持ちに残るは………キミだよ

ボールホルダーに手をかけ、モンスターボールを放る。

「行けるね、フリーサイン！」

「サイン！」

二本のスプーンを持ったキツネの悪魔。

フリーサインである。

レベルは17で覚えている技はテレポートとねんりきのみ

防御力とHPには不安が残るものの、素早さと特殊攻撃力はどちらもカイリユースを上回る。

カイリユースは物理特化の攻撃力が種族値134族であるのに対し、フーデインの特攻は135族とそれすら上回るのだ。

ゴローンとはレベル差があっても、素早さでは確実に勝り、攻撃力も勝る。フーデインに負けはない、と思う。

頼りになるよ、本当に。

レベル差があっても、向こうはゴローニャに進化前。

こちらはフーデインに進化した後だ。

実力の能力値でさえ上回っている可能性がある。

「ディッツ!」

まずはステロのダメージを受けるフーデイン。

防御力が紙でできているだけあって、かなり効くようだ。

だが、それで行動不能になるような腑抜けではない。

「先制行け！ ねんりき！」

「フー………！」

フーデインが目をつむってスプーンに念を送ると、ゴローンが紫色のオーラに包まれる。

そのまま、ゴローンを持ち上げる

「ンゴォー！ ンゴォォー!!」

苦しそうにもがくゴローン。

空中にいちや行動もできないだろう。

「振り払うのはむりか………なら、がんせきふうじ！」

空中でもがきながらも、ゴローンはタケシの指示に従って岩石封じを発動する。

フーデインの真上に岩石が出現。このままではフーデインが押しつぶされてしまう

「ねんりき解除。『テレポート』で背後をとれ！」

「デイー！」

「なに!？」

岩石封じは空を切る。

フーデインがいた場所に岩石が突き刺さった。

同時にゴローンも地面にたたきつけられる。

ガバツと顔を上げたゴローンだが、目の前には当然誰もいない。

「ゴローン！ 後ろだ！ “ころがる” 攻撃！」

「超能力の前では回転など無意味としれ！ “ねんりき” !!」

転がるが発動する前にフリーデインはゴローンの体を浮かせ……やはり念力じゃきつそうだな。せめて“サイコキネシス”あたりだったらもつと強くゴローンを拘束できただろうけど、しようがない。

「ゴロオ！ ンゴオ！ ゴロアアア!!!」

「たたきつけて黙らせて!!」

「フーツ！」

念力で思い切り地面にたたきつける

「“がんせきふう”——」

「“テレポート”」

「またか！ うしろだゴローン！」

何度でも繰り返し返してやるよ。

対応なんかさせない。

「ゴロア!?!」

「ツツツシヤ！」

「みゅーっ♪」

「ブーイ！」

拳を突き上げて飛び上がるわたし。

イーブイとミニリユウも喜びをジャンプとくねくねで表現している。

ミニリユウがくねくねするたびにわたしの重心がズレておととつとつてなっちゃう！

何はともあれ！ これで、ニビジムクリアだよ！

～おめでどう、オレンちゃん

ありがとう、レンジ。レンジも今度はタケシに挑戦したらいいよ

～気が向いたらな。エリカ様と戦うまではお預けだ。

そか

「すごい！ すごいよオレンちゃん！」

くりむちゃんがわたしの勝利を喜んで駆けつけてくれた

そのまま抱き上げてわたしを抱きしめてくれた。

おっふ。膨らみかけの胸とコツコツした肋骨の感触がわたしの肋骨を駆け巡るぜ！

「えへへ、勝ったよ！ ちゃんと見てた？」

「見てた見てた！ みんなすごく強いよ！」

「みゅー！」

「うんうん、今回は負けちゃったけど、キミもいっぱい頑張ったね、ミニリュウ」

「みゅりー！」

やさしくミニリュウの頭をなでるくりむちゃん。

ミニリュウは悔しそうだけど、チームとしての勝利はうれしいようだ。

それならよかった。ふてくされなくてよかったよ、ほんと。

「すごいなあオレンちゃん。とっても参考になったよ」

「そっか。それならよかったよ。今度はレッドさんがタケシさんに挑戦する番だよ。今度こそ勝たないとね！」

「ああ。だが、今はまだまだ修行が足りないからな。もう少しだけトキワの森でヒトカゲを育てたら、もう一度ここに来よと思う」

「それがいいよ。あー……………つかれた」

わたしもレンジも、バトルで叫んで熱くなっちゃったから、のどが渴いてきた。

水筒からおばあちゃん特製のアツアツのお茶を取り出してぐいっと飲む。

すると、タケシがパチパチと手をたたきながらこちらに歩いてきた

「見事だったよ、オレンちゃん。まさかここまでやるなんて思ってもみなかった。キミのポケモンみんながキミのことが大好きで、キミに応えようとしてくれた。いいトレーナーの素質を持っているよ」

「ありがとう」

「正直、俺は君のことを見くびっていたらしい。3歳児だと思って……決して油断していたわけではないんだがな……正直、やられたよ。完敗だ」

握手を求められたので、素直に応じる。

「これがグレーバッジ。受け取ってくれ」

「はい！」

〽ごつごつしたバッジを手に入れた！

〽テツテレー！

〽テレテツテレー！

〽デンデー——ン!!

たしかにそんなBGMが流れそうだけどき。脳内ファンファーレはやめてよレンジ。

☆

ジム戦も終わり、ポケセンでチンチンチロリン♪してもらったから、ニビシティからタママシに戻ろうと思う。

「えー！ もう行っちゃうの？」

「うん。でも、また会えるよ。何かと縁がありそうだしね」

なにせ、わたしとレンジがちよっかいを掛けに行くからね。

メインヒロインと主人公の行動は把握していたほうが、より面白おかしくポケモンの世界を堪能できるっつもんだ。

「じゃあね、クリムちゃん！ レッドさん！」

「ああ、また会おう！」

「今度会ったら私とバトルしてね！」

「うん！ 約束だよ！！ フーデイン、お願い」

こうして、ちゃんとしたジム戦でバッジをゲットすることができました。さて、これでトレーナーズスクールでも自慢できるぞ

.....

.....

...

「お婆ーちゃんただいま。バッジゲットしたよ！」
「おやまあお帰りなさいオレン。よくがんばったね」

ああ、我が家は落ち着く。

第23話 3歳児はやらかして心配される

2, 4, 6つと。……………2, 4, 6。ボールホルダーよし。

バッグの中の木の実と傷薬、すごい傷薬、なんでも直し、穴抜けの紐。技マシンケー
ス。折り畳み三輪車。よし。

水筒よし、酔い止め薬、よし。絆創膏よし。消毒用アルコールよし。ひじ当て、ひざ
当てよし。

着替えよし。ピカチュウ耳カチューシャ……………なんでこんなものがバッグに入つて
いるんだ？ まあいいや。カチューシャよし。

「さて、行くか……………」

「ブイッ！」

足元のイーブイもフンスと息を吐いて俺の隣に並ぶ。

やる気十分だね。俺はかたゆでタマゴ風に三輪車にまたがり、サングラスを装着す
る。

ここでタバコでもあつたら最高にハードボイルドかもしれない。

でも、残念ながら自分の肉体が3歳児という低スペックなため、どんなにハードボイルドにふるまおうと頑張っても、どうあがいてもソフトマイルドにしかならない。

ちくしよう。

「あら？ レンジさん、三輪車にのつてどこかに出かけるのですか？ 本日はジムも生け花教室もお休みですから、一緒にお買い物に出かけようと思ったのですけど……。お天気もいいみたいですからお昼寝日和ですし、お買い物の後には一緒にのんびりしようと思ったのですが……残念です」

そんな悲しそうな顔しないでエリカ様。

お買い物つて言っても、オレンちゃん用の布の買い出しでしょ？ 俺（・）はいかな

いよ

～えーっ！ わたしも買い物に行きたいのにー！

今回は俺に譲れ。オレンちゃん。

たしかにエリカ様に抱き着いておっぱいや腰つきを堪能品から眠るのも最高に幸せだろうけれど、本当に魅力的だけれど、それはまた後日ということ……おっぱい……くそう……

～未練たらたらじゃないの、レンジ。

あたりまえや！ エリカ様と一緒に昼寝だぞ。魅力的過ぎて当然だ！

「ブイ……………」

イーブイも俺の足を踏まないでっ！

〜うー……………でもしようがないか。先約があるからね

ああ。それを反故にするわけにもいかないからな。

「ごめんね、エリカ様。僕、今日はトレーナーズスクールの子たちとサイクリングをするって前々から決めてたんだ」

「予定が入っていたのなら仕方ありませんね……………仕方がないので、今日はもうお昼寝しま……………す……………す……………す……………」

あ、寝た。

エリカ様も忙しい身だ。

最近はおレンちゃんを着せ替え人形にしてストレスを発散していたらしいけど、それができなくて、たまっていた疲れが押し寄せて、姿勢よく座ったままお昼寝するというに至ったようだ。なんでやねん。

エリカ様は器用だね。

たしかFRLGでもエリカ様は主人公と戦う前にしゃべっている途中で寝ていたし、かなりマイペースなんだろう。

それに振り回されるオレンちゃんはかわいそうだ。

～レンジもでしょ

だが、そのおかげでオレンちゃんが産まれてしまったと思うとなんだかエリカ様に感謝したくなる。

～まあ、たしかにね

「それじゃ、行つてきます」

「ふあい……………気を付けてくださいね……………すう……………」

「……………」

うーむ。

～お部屋まで連れて行つてあげようか。

そうすつか。

寝落ちしてしまいそうなエリカ様をなんとか誘導してお部屋のベッドに連れていき、エリカ様の着物の帯を緩めてから、再び三輪車にまたがり待合場所へと向かった。

☆

「あ、レンジー！」

「来たな、レンジー！」

「遅れてくるなんて、ズルいわよー！」

「早く来いよー！」

トレーナーズスクールタママシ支部の俺の生徒たち。

フウとラン。

それにケントとサナエちゃん。そしてハヤト。

フウとラン以外は影の薄い子たちとサイクリングの約束をしていたのだ。

実はこの3人組も成績は優秀。

まあ、この俺が教えているんだ。当然の結果だな。

▽自己評価高杉ワロタ

うっせえ黙ってる。オレンちゃんが思っているよりもレンジの肉体的にも知的にもポテンシャルは高いんだよ。3歳児の肉体でも縄跳びで3重跳びくらい簡単にできるほどにな。

▽前世では無理して5重跳びが限界だったらしいね。

まあ、なんだ。前世でもアウトドア派だったから、体の動かし方の基礎はわかるし運動能力は高い。普通の3歳児よりはハイスペック幼児なはずだ。

▽そんなハイスペック幼児が三輪車にのってサイクリングに行く、と。

3歳児用の自転車なんてねえんだよ……しかたねーつつの

それにほら、よく見ろ。5歳児組はみんな補助輪付きだし、フウとランは買ってもらったばかりの新品自転車だぞ。

そんななかで3歳児の俺が慣れた手つきで自転車をこいでたらおかしいじゃねえか。

▽そりゃあ、たしかに。まあ、記憶は共有しているからわたしだって同じように自転車に乗れるわけなんだけども。

だったらオレンちゃんにとやかく言われる筋合いはねーよ。

「みんなおまたせ！ それじゃ、いこっか！」

オレンちゃんのアホは放っておいてサングラスを頭の上にならずらして三輪車の上から手を振る

訓練を重ねに重ね、エリカ様のジムトレーナーたちとも毎日のように戦闘訓練を行い、イーブイのレベルはすでに50を超えている。

すごく強い。

「わあ！ レンジのイーブイが戦うところ、初めて見る！」

「いつもピカチュウとミニリユウだもんね！」

そりゃあ、今鍛えないといけないのはオレンちゃんのポケモンだからね。環境は整っているから、すぐにレベルが上がるんだよね

三輪車にまたがりながら、俺のリユックの中から周囲を見回していたイーブイがリユックから飛び出す

「ブイブイ！」

「勝負の世界も野生の世界も弱肉強食！ イーブイ！ あの群れの中で一番足の速い奴を見繕え！ そんで勝て！ そしたら味方に引き入れる！」

「ブイ！」

イーブイはドードーの群れへと突っ込み、カマーンと尻尾を振って挑発する。

すると、ドードーの群れの長のような一回り体の大きな二つ頭がダシン！ と地面を強く踏みしめてイーブイの前に立ちはだかった。

どうやらこのドードーは珍種らしい。

すでにドードリオの片りんを見せているではないか。

二つ頭の右脳担当がキリツとした目で怒ってそう。

左脳担当が悲しそうというか、おびえている感じ。

仲悪いのかしら。

ドードーの凶鑑はたしか、時速100kmで走ることができるとっけ。

ドードリオが時速60kmで走ることができるとかなんとか。

進化したのに速度落ちるんかい。という突っ込みをしたくなる鳥ポケモンだ。

それなのに素早さの種族値はドードリオになると伸びるといっわけのわからない凶鑑説明。

もはやなにも信じまい。

「ドー……ドー……ドッドー……」 「ドー………」

「………ブイ」

イーブイたちのほうを見てみれば、ドードーの右脳が『ワレエ、ウチのシマになんの用じやい』左脳担当が『そうだそうだ………』

とイーブイに難癖をつけていた。

いや、ドードーのセリフは俺のアフレコだからね。適当翻訳だからあしからず

イーブイも『黙って私と勝負しなさい』と強者の雰囲気隠すことなく発揮して口元をにやけさせる。

イーブイは鈍足だ。

鈍足だが、レベルはすでに50を超えている。

この辺のドードー程度がかなうわけがない

はい、というわけでレーススタート。

「GOイーブイ！ 行先はセキチクの入り口まで!!」

「ブイ!!」

ダツと駆け出すイーブイ。

そして、負けじとイーブイに続いてドードーの長が長い足を高速で回転させイーブイに食らいつく

「おれたちがおもつてたバトルとちがう!」

「ポケモンしようぶしないなんて、ズルいわよ!」

ズルくないです、戦略ですー。

「つしゃアオラ!! 追うぞア!!」

キコキコと三輪車を漕いで下り坂を猛スピードで下っていく。

「あ、わたしもいく! ズルいわよ!」

「フウ、イーブイを追うわよ」

「ラン、レンジを追おう」

「まてー!」

ギヤハハハ! せつかくの休日だ! やり居たい放題やっちゃうよ俺は!

「おっ おお! おおおあああああああ!!!?」

イーブイとドードーがデッドヒートを繰り広げているなか、俺は重大なことに気付いた。

サイクリンググロードは長い長い下り坂。

そして俺の相棒のスーパーマシンは三輪車。

タمامシデパートで自分のお給料で買った5,980円の子供用三輪車だ。

素材のほとんどがプラスチックでできている。

こんな安物の三輪車に乗ったことのある人ならわかるだろう。

三輪車には……………

「ちよー！ レンジ早すぎ!!? ズルいわよ!!」

「レンジー！ ブレーキブレーキー！」

「さすがにそのスピードは危ないよ!!」

そう、三輪車には、チェーンもついていなければ、ブレーキコードもない。

つまり……………

「止まる手段がなああああああああああああああ
!!!!!!」

もうとつくにペダルから足は放している。

この状態からペダルに足を掛けようとしたら、比喻でもなんでもなく、間違いなく足がもげる。

前輪の回転数とまったく同じ回転数でペダルが回っているのだ。ペダルに触れた瞬間、確実に骨が折れる。

伊達に3歳児ボデイは丈夫ではないのだ。

マシンのコントロールだけは失ってなるものかとハンドルだけは必至でに入り込ん

でいるものの、3歳児パワーでどれだけ持つか。

いやあ、ははは、困ったね

▽アホ——！！！！

いやあ、困った困った

▽困ったじゃないよ！ これ大けがするか死ぬやつじゃん！！ レンジが死んだらわたしまで死んじゃうんだよ！！ 考えなしにこんな意味わかんないことしてんじゃないよ

——！！

——ガリイ！

▽ちよ、今の音って……………

あつははは、やばい、今ちよつと足を地面につけて減速を図ったのに靴底が削れた。

しかも、スピードに耐えかねてプラスチックの部品が砕けたっぽい

▽うそおおおおお！！！！？

今の自分の時速がおよそ80km。

「ブイ!？」

俺はごくごく冷静に三輪車のサドルに左足を乗せて尻を浮かせる。

頭の中はもうドーパミンもアドレナリンもエンドルフィンもドバドバでハイになっちゃってるな

脳内麻薬もドツパドパ。

冷静もくそもないね。

うーん、サイクリングロードはほぼまっすぐ。そして、最後は直角カーブで百メートルほど進めばセキチクシテイだったような。

まだまだ坂道は長いな。

そのうち時速100km超えそう。

左腕でボールホルダーに手を伸ばし、右腕一本で舵を取る。

「ピジョット！ 出ておいで!!」

「ピジョオ!!? ピジョットオオオオオ!!」

出てきてそうそう大絶叫

慌てなさんな。あんたのご主人様は無敵やで

～ちよつと！ 前!! 看板!!

ふえい？ オウノウ！

舵を取ろうとしたら確実に横転するから、突っ込むよ。

～ぶつかるじゃん!!

バギン!! と前輪が完全に壊れた。

タイヤが外れてプラスチックが高速でこすれて火花が散っている。

ガクンと衝撃が体を貫き、思わず浮きそうになる体をどうにかサドルを踏みしめた左足で踏ん張って耐える。

「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!! ピクシー!!」

おかしなテンションのまま上空にモンスターボールを投げる。

不安定な足場から放り投げるだけだから、それほど高さはない。

「ピイイイイイイイイイイ!!」

「イブイ———!!!」

出てきて早々に大絶叫。負けじとイブイも絶叫を上げながら必死の形相でこちら

に追いついてきた。

前輪が壊れたことでスピードが落ちたんだな。

ピジョットとピクシーは俺の意を組んで、落下中のピクシーをピジョットが受け止める。

〽看板！ というかお得な掲示板！ もう目の前!!

オウケイ！ レンジ、飛びまーす!!

「っしやおらああああ!!!」

サドルに両足を乗せて思い切り跳躍した。

「レンジイイイイ!!!」

「いやああああ!!!」

「ブイ——!!!」

それとほぼ同時に、三輪車が看板の支柱に激突。ガシャンという破碎音とともに、子

供たちの悲鳴が俺の鼓膜を打った。

くるくると回転しながら宙を舞う俺。

うえ、酔った。

「ピクシー、サイコキネシス!! 僕を受け止めて!!」

三輪車は大破したものの、空中に居ては俺のスピードは変わるわけがない。

というわけで、ピクシーのサイコキネシスで俺を受け止めてもらおうと考えましたア

!

「ピクシーイイイイ!!!」

全力のサイコキネシスで俺の体を包み込むピクシー。

次第にスピードはなくなっていくけれど、風がビュンビュンと頬を打ち、見える景色がいまだに高速で流れてゆく

「うぐえ!!」

さらには急激な減速による強烈なGが俺の体を襲う。

急停止だったら看板にぶち当たるのとまったく変わらないダメージを追うことになるから、これでもましなほうだ。

いくらピクシーでも、全力を出しても、こんな高速で動くものをサイコキネシスで動く物体を停止させろなんて言われても無理に決まっている。

まずいな。このままじゃ俺のスピードのほうが勝って地面に激突してしまうぞ。

∨道路のシミになるなんていやあああああ!!

足が空のほうを向いている状態で未来を分析していると、オレンちゃんが絶叫を上げる。

ガンガンと頭に響いてすぐくうるさい

でも、どうにかする手段も思い浮かばない。

大けがを覚悟で受け身を取る体制に入ると、腰のあたりがなにやら細長い布のような感触につつまれた

∨……………これは……………!?

まさか……………!

☆ フウ S I D E ☆

「レンジイイイ!!」

レンジの三輪車はブレーキがついていない。

ドードーとレースをしようがしまいが、遅かれ早かれこういう状況になっているはずだったのだが、こんな状況になってから気付いても時すでに遅かった。

レンジはまだ自転車に乗れるような年じゃない。

だから当然のように三輪車だったのだが、こんなことになるならレンジをサイクリングに誘うんじゃないか。

と今になって後悔している。

「ラン、ラン！ どうしよう！」

「フウ、わたしにもわかんないよ！」

慌ててランにどうするかの確認をとればランも気が動転していて何が何だかわからない状態だった

「あ!!」

そして、レンジのほうに向きなおればそこで目に入ったのは――

ガシャン！ と三輪車が看板にぶつかり、その衝撃でレンジが宙に放り出されてしまったところだった！

「いやあああああ！」

「レンジ――!!」

年下のトレーナーズスクールの生徒であるサナエちゃんとハヤトがレンジの惨状に絶叫を上げる

こんなときこそ年長者である僕たちが落ち着いておかないといけないのに、頭のいいレンジがあんなことをして、大けがをしているかもしれない。そう思うと、心が落ち着かなかった

「あ、あれ？　なんかいつのまにかピジヨットとピクシーがいるよ!？」

「あ、なんかレンジの体が……ピクシーのサイコキネシスだ!」

ランの言う通り、いつのまにかピジヨットとピクシーがレンジの後を追うように空中を滑空しており、宙を舞っていたレンジの体が次第に減速していくのが見えた

「イブイ——!!!」

さらには、レンジの一番のパートナーであるイブイも、必死の形相で掛けていたあのまま地面に激突すれば、レンジはただでは済まないだろう

イブイは、なんだかんだでレンジのことが大好きなのだ。

よくレンジの足を踏んでいるのを見かけるけど、その時のレンジは、たいてい何かに気を取られている。

イーブイはもつと自分にかまってほしくて、控えめにアピールをしているというのは、遠目からでも見て取れる。

レンジもイーブイのことは大事にしているし、互いの絆も愛情も、僕らがレンジから預かったペルシアンやキュウコンとは比べ物にならないほどに。

どうやったらそんなに必死に自分のことを心配してくれるようなポケモンを育てることができるだろうか

どうやったら、僕らもペルシアンやキュウコンの心を、それだけ開かせることができるだろうか。

レンジは、口は悪いけれど、ポケモンとの絆を産む力は一流だ。ポケモンの知識も、大人よりもある。

だからこそ、こんなにもポケモンたちはレンジのために必死になれる

「あれ？ イーブイが、なんか光ってるよ!？」

「ほんとだ! もしかして……………」

ランの言葉でイーブイをよく見てみると、確かにイーブイの体が光って見えた

ポケモンは育てていくと、進化をする。

時には懐き具合で。時には交換で。そして、時にはピンチの時に。

「レンジのピンチを助けたい一心で、イーブイが進化しようとしているんだ！」

イーブイは、レンジのことが大好きで、愛おしくて、だからこそ、必死になれる。

レンジのためなら、イーブイは奇跡を起こせる！

「がんばれ、イーブイ——！！」

「ブイ——！！」

イーブイの体が強く発光し、その小さな体が徐々に形を変えてゆく

放物線を描きながら宙を舞うレンジのもとへと、細長いものが伸びる

イーブイは必死に走りながら、進化をしながら、レンジを助けることだけを考えているんだ

「ブイ………ファイア——ッ！！！」

進化が完了したのか、桃色の体で疾走しながら触手を伸ばす、見たこともないポケモンがそこにいた

「ニン……………ファイ——！！」

必死で伸ばした触手はレンジの体をガツチリと捕まえ、ピンと触手を伸ばしたそのポケモンはガリガリと土煙を上げながらブレーキをかけ、猛スピードで地面に落ちそうになっていたレンジの体の勢いを、何とか止めることに成功した

「すごい……………！」

「あんなポケモン、見たことない！」

教科書に載っているポケモンは、カントー地方にいるポケモンばかりで、ほかの地方のポケモンは見たことない。

ホウエン地方のポケモンだったら少しはわかるけど……………

たしか、イーブイは進化ポケモン。

ほのおの石でブースターに

みずの石でシャワーズに

かみなりの石でサンダースに進化したはずだ。

そのほかにも、夜になるとブラッキーに

昼にはエーフィに。

たしか、森の中や氷の洞窟でも進化をするって聞いたことがある。

それと同じように、イーブイは新たな進化をしたんだ！

イーブイの進化の可能性は無限大だ！

「ニン、ファイア？ おまえ、イーブイから進化したのか？」

レンジはイーブイの進化したポケモンが勢いを殺してくれたおかげで、ピクシーのサイコネシスが働くようになったようで、空中でさかさまになりながら、自分に巻き付く触手をなでる

「ファイアンファイー！ ニンファイー！ アンファイーア!!」

何事かをレンジに向かって叫び続けるポケモン。

ようやく僕たちもレンジが宙に浮いている場所にたどり着けた。

ドードーもわけがわからないとばかりに首をひねりながら、近くでおろおろとしている

「あう、心配かけてごめん、ニンフィア。俺が悪かったよ……」

「アンファイ——!!」

「うわっ!」

地面に降ろされたレンジは即座にそのポケモンに押し倒され、両手足を押さえて馬乗りになった

レンジは3歳だ。

イーブイの時点でレンジの腰のあたりまでだった体が、レンジと同じくらいの大きさにまで成長しているんだ。

レンジには、その子をどかす筋力はない。

されるがままに拘束されてしまったようだ

「ファイアー!」

「ぶへっ!」

水色の瞳を潤ませ、大粒の涙を流しながら、進化したことによって生えた触手で動けなくしたレンジの頬を容赦なくぶっ叩いた

「アンファイ!」

「ブバッ!」

さらに往復でもう一回たたいた

さらには、タシタシとレンジの胸を前足で叩く

「ブブツッ！」

その間も、その子はレンジの頬を触手でピンタを続ける

大粒の涙を流すその姿に、どれだけの心配をかけたかがよく見て取れた

「ファイア、ファイア~~~~~!!」

ようやくレンジをたたくことに気がすんだのか

レンジの胸に顔をうずめ、ボロボロと涙をこぼしながらぐもつた声を、そのポケモンはずっと漏らしていた

「……………ごめんね、ニンファイア。ありがとう。すごく助かったよ」

レンジはそのポケモンの頭をやさしくやさしく撫でて、ボロボロと涙を流すその子を抱きしめて、しばらく横たわっていた。

第24話 3歳児はサフアリパークへ行く

さて、三輪車も大破したことで、サイクリングロードでサイクリングできなくなってしまうた。

「レンジー！」

「大丈夫なの!？」

「無事なら無事って言いなさいよ! ズルイわよ!」

ズルくないです、仕様です。

子供たちに囲まれて心配されること早数分。

ピクシーのサイコキネシスとニンフィアの触手のおかげで俺に怪我はない。

あるのは心配をかけたニンフィアにぶつ叩かれた頬がはれ上がっているくらいだ。

「みんな、心配してくれてありがとう。もう大丈夫だよ」

「そう、よかった………」

ホッと息をつくラン。

「ニンフィアも。進化しちゃうほど心配かけてごめんね」

「フィッツ」

もう知らない！ とばかりにそっぽを向くニンフィア。

しかし、その触手は俺の手首に巻き付いている。

あとついでに俺のおなかの上からどいてもらえたと助かるかな。

イーブイの頃ならまだしも、3歳児の肉体だとニンフィアは流石に重いつて……………

「みんな、これからどうしよう。レンジの三輪車は壊れちゃったし」

「レンジに怪我はない？ 歩くのも大変だったら、タマムシに戻ろうよ」

ハヤトとフウも心配そうにこちらを見下ろす。

ねえ、早くニンフィアを僕からおろして

「せっかくここまで下ってきたんだし、セキチクまで行こうよ。僕はウインディの背中に乗るからさ」

「レンジがそういうなら、それでもいいけど、もう危ないことはしないでね？」

「懲りたよ。大丈夫。」

「フィ……………」

手を振りながらフウとラン、そしてハヤトやサナエちゃんにもうしないことを誓う。だというのに、それでも疑わし気にニンフィアはこちらを見つめてきた。

しよーがないなー。

「ニンフィー!?!」

俺はニンフィアを抱きしめた

驚いたように目を見開く。

「えい」

「フィア……………」

そのままコロロンと転がってニンフィアを横倒しにして自分も転がる。

潤んだ青い瞳と目が合った。

怒気は収まっていないものの、それを補うほどの親愛がその瞳には込められている

俺がニンフィアが大好きなのと同じように、ニンフィアも俺のことが大好きなのだ。

そんなことは知ってる。イーブイが危険なことをしたら、俺は全力で止めただろう。

相棒が居なくなる、それは自分の半身が居なくなるも同義。この子が泣いているの

は、心配をかけた俺のせいだから。

だから——

ぎゅつと、ぎゅつと、僕はニンフィアの頭を包み込んだ

「ありがとうね」

「……………ファイア！」

だから、これ以上の謝罪はいらない。ただ一言。感謝を述べるのみ。ぷいっとそっぽを向くニンファイア。

そんな彼女の頭をなでてから、僕も起き上がる

「出てきて、ウインディ！」

「……………ガウ」

「おふっ！ 踏んでる！ 踏んでるよウインディ！」

起き上がったのにウインディに前足で踏み倒された

なんてことをしやがるこのワンちゃんは！

ボールから状況を見てやがったな。

しかも、俺を踏みながら「何心配かけとんのじゃワレ」と言いたげに見下ろしてくる

！

「これは他のポケモンたちからも甘んじて受けるべきだな」

フウが腕を組んでうなづく。よせやい。

「レンジが心配をかけたのは事実だもんね」

ランまでそんなことを言い出した

「ピイ」

「ジヨット……………」

「ドードー！」「ドードー……………」

じりじりところらに寄ってくる心配した組みのピクシーとピジヨット

しかもなんかドードーとか混ざってませんかねえ！

あなた部外者だったよね!?

▽わたしも、レンジにおしおきしたいんだけど

な、なにを言い出すんやオレンちゃん。

▽下手したら死んでたんだから、当たり前だよ

せやかて工藤、あの三輪車じゃ止まり様がなかったねんねんで

「下手な関西弁使うなうんこたレンジ。お仕置き代わりに右手の使用権はわたしがもらうね」

「な、なにをするだー！」

「あれ、レンジ!?!」

「なにをして……………!?!」

オレンちゃんが俺の右手を勝手に動かし、左手で阻止する間もなくバッグからピカチュウ耳のカチューシャを取り出し、素早く装着した!!

「オレン……………ちゃん?」

フウが驚いた顔でこちらを見つめる。

カチューシャさえ装着してしまえばわたしのターンよ!

「ぬがー! 入れ替わられたああああ!!」

「みんな! レンジのアホを懲らしめてやって!」

「ばっ! ウチのポケモンたちはみんなレンジとオレンちゃんの入れ替わりを知っている! そんなことをすれば……………!」

「それでもって、このカチューシャをぼいとね。」

「ああああああああ!!」

「あ、レンジに戻った」

ランが冷静にこつちを見ながらつぶやく

「なんでレンジは自分のことを懲らしめるなんて言ってるんだ？」

「いまごろじぶんがシンパイをかけすぎたことにきづくなんて、ズルいわよ！」
訳が分からず首をひねる子供たち。

それをしり目にピジヨットとピクシーとウインデイが俺の前に立ち、見下ろす

ニンファイアは、先ほどまで自分が率先して俺をぶつ叩いていたからか、半歩引いて俺をほかの子たちに譲った

そんな譲り合いの精神はいらない!!

「いたい、いたいって！ つつかないで！」

「ピジヨットー！」

「ピクシーー！」

「おっふー！」

「……………」

「なんか言つてよウインデイ！ 無言で見つめないで！ 怖い！」

「ズー」「ズー……」

「てめえはとりあえず混ざってくんやドードー！」

こうして、レンジはみんなにお仕置きをされたのであった。丸。

☆

し、しどい目にあった……………

＜わたし、痛覚も共有してるんだった……………すごく痛い……………

バーカ

＜レンジほどじゃないもん

ピジョットにつつかれ、ピクシーにのしかかられ、ウインディに踏まれ、ドードーに励まされ、ニンフィアにそっぽを向けながらも到着した、セキチクシテイ

あ、ドードーはゲットしました。

セキチクにいた係員さんに途中で三輪車を大破させたことを報告し、三輪車は回収及び廃棄してもらうことになった。

ゴミ持って帰っても仕方ないしね。

リュックを背負ってピカチュウカチューシャを左手に握りながら、トボトボと歩く。

「ファイア………」

その間も、心配そうに俺の右手首にずっと触手を巻き付けているニンファイア。

もう二度とおかしなことはさせないとも言いたげだ。

歩みの遅い俺に合わせてゆっくりと。

やさしいなお前は。

「レンジャー！ はやくおいでよー！」

「あ、まってー！」

フウに呼ばれて駆け足でそちらに向かう。

みんなはポケモンセンターの前で俺の到着を待っていてくれた

なにもサイクリングだけの予定でセキチクシテイにまで来たわけじゃない。

セキチクシテイには何がある？

よく思い出してほしい。

そう、入れ歯をなくしたサファリパークの園長が居る!!

じゃなかった。

大事なのはサファリパークの方ね。

自転車はサイクリングロードの終点で預けてある。

セキチクについてからは徒歩での移動だ。

とはいえ、俺の肉体は3歳児。

歩幅も短いし短足だし、体力もない。

ちよこちよこポテポテと走るしかないのである

段差が高くてポケモンセンターへの近道ができず、仕方なくジムやポケセンを遠回りして回り込み、海水浴場をチラリと一瞥してからサイクリングが終わって一時休憩のためにはポケセンにやってきた次第だ。

海水浴場か……。

まだ春先で涼しいくらいだけど、もうちよつと気温が高くなって来たらセキチクシテイで海水浴とかいいかもね。

エリカ様の水着姿を拝めるかも

～レンジ！ エリカお姉さまの肢体を衆目にさらすのはわたしは反対だよ！

たしかに。お風呂場でエリカ様の裸体を正面から抱き着いて堪能できる身分として

は、髪の毛一本すら渡したくないもんね。

素肌をさらすなんてもつてのほかだ。お父さん許しません。

～エリカお姉さまを誘うのは却下。行くならくりむちやんとにしときな

あの子がレンジの誘いに乗るわけないでしょ。その時はオレンちゃんが誘いな

～や、わたしも男なんだけど……。水着で気づかれるよ？

アホ抜かせ。どうせ3歳児のミニママサンだろ。レオタード着てたつて気づかれねーよ

10年後に皮剥いてからほぎきやがれ

～それ、自分の肉体のことだよ。ブーメランしてるよ

うっさい。いずれビッグサンになるんだよ。

「ふいー、ポケセンは涼しい。あ、ジョーイさん結婚してください」

「あら、かわいいお客様ね」

心の中でオレンちゃんと言ひ合いをしながらポケセンに入る。

ポケセンに入るや否やプロポーズするのも忘れない。

そしてジョーイさんのスルースキルもとてつもない。

どこに行っても同じあしらわれ方だ。マニュアルでもあるのだろうか

「おい、早くしてくれよ。こっちは急いでるんだ！」

と思つていたら、どうやらジョーイさんは接客中だったようだ。

そりやあ僕なんかに構つてられないね。

黒い服を来た男がジョーイさんに怒鳴りつける

コツコツと靴を苛立たし気に鳴らしながらジョーイさんを急かす。

行儀の悪いあんちゃんだね。

しばらくして『チンチンチロリン♪』が聞こえてきた。

奥からラツキーが台車を押してモンスタールボールを運んでくる。

奥には数人のジョーイさんとドクターさんが居た。そりやそうだよね。

「はい、お預かりしたポケモンはみんな元気になりましたよ♪」

「ちっ！ 早くしろよな。おいガキ！ 邪魔だ!!」

「あ、すいませーん」

さつと謝つて道を譲る。

あーいうのにはかかわらないのが一番！

∨……………

何か言いたげだね、オレンちゃん

〽今の人って

ああ、ロケット団だったね。

正面に赤いRの入った黒い服。

ロケット団の下っ端の服だった。

〽……………どうするの？

あん？ どうするもこうするも……………

俺はスマホを取り出して110に電話を掛ける

「あ、もしもし。匿名希望の3歳児ですが。セキチクシティにロケット団の構成員らしき人物を見かけました。何もなければそれでいいのですが、何か起こったら怖いので、助けてください」

〽……………行動が早い

「はい。……………はい、お願いします。では、失礼します」

ぶちつと通話を切りました。

すぐにセキチクシティの警察官たちが町の警戒を強化してくれるって。

これで何も起こらないならそれが一番。情報ありがとうって言ってたよ

〽いや、聴いてたよ。大丈夫

それにしても、原作にセキチクシティでロケット団の構成員っていたっけ？

〽いや、そんなことはなかったと思うけど……………

うーむ、何か起こりそうなトラブルの予感

〽そういうやまだわたしたちってそういうトラブルに巻き込まれたことってなかったよね

大きなトラブルと言ったら、マサヨシがミニリュウのタマゴをたたき割ったくらいだもんな

セキチクシティはサファリパークがあるし、ある程度レベルのある珍しいポケモンが見つかるところでもある。

ここにしかないポケモン、例えばガルーラやラッキーなどは強力なポケモンだ。

ん？　　そういえば、カイロス、ストライクはタママシのコイン交換でも手に入る。
生息地はサファリパークのみだ。

珍しいポケモンの部類に入るだろう。

ロケット団も、いい金になるポケモンだと思っているはずだ。

そうか、定期的に不法侵入なりなんなりでサファリに入って乱獲している可能性がなきにしもあらず！

～妄想を膨らませただけだけど、ないわけではなさそうだね。実際ウチのピクシーはロケット団にオツキミ山で乱獲された子なのだし。

といつても、3歳児の俺には何にもできないけどね。主人公じゃあるまいし、無尽蔵の体力も無敵の肉体も持っていない。

警察に任せましょ

～そうだね

ポケモンセンターに入ったら、パソコンを操作しなくてもスマホでポケモンの転送ができる。

レンジのスマホを起動つとね

ドードー、捕まえてそうそうなんだけど、仮想空間で遊んどけ。

「レンジ、何してたんだ？」

「ん？ なんでもない。」

スマホをポケに仕舞う。

ポケセンやおばあちゃんの家じゃないとポケモンの入れ替えはできない。

神様は俺をこの世界に放り込んだだけで、何一つチートな能力はくださらないんだもの。

まあ、そんなもんあったらつまんないけど。

「あ、そこな美人のウエイトレスさん、シャンパン一つ」

「おだてても何も出ないですよ。あとシャンパンは早すぎです」

「あうち」

喫茶スペースでバイトをしていたらしきバイトさんにシャンパンの注文をすると、ポンと頭を撫でられた

残念、ナンパ失敗。

「ファイア………」

そつと足を踏まないで。その辺はイーブイのころから変わらないのね

☆

「というわけで、やってきましたサファリパーク！」

「イエーイ！」

「エーイ」

「エーイ」

「みゅー♪」

え？ ロケツト団？ 警察が何とかしてくれるでしょ。

電話したんだし。

これで子供のいたずらでも思ってたら警察なんか滅んでしまえ

こちとらサイクリングロードを抜けてまでサファリパークまで来たんだよ。

いまさら予定の変更とかありません。

外の世界に興味津々のミニリユウも、さすがにカバンの中に入るようなサイズじゃなくなってきたから、モンスターボールから飛び出して、俺の首に巻き付いてきよろきよろと周囲を見渡しているよ

桃色の身体だから、少々目立つし、さすがに重い。

首に3キロ近いおもりをつけているのだ。重くて当然だ。

んでもって……………

『右手に見えますのが、ガルーラの親子連れです』

ガイドさんの指示に右を向けば、ガルーラの親子が木の実を取って楽しそうに食べていた！

「この世界唯一の有袋類！ しかも哺乳類のはずなのに卵から産まれるという摩訶不思議な存在筆頭！ レンジのスマホカメラ起動！ やひやひやひや！」

「レンジがまたおかしくなった！」

「ニンフィア！ どうにかして！」

「フィア！」

「ふふっ!?!」

ニンフィアに触手でぶっ叩かれて正気に戻る

ぐぬぬ、ニンフィアに進化してからというもの、レンジの奇行が鳴りを潜めている

ああ、本来ならばあそこでポケモンを捕まえるために徒歩で歩いているはずなのに

.....

「それにしても、パークの専用バスがあつてよかつたねー」

「ここなら野生のポケモンたちに襲われる心配もないし」

「窓からポケモンたちの様子がよく見られるもの」

そう、サファリパークの専用バスで園内を移動することになっているのだ

本当なら来たかったよ。

でもね、

年齢制限がかかったんだよ.....

10歳なら大丈夫だったんだよ。

さすがにポケモントレーナーとしての実力もあるし、ある程度は見逃してもらえ。でも、こっちは3歳児と5歳児と7歳児だよ。

トレーナーの資格を持っていても何するかもわからない子供が！ 園内に入って迷子にならない保証がどこにある！

保護者もついてきてないんだ！ みんな俺が居るから大丈夫だと思いやがって！

保護者同伴なら問題なかったのに……まあ、バスから眺めているだけでも楽しいけどさ。

『左手に見えますのが、ニドリーノとニドリーナ。エサの時間のようですね』

おお、向こうにはニドリーノとニドリーナの群れ！ ニドランもいる！

うさぴyon！ うさぴyon！

癒されるわあ

～かあわいっ♪

本当にな。あそこに混ざってモフモフしたい！

～でも毒針ポケモンだよ。抱いたら全身毒針だよ

毒が何だっつてんだよ。モフ死できればケモナー冥利に尽きるだろ

✓ 確かに！

「ニンファイア！ レンジがバスから飛び降りようとしてる！」

「ファイアー!!」

「ぶべらーっ?!?!?!」

触手で引つ張られてカウンターの要領で触手でひっぱたかれる
触手の扱いに慣れてきておるな……………ニン、ファイア……………がく

『おっと、これはラツキーです！ 右手奥の方にラツキーが見えます、望遠鏡は座席の下にあります。一目見ておいて損はないはずですよ』

なに、それはラツキーだ！ 一目見ておいてスマホで写真撮って凶鑑登録しておかねば！

『あ、あれ？ なんだか様子が……………あ!!』

双眼鏡で窓の外を覗いていると、ガイドさんが声を上げた

「ん?」

と、同時に俺の方も異変を感じた

『黒服が、ラッキーを!?!』

その瞬間、レンジのボールホルダーから、バリんと音が聞こえて一匹のポケモンがバスの中に姿を現した

俺は双眼鏡から目をそらさずに、その子に向かって声をかける

「ピクシー、行く気か？」

「ピククシー！」

ピクシーは己の弱さゆえに、ロケット団につかまり、そして売られ、俺の元にやってきた。

別にポケモンをとらえることが悪いことだとは言わない。

それで生活をしている人だっているし、実際に俺たちはポケモンの肉を食って生きているんだ。

普通の牛や豚はこの世界には生息していない。それに、人間よりも圧倒的に『ポケモン』のほうが数が多い。ここは、ポケモンの世界なんだ。

良き隣人で、尊い友人で、時には食料。それがこの世界でのポケモンのあり方。

捕らえるのが間違いだとか、殺すのが間違いだとか、そんなことを言うつもりはない。

だけどき、目の前で無実のポケモンが無理やり連れていかれるのを見て納得できると思うか。

俺にはできない。

ピクシーも、またしかり。

「ファイ……………」

ニンフィアは、少し悩んだ末に俺の手首に巻き付けていた触手を、そつと放した。危ないことをさせないためにずつと触手を巻き付けていたはずだ。

だが、俺の行動を止めるどころか、話した触手を俺の手に搦め、自分も行く主張してくるではないか

「しゃーねーな。ちよつくら悪者退治に行つてくらあー！」

ガラッと強化ガラスの窓を開けて飛び出した。

「ちよ、レンジ!？」

「わりいな、自習の時間だ！」

フウとラン、そしてバスガイドさんの制止を振り切り、宙に躍り出る。

そして、俺の後に続くように、ピクシーとニンフィアがバスから飛び出した

「ウインデイ！ 僕をあつちに連れて行って！ ピジヨットはピクシーと一緒に空から
援護を！」

「オン！」

「ピクシー！」

着地地点に伏せたウインデイを出現させ、ピクシーのサイコキネシスでゆっくり着
地、さらにニンフィアの触手で滑ることもないように固定された。

ニンフィアは鈍足だから、ウインデイの背に乗って移動するらしい。

ピクシーは自分を浮かせてピジヨットの背に乗る。

～せっかく警察に連絡したのね

俺が動く必要もなかっただろうけど、目の前で見せられた光景を見過ごすわけにもい
かないからな

∨ 3 歳児の肉体じゃ辛いんじゃない？

辛いからで逃げ出すような精神はしてねえよ。

俺を誰だと思ってるやがる

∨ レンジだよ

おう、そうだ。俺はレンジ様だ。チートがなくなると俺には仲間がいる。いっちょガチ
バトルと行こうじゃないの、ロケット団の下っ端クン!!

ここいらでちよいと主人公らしいところを見せてやりたい気分なんだよ!!

∨ 強者ぶるのは、負けフラグじゃ……

第25話 3歳児は全力で奇襲を仕掛ける

セキチクシテイのサファリアパークでロケット団の下っ端らしき人物が、幸運のポケモンの象徴であるラッキーに向かって網を放り投げていた

あれ？ もしかしてラッキーって卵を入れる袋があるから有袋類？

〜ガルーラも卵から産まれるよ。ポケモンの世界じゃ哺乳はしても哺乳類はいないんだから。『有袋類型ポケモン』ってのが正しいかもね

ああ、ガルーラが唯一の有袋類じゃないんだ。

オレンちゃんとそんな掛け合いをしつつ、ロケット団に向かって突っ込んだ

「うわ！ なんだ!?!」

「好きにさせるな!! ピクシーは奴を『サイコキネシス』で拘束しろ!!」

ボールを取り出す暇などは与えない。

喧嘩や暗殺の基本だ。

相手を同じ土俵に上げない。

いかに自分のペースで相手を翻弄するかが勝利のカギ。

野良バトルで相手が犯罪者なら、律儀にポケモンバトルをしてやる義理もない。

ボールに手を伸ばそうとした下つ端を、ピクシーがサイコキネシスで拘束し

「ウインディ、フレドラ」だ！ 殺す気でぶち当てる!!」

ウインディの背中から飛び降りながら「フレアドライブ」の指示を出し、ウインディが炎に包まれて全力疾走する。

俺は五点接地で受け身を取りながら転がって着地し、ニンフィアは触手をつかって柔らかに地面に下りた。

ニンフィアは俺の運動能力の高さを知っているので、特に補助もいらないと踏んできたようだ。

信頼関係のなせる業かしら。

でも手足が短いから五点接地が簡単だっただけなんだぞ。

「ぐああああ!!」

体を起こせば、身動きの取れない下っ端に、ウインデイのフレドラが直撃して吹き飛んでいた

ゴンゴンガン！ と地面を転がり、べちゃりと地面にうつぶせに倒れ、プスプスと黒い煙を上げている

「うう、あ、つい……………」

しかし、意識はあるようで、苦しそうに痛みと熱さに悶えていた

「なんだよ、殺せてねえじゃん。手加減してんのか、ウインデイ？」

若干攻めるようにウインデイを見上げると、フンスと鼻息を吐いてからコクリと頷いた

「どうやら反省する気はなく、意図的に手加減したようだ

「……………」

「……………ああ、そーいや人の視線があるのか。まったく面倒臭えな」

「……………（フンス）」

「情報もだね。つんだよ。てめ俺より冷静じゃねーか」

ウインデイがチラとバスの方を見る。

ガシガシと頭を掻いてから俺は息を吐いた

「ニンフィア、これ縛り上げといて」

「ファイア」

ニンフィアに下つ端を縛り上げるように指示し、俺は網にかかっていたラツキーに視線を向ける

「ラキイ……………」

ブルブルと体を震わせるラツキー

俺と視線を合わせようとはしない

人間すべてが敵に見えている者の眼だ。

「ピクシー、手伝って。この子を網から出すよ」

「ピクシー！」

「ラキイ……………」

「怖いよね。人間が恐ろしいよね。大丈夫。怖い人はあそこのウインディとこのピクシーがやつつけてくれたから。心配しないで。すぐにキミを網から出してあげる」

恐る恐る顔を上げるラツキー。

目の前にいるのが恐ろしいロケット団ではなく、人畜無害の幼い子供だったからか、

ようやくほっと息を吐く。

うーん、こういうことが起こる世界なんだよなあ。

ナイフやハサミを準備しておいた方がいいね。

「よし。取れた！ 怪我はない？ 大丈夫？ キミみたいな珍しいポケモンは安全とは言えないから、向こうのバスまで一緒に来てほしいんだ。ついてきてくれる？」

俺の質問にコクリと頷いて返すラッキー。

「よし、ピクシー。ラッキーを慰めつつ、バスまで護衛してあげて！」

「ピー！」

ピクシーが任せろと言わんばかりに胸を叩く。

「ピジヨットは旋回。伏兵が居ないか注意していて。こういう盗つ人は集団行動が基本だ。捕獲作戦に失敗した時に備えてバックアップが必ず居ることを想定しろ」

「ピジヨットー！」

大きく羽ばたいて上昇するピジヨット。

それを狙うように、パン、という一発の濁いた銃声が聞こえた

「ピジヨ………！」

「ピジヨット!! ピクシー、戻れ！」
対応が早い。

やはり伏兵が居たか。空から墜落しそうなピジヨットに向けて、モンスターボールの収納光線を当てて回収する。

同時にニンフィアを抱き寄せて、できるだけウインディの巨体を盾にできるように密着する。

ウインディも心得たように、軟弱な肉体を持つ俺を守ることを最優先として前足でニンフィアと下っ端ごと、俺を懐に押し込んだ。

安全とは言いがたい肉の壁の中で、ピジヨットが収まったボールの状態を確認する。

どうやら死にはしないようだが、体内に弾が残っている。

ボールに素早く収納したおかげで出血が広がる心配はないけど、ピジヨットの体力が尽きる前に早くジョーイさんに診せる必要があるな

敵の一人は捕まえた。

しかし、どこから狙っているかもわからないが、相手は銃を持っている。

悪の組織の資金力はとつもないな。

非合法の組織というのは金の入る仕事だから、しょうがないか。

どこから狙っているかわからない以上、ここにいるのはまずい。何人居るかも不明な

らば、逃げるが勝ちだ。

迷わずオレンちゃんのパールホルダーから一つのボールをはじき出す。

「フリーデイン、テレポート」。これだけの人数を運ぶのは辛いけど、根性出せ。セキチクのポケセンまでだ」

「デイン!!」

出した瞬間にコクリと頷き、フリーデインはテレポートを敢行。

結構無茶をさせたみたいだ。

テレポート特有の浮遊感を一瞬だけ味わうと、そこには先ほど見たポケモンセンターが。

子供たちのことも心配だが、ひとまずは自分の身の安全とピジョットの容態確認が最優先だ。

☆

「ジョーイさん！ 警察に連絡して！！ サファリパークでロケット団がポケモンを乱獲しているんだ！」

「えっ!?!」

「あと、僕のピジヨットが撃たれた！ 治療をお願いします!! 捕らえられそうになつていたラッキーのケアもお願い!!」

「ええっ!?!」

「とりあえず下つ端の一人だけ拘束できたから、この人を縛れるものを用意して欲しい！ 急いで!!」

「は、はいい！ わかりました!!」

ポケセンに転がり込んで急患と犯罪者を持ち込み、騒動の種をまき散らしながら大声でジョーイさんにまくしたてると、慌てたように俺のピジヨットのモンスターボールを抱えて走り、ナースセンターに居るジョーイさんたちに様々な指示を出していた

「よし、こいつを縛るのは任せろ！」

ニンフィアが下つ端の拘束を解除し

一般人の大人のおっちゃんたちがロープで下つ端をぐるぐる巻きにしようとしているのを見て、俺は舌打ちする

「だあってろ！ 素人が手えだすな！」

素人が拘束しようとしても逃げられるだけだ。

しかも、ぐるぐる巻きなんて愚の骨頂。

逃がす手伝いをしているとしか思えない。

俺はおつちやんが用意したロープをひったくって、ロープを二つ折りにすると、折れ目の方からさらに輪を作り、下つ端の左手首に通して素早く絞めた。

その左腕を背中に回して、ロープを首を通して引き上げると、下つ端の左腕が背中から釣り上げられるように持ち上がり、首を通したロープが苦しそうに下つ端の首を絞められ。

「ぐあー！」

うめき声を漏らす、それを無視して、右手も背中に回し、上から外巻で右手首にもロープを引っかけてから、下つ端の身体を一周するようにロープを回す。

ウインディの“フレアドライブ”をまともにくらったのだ。骨折くらいしているだろうし、火傷の痕も重症だ。

だが、容赦するつもりはない。

ロープを首を通すことでできた、背中のロープの×印にさらにロープを通して、右手首、左手首、×印の3点を結んできれいな三角形が出来上がる。

早縄、後ろ締めだ。主に引つかける作業しかないので、「結ぶ」という力と時間のかかることはしていない。

この作業にかかるのは慣れたら10秒もいらぬ。

ぐいっとロープを引つ張ると、首を絞められ、背中に回された腕を引き上げられ、苦痛と呼吸の阻害を引き起こす。

「誰かがここを持っていたら、逃げ出すことは絶対にできないから」

ポカンと早縄術に目を向くおっちゃんたち。

俺が差し出したロープをおっさんは慌てて受け取った

「まだ人が残ってるから、僕はもういかなきゃ！　いくよ、フーデイン！」

ピクシーとウインディをボールに収納し、ニンフィアの触手が俺の手に巻き付く。

その瞬間、フーデインがテレポートを発動。

視界が再びぶれてテレポート特有の浮遊感に包まれた。



「わっ!」

「レンジ!」

フリーデンが気を利かせてバスの中にテレポートをしてくれたようだ

人につつからないよう、空中に放り出されたけれど、持ち前の運動神経でなんとか着地を完了させる。

「けが人はいない!」

「だ、大丈夫!」

「わかった。ガイドさん! ラッキーは助けた! バスをサファリ入り口戻して!!」

俺の声に反応して、バスを走らせる運転手さん

〽伏兵がどこにいるかもわからない状態じゃ、これが最善かな

どーだろな。ラッキーを救えたのならひとまずこっちの勝ちだけど、相手の人数もわからないのは辛いな。

〽組織相手に個人で挑むのが間違いだよ。そんなのは主人公たちに任せておこう。

……そうだな。とはいえ、ロケット団とてポケモン勝負だけで片が付くわけじゃないことはわかっていたけど、銃器が出てくるとは少し予想外だった。

「ヤクザ組織なんだから考慮してもよかったけど、どこか『ポケモンの世界だから』っていう甘えが残っていたんだろうね」

バスの窓は強化ガラスでできてるし、サイホーンの突進にも耐えられる頑丈な設計だ。

「ここなら銃弾もしのげるだろう。」

「ふう……………」

「え、呼んだ?」

「呼んでない」

息をついてからフウの隣の席に座る

周囲の人たちはぼかんと口を開けていた。

そりゃそうだ。

ラッキーが捕らえられそうになっていると、突然飛び出した子供がその者に向かって

フレアドライブを仕掛け、ピジヨットが羽ばたくと銃声が聞こえてピジヨットが墜落し、その後忽然と姿を消したと思ったら、数分後にはここに転移して戻ってきたのだ。そりやあびつくりもするさ。

「レンジ、ラッキーはどうなっちゃったの？」

不安そうに聞いてくるラン。

「ラッキーはポケモンセンターに預けてきたよ。捕らえたロケット団員もポケモンセンターで縛り上げている。でも警察に引き渡したところで、大した情報は出てこないじゃないかな」

「そうなの？」

「下っ端だったからね。下っ端に情報を渡すような間抜けなら、そいつはボスの器じゃない」

策略家でカリスマ性のあるサカキは、下っ端クラスであれば部下にすら尻尾を掴ませないはずだ。

作戦実行部隊はおそらく、失っても痛手がないチンピラ程度の小物。

バックアップは何があっても対処できるベテラン、といったところか。

「こりや、ゲームの世界だとなめてかかったら、ガチで死ぬな……」
「ファイア……」

目をつむってぎゅっと両手を握りこむと、ニンファイアはその両手を、触手でそつと優しく包んだ。

第26話 3歳児は心配される

再びポケモンセンターに戻ってきた

「ただいまジョーイさん。結婚してください」

入るや否やプロポーズすることは忘れない。

▽結局、警察って役に立たなかったね

そうだな。せっかく通報したのにな。

「あ、レンジくん！ すぐに来てください！」

いつものごとくスルーされ、ジョーイさんに呼ばれて集中治療室へ。

ガラスの向こう側には、管を通して点滴を受けるピジヨットが寝台に寝ていた。

「生きてるんでしょ、ピジヨット」

「ええ………思ったよりも冷静ですね」

「あのくらいで死ぬんじゃない僕のポケモンとしては弱すぎる。生きてるに決まってる」

「厳しいくらいに信頼しているのね」

「当然」

ニンフィアがそつと俺の手に触手を巻き付ける。

安心しろ、ニンフィア。お前も強いよ。胸を張れ

「ただ、しばらくは安静にしていた方がいいでしょうね。身体に残っていた弾は摘出したみたいだけど、すこし大掛かりな手術だったから、ピジヨットが元気になるまで、しばらくは様子見ね」

「……………わかりました。ピジヨットはタمامシシテイのポケモンセンターに転送しておいてもらってもいいですか？ そつちが僕のホームグラウンドだから」

「わかったわ」

ピジヨットは一時離脱。銃撃されたのなら仕方がない。

移動はウインデイとフリーディンに任せよう。

「僕が捕らえてきた男は？」

「それが……………逃げられたみたいなの」

「は？ なんで？」

俺の後ろ締めが緩かった？ いや、そんなことはない。

そもそも、縛らなくなつて奴はウインデイの「フレドラ」の直撃をくらつて大けがを負っていたんだ。

逃げられるわけがない

だつたらどうして？

決まってる。

それを手引きしたやつがいるんだ

「……………最後にロープを持っていた人は誰？」

「それが……………わからないんです」

「はあ？ 監視カメラくらいはあるでしょ、それは？」

「……………電子機器がなぜかマヒしていて、どこも記録は残っていないの」

つ、つかえねえ。

と言いたいところだけど、くそ、やられたか。

ロケット団が先に一手を打って来たらしい

「どうしていなくなつたのかはわかりますか？」

「ええ……………突然、ポケモンセンターに窓からスタングレネードが入ってきて、それで

……………」

目と耳を、ポケモンセンター内部の人たちは潰され、一部システムをダウンさせられ、
そしてまんまと人質を奪われた、と。

じゃあ結局、誰が最後にロープを持っていたんだ？

あの場にいたのは、本当にモブとしか言いようのないおっちゃんたちだったけど
.....

もしかして、ロープを握っていた人ごと攫った？ んなアホな。リスクが高すぎる。

「だーもー、考えてもわからん。そんな一瞬で人質をさらえるような奴は忍者かテレポートできるやつくら、い……………あ……………」

そうか、テレポート……………。何度も俺が利用しているじゃん。

ポケモンの世界はテレポートが可能。だったら、オレンちゃん！

∨ロケット団だって、ズバットゴルバットやドガスアーボばかり使うわけじゃない。あくまでもロケット団は『ポケモントレーナー』だからね。

エスパークタイプのポケモンを持っているヤツだっているだろう。

くっそ、ぬかったな……………。

∨ロケット団が乱獲するポケモンの中にはケイシーも含まれているんだし、持っていないわけがないか。

……………もうこうなったら容疑者なんて、探すだけ無駄だ。

「あーあ。やめやめ。こりゃあ警察なんてシステム無意味だわ」

「ファイア？」

「うん、もう帰ろう。さすがに萎えた。授業する気にもならないし、こんな事件に巻き込

まれるとは思わないじゃん。」

俺が完全にやる気を失ったのを悟ったニンフィアが「帰るの?」と視線を上げて聞いてくる。

だからそれに頷いて、リュックを背負いなおした。

「あら、レンジくん。ポケモンの言葉が判るの?」

「わかんないよ。でも、ポケモンだってバカじゃないんだから、言いたいことくらいはくみ取れる」

「そう、それはすごい才能ね」

「ま、僕は天才だからね。これくらいできなきや、世界最強のトレーナーにはなれないよ」

〽でた、ビッグマウス。そんなレンジが嫌いじゃないよ。

ありがとよ。さて、ピジヨットはここから転送してもらえるみたいだし、どうやって帰ろうかな。サイクリングロードは、俺の三輪車はアボンってなったから通れないし、しようがないからバスに乗って帰ろうかな。

〽レンジ、その前にピクシーを回収しないと

ああ、そうだったな。

「ジョーイさん、僕のピクシーは？」

「傷ついたラッキーを慰めてくれていたわ。ピクシーはこっちの部屋ね」

そういつて案内されたのは、子供部屋みたいに、おもちゃが散らばる部屋だ。

ふーん、ポケモンは元気だから、遊びたい盛りのポケモンにはいいかもしれないけれど、カウンセリングするならもつと静かな場所でもいいんじゃないかな

＜部屋が空いてなかったんじゃない？ いろいろ立て込んでたし。

それもそつか。仕方ないね。

「ピクシーー！」

「ラッキーー！」

その部屋に顔を出すと、俺に気付いたピクシーが駆け寄ってくる

ラッキーの方も、捕らえられそうになっていた頃の怯えは消えているようだ。

ピクシーに任せてよかった。

＜さすがにわたしたちには連れ去られそうになったポケモンの気持ちはわかんないもんね

うん。

「ピイ、ピクシイ」

「ん？ どうしたの？」

ピクシーが「ねえ、ちよつと聞いて」と何かを言いたげに俺を見下ろす

そのままクイクイと俺の服の袖を引っ張ってラッキーに近づける

すると

「ラキイ……………」

ペこりとラッキーは頭を下げた。

「ん、どういたしまして。今度はロケット団に捕まらないようにするんだよ」

お礼が言いたかったのね。気にしなさんなって。俺自身はクズな自覚があるけれど、ポケモンには甘いという自覚もある。目に見える範囲でポケモンのピンチには駆けつけるよ。

「ラキッ！」

ラッキーはコクリと頷いて、俺のリユックを叩く

「え、なに？」

さすがに行動の意味が理解できずに首を捻るが

「ファイ」

ニンファイアが俺のリュックの中からモンスターボールを取り出して俺に手渡す

「ああ、そういうことか」

俺もやつとわかった。ピクシーと同じだな。

「そうだね。救ってもらった恩や、感謝。弱い自分に対する怒り。強くなれる可能性があるのなら、それに掛けてみたいんだろうね」

おっけ。面倒を見てあげようじゃないの。

「ついて来たいの？」

「ラッキ！」

力強くうなづく。

「強くなりたい？」

「ラッキ！」

拳を握り締めて頷く。

「わかった、おいで。今日からキミは、僕の仲間だ」

「ラッキ！」

モンスターボールを大きくして、ラッキーに向けると、ラッキーはボールのボタンに自らの手を触れる。

受け入れる準備が完了しているポケモンには、ボールが割れる心配はしなくていい。カチツという音と共に、ラッキーはボールの中に自らの意思で入っていった。

～うひい！ レンジのパーティに新たなポケモン。ピンクの悪魔が参入した！

オレンちゃんの桃ミニリユウとタツベイを入れ替えたら、レンジのポケモンは全部ピンクになるぞ

～あれ、そうなっちゃう？ あ、確かにレンジのポケモンはピンクに偏ってる!!

レンジのポケモン

ニンフィア（ピンク）

ウインディ（赤）

ピクシー（ピンク）

ラッキー（ピンク）

ピジョット（肌色）

タツベイ（グレー）

オレンちゃんのポケモン

ミニリユウ（桃色）

ピカチュウ（黄色）

フーデイン（黄色）

～うへはー、なんかこうしてみると、タイプが偏ってるね。

俺の手持ちに水タイプが居れば、旅パとしては完成するんだろうが………ほとんどが成り行きで捕まえた戦闘要員だからな。

ピジョットとフーデインは便利なパシリになっているけど。

～便利だから仕方ないね。

「出てきて、ラツキー」

「ラツキラツキー！」

ボールを弾いてラツキーを出す

「俺（・）についてくるってことは、相当な覚悟が必要だぞ。強くなるってことは危険もはらむし、ロケット団とも戦うことがあるだろう。覚悟を決めたお前に言うのも無粋だが、ついてくると決めた以上。俺ももう優しい言葉は吐かない。俺についてこい」

「……………！ ラッキー！」

俺の口調が変わったことに驚きつつも、本気で接してくれていることが伝わったのか、頷いて返す。

「そんじや、後のことは警察にまかせて、拠点（タマムシ）に帰るとするか」

「あれ、セキチクジムはいいの？ せっかくセキチクに来たんだから寄っていけばいいのに」

ジム戦するのはオレンちゃんだろ。俺はエリカ様を倒してからでいい
「やー、わたしも今の戦力でキョウには勝てないからやめとこうかな」

賢明だ。

「あら、ラッキーはゲットしちゃったの？」

ジョーイさんが目を丸くしてこちらを見下ろす

「うん。もともとはそんなつもりじゃなかったんだけど、ラッキーがどうしても僕についていきたいって」

「……………そう。ポケモンに好かれるのは、大事な才能よ。ラッキーのこと、大事にしてあげてね」

「愚問」

ニツと口角を上げてラツキーの背中を叩くと、ラツキーもむんと胸を張った

☆

さすがに事件に巻き込まれた俺たちをそのまま返すわけにもいかなかったらしく、警察の方がタマムシまで送ってくれた。

子供たちの自転車も運んでもらったよ。

楽ができたけど、帰るのが怖いな

☆

「レンジさん、レンジさあああん！ 警察の方から話はいかがいきましたよ！ どうして無茶するのですか!!」

マンションに帰ったら、プンスコと腰に手を当てて怒るエリカ様に遭遇した
「レンジさんになにかあったら、わたくし、わたくしは………っ！」

涙をためて、俺を抱きしめるエリカ様

ぎゅうつと力強く抱きしめられたことで、それがどれだけ心配していたのかということが伝わる

「おちついてエリカ様。警察の人に何を聞いたの？」

胸の感触を堪能することもなく、力いっぱい抱きしめられて、少し呼吸が苦しい。

そのままエリカ様の背中にポンポンと手を回し、エリカ様の話を聞く

「全部ききました。本当に、心配しました……。三輪車で無茶な乗り方をしたことも、ロケット団に立ち向かったのも、全部です。拳銃で撃たれたレンジさんのピジョットがタマムシのポケモンセンターに転送されてきたという知らせを受け取った時には、生きた心地がしませんでした……」

そっか。そりゃあ、僕の保護者であるおばあちゃんと、エリカ様に連絡がいくのも領ける。

「…………ごめん。今日はいろんな人に心配をかけてばっかりだ」

「当然ですっ！ 下手したら死んでしまっているのですよ！ たしかにレンジさんは正しい行動をしました。勇敢で、とても素晴らしい働きをしたと警察の方からもうかがいました」

「……………」

「ですが、命あつての物です！ 無茶をしないでください……………わたしにとつても、レンジさんはとても大きな存在なのですから、死んでしまつたら、わたくしには耐えられないじゃないですか……………」

ポロポロと涙をこぼしながらエリカ様はギュツと俺の顔をエリカ様の頬に寄せるように抱き寄せる

こんなに俺を心配して泣いているのを見ると、この人に悲しい顔はさせたくないなど思うようになるなあ

エリカ様に悲しい顔は似合わない。

「ごめんなさい」

「許しません。不安にさせた罰として、今日は一緒にお風呂に入ります」

「いつもと変わらないじゃない」

「いつもよりじっくり入ります」

「それは恐ろしい」

くくつと苦笑してみせると、エリカ様も、漸く笑みを浮かべて俺を解放してくれた

「エリカ様。今回は無茶をしてごめんなさい」

「はい、しっかりと反省してください」

「でもね、それで助かった子も居るんだ。僕のピクシーのように、ロケット団に捕まって売られることのないように、この子……ラッキーを助けることができたんだ」

そういつて、僕はラッキーの入ったモンスターボールをエリカ様に見せる。

エリカ様はそのボールを見てから目を細め

「レンジさんは反省するべきことはありますが……その点に関していえば、誇つていいです。よく、がんばりましたね……」

最後には俺の頭を撫でてくれたのだった。

第27話 3歳児は社会の厳しさを学ぶ

「今日はピクニックにいきますよお〜♪」

「うわーい！ エリカお姉さま大好きー！」

「わたくしもオレンちゃんが好きですー！」

レンジが無茶したあの日から、エリカ様が極端に過保護になった。

「ちゃんと手をつないでいてくださいね」

「大丈夫ですよ」

極端すぎるほどに

「あ、小石が落ちています！ オレンちゃん、気を付けて」

「うん」

むしろ

「はいオレンちゃん、あーん」

「あーん」

鬱陶しいほどに。

「……………どうしてこうなった」

もちやもちやと栗羊羹をたべながら、天を仰いで呟くのだった。

☆

まあ、そんなことはどうでもいい。

「オツキミ山でピクニックなんて、久しぶりです♪」

「わたしはオツキミ山初めてです、エリカお姉さま」

「うふふ、それならオレンちゃんにはいっぱい教えてあげますね」

オツキミ山。

FRLGではロケット団が化石の噂を聞きつけて内部をウロウロしている状態だっ

だが、もちろんロケット団はそれだけのためにオツキミ山にいるわけではない。

カタカタと、レンジのモンスターボールが揺れる。

オツキミ山はピッピの故郷だ。

おそらくだけど、ロケット団に乱獲されて、ロケットゲームコーナーに景品として売られた。

悪の芽は摘んでやらねば。

「エリカ様。ピクニックもいいけど、手持ちのポケモンは大丈夫？」

「ええー！ 何が起こってもいいように、ピジョット、キュウコン、ラフレシア、ガラガラ、ハピナス、シャワーズを連れてきています！」

思ったよりもガチ使用。草ジムリーダーとは思えないラインナップだ。これ完全に旅パですわ。

「す、すごいですね……………」

「それもこれも、オレンちゃんが無茶をしないためです！」

腰に手を当ててわたしの額をツンとつつく。

「フイーア」

それでもって、わたしの手首に巻き付いた触手がキュツと締まる

ニンフィアも心配して引っ張ったらしい。

心配してくれるのはうれしいけど、束縛されるのを嫌うレンジには窮屈すぎるよ
あのアホはいつかストレスで飛び出しちゃうかもしれないよ

もちろん、わたしもレンジと同一人物だから窮屈と感じているのだけどね。

レンジが無茶してピジヨットが大怪我をした。

無茶ばかりするレンジを心機一転するために、エリカ様がわたしをピクニックに連れてきてくれたのだけど……………

タイミングが素晴らしいよ、エリカお姉さま。

おそらく、原作と同じタイミングだ。

「あ、見えてきましたよ、ポケモンセンター！」

「失礼します」

それでもつて、オツキミ山の麓にあるポケモンセンターに入るわたしたち。コンビニ感覚で利用できるからいいよね。

入り口に新聞が置いてあったので、なんとなく手に取ってみる

『ハナダシティの民家に窃盗?!』

という見出しだった。

ああー、ロケット団員が壁破壊してわざマシンを奪ったっていうアレかな
懐かしいな。

「なに見ているのですか、オレンちゃん」

「ん、新聞ですよ、エリカお姉さま。ハナダシティで窃盗ですって。物騒ですね」

ちなみに今のオレンちゃんの格好は、エリカお姉さまとおそろいの、上が黄色、したが赤の袴姿だよ。

もちろん、オレンちゃん用のカチューシャもエリカお姉さまとおそろいな。

だからかな、言葉遣いもおしとやかにってしてしまうのよ

「もう、ピクニックに来てそんな物騒な事にまた首を突っ込もうとするのですか？　ダ

メですよ！」

ぶん。ぷんと頬を膨らませるエリカお姉さま。

そのお顔も大変麗しゅうございます。

「でもほら、ここにまたロケット団の仕業かつて書いてある」

「あ……………本当ですね。最近活発になつていふという非合法の組織でしたね。たしか、この間レンジさんが巻き込まれたあの事件の時も」

「うん、ロケット団がラツキーを無理やり捕らえようとしていたんだ」

「セキチクの次はハナダシティ……………タمامシにもロケット団が居るのかもしれないね。注意しなければ……………」

眉を寄せて新聞を見つめるエリカお姉さま。

残念ながら、タمامシ地下に、ロケット団アジトがあるのでですよ。

タمامシシティは治安が悪いからね。

暴走族はいるし、パチ屋あるし。

「あ、ほら、エリカお姉さま。バックナンバーでオツキミ山のことも新聞に載ってますよ！」

それにエリカ様が責任を感じてはいけない。

話を逸らすためにわたしは過去の新聞を手にとってみた。

「あ、本当ですね……オツキミ山で化石が発見される……。おお、それはすごいですね！ 現在ニビシティの博物館で展示されている化石はオツキミ山で発掘されたものなのです」

「大昔に滅んだとされたポケモンか……。エリカお姉さま、どんなポケモンなのでしょう？」

「うふふ、見てみたいです」

過去に滅んだポケモンに胸を躍らせるエリカ様。

わたしも大昔のポケモンに会ってみたいなあ。

カブトやオムナイト以外にもわたしの知らないポケモンがいっぱいたんだろなあ。

「さあ、休憩もこの辺にして、コレを飲んだらそろそろ行きましょうか」

エリカお姉さまが自販機でサイソーダを買ってわたしに渡してくれた。

ひんやりしてのど越しがあつて最高だね。

ビールだったらもつとよかった。

でもさすがに3歳児ボディにビールは無理だ。肝臓が持たない。

「そうですね。ところで、オツキミ山つて中が洞窟になっているのですよね！」

「ええ、そうですよ。行ってみます？」

「行ってみたいです！」

「うふふ、もしかしたら化石が見つかるかもしれませんね♪」

エリカお姉さまと手をつなぎ、ポケモンセンター内のごみ箱にサイソーダを放り込む。

オツキミ山内部ではズバットが居るから、気を付けて進まないよね。

3歳児は血液の量は少ないのです。

「お嬢ちゃん、化石を見に行くのかい？」

「ふに？」

「はい？」

と、そこで声をかけてくるおじさんが現れた

「あなたは？」

「ふふふ、そんなあなたに朗・報です！」

あかん、聞いてない、このおじさん

「お嬢ちゃん、あ・な・た・が・た・だけに……………！ いいお話がありました」

あ、このいい文句。知ってる

「おじさん、くわしくきかせて！」

知っててなお、わたしはこのおじさんから話を聞く。

「秘密のポケモン コイキングが、なんとたったの500円！ どうだい、買うかい？」

そういつて、おじさんはID登録のされていないモンスターボールを差し出してきた
「行きましよう、オレンちゃん。ID登録なしにポケモンを捕らえるのは違法ですよ。

「このおじさまの話を聞いてはいけません」

「そお？ 残念だねえ」

「ごめんね、おじさん。わたしたちはもうコイキングもっているの」

「ちえ、そうなんだ。世間知らずのお嬢さんかと思ったのに……」

「ごめんね、そういうのは主人公たちにやってちょうだい。」

「そんで社会の厳しさを学んで騙されてちょうだいな。」

「あー、もしもここでコイキングを貰ってたら、名前を『サシミ』にしたのに。」

「あ、そうだ。オレンちゃんの手持ちにもコイキングを入れておこうつと」

「パソコンの中ですか？ では、待ってますね」

「エリカ様は椅子に座って待つことに。」

「その間にわたしはスマホからコイキングを取り出すと、オレンちゃんの手持ちに入れた。」

「うーん。じゃあこいつの名前はサシミだね。」

「おまたせしました、エリカお姉さま」

「あら、早いですね。では行きましようか」

「はい！」



オレンちゃんの手持ち

桃ミニリユウ

ピカチュウ

フーデイン

刺身

この4匹だ。

ちなみにニビジムを終えたあと、バタフリーはスマホに戻しました。

お役目終了です。

ニンフィアはレンジのポケモンなのでカウントしません。

なんというか、共有ポケモンって感じはするけど、IDはレンジのだしね。

刺身はレンジのIDだけど、なんとなくおじさんの話を聞いて手持ちに入れたくなっ
たんだ。

ちなみに、トレーナーズスクールの講師をしているお金をほとんど使って、学習装置
も購入したので刺身のレベル^{コイキン}上げもサクサクだね

「洞窟の中って意外と明るいんですね」

「まあ、一階は照明がついていますからね。オレンちゃん、足元に気を付けて歩くのです
よ」

「わかっています、エリカお姉さま」

エリカお姉さまに手を引かれて洞窟を歩く

途中に看板が！

『ズバットの吸血攻撃に注意!!』

「こわいですね……………わたしは体が小さいから、ズバットに吸血されたら一瞬で干から
びちゃいます……………」

「その時はわたくしがオレンちゃんを守りますよ」

「ファイア！」

「みゅー♪」

不安がるわたしをエリカお姉さまが胸をドンと叩いて任せなさいとお姉さん風を吹かせる

同時にニンファイアがキュツと手首を締めて、背中のリュックからミニリュウが顔を覗かせる。

「頼りにしていますー！」

というど、エリカお姉さまは口元をこんなふうににして得意げに笑った

「ええつと、たしかこつちだよね……………」

「どうしたのですか、オレンちゃん」

「あ、あった。梯子だ！」

わたしが指さした先にあったのは、梯子。

「地下への入り口ですか……………地下はさすがに照明がないかもしれないですよ」

「まあ、行ってみようよ」

と、梯子を下りていく。

もちろん、エリカお姉さまが先に下りて、わたしが後から行く感じだね。

わたしが手や足を滑らせても対応できるように、エリカお姉さまは先に行つたのだ

「うー、確かに暗いね……あ、パラスだ」

「本当ですね……」

懐中電灯を片手に地下通路を進んでみる

パラスをゲットしながらも、滴る地下水を踏みしめて先に進む

「なんだかこうしていると、ジムリーダー以前に冒険していた頃を思い出します」

「へえ、エリカお姉さまにも冒険時代があつたのですね」

「それはありましたよ。実家が厳しい家でしたので、つい飛び出してしまふ、おてんば娘でした」

「ふふ、そんな感じがします」

袴の袖を口元に当てて上品に笑うわたし。

これって洞窟の装備じゃないよね。

袴だよ？

「あれー？　そこにいるのって」

「おや？」

栗色の髪を揺らして、バタフリーのフラッシュを明かり代わりにこちらに歩いてきた、くりむちちゃんが現れた

この主人公感。 覇気を感じる……………！

「こんなところで奇遇だね、オレンちゃんはニビシテイでの修業はおわったんだ」

「えへへー、私のフツシーもフシギソウに進化したからね！　これからハナダシテイに行くところなんだ！」

ぐつとモンスターボールを突き出すくりむちちゃん

「おお！ おめでとう!!」

「あー！ そういうオレンちゃんも、その子は……………」

「ああ、この子はね、ニンフィア。イーブイの進化系なんだあ」

「かわいいー!!」

ぎゅーつとニンフィアに抱き着くくりむちゃん

そうだろう、かわいいだろう。

毛並みのケアは毎日欠かさずやっているからね。

肌触りふわふわ、ほっぺはプニプニ、抱きしめてわしやわしや

それを気持ちよさそうにされるがままのニンフィアなんだ。

ニンフィアの毛の一本まですべてわたしのものだ。

「オレンちゃん、お知り合いですか?」

「あ、うん。この子はわたしの友達でライバルの、くりむちゃん」

「くりむって言います、キレイなお姉さんですね！ 二人ともそっくりでかわいらしいです!」

いや、そっくりって言ってもさ、服装だけよ?

「服装が全く同じなら似てるように見えるもんだろ
あらレンジ。起きてたの。」

「ずっと起きてるわ」

「あらあら、うれしいですねえ〜♪」

「傍から見たら姉妹に見えるんでしょね、エリカお姉さま」

「あら、わたくしはオレンちゃんと姉妹だと思っておりますが、違いますか？」
「……………違わないかもしれないですね」

もはやエリカお姉さまはシスコンの域に達している

そんなでもってわたしもエリカお姉さまが大好きだ。相思相愛だね

「代われ」

やだ。

「ファイア……………」

そんな悲しそうな目で見つめながらわたしの足を踏まないで、ニンフィア！

「どうも、ウチのオレンちゃんがお世話になっております。わたくしが姉のエリカと申

します」

「タمامシシテイのジムリーダーなんだよ」

「ええっ!」

正しい姿勢でキレイなお辞儀をするエリカお姉さまを、今度はわたしがくりむちゃんに紹介する番だ。

この方がジムリーダーだと知ったくりむちゃんが驚いた表情でエリカお姉さまを見上げた

「オレンちゃんってジムリーダーの妹さん!」

「え? あ、うーん……………」

「はい! とつても優秀な妹なのです。将来はわたくしのジムを継いでほしいのですが……………」

わたしが応えあぐねていると、答えおったわこのお姉さま!!

男やっちゆうに。

「エリカお姉さま、わたしはすべてのポケモンをもふゆもふゆするモフリストを目指し

ているのです。ジムは継げません」

「あら、てつきりわたくしはポケモンブリーダーかポケモンレンジャーを目指しているのかと思っておりました」

きよとんとエリカお姉さま。

ふに？ いや、まあレンジの知識と身体能力をフル活用すればレンジャーもできないけど、一番大事なのはもふゆもふゆすることだよ？

でも——

「それもいいですね、今度資格をとってみます」

「自由ですね、オレンちゃん」

クスクスとエリカお姉さまが笑う。当たりが洞窟だから暗いのに、その笑顔がまぶしすぎて直視できない！

「ほへー、すごいんだね、オレンちゃん。将来の夢まであるなんて……」

「ま、まあ、ね」

それで純粹に尊敬のまなざしを送るくりむちちゃんも直視できない!!

こっちはなんか後ろめたさで！

☆

「さて、オレンちゃん。こんなところで再開してなんだけど、立ち話はこの辺にして」

くりむちちゃんはモンスターボールを握りしめ、好戦的な瞳でわたしを射抜いた

「さっそくバトつちやう？」

「バトつちやおう！」

バツと距離を取るくりむちちゃん。

トレーナーは目と目があったらそれはバトルの合図だ。

洞窟の中という狭く暗い環境でのバトル。

気を引き締めていこう

「あらあら、この雰囲気、懐かしいですわね♪ それでは、わたくしが審判を務めさせていただきますっ！」

ね エリカお姉さまが審判を買って出てくれた。これは野良バトルとしてもやりやすい

「ふふふ、実はわたしは秘密のポケモンを500円で譲ってもらったの。この子でオレんちゃんをメツタメタに張っ倒してあげるんだから！」

「……………」

絶句。言葉が出なかった。

わたしとエリカ様は一瞬視線を合わせると、冷や汗を垂らす。

「いけ、おうさま!!」

勢いよくくりむちゃんがボールを投げ——

ポンッ!!

「コツコツコツコッ! コキッ!」

—— ビタビタ、ビタビタ、ビターン

「す………すでに社会の厳しさを買わされたところだった——
!!?」

第28話 3歳児は成長を実感する

「コツコツコツコ！ コキツ！」

「あわわわわ！」

コイキングを召喚してどや顔のくりむちちゃん。
もう……………なんなのこの子。

リーグの関所を色仕掛けで突破しようとするし、森に入って頑固になつて帰れなくなるし、詐欺師に騙されてコイキングを買わされるし！
▽であつた当初からアホの子だな。

そう！ 残念なんだよ、かわいいけど残念！

「ふっふっふ、あまりの珍しさに声も出ないみたいね」

「いや、そんな……………」

「さあ！ オレンちゃんがポケモンを出す番だよ！」

聞いて！　ねえ、聞いて！！

「ああ、もう！　ミニリュウ！」

「みゅー♪」

わたしのバッグからミニリュウが這い出てくる

「いいかいミニリュウ。あのコイキングはね、何もできない。言わば的だ」

「みゅー！」

「だからって余裕な顔をしたらダメだ。ミニリュウには教えてあげるけど、あのへつばこコイキングも最強足りえるポテンシャルを持っている。あの鯉は、進化すると龍に化けるんだ。」

「みゅー？」

わたしの話が理解できないように首を捻るミニリュウ

「あの弱い姿をよく見えておけ。アレは、お前を脅かす化け物に成長すると心得ておくんた。未だに弱いお前が慢心すると、相手が逆襲して来たら、今度はお前が死ぬぞ」

「……………みゅー！」

ミニリュウは幼いながらも、オレンちゃん、レンジと行動を共にするポケモンだ。

当然ながら、レンジのポケモン、ピジヨットがロケット団に撃たれたことも知っている。

ピジヨットは今のミニリュウに比べたら断然に強い。

そのピジヨットが床に臥せているのだ。

自分の弱さを見つめなおし、弱さを受け入れて、弱いながらも頑張ってきたミニリュウが、何もできない的に対して慢心してしまえば、この子は成長などできない。

「相手が弱くても見下すな。お前は弱い。だからこそ強くなれる。全力で行くぞ」

「みゅー！」

コイキングを見下すな。奴は化ける。ミニリュウは弱い。だが、お前も化ける。現在の地力はお前の方が上だ。だが、油断だけはするなよ。

「GO！ ミニリュウ！ あの天狗つ鼻をぼつきんちよにへし折って差し上げなさい！」

「その大口も叩け無くしてあげるんだから！」
デュエルが始まる！！

「おうさま、跳ねる!!」

「ミニリュウ、たつまき!!」

ミニリュウは小さな角に力を溜めて、一気にそれを放出すると、小さなつむじ風が発生する

「みゆりー!!!」

それは徐々に規模を増し、一筋の竜巻となる

「コココココ! コキイー!」

その豪風にぶち当てられたコイキングは空を舞う

「追い打ちかけて! たたきつける!!」

その竜巻の流れに沿うように、龍が空を舞う

「そんなのあり!?!」

「ポケモンバトルは何でもありだよ! 行けーミニリュウ!!」

「りゅー、みゆうー!!!」

尻尾が白く光を放って力を溜め、バネのような動きでコイキングを真下にたたきつけ

た

「バゴン！　といい音を出して弾き飛ばされたコイキングは、勢いよく地面に激突する
「ああつ！　おうさま!!」

もうもうと土煙が視界を遮り、ミニリユウがとぐろを巻きながら地面に着地。

「よくやった」

「みゆー！」

にっこ笑いながらミニリユウの頭に手を乗せる。

わたしは元が男だからね。今もだけど。

どうしても素に戻るとレンジの性格が反映されちゃうなあ。

オレンちゃんの時はもつとしっかりしないと。

「よし、いったん戻って。ミニリユウ。」

によるによるとミニリユウがわたしの首にまきつくつと

土煙の中からコツコツコとコイキングの跳ねる音が聞こえる

「むー！ 何もさせてもらえなかったうえにポケモンも戻された！ 今度はどんなポケモンを出してくれるのかな？ さっきは油断しちゃったけど、今度はそうはいかないんだから!!」

どこからその不思議な自身が湧いてくるのかヒジョーに気になるところだけど

その自信を粉々にするために、オレンちゃんは頑張るよ

とはいえ、勝ち格の試合じゃつまらない。負ける気はないけれど、少しだけ経験を積ませるといふ理由もあるが遊んじやおう

「GO！ 刺身!!」

「コツコツコツコ!!」

わたしは地下水の下たる場所に刺身を繰り出した！

コイキング対決だ。思う存分、刺身を繰り出してやるさ

「んな!? さすがオレンちゃん！ オレンちゃんも幻のポケモン、コイキングを捕まえてたんだね！」

「エリカお姉さまのジムの庭園にいっぱいいるよ」

「ええ!!?」

もちろん、くりむちゃんに現実を見つめなおしてもらうために

感心したようにわたしを見つめていたくりむちゃんだけど、驚愕して目を大きく見開く

「くりむちゃん。コイキングは水辺ならどこにでもいるポケモンだよ。」

「ええー……!!? く、クーリングオフは!」

「生ものはうけつけていません。諦めよう」

「そ、そんなあ………」

ガクリと膝をつくくりむちゃん。

その近くでビタンビタンと跳ね、「コツコツコ」と声を出すコイキングに哀愁が漂うよ

……

前のめりになり、地面に手をつくくりむちゃん。

自分がおじさんに騙されたとして、あまりの悔しさにポロポロと涙を流す。

強く生きるんだよ

「そ、そうだ、戦闘力は強いかもしれ——」

「コイキングは雑魚だよ」

「うわああああん!!」

実際の戦闘力はまだミニリユウと戦っただけ。

何もわからないくりむちは期待を込めて顔を上げた瞬間。

わたしの一言で絶望に顔を染め、泣きだした

この表情。ゾクゾクする

「で、でも! オレンちゃんだってコイキングを持つてるじゃん!!」

「うん。わたしはコイキングを育てるよ」

「な、なんで? 自分で弱いつて言ったじゃない」

「コイキングは、ギャラドスに進化するからね。カントー地方に存在する水タイプの中じゃ、最強クラスになる。持つてて損はないどころか、プラスになるから。育てる甲斐はあるよ」

進化したら強くなることを知ってホツと息を吐くりむちちゃん。

「そうなんだ………だったら、あのおじさんが言つてたこともあながち嘘じゃないんだね」

「いや、くりむちは普通に騙されているよ。進化してないコイキングはただのクソザコナメクジだよ」

「うえええ!!?」

「だって、跳ねることしかできないんだよ？ どうやって経験を積ませるのさ」

「そ、それは……えーい！ おうさま！ がんばって!!」

うわっ！ コイキング任せにしやがった！

わたしは嗜虐的な笑みを浮かべて命じる

「だつたらこつちの独壇場!! 刺身！ たいあたり!!」

「コツコツコ！」

「コキーツ!」

コイキングに弾き飛ばされるコイキング

コイキングは地下水の滴る洞窟を滑りながら体制を立て直し、コイキングを睨みつけた

コイキングはその視線を受けて「コツコツコ」と嘲り笑うように声を出す

コイキングはコイキングを睨みつけたままビタビタと跳ねながらコイキングに向かつて体当たりを仕掛けた

ビタビタ、バタンバタンとコイキングのコイキングによるコイキングのための仁義なき戦いは幕を上げ

「あ、あれ、どつちがわたしのコイキングだっけ？」

「お、おうさまー！ どっち?」

わちやわちやと攻撃を繰り返すコイキングたち。はねる、体当たり、たたきつける。技ではなくただの物理攻撃だ。

暴れているだけだ。

次第にコイキングたちの体力が切れ、同時にノックアウトした

「こりやどうやって鍛えりやいいのか、わからないね」

ボールから出る光線をコイキングに当て、自分の刺身を回収する。

「全然バトルらしいバトルじゃなかったよ……」

くりむちゃんの方もがっくりと肩を落としながらコイキングを回収していた。

「それじゃ、これがちゃんとしたバトルになるよう、どっちが優秀なギャラドスを育てられるか。競争しよう」

「うん！ きっかけはなんであれ、大事なポケモンだもん！」

うむ、とても色仕掛けでポケモンリーグの関所を突破しようとしてた女の子とは思え

ない純粋なセリフだ

まだ地力ではくりむちゃんのコイキングには勝っていないわたしのコイキングだけでなく、育成力に定評のあるわたしがコイキングを最強の龍にしてみせる

「GO!ミニリュウ。行って!」

「みゆう!」

次は、桃ミニリュウの番だ

「おねがい、フッシー!!」

「ソーウ!」

くりむちゃんが繰り出したのは、フシギソウ

「進化したんだ」

「もちろん。そっちだって、そのミニリュウちゃん、だいぶ大きくなったみたいだね」

「うん。そろそろ、首に巻くのがつらくなってきたところだよ」

「み!?!」

驚愕の瞳でわたしをみつめるミニリュウ

え、当然じゃん。2 m以上あるミニリュウの体重なんて10 kgは余裕で超えている

よ

3歳児ボデイにはきついつてばよ

「甘えたい盛りなんだねー。そんなにポケモンに好かれるオレンちゃんがかうらやましいよ」

「愛情はたっぷり注いでいるからね。さて、それじゃあ始めようか。並の鍛え方じゃわたしのポケモンたちには敵わないってことを思い知らせあげるんだから！」

羨ましそうにわたしのポケモンを見てもあげないからね

「フッシー！ つるのむちー！」

「もう愚鈍なミニリユウじゃないよ！ たつまきー！」

ミニリユウは竜巻を呼び、つるのムチを遮る。

最初にくりむちちゃんと戦ったのは、攻撃手段がまきつくしかなかったあの時だけだ。

今は違う

「しびれごな!!」

「させるな！ でんじは!!」

バチッ!!

と互いの身体にはじける電気のようなみのが見える

チツ、指示のタイミングが遅かったか……

ミニリユウとフシギソウは、同時にマヒしてしまったようだが、まったく問題にならない

少々動きが鈍ったところで、ミニリユウには関係ない。

「りゅうのいかりー!」

ミニリユウの角が輝き、光線が飛び出す。

りゅうのいかりは固定ダメだ。

体調に問題があるうとなかろうと、技が繰り出せば問題ない。

「フッシー!」

鈍足なうえに体がしびれて上手く動けないフシギソウには、直撃だった。

「くっそー! はっぱカッター!」

それに、フシギソウは物理、特殊で言えば物理型だ。

補助技でじわじわ削る草タイプならではのいやらしさが持ち味ではあるが、メインウエポンであるつるのむちも、葉っぱカッターも。物理技なのだ。

「みぎゅ……………」

そしてミニリュウの特性は夢特性である『ふしぎなうろこ』
これは状態異常時に防御力が1.5倍になるというふしぎなうろこなのだ。

いくら体力逆Vのミニリュウでも簡単に耐えられる

「ミニリュウ、りゅうのいかり!!」

「また!! ワンパターンなんじゃないの!?!」

「ワンパターンと言われても、一番有効な攻撃手段がりゅうのいかりなんだよね!」

角に光を溜めるミニリュウを見て青ざめるくりむちゃん

さすがに2発目は耐えられるかどうかかわからないだろう。

「やどりぎの……………」

「おそい!!」

くりむちやんの言葉に反応して背中からポポンと種子を飛ばすフシギソウ
それらを見無視してミニリュウのりゅうのいかりが炸裂した

「やったか!?!」

なんてフラグを自ら立てていく。

フシギダネから進化しているんだ。

油断なんかしないために、むしろ自分からフラグを建てに行つた

「ゆだんしないでねミニリュウ! 追撃に竜巻!!」

砂塵で様子が見えない中、ミニリュウの竜巻がフシギソウに飛んでいく。

と、同時に

「みゅ?!」

「お!」

「ま、まにあつた!!」

くりむちやんが飛ばしていた“やどりぎのたね”がミニリュウに絡みついていた
移動障害に1/8ダメージ、そして相手の回復。

「やっぱり一筋縄ではいかないか。ミニリュウ! たたきつける!!」

「みゅー!!!」

だが、フシギソウの健闘もそこまで。

とぐろをスプリングのようにして飛び上がり、全身を使った尻尾によるたたきつけるで、脳天を撃ち抜かれ、フシギソウは意識を失った

「フシギソウ戦闘不能！ よって勝者、オレンちゃんです！」

ミニリユウは、初の敗北を喫した相手との再戦に、勝利したのであった。